

神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う

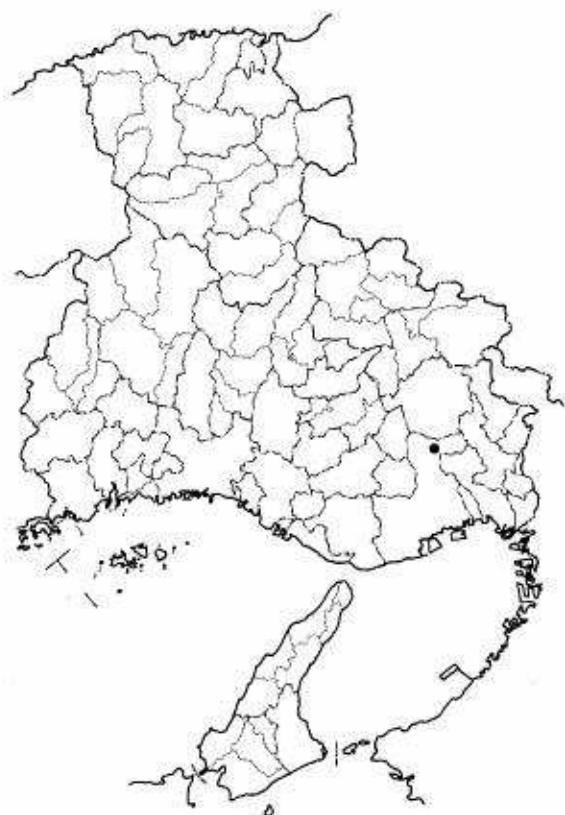
日下部遺跡発掘調査報告書

平成13年3月

兵庫県教育委員会

神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う

日下部遺跡発掘調査報告書

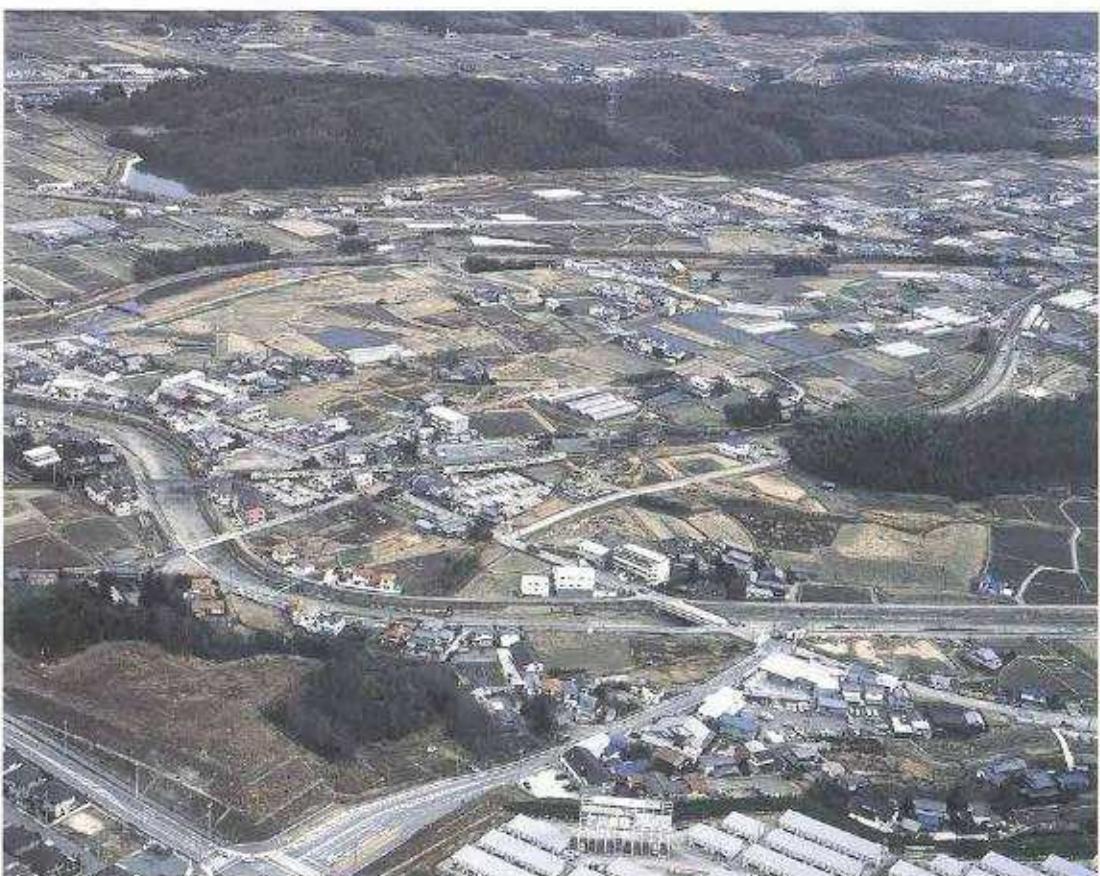


平成13年3月

兵庫県教育委員会



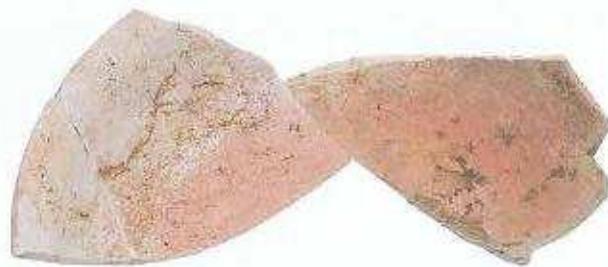
遺跡航空写真（西から）



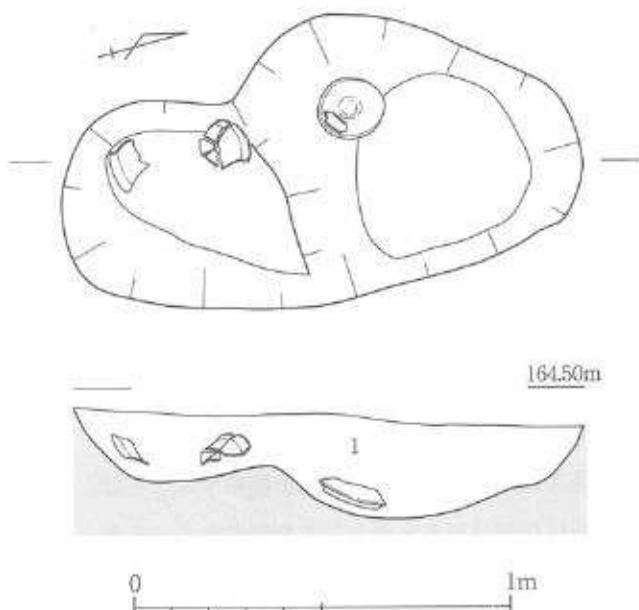
遺跡航空写真（南から）



木之元地区全景（南から）



朱の付着した土器（No36）



第4図 上才谷地区3区SK-2

C. 3区の遺構（図版60）

古墳時代の竪穴住居跡1棟、土坑1基、溝1条、中世の遺構としては、多数の柱穴・溝および石組みを持つ土坑が検出された。柱穴は、特に調査区北部で密度が高かったが、調査区の制約のため、掘立柱建物跡として復元できたものはなかった。

SH-1（図版61 写真図版46・47）

竪穴住居跡は大部分が調査区外にあるため、平面的規格・規模は不明である。検出面からの深度は20cmを測る。床面には密着した状態で、須恵器壺・蓋および土師器の甕が出土している。

SK-2（第4図 写真図版47）

竪穴住居跡の北側で、不整梢円形の土坑1基が検出された。底面は2段に掘りこまれている。ほぼ底面に密着した状態で、古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

SD-1

竪穴住居跡の南で検出された。東西に延び調査区を横断しているため、調査できた範囲は、幅約4m、深さ50cmにすぎない。底面付近で古墳時代後期の須恵器が出土した。

調査区の北部で検出された溝は、平行して延びるものと、これに直交するものとで構成されており、柱穴よりも新しい時期に造られている。

石組土坑（図版61・62 写真図版47・48）

長辺2.8m、短辺2.0m、深さ50cmを測る長方形の土坑である。石組みは本来四辺ともに設けられていたものと思われるが、南・北両辺はの石材は、土坑埋土内に転落した状況で検出されている。もっとも遺存状況の良好であった西辺には、三段の石組みが認められた。土坑内は、灰色～褐灰色の砂質シルトで充填されており、少量の炭の堆積も認められた。埋土中からは少数の中世の遺物が出土したほか、西

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2

第2章 遺跡の環境

1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	7

第3章 木ノ元地区の調査

1. 概要	11
2. 遺構	12
3. 遺物	16
4. 小結	18

第4章 乗安地区の調査

1. 概要	19
2. 遺構	20
3. 遺物	23
4. 小結	28

第5章 宮ノ後地区の調査

1. 概要	29
2. 遺構	29
3. 遺物	31
4. 小結	32

第6章 上才谷地区の調査

1. 概要	33
2. 遺構	33
3. 遺物	35
4. 小結	36

第7章 宮ノ向井地区の調査	
1. 概要	37
2. 遺構	37
3. 遺物	39
4. 小結	40
第8章 林ヶ鼻地区の調査	
1. 概要	41
2. 遺構	41
3. 遺物	43
4. 小結	44
第9章 坂本垣内地区の調査	
1. 概要	45
2. 遺構	45
3. 遺物	46
4. 小結	46
第10章 嘴滝掛り地区の調査	
1. 概要	47
2. 遺構	47
3. 遺物	48
4. 小結	49
第11章 科学分析	
1. 日下部遺跡より出土した灰釉陶器付着赤色顔料の分析	50
第12章 まとめ	53

図版目次

- 図版1 全面調査区位置図
- 図版2 木之元地区 全体図
- 図版3 1区～4区全体図
- 図版4 4区 SH-1・9／SH-3・8
- 図版5 4区 SH-2／SH-4／SH-6／SH-7／SH-10／SH-11／SH-12
- 図版6 SB-1～3／SK-1
- 図版7 5区全体図／6区全体図／方形周溝墓／方形周溝墓主体部
- 図版8 出土遺物1
- 図版9 出土遺物2
- 図版10 出土遺物3
- 図版11 乗安地区 全体図
- 図版12 1区全体図／2区全体図
- 図版13 1区 SD-1・2
- 図版14 1区 SD-2 遺物出土状態
- 図版15 2区 SH-1／SH-2／SH-3／SH-4／SK-1
- 図版16 3区 全体図
- 図版17 3区 SH-1～4
- 図版18 3区 SH-4 遺物出土状態／SB-1
- 図版19 3区 SB-2／SB-3／SB-4／SB-5
- 図版20 3区 SK-11／SK-12／SK-13／SK-15
- 図版21 3区 SK-1／SK-2／SK-3／SK-4／池状遺構
- 図版22 4区 全体図／SH-1／SH-2／SB-1
- 図版23 4区 SK-1／SK-2／SK-3・7・8／SK-4／SK-5／SK-6／SK-10／SK-11
- 図版24 8-1・2・4区 全体図
- 図版25 8区 SH-1／SH-2／SH-3／SH-5
- 図版26 11区～13区 全体図
- 図版27 11区～13区 土層図／集石遺構
- 図版28 1区出土遺物1
- 図版29 1区出土遺物2
- 図版30 2区出土遺物1
- 図版31 2区出土遺物2
- 図版32 3区出土遺物1
- 図版33 3区出土遺物2
- 図版34 3区出土遺物3

- 図版35 3区出土遺物 4
- 図版36 乗安地区 3区出土遺物 5
- 図版37 3区出土遺物 6／4区出土遺物
- 図版38 8区出土遺物 1
- 図版39 8区出土遺物 2
- 図版40 8区出土遺物 3
- 図版41 8区出土遺物 4
- 図版42 8区出土遺物 5
- 図版43 8区出土遺物 6
- 図版44 8区出土遺物 7
- 図版45 10区出土遺物／13区出土遺物
- 図版46 12区出土遺物
- 図版47 宮ノ後地区 全体図
- 図版48 3～7区土層図
- 図版49 1区全体図／2・3区全体図
- 図版50 3区 集石遺構／SK-1
- 図版51 4～7区全体図
- 図版52 4・7区平面図／5区平面図／6区平面図
- 図版53 出土遺物 1
- 図版54 出土遺物 2
- 図版55 出土遺物 3
- 図版56 上才谷地区 全体図
- 図版57 1区 全体図
- 図版58 1区 SH-1／SK-1
- 図版59 2区全体図／4区全体図
- 図版60 3区 全体図
- 図版61 3区 SH-1／石組土坑完掘状況図
- 図版62 3区 石組土坑
- 図版63 5区全体図／6区全体図
- 図版64 出土遺物 1
- 図版65 出土遺物 2
- 図版66 宮ノ向井地区 全体図
- 図版67 第1遺構面平面図
- 図版68 第2遺構面平面図
- 図版69 南壁土層断面図
- 図版70 SH-1／SK-2／SK-3／集石土坑
- 図版71 出土遺物 1
- 図版72 出土遺物 2
- 図版73 出土遺物 3

図版74	林ヶ鼻地区	全体図
図版75		7区 全体図／S B-1／S K-1
図版76		10区 全体図
図版77		10区 土層図
図版78		10区 S K-1～7
図版79		出土遺物
図版80	坂本垣内地区	全体図
図版81		2区 主要遺構全体図
図版82		5区土層図／S X-1
図版83		S K-1／S K-2／S K-3
図版84		出土遺物 2
図版85	鳴滝掛り地区	全体図
図版86		1・2全体図／3・4区全体図
図版87		5・6・7・8・9・10区全体図
図版88		出土遺物 1
図版89	各地区出土鉄製品	
図版90	各地区出土石製品	

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡内の地形
- 第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡
- 第3図 乗安地区1区S D-1出土須恵器
- 第4図 上才谷地区 3区 S K-2
- 第5図 林ヶ鼻地区 出土遺物 2
- 第6図 坂本垣内地区 出土遺物 1
- 第7図 鳴滝掛り地区 出土遺物 2

写真図版目次

巻頭カラー

図版1 上) 遺跡航空写真(西から)

下) 遺跡航空写真(南から)

図版2 上) 木之元地区全景(南から)

下) 朱の付着した土器(No36)

写真図版

木之元地区

図版1 4区 上) 4区北半全景

下) 4区南半全景

図版2 上) SH-1・9

中) SH-2

下) SH-4

図版3 上) SH-6

下) SH-3・8

図版4 上) SH-3

中右) SH-3 壁際土坑

中左) SH-3 中央土坑

下) SH-8

図版5 上) SH-7

中) SH-11

下) SH-12

図版6 5区 上) 5区全景

中) SK-1

下) 池状遺構

図版7 6区 上) 6区全景

下) 方形周溝墓

図版8 4区 上) 4区上層の遺構

(SB-1・2・3)

下) SK-1

図版9 出土遺物1

図版10 出土遺物2

乗安地区

図版11 1区 上) 上層柱穴群

中) SK-1断面

下) SK-1

図版12 上) SD-1

中) SD-1断面

下) SD-1遺物出土状態

図版13

上) SD-2

中) SD-2断面

下) SD-2遺物出土状態

図版14

上) SD-2遺物出土状態

中) SD-2遺物出土状態

下) SD-2遺物出土状態

図版15 2区 上) 全景

下) 壴穴住居跡群

図版16

上) SH-3

中) SH-2

下) SH-1

図版17

上) SH-4

中) SK-1

下) 土師器甕出土状態(No157)

図版18 3区 上) 全景

下) 壴穴住居跡群

図版19

上) SH-1

中) SH-1遺物出土状態

下) SH-2

図版20

上) SH-3・4

中) SH-4

下) SH-4遺物出土状態

図版21

上) 掘立柱建物群

中) SB-1

下) SB-2・3/SB-2内土坑

図版22 3・4区 上) SB-2・3/

SB-2内土坑

中) 池状遺構

下) 4区全景

図版23 8区 上) 全景

中) 柱穴群

下) SD-1

図版24 8区 上) 8-4区全景

中) 包含層遺物出土状態

下) SH-2・3

図版25

上) SH-3遺物出土状態

中) SH-3

下) SH-2

図版26	上) S H - 5 中) S K - 1 下) S K - 2	図版50	上) 5区全景 下) 6区全景
図版27	上) 8 - 1区全景 中) 8 - 1区中央礫群 下) 8 - 1区礫群内立石	図版51	出土遺物 1
		図版52	出土遺物 2
		図版53	出土遺物 3
			宮ノ向井地区
図版28	1区出土遺物 1	図版54	上) 1区上層の遺構 中) 3区旧河道 下) 3区旧河道
図版29	1区出土遺物 2	図版55	上) 3区 S H - 1 中) 3区遺構群 下) 3区 S K - 1 瓦埋納状況
図版30	1区出土遺物 3 / 4区出土遺物	図版56	上) 4区遺構群 下) 4区北半
図版31	2区出土遺物 1	図版57	出土遺物
図版32	2区出土遺物 2	林ヶ鼻地区	
図版33	3区出土遺物	図版58	上) 7区全景 下) 7区 SK - 1
図版34	8区出土遺物 1	図版59	上) 10区土坑群 下) 10区遺構群
図版35	8区出土遺物 2	図版60	出土遺物
図版36	8区出土遺物 3	坂本垣内地区	
図版37	8区出土遺物 4	図版61	上) 主要遺構群 下) 主要遺構群
図版38	8区出土遺物 5	図版62	出土遺物
図版39	9・11・12区出土遺物	鳴滝掛り地区	
宮ノ後地区		図版63	上) 1・2区全景 下) 3・4区全景
図版40	上) 2区全景 下) 3区全景	図版64	上) 1区 S H - 1 中) S H - 1 内遺物出土状況 下左) S K - 1 上粘土被覆状況 下右) S K - 1 瓦埋納状況
図版41	上) 3区集石遺構 中) 3区集石遺構 下) S K - 1	図版65	上) 6~9区全景 中左) 6区 S K - 1 内礫群 中右) S K - 1 完掘状況
図版42	上) 6区上層の遺構 下) 7区全景	図版66	下) S B - 2
図版43	上) 6区下層 中) 7区谷部土層断面 下) 7区土層断面	図版67	上) 8区全景
図版44	出土遺物 1	図版68	中) S B - 1
図版45	出土遺物 2	図版69	下) S D - 1
上才谷地区		図版70	出土遺物
図版46	上) 1区全景 中) 3区全景 下) 3区北端の遺構	図版67	出土遺物
図版47	上) S H - 1 遺物出土状況 中) S K - 2 下) 石組土坑	図版68	鉄製品 1
図版48	上) 石組土坑 中) 石組土坑西壁 下) 石組土坑東壁	図版69	鉄製品 2 / 石製品 1
図版49	上) 2区全景 下) 4区全景	図版70	石製品

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業は、地区内を分断するように山陽自動車道路が建設されるのに伴い、周辺部の道路・公園など生活関連施設を整備し、農地の計画的な宅地化と保全を図り、健全で良好な市街地を形成することを目的として、昭和63年に神戸市都市計画局によって計画され、事業の遂行は財団法人神戸市都市開発整備公社（以下公社と呼称）に委託された。

そして、平成7年1月に発生した「阪神・淡路大震災」以降、事業は区画整理を行うことで被災者に宅地を供給することを目的とした「復興事業」に位置づけられ、平成7年5月に現地に「道場八多土地区画整理事務所」が開設され、事業が本格的に進められ始めた。

この事業に伴う埋蔵文化財調査は、平成元年・5年・6年度に、神戸市教育委員会（市教委）によって確認調査が実施され、一応の遺跡範囲が決定された。事業が復興事業となった平成7年度以降は文化庁通知「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針」、及びそれを受けた兵庫県教育委員会（以下県教委と呼称）が定めた「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱い要領」の適用を受けることとなった。

これらの「基本方針」では、全面調査の対象範囲は遺構が損壊される範囲、恒久的な建造物が構築される範囲等に限定されることになった。本土地区画整理事業の計画では区内はすべて盛土されることになっていることから、全面調査の対象範囲から除外され、全面調査は道路計画区域と公園用地の掘削される範囲に限定されることになった。

一方、阪神・淡路大震災からの復旧・復興事業は急ピッチで進められ、それに伴う埋蔵文化財の調査件数も急激に増加し、神戸市教育委員会では対応が不可能となった。そこで「阪神・淡路大震災に係る埋蔵文化財発掘調査支援基準」に基づき、兵庫県教育委員会に支援の依頼があった。

これを受けた県教委では公社と協議に入り、発掘調査が大規模になること、事業の性格から3年以内に調査を終了する必要があること等から、県教委と公社が受委託契約を結んだ上で、調査を実施することになった。また調査計画を完全に進めるために、工期を限定して、調査の諸作業を請負形式で発注し、調査を実施することになった。

こうして、平成7年度より道路や公園などの公共用地を対象にした調査を、公社の依頼を受け、県教委が各県・市からの支援職員の応援を得て開始した。しかし、この平成7年度の調査で、広大な遺跡範囲の中には、遺構や遺物の極めて希薄な部分が含まれていることが判明し、平成8年度は従前の結果に基づく全面調査とともに、再度確認調査を実施し、遺跡範囲の絞り込みを行った。平成9年度の全面調査はこの再度の確認調査の結果に基づいて行ったものである。（吉誠）

2. 調査の経過

A. 試掘・確認調査の経過

試掘調査は神戸市教育委員会によって平成元年度・5年度・6年度の3次に渡って実施された。この3ヵ年に渡る試掘調査は $2 \times 2\text{ m}$ の坪を72ヶ所に設定して実施され、約130,000m²の調査必要範囲が確定された。

この結果に基づき、平成7年度から全面調査を実施したが、事業が震災復興事業となって遺跡の取扱いも緩和処置が計られることになった。この処置を運用するためには遺跡の詳細な内容の把握が必要となり、平成8年度に2次に分けて公共用地を対象に確認調査を実施した。この2次に渡る確認調査は神戸市教育委員会が主体となり、「阪神淡路大震災に係る埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定書」（以下協定書）に基づいて兵庫県教育委員会に支援依頼があり、これを受けた県教育委員会は兵庫県埋蔵文化財調査事務所職員及び各都府県からの支援職員を派遣して実施した。

調査年度	種別	調査主体	調査期間	調査面積	調査担当者
平成元年度	試掘	神戸市教育委員会	平成2年1月26日～3月6日	10m ²	西岡功次 黒田恭正
平成5年度	試掘	神戸市教育委員会	平成5年11月4日～11月10日	140m ²	口野博史
平成6年度	試掘	神戸市教育委員会	平成7年3月27日～4月3日	128m ²	口野博史 橋詰清孝
平成8年度 第1次確認調査	確認	神戸市教育委員会	平成8年7月25日～8月23日	184m ²	小林公治（山梨県） 大川勝宏（三重県）
平成8年度 第2次確認調査	確認	神戸市教育委員会	平成8年10月21日～11月15日	192m ²	久保弘幸（兵庫県） 小野田義和（福島県） 伊藤敏行（東京都） 工藤忍（青森県）

B. 平成7年度の調査

乗安地区の2・5～7区・8区の一部、宮ノ向井地区の1～3区、林ヶ鼻地区の1～5・7～9区の計約7,465m²について、平成7年10月11日から平成13年3月13日にかけて全面調査を実施した。

調査は「協定書」に基づく支援要請が神戸市教育委員会から兵庫県教育委員会にあり、これを受けた兵庫県教育委員会が調査主体となって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が下記の表のように各府県からの支援を得て実施した。

調査の実施にあたっては、調査範囲が広範囲であることから調査の効率化・迅速化を計る必要があるため、神戸市都市整備公社と兵庫県教育委員会が受委託契約を締結し、調査作業を請負工事方式で業者発注する方法を探った。

調査は各地区とも包含層までの表土及び客土層を機械力によって除去し、包含層は人力で掘削した。この調査では乗安2・7・8区から古墳時代の遺構が、林ヶ鼻7区では中世前期の遺構が検出された。また宮ノ向井地区では、3区から弥生時代の竪穴住居跡や中世の遺構が確認された他、1・2区では中世の遺構面下にさらに遺構面が確認された。しかし年度末という時間的な制約から、下層の遺構面の調査は次年度に持ち越すことになった。

	調査地区	調査面積	調査期間	調査担当者
第1次全面調査	乗安2・5~8区	7,465m ²	平成7年10月11日~ 平成8年3月13日	鐵 英記 (兵庫県)
	宮ノ向井1~3区			榎本 哲 (大阪府)
	林ヶ鼻1~5・7~9区			黒石哲夫 (大阪府) 河村健史 (福井県) 小野木学 (岐阜県)

3. 平成8年度の調査

この年度は木之元1~3・7・8区、乗安8~10・14区、宮ノ後地区1・3~8区、宮ノ向井1・2区、鳴滝掛り地区、林ヶ鼻6区を対象に、第2次全面調査を実施する一方、上記の通り、2次に渡る確認調査を実施した。

そして、第1次確認調査の結果に基づき、木之元4・5区、乗安3・4区、宮ノ後2区を対象に第3次全面調査を実施した。さらに第2次確認調査の結果を受け、上才谷1~3区、林ヶ鼻10区、坂本垣内地区を対象に第4次全面調査を実施した。

調査はすべて前年度同様、神戸市教育委員会からの支援要請に基づいて、兵庫県教育委員会が調査主体となって、兵庫県埋蔵文化財調査事務所が各府県からの支援を得て実施した。調査の実施にあたっては神戸市都市整備公社と兵庫県教育委員会が受委託契約を締結し、調査作業を請負工事方式で業者発注する方法を探った。

	調査地区	調査面積	調査期間	調査担当者
第2次全面調査	木之元1~3区	8,268m ²	平成8年6月10日~ 平成8年11月15日	吉誠雅仁 (兵庫県)
	乗安8~10区			中田 英 (神奈川県)
	宮ノ後1・3~8区			青山 透 (広島県)
	宮ノ向井1・2区			深谷憲二 (茨城県)
	鳴滝掛り1~10区			藤原直人 (長野県)
	林ヶ鼻6区			大川勝宏 (三重県) 横田 明 (大阪府) 鈴木篤英 (福井県) 福島孝行 (京都府)
第3次全面調査	木之元4・5区	2,565m ²	平成8年11月18日~ 平成9年2月28日	吉誠雅仁 (兵庫県)
	乗安3・4区			久保弘幸 (兵庫県)
	宮ノ後2区			鐵 英記 (兵庫県) 小野田義和 (福島県) 吉田東明 (福岡県)
第4次全面調査	上才谷1~3区	1,897m ²	平成8年12月28日~ 平成9年3月25日	久保弘幸 (兵庫県)
	林ヶ鼻10区			植松邦浩 (愛媛県)
	坂本垣内地区			三輪晃三 (岐阜県) 中村啓太郎 (福岡市)

4. 平成9年度の調査

公社による設計変更によって上才谷4～6区、宮ノ向井4区の調査を実施し、さらに遺物の出土が予想される乗安11～13区の調査を実施した。これらの地区の調査で、本土地区画整理事業に伴う日下部遺跡の内、公共用地部分については全て終了した。

なお、今年度の調査も「協定書」に基づく支援要請が神戸市教育委員会から兵庫県教育委員会にあり、これを受けた兵庫県教育委員会は神戸市都市整備公社と受委託契約を締結し、兵庫県埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査の諸作業は請負工事方式で業者に発注した。

	調査地区	調査面積	調査期間	調査担当者
第5次全面調査	乗安11～13区	2,189m ²	平成9年10月16日～ 平成10年2月17日	久保弘幸（兵庫県）
	上才谷4～6区			岡田章一（兵庫県）
	宮ノ向井4区			

5. 平成10年度の調査

この年度から出土品整理調査を開始した。調査は神戸市都市整備公社からの委託を受け、兵庫県教育委員会が受託し、調査の作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当した。震災復興の各都府県からの支援は前年度までに終了し、出土品の整理については調査に関係した吉識、久保、鐵が担当し、嘱託職員の補助を得て実施した。

本年度は土器の接合・補強の作業を行った。

6. 平成11年度の調査

前年度に引き続き出土品の整理作業を行い、本年度は実測・復元・写真撮影作業と、鉄製品の保存処理作業を行った。調査は神戸市都市整備公社からの委託を受け、兵庫県教育委員会が受託し、調査の作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当した。実測等の作業は吉識・久保・鐵が嘱託職員の補助を得て実施し、保存処理については加古千恵子、岡本一秀が嘱託職員の補助を得て実施した。なお、遺物写真の撮影は業者に発注して実施した。

7. 平成12年度の調査

本年度も、神戸市都市整備公社からの委託を受け、兵庫県教育委員会が受託し、調査の作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当した。本年度は報告書の刊行に向けたトレース・レイアウト・原稿執筆等の調査作業を行い、これらの作業終了後には出土品の収納作業を行った。出土品の収納は報告書に掲載した遺物、実測した遺物、その他の3種に分け収納した。鐵が兵庫県立歴史博物館に転勤したため、本年度の作業は吉識、久保が嘱託職員の補助を得て実施した。（吉識）

整理作業の体制

年 度	主な作業の内容	担 当 者	備 考
平成10年度	接合・補強	吉識雅仁 久保弘幸 鐵 英記	ネーミングまでは現場で終了
平成11年度	実測・復元・写真撮影 保存処理	吉識雅仁 久保弘幸 鐵 英記 加古千恵子 岡本一秀	写真撮影は業者委託
平成12年度	トレース・レイアウト・報告書刊行	吉識雅仁 久保弘幸	

第2章 遺跡の環境

1. 地理的環境

日下部遺跡は、神戸市北区道場町日下部に所在する。現在の行政区画上は神戸市であるが、この地域は三田盆地の南端にあたり、これ以南は六甲山系北側に広がる山麓部となってゆく。遺跡周辺には、主として神戸層群中部累層からなる丘陵がひろがっており、これを、有間川・有野川・八多川など、武庫川支流の小河川が開拓した谷部に、小規模な段丘面・沖積低地が形成されている。日下部遺跡は、こうした低地に臨む丘陵裾から段丘上や、沖積微高地上に営まれた遺跡で、標高は175m前後を測る。

従来、日下部遺跡は、有野川流域の左岸沿いから有野川と八多川の合流点に広がる範囲と理解されている。しかし日下部遺跡における遺構・遺物の分布状況を詳細に見るならば、今回、一連の調査を行なってきた範囲では、各地区ごとに、その内容を異にしている。したがって「日下部遺跡」は単一の遺跡ではなく、時期・性格の異なる小規模な遺跡群の総体と考えてよかろう。八多川左岸を中心に広がる八多中遺跡も、ほぼ同じ様相を呈している。

遺跡が立地する段丘・微高地が、形成された時期は現在のところ不明である。有野川その他の河川は、合流して有間川となり武庫川へと注ぐが、この合流点は比較的狭隘で、武庫川への排水が常時安定して行われていたとは考えにくい。おそらく合流部での排水不良により浸食基準面が変動し、小河川の流域で複数回の段丘面の形成がおこなわれたであろうことは想像に難くない。今後、周辺の調査にあたっては、こうした地形形成のデータ収集に努めねばなるまい。地形形成史が判明すれば、遺跡消長と対比させることで、当該地域の考古学的成果について、より有効性の高い解釈をおこなうことができよう。

日下部遺跡が所在する三田盆地南部地域は、古代の区分に従えば摂津国の一域にあたっているが、北・南・東方を山地に囲まれ、独立した地理的領域をなしており、これは現代においても変わりがない。しかし、大阪湾の北西に広がる摂津の平野部へは、三田盆地との境をなす武田尾付近が、きわめて狭隘な渓谷となり、一種の難所となっているとはい、武庫川を下るルートがある。一方、現神戸市の中枢部へは、古代から利用された「有馬道」があり、また狭小な谷部を通過して、西方の加古川水系へ到達する街道も、古代、播磨と摂津を結ぶ主要な街道の一つとして利用してきた。このような地理的独立性と、交通路として利用されてきた地域性が、遺跡形成史にどのように影響しているかを明らかにすることも、今後の課題と言えよう。

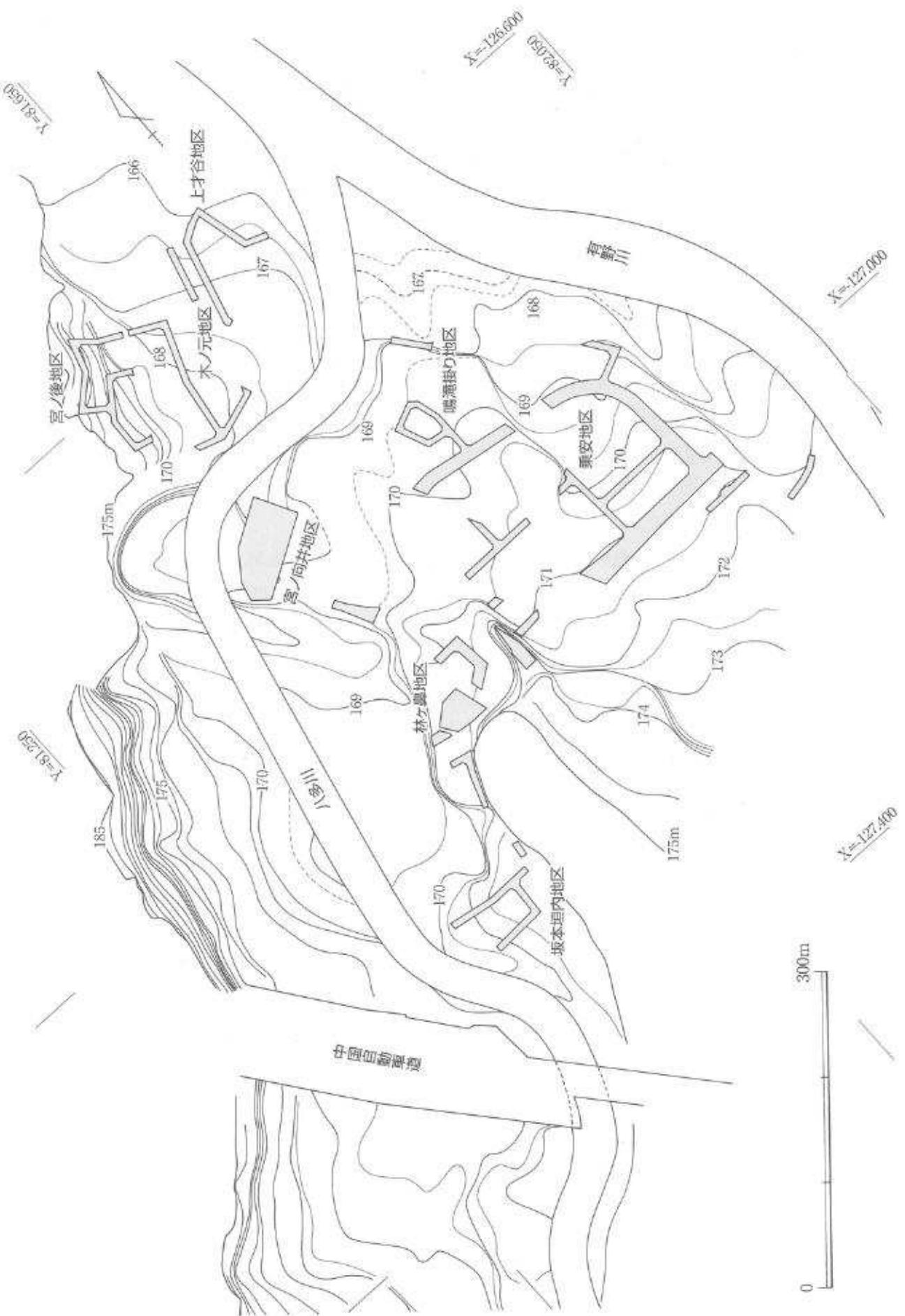
現在この地域は、大阪・神戸市域への交通網が整備されるとともに、中国縦貫道・山陽自動車道・舞鶴自動車道などが整備され、東西・南北交通の結節点として急速に姿を変えつつある。また北摂・三田ニュータウン、北神ニュータウンなどの整備により、特に大阪地域からの人口の流入が激増した。かつての里山と、点在する山村の景観は大きく変貌しつつある。(久保)

参考文献

藤田和夫編 1996 「第4章 被覆層Ⅰ」『兵庫の地質』兵庫県土木部助成兵庫県建設技術センター

岡本一秀・長濱誠司 1998 「第2章 第1節 地理的環境」『神戸市北区 八多中遺跡 清水廻り

遺跡』兵庫県文化財調査報告第173冊 兵庫県教育委員会



第1図 遺跡内の地形

2. 歴史的環境

日下部遺跡、八多中遺跡は旧有馬郡のうちでも南部に位置している。この地域において各時代の遺跡は、武庫川の西側に分かれた支流である長尾川、八多川、有野川、有馬川などに沿った谷筋に展開している。

A. 旧石器・縄文時代

旧石器・縄文時代については人々の生活の痕跡はわずかに認められるにすぎない。旧石器時代では生田遺跡でチャート製石核が採集されているのみである。縄文時代では小坂砦（19）で早期（神宮寺式～高山寺式）の土器、塩田遺跡（24）、北神第4地点遺跡（12）、宅原遺跡（豊浦地区）（54）で石鎌、石匙、有舌尖頭器が出土している。遺構が検出されているのは、宅原遺跡（内垣地区）で後期（中津式）の土坑が検出されているのみである。

B. 弥生時代

この地域で本格的に定住の痕跡が認められるのは弥生時代になってからである。塩田遺跡では前期末から中期後半の遺物が出土しており、弥生中期の竪穴住居跡、溝などが検出されている。近辺の遺跡のなかでは弥生前期の遺跡としては三輪・餅田遺跡（三田市）と並ぶ拠点的な遺跡と考えられている。さらに中期になると、特に中期中葉を中心とする、4つの集落単位が想定されている。中期末になると塩田遺跡が衰退するとともに、有馬川を挟んだ対岸の丘陵上に北神第4地点遺跡が出現する。北神第4地点遺跡では竪穴住居や段状遺構が検出されており、すぐ北に隣接する三田盆地と同様の状況を呈している。なお、この時期、日下部遺跡・八多中遺跡内では明瞭な遺構などは認められないが、八多中遺跡（2）のカイモリ地区では包含層から石戈が出土している。

弥生時代後期になると集落が再び平地に展開し、その数も格段に増加する。日下部遺跡（1）、塩田遺跡、宅原遺跡（内垣地区）などで竪穴住居跡が検出され、丘陵部の北神第4地点遺跡でも遺跡は継続されている。宅原遺跡（内垣地区）では井堰、日下部遺跡（木ノ元地区）で方形周溝墓、北神第4地点遺跡では箱式石棺墓が検出され、下二郎遺跡（20）、宅原遺跡（辻垣内地区）（54）でもその他の遺構が検出されている。

庄内期になると集落を望む丘陵部での墳墓の造営が特徴的になる。北神第45地点遺跡（16）、定塚墳墓群（54）などの墳墓群はいずれも木棺や土器棺を内部主体としている。北神第45地点遺跡では径約12mのいびつな楕円形の墳丘で、墳丘上の主体部は削平され、斜面で土器棺3基、木棺1基が検出されている。定塚墳墓群は5基からなる墳墓群で、1号墳は1辺約7mの方形墳である。墳丘中央部で木棺1基、土器棺2基を検出されている。2号墳は1辺13.5mの隅丸方形状の墳丘で、墳頂部に木棺2基と土器棺1基が検出されている。集落では宅原遺跡（有井地区）、日下部遺跡（乗安地区）、八多中遺跡（堂ノ元地区）で竪穴住居跡が検出されている。

C. 古墳時代

古墳時代前期に入っても、庄内期に引き続き丘陵部では北神第9地点（11）、大橋山古墳群（19）など木棺直葬墳が築かれている。北神第9地点遺跡1号墳は14m×11mの長方形墳で、墳頂部に木棺が1

基検出されている。大橋山古墳群の4号墳は直径9mの円墳である。集落は宅原遺跡（有井地区、辻垣内地区）、日下部遺跡（鳴滝掛り地区）、下小名田遺跡で竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代中期には宅原遺跡（豊浦地区）で竪穴住居跡、塩田遺跡で大溝が検出されているが、明瞭な遺跡はあまり多くはない。

古墳時代後期なると6世紀前半の北神第13地点遺跡（10）が竪穴式石室、6世紀中葉の北神第9地点遺跡（11）2号墳が木棺直葬墳であることなど中期以前の形式を引き継ぐ古墳が見られるが、6世紀中頃以降には周辺の丘陵部に横穴式石室墳が数多く作られている。中野古墳群、北神第2・3地点古墳（13）、北神第35地点古墳（10）、稻荷神社裏山古墳群（29）、尼崎学園内古墳群などが知られる。オキダ古墳群（15）や八多中遺跡（堂ノ元地区）のように低地に造られているものもある。横穴式石室墳は籠谷古墳（28）、北神第20地点古墳（10）など7世紀まで造られている。

集落では宅原遺跡で有井・豊浦・宮ノ元・辻垣内・岡下地区など地点を増やしながら、継続的に集落が展開する。竪穴住居跡が見られるとともに、掘立柱建物も比較的顕著に見られるようになる。

また、日下部遺跡（乗安地区、上才谷地区）、八多中遺跡、二郎宮ノ前遺跡（18）、上小名田遺跡（6）などでも竪穴住居跡がみられ、古墳の増加とともに小規模な集落も数多く展開するようになる。

D. 古代

古代には摂津国の中のうち有馬郡と呼ばれた。類聚倭名抄によると有馬郡内には春木、幡多、羽束、大神、忍壁の5郷が所属していたとされている。このうち幡多郷については八多町を中心とするものと考えられている。7世紀においても前時期から継続する遺跡が多く見られる。特に、宅原遺跡では豊浦地区・宮ノ元地区では竪穴住居が造られるとともに、大型の掘立柱建物が造られている。岡下地区でも大溝や掘立柱建物が検出されている。さらに、この遺跡では「五十戸」、「評」、「郷長」など律令期の支配体制を示す言葉が記された墨書き器などが出土していることから、「評衙」、「郷衙」などの地方官衙が置かれたことが想定されている。日下部遺跡（乗安地区）では竪穴住居跡が比較的まとまって検出され、八多中遺跡（池尻地区）では灌漑用水路が検出されている。

8世紀になると比較的大規模な遺跡であった宅原遺跡や日下部遺跡では、遺跡が廃絶したり、縮小したりするようになる。また、二郎宮ノ前遺跡、平田遺跡、八多中遺跡、下小名田遺跡などでも掘立柱建物が検出されているが、小規模で散漫なものが多くみられる。この時期は前後の時期に比べて開発の低調さがうかがわれる。

9世紀以降になると、八多中遺跡（池尻地区）で9世紀の大型の掘立柱建物群やさらに奥に位置する上小名田遺跡で10世紀の大型の掘立柱建物群など見られるようになる。このような開発の拠点となつたと思われる遺跡が見られるようになるとともに、鹿の子遺跡（55）のような谷の奥にまで開発が及んでいる。さらに、日下部遺跡、日下部北遺跡（8）、生田遺跡、塩田遺跡、宅原遺跡（豊浦地区、上天神地区、宮ノ元地区、辻ヶ内地区）、下小名田遺跡でも施釉陶器、帶金具、石帶、銅印などの遺物が出土しており、このような開発拠点が他にも数多く存在していたことがうかがわれる。

E. 中世

12・13世紀にはさらに遺跡の数は拡大し、微高地単位で稠密に分布するようになる。下二郎遺跡、二郎宮ノ前遺跡、日下部遺跡、日下部北遺跡、生田遺跡、塩田遺跡、平田遺跡、宅原遺跡、八多中遺跡

下小名田遺跡、上小名田遺跡、森尾遺跡などで掘立柱建物跡が検出されている。そのなかでも、上小名田遺跡や二郎宮ノ前遺跡などでは規模の大きい掘立柱建物跡などが検出され、二郎宮ノ前遺跡では園池を有している。

これら稠密に広がった遺跡のなかで14世紀以降まで継続するものはやや減るが、二郎宮ノ前遺跡、宅原・豊浦地区、宅原・宮ノ元地区、日下部遺跡、八多中遺跡、上小名田遺跡などのようにそのまま遺跡が存続しているものもそれほど少くない。

墓については12・13世紀代では屋敷墓と考えられる木棺墓が、塩田遺跡、宅原遺跡（豊浦、宮ノ元、岡下、蓮花寺地区）など数多く検出されている。14世紀以降になると丘陵部で坂本山墳墓群（19）、塩田中世墓（27）、北神第46・47地点遺跡（9）など集石墓や火葬墓などが見られようになる。（池田）

主要参考文献

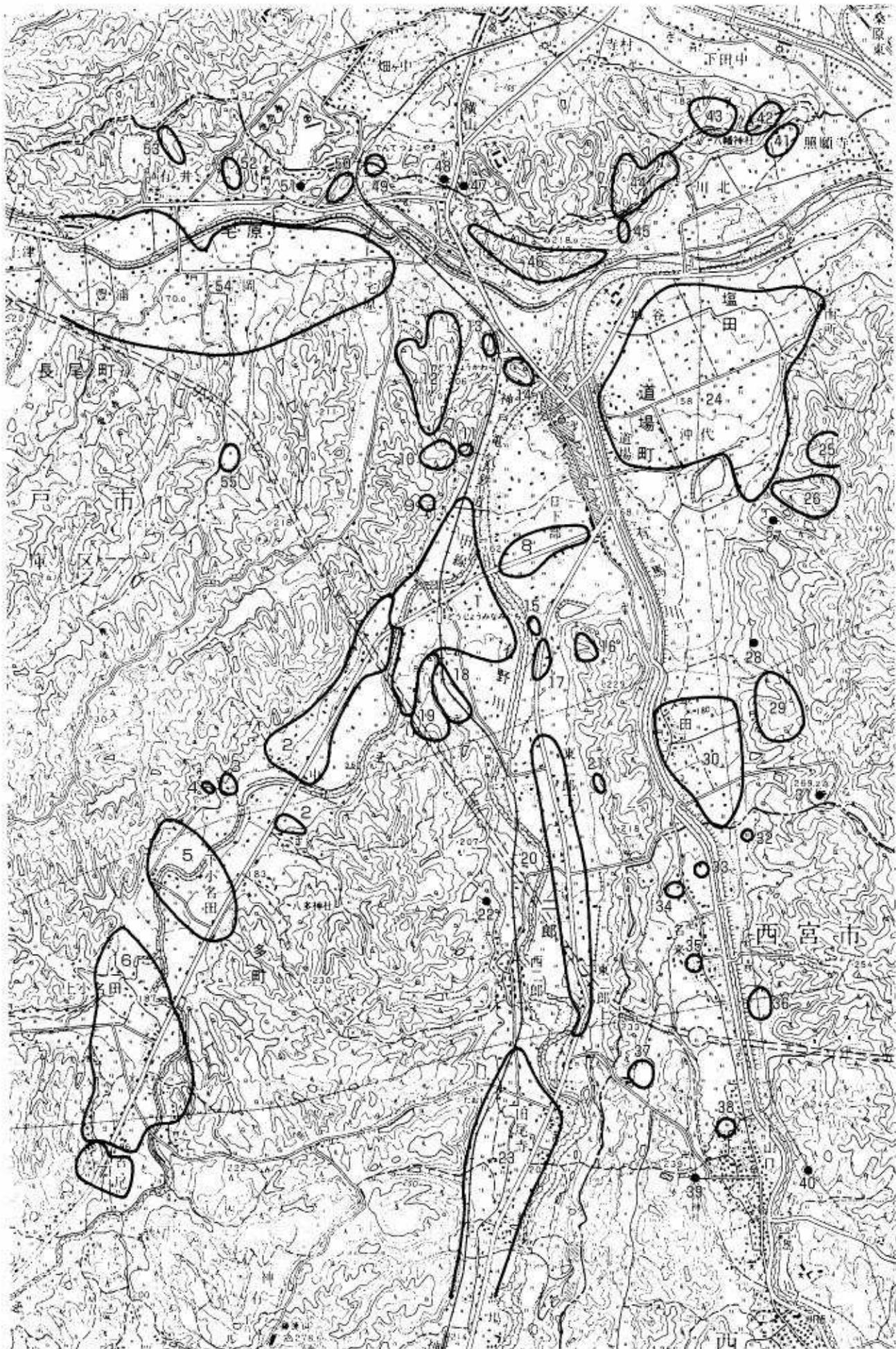
『新修 神戸市史 歴史編 I』神戸市 1989年

『昭和56年度～平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

神戸市教育委員会ほか「北区の古墳（一）」『神戸の歴史』14 1986年

1. 日下部遺跡	2. 八多中遺跡	3. 清水廻遺跡
4. 小名田窯跡群	5. 下小名田遺跡	6. 上小名田遺跡
7. 吉尾遺跡	8. 日下部北遺跡	9. 北神第36・46・47地点遺跡
10. 北神第10・13・20・35地点遺跡	11. 北神第9地点遺跡	12. 北神第4地点遺跡
13. 北神第2・3地点遺跡	14. 松原城跡	15. オキダ古墳群
16. 二郎古墳群	17. 二郎遺跡	18. 二郎・宮の前遺跡
19. 小坂砦・大橋山古墳群・坂本山墳墓群	20. 下二郎遺跡	21. 二郎南古墳群
22. 龍谷古墳	23. 岡場遺跡	24. 塩田遺跡
25. 東山中遺跡	26. 鯉口古墳群	27. 塩田中世墓群
28. 平田古墳群	29. 稲荷神社裏山古墳群	30. 平田遺跡
31. ヨタノ谷遺跡	32. 山口町第4地点遺跡	33. 山口町第10地点遺跡
34. 山口町第9地点遺跡	35. 山口町第5地点遺跡	36. 山口町第7地点遺跡
37. 山口町第11地点遺跡	38. 山口町第3地点遺跡	39. 公智神社銅錢出土地
40. 下山口高塚古墳	41. 自彊遺跡	42. 山崎城跡
43. 上山古墳群	44. 上山南古墳群・立石城跡	45. 川北古墳群
46. 八景中学南古墳群	47. 尾張谷古墳	48. 墓山古墳
49. 横山城跡	50. 天皇山古墳群	51. 炭焼群集墳
52. 定塚墳墓群	53. 奥田群集墳	54. 宅原遺跡
55. 鹿の子遺跡		

遺跡分布図の地名表



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章 木之元地区の調査

1 概要

A. 概要（図版2）

八多川と有野川の合流点付近、八多川左岸の沖積地に位置する地区である。調査時は八多川沿いから北に伸び、西に折れた市道までを木之元地区としていたが、地区的遺構の内容や地形から市道を越えた丘陵裾部までの地区を木之元地区と呼称することにした。

この地区では遺構面が2面検出されている。上層の遺構面は4区の中央から北側と4区の南端で検出され、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物3棟と土坑2基・溝等が検出されている。

下層遺構面からは弥生時代末・古墳時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等が検出された。弥生時代末の遺構には竪穴住居跡8棟と土坑があり、ほぼ4区に集中している。竪穴住居跡には円形と方形があり、床面周囲に高床部を有する。

古墳時代後期の遺構は弥生時代の遺構分布範囲より南によって、4区南端から1区にかけて検出されている。検出された遺構には竪穴住居跡3棟と掘立柱建物1棟があり、竪穴住居跡3棟はすべて方形で、竪付きのものが1棟存在している。

5・6区では弥生時代末の土坑・方形周溝墓が検出された。

B. 地形

この地区的地形は大きく、微高地と沖積低地に分かれ、1区から4区中ほどSH-1の北側、5区の西端から6・7区にかけての地区は微高地上にあたり、弥生時代～古墳時代及び中世の集落が形成されている。一方2区から東に伸び、そこから大きく回りこんで4区北半を通って5区東半に続く地区は沖積低地にあたり、旧河道が入り乱れて形成されている。ちょうど4区のSH-1の北側にある現畦畔とその西端から北に続く畦畔が、両地形を分ける位置に築かれている。

C. 基本層序

微高地はにぶい黄褐色の砂質シルトないし同色の極細砂で形成され、この層の上面から弥生時代末、古墳時代後期の遺構が検出されている。4区中央から北側ではその上に弥生土器を包含する黒褐色シルト質極細砂（第39層）が堆積し、さらに古墳時代から律令期の遺物が含まれる褐灰色の極細砂（第38層）が堆積し、この第38・39層の上面から中世の遺構が検出されている。4区南端では微高地を形成するにぶい黄褐色層（第31層）は比較的傾斜を持って2区に向かって下がり、そこに灰黄褐色の極細砂が2層（第29・30層）堆積していた。第29層の上面が上層遺構面となって、中世の溝が検出されている。上層の遺構面から現耕土までは両地区とも水田耕作に伴う客土層である。SH-6が検出された付近から1区にかけては耕土直下に下層の遺構面が検出され、上層の遺構面は検出されていない。また古墳時代後期の遺構も遺存状況が悪く、後世の削平により上層の遺構面は消失したものと判断される。

2. 遺構

A. 1区の遺構（図版3）

微高地上にあたる地区であり、遺構検出面はにぶい黄褐色極細砂上的一面である。検出面はほぼ平坦であるが、東端は2区に向かって傾斜する。検出された遺構は竪穴住居跡1棟・土坑1基・柱穴である。ただ柱穴群は建物跡や柵といった構造物に復元することはできなかった。

S H-12（図版5 写真図版5）

北壁際で検出された方形の竪穴住居跡で、大半が調査区外となって南端部が検出されたのみである。すでに削平によって壁はほとんど失われており、壁溝だけが検出された。検出された部分での規模は一辺約4.1mである。壁溝は幅約10cm、深さ約6cmを測る。

S K-1

長径100cm・短径45cm・深さ15cmの不整形な土坑で、埋土は暗褐色シルトであった。埋土には少量の炭化物が含まれ、骨片及び須恵器片が出土した。

B. 2区の遺構（図版3）

遺構検出面はにぶい黄褐色極細砂上面と第6層の灰褐色シルト上面の2面である。下層の遺構検出面であるにぶい黄褐色上面では3区へ続く旧河道の肩部が検出され、肩部から弥生土器の高杯が出土した。

上層の遺構は明確な形で検出していないが、北壁の観察で4区のSD-1の延長上にあたる位置で溝が確認されている。溝の詳細は4区の項で記述する。

C. 3区の遺構（図版3）

微高地から一段下がった沖積低地にあたる地区であり、南西から北東方向へ伸びる礫や砂等の河川堆積物が観察できた。

検出された遺構は溝3条であり、SD-2は幅約130cm・深さ約50cm、SD-3は幅約80cm以上・深さ約50cm、SD-4は幅約95cm・深さ約25cmであり、埋土はともに灰黄色砂質シルトを中心とした層であった。遺物の出土がほとんどなかったが、埋土から中世の遺構と判断される。

D. 4区の遺構

中央から南半は微高地上、北半は沖積低地にあたる地区である。微高地上ではにぶい黄褐色極細砂上、褐色シルト質極細砂と黄褐色シルト質極細砂の混層上の2面で遺構が検出された。

i) 下層の遺構（図版3 写真図版1）

下層のにぶい黄褐色極細砂上からは竪穴住居跡11棟・掘立柱建物1棟・土坑・溝等が、上層の検出面からは掘立柱建物3棟と土坑2基等が検出された。竪穴住居跡は円形プランを呈するものが3棟、方形プランを呈するものが10棟ある。

S H-1（図版4 写真図版2）

微高地の北端でSH-9と切りあって検出された竪穴住居跡で、北西隅は調査区外となっている。平面形は方形を呈し、北東隅から微高地端に向かって屋外溝が伸びる。住居跡の規模は一辺約6.4mで、

遺存する壁高は約40cmを測る。検出できた部分では壁下に幅30cm・深さ10cmの壁溝が認められた。床面は大部分が検出できていないため不明な部分も多いが、SH-9の床面上で検出した柱穴のP1~3がこの住居跡の主柱穴にあたるものと判断され、配置から見て主柱穴は4本と考えられる。

屋外溝は壁溝と連続する形で設けられ、幅約80cm・深さ約40cmを測る。溝の両サイドが深くなっている。

出土した弥生土器の内、図化できたものは8の甕1点だけである。

SH-9 (図版4 写真図版2)

SH-1に切られた竪穴住居跡で南西隅から西壁は調査区外となっている。検出できた部分から、平面形は方形を呈し、南北約7.3m・東西6.2m以上の規模を測り、遺存する壁高は最高約66cmを測る。南壁の中央付近には幅約80cm・奥行約60cmの張り出し部が設けられている。北西隅にも幅100cm以上・奥行約40cmの張り出しが認められる。ただ北西隅という不自然な位置に設けられており、この住居に伴わない可能性もある。

壁溝は幅約15~40cm・深さ12cmを測り、壁下を全周する。床面の中央には径約85~95cm・深さ約56cmの中央土坑が設けられている。中央土坑は2段に掘られ、上段の平面形は円形、下段の平面形は方形を呈する。中央土坑の周囲には基底幅約25cm・高さ約8cmの周堤が巡らされていた。

床面の周囲には幅約80cm・高さ約14cmの高床部が設けられ、検出できた部分では床面の周囲を全周している。

柱穴は6本検出されたが、P-4~6の3本がこの住居跡に伴う主柱穴と判断され、配置からみてこの住居跡の主柱穴は4本と判断される。

床面からは1・2の土器が出土した他、南辺の中央付近の高床部上から炭化米の塊が出土した。埋土からは3~7の土器が出土したが、SH-1に伴うものも含まれていると思われる。

SH-2 (図版5 写真図版2)

平面形が円形の住居跡と判断されるが、大半は調査区外となっている。検出できた部分は南北約7.4m・東西約2.2m、壁高は最高42cmを測る。壁下には幅約15cm・深さ約9cmの壁溝が巡らされているが、一部途切れる部分が認められた。床面の周囲には幅約105cm・高さ11cmの高床部が設けられている。高床部の段付近に柱穴が検出されており、この住居跡に伴う主柱穴の1本と見られる。

壁際には径約70cm・深さ約40cmの円形の土坑が設けられており、土層断面では修繕の跡が観察されている。

床面上には遺物はほとんど見られなかったが、壁際の土坑から9・10の鉢と小型壺が出土している。

SH-3 (図版4 写真図版3・4)

SH-8を切って検出された竪穴住居跡で、西半は調査区外となっている。

検出できた部分では、南北約6.3m・東西5.2m以上の規模を測り、遺存する壁高は最高約60cmを測る。平面形は南・北壁と東壁が直交していないため、かなり歪な方形になっている。壁溝は幅約15cm・深さ9cmを測り、壁下を全周する。

床面には周堤を巡らした長径約105cm・短径65・深さ約50cmの不整形な楕円形の土坑が設けられている。土坑の中央には小穴が2ヶ所認められた。土坑の位置や形状から見て、この住居跡に伴う中央土坑と見られる。周堤は基底幅約40cm・高さ約8cmを測り、中央土坑の東側は途切れている。

床面の周囲には、東壁の中央付近を開けて、幅約90cm・高さ約17cmの高床部が設けられている。

この開けられた部分には長径約80cm・短径約65cm・深さ約70cmの土坑が設けられている。土坑は2段に掘られており、下段は径65cmのほぼ円形を呈する。下段が当初の形状で、上段は使用時の肩崩れの可能性がある。

柱穴は9本検出されたが、主柱穴はP-1~3の3本と判断され、配置からみてこの住居跡の主柱穴

は4本と判断される。

床面から12の土器が出土し、壁際の土坑から11が出土している。13は埋土中からの出土である。

S H - 8 (図版4 写真図版3・4)

S H - 3に切られた方形の竪穴住居跡で、東西の壁は調査区外となっている。

南北約6.8m・東西6.0m以上を測り、西側では床面の高床部が検出されていることからみて、西壁は調査区のすぐ外側付近にあるものと判断される。遺存する壁高は最高約50cmを測り、検出できた部分では壁下に幅約20cm・深さ約8cmの壁溝が設けられている。

床面の中央には長辺約90cm・短辺約70cm・深さ約22cmの方形の中央土坑が設けられ、土坑を取り巻いて基底幅約30cm・高さ約6cmの周堤が巡らされ、S H - 3の下にあたる部分では検出されていないが、本来は中央土坑の周囲を全周していたものと思われる。

東壁側を除く床面の周囲には幅約90cm・高さ約12cmの高床部が設けられ、北壁側の中央には高床部上に台石が置かれていた。南西隅のS H - 3の下にあたる部分では途切れた部分もあるが、本来は検出された部分の床面周囲を全周していたものと思われる。

主柱穴はP - 4～6の3本が検出されており、配置からみてこの住居跡の主柱穴は4本と判断される。埋土等から弥生土器が出土したが、図化できるものはなかった。

S H - 4 (図版5 写真図版2)

平面形が円形の住居跡と判断されるが、大半は調査区外となっている。南北約6.3m・東西約1.5mが検出でき、壁高は最高15cm遺存していた。壁下には幅約15cm・深さ約5cmの壁溝が巡らされているが、西壁の中央付近で途切れている。高床部については確認できなかった。

床面上から16の弥生土器甕底部の他、17のガラス製の管玉が出土している。15の器台は埋土からの出土である。

S H - 5 (図版3)

西壁際で検出された隅丸方形状の竪穴住居跡で、規模は南北約5.0mを測る。南東隅及び床面の東端は浅い溝状の落ち込みによって切られている。壁は検出されず、壁溝と柱穴が検出されている。東壁の北半から北壁側の壁溝は幅約10cm・深さ約10cmと幅の狭いものとなっている。南半の壁溝は幅約25cm・深さ約12cmを測る。

柱穴は2本検出され、配置からみてこの住居跡は4本柱の構造をとるものと考えられる。

S H - 6 (図版5 写真図版3)

長辺約6.0m・短辺約5.0mの長方形を呈する竪穴住居跡で、壁高は最高約60cmを測る。床面の短辺側両辺に幅約90cm・高さ約20cmの高床部が設けられている。高床部は盛土によって構築されている。

壁溝は北西隅部から東壁北半にかけてと南西隅部で認められ、幅約8cm・深さ約2cmを測る。

床面の中央には長径約95cm・短径70cm・深さ9cmの中央土坑が設けられている。また南壁際の床面にも長径約102cm・短径約60cm・深さ約25cmの土坑が設けられていた。床面上には炭化物や焼土が認められた。

床面上からは18～29の土器が出土している。また埋土からF - 1の鐵鎌が出土している。

S H - 7 (図版5 写真図版5)

北西壁の中央から南西隅部にかけて検出された方形プランの竪穴住居跡で、北西壁の中央に竈が設けられている。検出された部分は北西壁が約1.5m・南西壁が約3.5mであり、壁は最高約14cm遺存していた。竈がほぼ壁の中央とすると、この住居跡は一辺が約4.6mとなる。

竈はにぶい黄橙色や灰黄色の極細砂を積上げて構築されており、壁は最高15cm遺存していた。床面には多少凹凸が認められ、東壁にかかって柱穴が1本検出されている。

埋土から30の須恵器壺の口縁部片が出土している。

S H-10 (図版5 写真図版5)

調査区東壁沿いで西壁だけが検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。南北約5.3mが検出され、壁高は最高40cmまで遺存していた。西壁下には幅約15cm・深さ約6cmの壁溝が設けられていた。

S H-11 (図版5)

方形の竪穴住居跡で東隅部が検出された。検出された部分では一辺2.6m以上を測る。壁高は最高16cmまで遺存していた。床面上からは柱穴・壁溝等は検出できなかった。

S B-4 (図版3 写真図版1)

S H-10を切った状態で検出された桁行2間(約3.2m)・梁行1間(約3.2m)、棟方位をN45°Eとする掘立柱建物跡である。桁方向の柱間は約1.6mを測る。柱穴の埋土は暗褐色シルト質細砂であった。

ii) 上層の遺構

S B-1 (図版6 写真図版8)

棟方位をN60°Eとする桁行3間以上・梁行2間の掘立柱建物跡である。規模は桁行約4.7m以上・梁行約4.4mを測る。柱間は棟方向が215cm~240cm、梁方向が220cmとなっている。棟方向は西側に連続して調査区の外に伸びる可能性があり、また柱の並びからみて南方向に伸びて、S B-2と同一の建物になる可能性をもつ。柱穴は円形で、一部に根石を持つものも認められている。柱穴の埋土は灰色シルトであった。遺物は出土していない。

S B-2 (図版6 写真図版8)

棟方位をN63°Eにおく桁行2間以上・梁行2間の掘立柱建物で、規模は桁行約4.3m以上・梁行約4.4mを測る。柱間は棟方向が平均210cm、梁方向はやや不揃いであるが平均約220cmを測る。建物内の南東隅部にはSK-1が設けられており、建物に付随する施設である可能性が考えられる。

出土した遺物には中世の須恵器碗33と須恵器壺34の口縁部がある。34は混入したものであろう。

S B-3 (図版6 写真図版8)

棟方位をN65°Eにおく桁行2間以上・梁行2間の掘立柱建物で、規模は桁行約4.4m以上・梁行約4.3mを測る。柱間は棟方向が平均220cm、梁方向は平均215cmを測る。梁側の側柱列の柱穴だけに切りあい関係が認められている。

遺物の出土はない。

S K-1 (図版6 写真図版8)

長径約125cm・短径約75cm・深さ20cmの不整形な椭円形を呈する土坑で、内部には河原石が敷くように置かれていた。また埋土や石の間には炭化物が多く含まれ、層状を呈していた。

遺物は出土していない。

E. 5区の遺構 (図版7 写真図版6)

4区と直角に連続する地区で、地形的には微高地の地区とその下の沖積低地に分かれる。微高地は4区から続くもので、微高地と沖積低地の間は低い崖状となっている。

微高地上の地区では方形の土坑が検出され、沖積低地側からは池状遺構と流路・旧河道が検出されている。

S K-1 (写真図版 6)

南壁にかかるコの字状に検出された土坑で、東壁は流失している。検出できた部分では一辺5.6m以上を測る。壁下には幅約15cm・深さ15cmの壁溝状の浅い溝が検出されている。また床面は西壁側から北壁側にかけて高床状に約13cm高くなっている。床面状からは柱穴等が検出されたが、この遺構に伴うものかどうかは断定できなかった。

出土した遺物は38~40の弥生土器甕・鉢がある。

池状遺構 (写真図版 6)

北壁沿いに弓の字状に検出され、検出できた部分では最大約8.7m・深さ約60cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトと黒褐色砂質シルトである。

埋土の最下層から44の弥生土器甕が出土し、45~47の弥生土器甕や鉢は埋土中から出土している。ただ、池状遺構が掘り込まれている下層からは弥生土器や須恵器杯が出土しており、池内部から出土した土器類は混じりこみの可能性が高い。

F. 6区の遺構 (図版7 写真図版7)

5区とは市道を挟んだ西側の地区で、丘陵裾部の段丘崖の下にあたる地区である。遺構検出面は段丘崖下から5区に向けて緩く傾斜する。この地区からは方形周溝墓、溝、柱穴が検出されている。

方形周溝墓 (図版7 写真図版7)

周溝の内壁で測った規模は南北約6m・東西5m以上で、東隅部と北溝の中央が陸橋状に途切れている。周溝は東溝が幅約70cm・深さ23cm、北溝の東半で幅約45cm・深さ約5cm、北溝の西半で幅約25cm・深さ約12cmである。南溝は東隅部で曲がらずに直線的に伸びた後、直角に曲がり、東溝とは約2mの間隔でほぼ並行して走行する。

主体部はほぼ中央に周溝と直行、平行する方位で検出されており、長さ約290cm・幅約115cm・深さ約17cmの規模である。平面形は長方形を呈するが、南辺側の幅が広くなっている。内部の埋土は黒褐色シルトで、僅かに木棺状の痕跡が確認されている。ただ遺存状況が悪かったため、木管の痕跡は明確に確認することはできなかった。

遺物としては周溝内から弥生土器後期末の甕底部等が出土している。

3. 遺物

A. 1~3区の遺物 (図版9)

微高地上にあたる1・2区ではほとんど図化できる遺物は無く、3区の包含層から出土した34の須恵器杯Hのみが掲載できた。比較的口縁部の立ち上がりが大きく、口縁端部は内傾する面をもっており、田辺編年のTK23からTK47段階のものである。

B. 4区の遺物

下層の竪穴住居跡を中心に上層の掘立柱建物跡や包含層から、弥生土器、古墳時代の須恵器、古代の須恵器・施釉陶器、中世の須恵器・土師器などが出土している。量的には弥生土器が最も多く、その他

は少量である。土器以外には管玉と鉄鎌がそれぞれ1点づつ出土している。

S H - 1・9 出土遺物（図版8 写真図版9）

S H - 1・9 からは壺が8点出土している。1・2の壺はS H - 9 の床面から出土している。1は口縁部が単純に開く小型の壺で、体部は肩部が張り、体部中央から上が平行叩き、下半が右上がりの叩きである。2は口縁部が屈曲して立ち上がる壺で、体部は内外面とも刷毛調整である。

8はS H - 1の床面から出土した壺で、体部は中央付近が張り、外面は叩き、内面はヘラ削りである。

3～7はS H - 9 の埋土からの出土として扱っているが、S H - 1・9 には切りあい関係があることから、S H - 1に属するものも含まれている可能性が高い。3・4は口縁部に若干の違いがあるが、ともに外面は右上がりの平行叩きで、4の内面は刷毛調整である。5は単純に開く口縁部をもち、下方に下がった位置に最大径がある器形で、壺になるものであろう。体部外面は叩き、内面は刷毛、口縁部の内面にヘラ磨きの痕跡が残る。6・7は壺で、口縁部が内湾気味となり、端部を上方に摘み上げている。6は小型の壺で体部内面がヘラ削り、大型の7は内外面とも刷毛調整である。

S H - 2 出土遺物（図版8）

壁際の土坑から9・10の土器が出土している。9は内面に刷毛調整が残る壺か鉢の低部である。10は小型の壺の体部で、外面をヘラ磨きしている。内面はナデ調整。

S H - 3 出土遺物（図版8）

11は外面に右上がりの叩きが残る壺で、口縁部は立ち上がった後、端部で大きく横方向に開く。内面には僅かに刷毛調整の痕跡が残る。12は小型の鉢で、内面に刷毛調整の痕跡残る。13は小型の壺の底部である。

S H - 4 出土遺物（図版8・10 写真図版9）

14～16の土器類と17の管玉が1点出土している。14は外面に右上がりの叩きを残す壺で、肩部の叩きはナデ消されている。体部の内面はヘラ削りする。15は小型の器台で、口縁部は屈曲して小さく立ち上がる。脚柱部は短く、裾部は大きく開く。裾端部は欠損している。

17は碧玉製の管玉で、下端は欠損する。現存長約2.1mm、径約5mm、孔は径約1mm、穿孔は1方向。

S H - 6 出土遺物（図版9 写真図版9・10・68）

18～29の壺・壺・鉢・高杯とF-1の鉄鎌が出土している。18は屈曲する口縁部を持つ小型の壺で、体部は肩部が張って扁平である。19は体部の中央が張り、くの字状に開く口縁部がつく壺で、口縁端部は僅かに面をもつ。体部外面は刷毛調整。

鉢は20～23の4個体がある。20・21は小型の鉢で、20は体部が内湾しながら伸び、21は外反する短い口縁部が付く。22は中型の鉢で、口縁部は体部から僅かに外反する。23は大型の鉢で、口縁部は屈曲して外面に擬凹線が施されている。

高杯は2個体あり、24の脚部は脚柱部が短く、裾部は大きく開く。外面を丁寧にヘラ磨きしている。

25は椀状の杯部に脚部がつく。杯部内面や脚部の外面に刷毛調整の痕跡が残る。

26～29は壺あるいは壺の体部片である。28の内外面は刷毛調整である。29は小型の壺で、外面をヘラ磨きしている。

S H - 7 出土遺物（図版9）

30は須恵器直口壺片である。口縁部と頸部の境に稜をもち、頸部の外面を波状文で加飾する。

S B - 2 出土遺物（図版9 写真図版10）

31は須恵器の碗で、底部は糸きりである。低部は平底となり、体部は直線的に開く。

包含層出土遺物（図版9 写真図版10）

弥生土器壺、土師器器台、須恵器杯H・壺、灰釉陶器椀、綠釉陶器片を記載した。32は口縁端部内面を小さく摘み上げ、外面を叩き後粗くヘラ磨き、内面を刷毛調整する。31は小型の器台で、受部は浅く、口縁部は短く屈曲して立ち上がる。脚柱部は短い。外面にヘラ磨きが残る。

34は須恵器の杯Hで、口縁端部は内傾した面をなす。35は須恵器壺の頭部片で、頸部中央に稜をもち、外面は波状文で加飾する。

36は灰釉陶器の椀であるが、無釉である。体部は浅く、高台は三角形を呈す。内面には水銀朱が薄く遺存し、その部分が磨耗している。朱墨の硯に転用されていた可能性がある。37は綠釉陶器の低部片で、いわゆる蛇の目高台である。

C. 5区の遺物

方形土坑・池状遺構などから出土した弥生土器と古墳時代の須恵器がある。量的には弥生土器が多い。

S K-1 出土遺物（図版10 写真図版10）

弥生土器の壺・甕・鉢がある。38は壺で、口縁部は短く外上方へ立ち上がり、端部で僅かに外反する。体部は中央が張った長い器形で、外面は叩き後刷毛調整、内面はナデ調整。39の甕は口縁端部に面をもち、体部外面は叩き後刷毛調整、内面はナデ調整。40は小型の鉢で、内面は刷毛調整である。

池状遺構出土遺物（図版10 写真図版9）

弥生土器の甕と鉢が出土している。41・42は小型の甕で、41は外面を叩き後、上半部を刷毛調整する。内面はナデ調整。42は頸部が締まらない器形で、口縁端部に擬凹線を施す。内外面とも刷毛調整。44は大型の鉢で、口縁端部は面をもつ。内面は刷毛後ヘラ磨き、外面はヘラ磨き。

包含層出土遺物（図版10）

弥生土器の壺・高杯と須恵器の杯Hが出土している。45は壺の体部で、外面の下半から上をヘラ磨きする。下半から底部までは外面は叩き後ナデ、内面は刷毛後ナデ調整する。46は高杯で、口縁部は体部から屈曲して立ち上がり、大きく外反する。内外面ともヘラ磨き。47は中型の鉢で、口縁部は体部から屈曲して横方向に開く。体部内面にヘラ磨きが残る。

48は須恵器の杯Hで、口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部は丸い。

4. 小結

八多川左岸の低位段丘上及び沖積低地に位置するこの地区では、段丘上から遺構面が2層確認され、下層の遺構面では円形竪穴住居跡2棟と方形竪穴住居跡10棟が検出された。住居跡の時期は大きく弥生時代後期後半～古墳時代前期（SH-1・3・5・6・8-10）と古墳時代後期（SH-7・11・12）の2時期に位置づけられる。古墳時代前期までの住居跡はさらに川除5期（SH-8・9）、川除6期（SH-6）、川除6～7期（SH-1・3）位置づけることが可能である。円形住居跡は詳細な時期の特定は困難であるが、SH-4の埋土からは川除7期に属するような器台が出土しており、それ以前には廃絶していたものと考えられる。

上層の遺構は柱穴から出土した遺物が少ないが33は川除遺跡における中世IV期に相当するもので、12世紀中～後半に位置づけられる。（吉誠）

第4章 乗安地区の調査

1. 概要

A. 概要 (図版11)

有野川左岸の扇状地性の段丘上とそこに入り込んだ谷部に位置する地区である。調査は3ヵ年にわたって実施している。

この地区では古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代、中世の遺構が検出されている。古墳時代前期の遺構は1・4区で溝が、3区で溝と竪穴住居跡が検出されており、他に7・9区の旧河道からこの時期の遺物が出土している。

古墳時代～飛鳥時代の遺構は2・3区と8区の大きく南北2群に分かれて竪穴住居10棟、方形土坑等が検出されている。竪穴住居跡は平面プランも不整形で、主柱穴が認められていない。遺物は8区の包含層をから多量に出土している。出土した遺物には須恵器・土師器があるが、量的には須恵器が多く、器形的には小形の供膳形態のもが多くなっている。

中世の遺構は1・3・4区で、掘立柱建物6棟や土坑等が検出され、8区でもこの時期に属する柱穴が検出されているが、建物跡としては捉えられていない。遺物も1・3・4区を中心に出土し、その他の地区では僅かに包含層で認められた程度である。

B. 地形 (図版11)

この地区的地形は大きく、扇状地性の段丘上とそこに入り込んだ深い谷地形に分けられる。段丘上には1～4・7・8区があたり、河川沿いの4区東側から8区東側にかけて、河川に並行する段丘崖が見られ、12区付近で西に回りこみ、8区と9区の間の水路に並行し、7区付近で不明瞭となっている。段丘上の地形は大きさは南から北に傾斜している。東側の段丘崖下には細い谷状の地形が南北に続いており、有野川の旧河道と見られる。そこにあたるのが14区である。14区では遺構は検出されていない。

C. 基本層序

段丘上の内、2・3区の遺構検出面はにぶい黄褐色砂質シルトである。1区の遺構検出面は2区から続く西半がシルト、SD-1から東は砂礫で形成される。シルト層の上面からは弥生時代末、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構が検出され、砂礫層上からは中世の土坑の底が検出されている。3区の西端では谷部が埋没した後に、その上面から中世の遺構が営まれている。4・8区では遺構検出面は黒褐色ないし赤黒色の砂から粘質シルトである。この下層に黄褐色シルト層がみられることから、1～3区でも本来は黒褐色砂ないし粘質シルトが存在していた可能性がある。この黒褐色系の土層は有機質の腐植土と見られる。これら段丘上の地区では、耕作土以外は遺構面検出面まで水田造成に伴う客土層である。

谷部にあたる地区では基本的には河川堆積の土層がみられ、14区では底まで検出できなかた。9～13区では古墳時代後期～中世の遺物を含む河川堆積層の下層に黄褐色砂層が検出され、そこからさらに切り込む河道が認められている。この河道の内部から古墳時代前期の土器を出土している。

2. 遺構

A. 1区の遺構（図版12 写真図版11）

段丘上にあたる地区で、調査区はT字形である。遺構検出面は、SD-1の西側の地区ではにあい黄褐色の砂質シルトであり、古墳時代前期、古墳時代前期～飛鳥時代、中世の遺構が検出されている。SD-1の東側では遺構検出面は一段高くなり、南北方向の地区を含め、砂礫層となる。

検出された遺構は、古墳時代前期の溝1条、古墳時代後期の溝1条、飛鳥時代の柱穴、中世の土坑、柱穴がある。柱穴類は建物として復元することはできなかった。

SD-1（図版13 写真図版12）

幅約1.7m・深さ約40cmの溝で、埋土は黒褐色シルト質細砂であった。溝内部には多量に河原石が認められ、人為的に埋め戻されたものと見られる。礫群中の一ヶ所から51の須恵器大甕片が出土している。

SD-2（図版13・14 写真図版13・14）

SD-1に並行して検出した幅約5m・深さ40～50cmの溝である。溝の内部には黒褐色及び暗褐色の砂質シルトが数層堆積し、溝底は西半で一段深くなり、その部分から土師器が多量に出土している。（吉謙）

B. 2区の遺構（図版12 写真図版15）

調査区は微高地であり、遺構検出面は灰黄色シルトの一面である。検出面はほぼ平坦であるが、北東に向かってやや傾斜する。検出された遺構は竪穴住居跡4棟・土坑1基・柱穴・溝である。柱穴群については建物跡や樋といった構造物に復元することができなかった。溝についてはごく浅いもので、遺物もほとんど検出されていないため、性格は不明である。

SH-1（図版15 写真図版16）

調査区東寄りで検出された住居跡である。平面形は長方形を呈し、東辺に竈状の落ち込みがある。規模は東西4.35m、南北3.8m、遺存する壁高は最高で約40cmを測る。柱穴は確認できなかった。床面に偏平な台状の石が置かれていた。

埋土内から126～131の土師器の甕・椀・高坏・小型壺等が出土している。

SH-2（図版15 写真図版16）

調査区西寄りで検出された住居跡である。平面形はおおむね正方形を呈し、東辺に竈を持っていたと思われる。住居跡の規模は東西3.6m、南北3.4m、遺存する壁高は最高で20cmを測る。床面で柱穴は確認できなかった。床面および埋土から134～142の土師器の甕・壺・鉢・高坏・端等が出土している。

SH-3（図版15 写真図版16）

調査区西寄りで検出された住居跡である。南東隅は調査区側溝で切られ検出できなかったが、平面形は長方形を呈し、北辺に竈を持つ。住居跡の規模は東西4.5m、南北5.4m、遺存する壁高は最高で20cmを測る。床面で柱穴を3基検出しているが、いずれも主柱穴とは考えられず、柱穴の配置は不明である。北東隅に礫を敷いたような部分と土師器の甕を埋置した土坑を持つ。

床面から111～118の須恵器の坏蓋・坏身・土師器の坏・甕等が出土している。

SH-4（図版15 写真図版17）

調査区西端で検出された竪穴住居状の遺構である。平面形は長方形を呈する。規模は東西4.5m、南北5.7m、遺存する深さは最高で10cm程度の深い落ち込みである。柱穴は確認できなかった。

SK-1 (図版30 写真図版17)

長辺2.9m、短辺2.8mのやや歪んだ方形を呈する土坑で、深さは最高で25cmを測り、埋土は黒褐色シルトである。埋土には多数の土器片と礫が廃棄されたような状況で含まれていた。図示できたものは124・125の土師器2点である。(鐵)

C. 3区の遺構 (図版16 写真図版18)

古墳時代の竪穴住居跡・溝、中世のとしては掘立柱建物跡・土坑・池状遺構が検出された。

SH-1・2 (図版17・写真図版19)

調査区の南東部で重複して検出された、方形の竪穴住居跡である。SH-1がSH-2を切って構築されている。ともに遺構の半ばが調査区外にあり、規模は確定しがたい。SH-1の床面からは、161他の土師器がまとまって出土している。

SH-3 (図版17・写真図版20)

調査区東部に位置する方形住居である。その半ば以上が後世の削平により消滅しているため、規模は明瞭ではない。壁溝と柱穴が検出されている。遺物は僅少である。

SH-4 (図版17・18・写真図版20)

調査区東部に位置し、SH-3を切って構築されている。不整長方形の平面プランをもち、その西辺中央に竈を附設していたと思われる顕著な焼土がみられた。焼土周辺の床面より、土師器を中心とする土器群が出土している。

SB-1 (図版18・写真図版21)

調査区西部に位置する、4間×4間の建物跡である。不規則な柱の配置を見せるが、中央と四隅の柱穴の規模が傾向があることから、主要な柱穴と補助的に設けられた柱穴の別があったのかもしれない。建物跡内および周辺に、偶蹄類の足跡と思われる凹みが分布していたことから、部分的に牛小屋として使用されていた可能性も否定できない。

SB-2～5 (図版19・写真図版21・22)

調査区中央部に位置する建物群である。2間×5間総柱のSB-4を中心に、これと方位を同じくする。2間×2間で方形の土坑を囲むSB-2、1間×3間(?)のSB-3、1間×2間のSB-5で形成されている。

SB-2に囲まれた土坑は、一辺2.5m前後の方形を呈し、内部は拳大～人頭大の礫で充填されていた。深さは40cm程度で底面は平坦に整えられていた。出土遺物は認められず機能は不明であるが、SB-2との関連が想起される。

池状遺構 (図版21・写真図版22)

SB-2～5の南側で検出された、不整梢円形の遺構である。長径5m、短径3.5m、深さ30cm前後を測る。埋土中に拳大～人頭大の礫が多量に埋設されており、その状況からあるいは、周囲に石垣をもつものかと思われたが定かではない。

土坑

調査区西半を中心に、多数の土坑が分布している。形態や深度等から複数の機能が想定できるが、出土遺物等から機能が明らかとなったものはない。特徴的なものに焼土をもつ土坑があげられる。

SK-1～4 (図版21)

いずれも底面を強く焼かれている土坑である。ほとんどの場合底面は赤褐色になるまで焼成されてお

り、周囲には暗赤色の焼土が広がり、炭化物の散布も認められた。平面形態や大きさ、深さに共通する要素が認められる。

S R - 1

調査区北東部から南部にかけて延びる。最大幅7m前後、深さ0.5m前後を測る。埋土下層より古式土師器がまとまって出土しており、特に調査区東部でこれが顕著であった。

D. 4区の遺構 (図版22・23 写真図版22)

4区では、堅穴住居跡2棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟のほか、土坑、旧河道が検出された。遺構内からの顕著な出土遺物はなく、堅穴住居跡はいずれも大部分が調査区外にあるため、詳細は明らかでない。

堅穴住居跡は2棟とも方形の平面プランをもつ。床面では柱穴等は検出されなかった。出土遺物に顕著なものはないが、住居のプランから古墳時代の遺構と推定できる。

掘立柱建物跡は堅穴住居跡に重複して構築されていることから、これより新しい時期のものと考えられる。

土坑は11基が検出された。不整円形ないし不整梢円形のものが大半で、規模は直径1m前後を測るものが多い。分布の規則性は認められず、機能も明らかではない。(久保)

E. 8区の遺構

段丘上にあたる地区で、黒褐色の砂及び粘質シルト上から古墳時代後期・飛鳥時代の堅穴住居跡・柱穴・土坑、中世の柱穴が検出された。柱穴類については建物跡として復元できたものはない。

S H - 1

S H - 2・3に切られて検出された方形の住居跡で、一辺約4.6mの規模である。壁高は最高約10cm遺存していた。床面は南半が一段低くなり、床面上からは柱穴等は検出されていない。

埋土は黒褐色の砂質シルトであった。

内部からは290~295の須恵器杯H・杯G・壺、土師器甕が出土している。

S H - 2

南北約4.9m・東西4.4mの不整形な長方形の住居跡で、壁高は最高約17cm遺存していた。東半の壁下には幅約16cm・深さ約10cmの壁溝が設けられていた。床面上からは柱穴等は検出されていない。埋土は灰褐色・黒褐色砂質シルトであった。埋土から296から301の須恵器杯H・杯B蓋、土師器甕が出土している。この他、床面上には砂岩製の台石状のものが出土している。

S H - 3

一辺約4.7mの方形の堅穴住居跡で、壁高は最高25cm遺存していた。埋土は暗褐色砂質シルトを中心としたものであり、炭化物が多量に含まれていた。主柱穴にあたるような柱穴は検出されていない。

埋土中及び床面から浮いた状態で、315から340の須恵器杯B蓋・杯B・杯G、土師器杯A・甕が出土している。

S H - 4

S H - 2の南側で方形の落ち込みの北東隅部が検出されたもので、一辺2m以上の規模である。壁高は約10cm遺存していた。

SH-5

一辺約4.5mの方形の堅穴住居跡であるが、北辺が斜行して、平面形は歪なものになっている。壁高は約20cm遺存しており、床面上には砂岩製の台石状のものが見られた以外、柱穴等は確認できなかった。埋土は黒褐色のシルト質極細砂であった。埋土中からは300から314の須恵器杯G蓋・杯B蓋・杯G・高杯、土師器杯蓋・杯A・甕が出土している。(吉誠)

3. 遺物

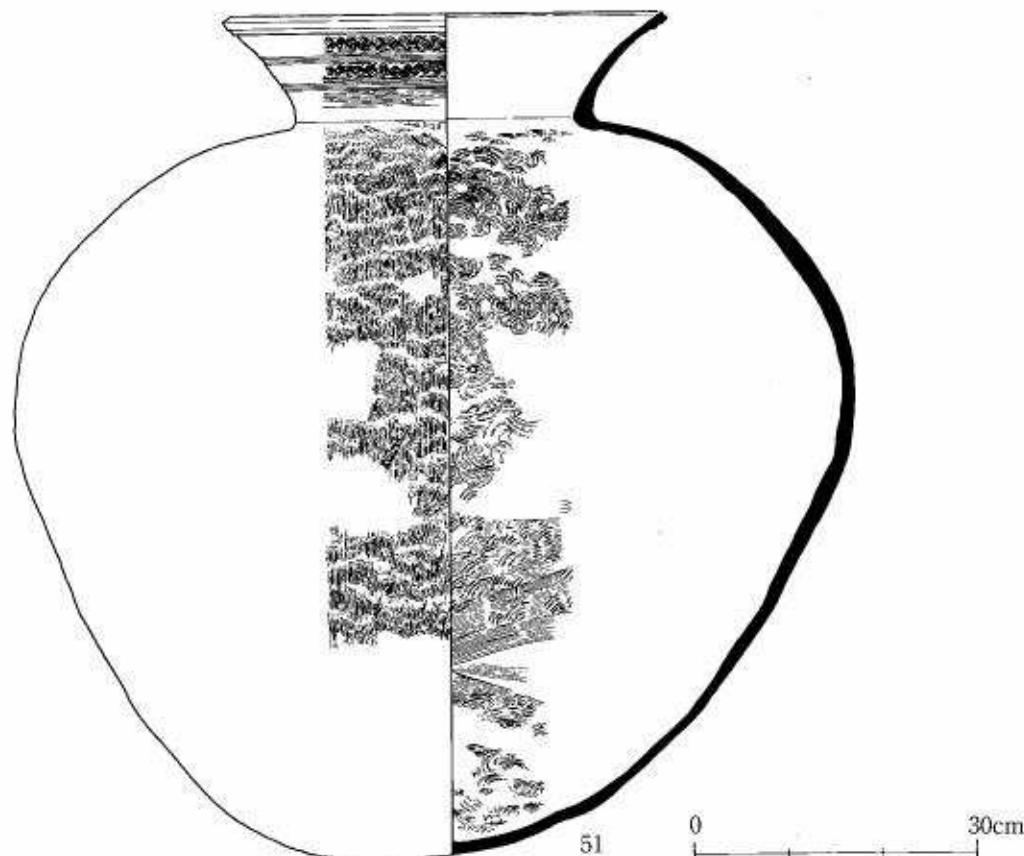
A. 1区の遺物

SD-2出土遺物(図版28 写真28・29)

壺・甕・高杯・器台・鉢類が出土している。壺類には大型・中型・小型のものがあり、大型・中型には口縁部が二重口縁を呈する52と、単純に外上方に開く53~55・98の2種が見られる。52と98は外面にヘラ磨きする比較的丁寧な造りである。53~55は刷毛調整が残るなど粗製の土器である。

58は小型丸底壺で内外面ヘラ磨きしている。56はやや頸部が細く細頸壺か。57は外面に叩き目を残す。甕は13固体が図化され、弥生甕の伝統を残すもの、庄内甕の影響を受けたもの、布留式の影響を受けたものの3種がある。弥生甕の伝統を残す60~69は体部の形状は崩れ、歪なものが多い。体部外面から口縁部外面は粗い叩き、内面はヘラ削りである。庄内甕の影響を受けた70・71は外面に細かい叩きを施し、内面ヘラ削りする。布留式甕72の体部内面はヘラ削りである。

高杯73は口縁部が屈曲して稜をもつ。内外面をヘラ磨きする。



第3図 1区 SD-1出土須恵器

器台74から77はいずれも小形の器形で、受部と脚部が直線的に開く74、皿状の受部をもつ75、皿状の受部の口縁端部を短く摘み上げた76がある。77は皿状受部をもつ器台の脚部である。74・77は客部に細かいヘラ磨き状の痕跡が残る。76は受部内面にヘラ磨きが残る。

鉢は最も多く見られる器種で、いずれも小型の器形である。浅く杯あるいは碗状の器形の78-81、体部から口縁部が斜め上方に開く82・83、口縁部が屈曲し、いわゆる二重口縁の84・85、台が付く86-92が見られる。82の外面には叩きが残り、84・85は内外面ヘラ磨きしている。台が付く器形は内面をヘラ磨きしたものもあるが、外面は粗雑な造りで粘土の接合痕を残すものがある。

有孔鉢は94-97の4個体がある。94・95は内面をヘラ磨き、95-97の外面は叩きが残る。96は底部をヘラ削りしている。

93は鉢のミニチュア土器で、指押さえの痕跡を残す。

S D-1 出土遺物 (第3図 写真図版30)

51は須恵器の大型甕で、体部は中位のやや上が強く張り、外面は平行叩き、内面は同心円の当具の痕跡が残る。口縁端部は面をもち、頸部との境にぶい稜をもつ。頸部は凹線で3段に分け、上2段に波状文を施す。

S K-1 出土遺物 (図版29 写真図版30)

土師器皿類が多量に出土している。皿類には口径が8-9cmで浅い器形の99-102、口径が10-11cmを越し、比較的深い器形の103-110がある。110以外は手づくねである。110はヨコナデしている。

B. 2区の遺物

S H-1 出土遺物 (図版30 写真図版31)

土師器壺126、甕127、高杯128・129、碗130、鉢131が出土している。小型壺126は体部外面と体部内面の上半を細かいヘラ磨き状に磨く。同様の磨きは高杯129にも認められる。甕127は内面ヘラ削り。高杯128・129はともに外面に稜をもつもので、129の杯部の外外面には細かく磨かれている。碗130は底部ヘラ削り、体部の内外面はヘラ磨きである。鉢129は低い脚台が付くものである。

S H-2 出土遺物 (図版31 写真図版32)

土師器壺134・135、甕136-139、高杯140、鉢141、鍋142が出土している。134・135は直口壺で、134は体部外面をヘラ磨き、135は小型の壺で外面を細かく磨いている。甕はいずれも内面ヘラ削りで、136は外面叩き、137は外面を板状の工具でナデている。高杯140は口縁部と杯部の境は不明瞭となり、体部の内外面を細かく磨く。140は鍋で、体部内面はヘラ削りである。

S H-3 出土遺物 (図版30 写真図版31)

須恵器杯H蓋111、杯H112・113、土師器碗114、甕115・117・118、瓶116が出土している。須恵器杯H蓋は口径約11.4cmと小型化したもので、天井部はヘラ切り後ナデ、杯Hも口径9.9-10.3cmと小型化したものであるが、113は底部をヘラ削りしている。112の底部はヘラ切り後ナデである。

土師器碗114は底部外面をヘラ削りし、内面に放射状の暗文が残る。甕は小型のものと、大型のものがあり、小型の115は外面に僅かに刷毛が残り、内面はヘラ削り。大型の甕117は口縁端部が外側に突出する。体部を欠いているが、長胴になるものである。118は口縁部の外面に指押さえの痕を残す。瓶116は口縁端部が内面に肥厚し、外面は縦方向の刷毛調整。

S H-4 出土遺物 (図版30 写真図版31)

須恵器杯G蓋・杯G・杯B、土師器甕が出土している。杯G蓋は内面にカエリが付き、天井部の高い

119と天井部の扁平な120がある。口径はほぼ10.5cm前後である。121の杯Gは口径9.7cm、122の杯Bは口径14cm。123は土師器の小型の甕で体部内面はヘラ削りである。

包含層出土遺物（図版31 写真図版32）

古墳時代の土師器小型丸底壺143・144、小型壺145、鉢146・147、高杯148・149、器台151・152、飛鳥時代の須恵器杯G蓋153・杯G154～156、土師器甕157が出土している。小型丸底壺は大きさに違いはあるが類似した器形であり、調整も細かい磨きを施すなど共通している。鉢146は平底である。147は口縁部が大きく開く器形で、体部の内面をヘラ削りしている。高杯148は小型で杯部は内湾し、口縁端部は横方向に開き小さく摘み上げている。脚裾部は脚柱部から屈曲して開く。149は杯部が体部と口縁部の境で屈曲する。両個体とも内外面をヘラ磨きしている。器台152は脚柱部がほとんどなく受部と脚部の境が屈曲する。151・152とも外縁を細かい磨きで仕上げている。

須恵器杯G蓋153は口径が11.6cmである。杯G154～156は口径9.0～11.2cmであり、154の底部にはヘラ記号が入っている。蓋の可能性もある。土師器甕157は口径約20.9cm・器高約32.5cmの長胴の甕である。口縁端部は僅かに上方に摘み上げられている。（吉謙）

C. 3区の遺物（図版32）

S H - 1 出土遺物（図版32）

158～161はS H - 1床面より出土した土師器である。小型丸底壺、鉢、有段鉢、甕を含む。

S R - 1（図版34～36・89 写真図版33・68）

195～263はS R - 1より出土した。195～213は上層～上面の遺物である。検出面付近では、多数分布する中世前半期の遺構の影響と思われる、当該時期の遺物が出土している（195～203）。

埋土上部には、古墳時代後期の遺物が包含されている（204～213）。これにより、概ね6世紀後半までは、流路は凹地として残されていたものと判断できる。

F - 5はS R - 1埋土より出土した鉄鏃である。

埋土下層からは、庄内式～布留式併行期の土師器類が多数出土した（図版35・36）。隣接集落から投棄されたものであろうか。大部分は布留式に併行する時期のものであるが、一部に庄内式の様相をとどめる甕が認められる。

S H - 2 出土遺物（図版32 写真図版33）

162～168は、S H - 2より出土した。須恵器坏蓋、土師器坏、甕を含む。須恵器蓋の形態から、TK4.3型式前後に比定できよう。

その他の遺構出土遺物（図版32・89 写真図版68）

169はS D - 1より出土した須恵器碗である。

170～174はS B - 1柱穴より出土した。171・172は柱穴18、173は柱穴12、174は柱穴5の出土である。

F - 2は、S B - 1の柱穴4より出土した、一端が折り曲げられた鉄器である。他の一端はヘラ状を呈する。

175はS B - 3の柱穴47より出土した。古墳時代の須恵器であり、混入遺物である。

F - 3はS B - 3の柱穴23より出土した釘である。

176～179は、建物に復原できなかった柱穴から出土した遺物である。12～13世紀代に属する。

F - 4は柱穴2より出土した釘である。

包含層中からは、264～278が出土した。大部分は中世前半期のものであるが、264～267は飛鳥時の遺物である。

D. 4区の遺物（図版37・89 写真図版30）

遺構内からの顯著な出土遺物はなく、図示した279～289はいずれも包含層出土の遺物である。

古墳時代後期～中世前半期までの遺物を含み、既述の乗安3区とはほぼ同時期の遺跡とみて大過なかろう。

F-6・7は包含層より出土した鉄器である。F-6は基部を袋状に折り曲げた鉄斧、F-7は鉄製円盤の中央に、鉄製の軸があることから紡錘車かと推定している。（久保）

E. 8区の遺物

S H-1 出土遺物（図版38）

須恵器杯H・杯G・高杯・壺、土師器甕が出土している。杯Hは290・291の2個体があるがいずれも口縁部の立ち上がりは短く、内傾したものになっている。292の高杯は脚部を欠くが、杯Hに脚をつけたもので、極めて大型の高杯である。295は土師器の中型の甕である。

S H-2 出土遺物（図版38 写真図版35）

須恵器の杯Hと、杯Bか杯Gとみられる口縁部が出土している。296は口縁部の立ち上がりは短く、端部は内傾した面をもつ。

S H-3 出土遺物（図版38・39 写真図版34）

須恵器杯B蓋315～318・杯G319～325・杯A326～329・杯B333～335・椀A330～332、土師器杯A336・鍋337・甕338～340が出土している。須恵器杯B蓋は内面にカエリが付き、口径が14～15cmの315～317、口径が17cmを越す318の2種が見られる。杯Gは口径8.7～10.7cm、器高3.3～3.6cm。口縁部が直線的に上方に開くものも見られる。杯Aは口径11.4～14.5cm、器高3.3～3.8cm。330～332は深い器形で椀になる可能性がある。杯Bは口径14～15cm、器高3.9～4.4cm。333の底部外面には爪形文が見られる。

土師器杯A336は口縁端部が内側に肥厚し、口縁部外面はヘラ磨き、底部外面はナデである。口縁部内面には2段に暗文が施されている。

S H-4 出土遺物（図版38）

須恵器の杯B蓋と土師器の甕が出土している。杯B蓋298は口縁部の内面にカエリをもつ。土師器甕299は二次焼成を受けている。

S H-5 出土遺物（図版38 写真図版35）

須恵器杯G蓋300・杯B蓋302・杯G303～305・高杯306・壺蓋301、土師器杯蓋308・309・杯C310・杯A311～313・甕314が出土している。須恵器杯B蓋302は内面にカエリが付く。杯Gは口縁部が丸みをもつものと、直線的になり杯Aに似た器形となるものがある。土師器杯Aは内面の暗文は1段で、底部外面を指押さえ後ナデを施す308と、ヘラ削りする312・313がある。

S K-1 出土遺物（図版39 写真図版35・38）

須恵器杯G341～346・高杯347・壺348、土師器杯C349・甕350～352・瓶353が出土している。須恵器杯Gは口径10.9～11.9cm、器高3.4～4.1cm。杯Hの蓋が逆転したような器形も含まれる。高杯は無蓋で、脚に透かしはみられない。土師器杯Cは外面ヘラ磨きしている。

8-1区包含層出土遺物（図版40・41・42 写真図版36・37）

平成7年度の調査において包含層から多量に出土した土器類であり、須恵器・土師器があるが、量的には須恵器が多い。

須恵器には杯H蓋354、杯H355～358、杯G蓋359～369、杯G370～391、杯A392～403、杯B蓋404～413、杯B414～418、高杯419・420、皿421、甕422・423、平瓶424、鉢426、土師器椀A428、杯A429～431、杯C432、皿A433・434、高杯435・436、鉢440・441、甕437～439、鍋442、瓶443～446がある。

須恵器杯H蓋は天井部ヘラ削り、杯Hの内358は底部の周囲のみヘラ削りしている。杯G蓋は天井部が高い器形と扁平な器形があり、カエリが口縁部より下に突出するものと、内側で納まるものがある。口径は9～11.9cm。杯Gは底部が丸みもって深い器形と底部が平らで浅い器形があり、口径は8.6～10.8cm。杯Aには口径11～13cmの392～400と口径が14cmを越す401～403がある。器形的には底部が丸みを帯びたもの、底部は平らで口縁部の下半が内湾するもの、口縁部が直線的に開くものがある。杯B蓋404～413は413を除いて天井部は扁平で、口縁部は湾曲する。413は口縁部が伸びた形状となっている。口径では17cmを越すもの、16cm前後のもの、15cm以下の3種がみられる。杯Bは414～418の5個体があるが、414は口径16.9cmで底部と口縁部の境は丸みを持つ。416～418の底部と口縁部の境が屈曲気味となっている。418の口径は12.9cm。高杯は杯部419と脚部420があり、419は口縁部と体部の境に稜をもつ。420の脚部は脚柱部の中央に凹線文を施している。皿421は口径約21.8cm。

鉢426は口径26.4cmで、口縁端部は内傾した面となっている。

土師器椀428は口径9.2cmの小型のものである。杯A429は口径15.4cmで、底部外面は中央を2方向に、周囲を4分割してヘラ削りしている。体部外面はヘラ磨き。体部内面は放射状の、口縁部内面は横に暗文が施されている。430は口径19.8cmで、製作手法は429と同様である。内面の暗文は2段に施されている。431は口径22.5cmで、ナデ調整である。皿A433は口径21.4cm、434は口径23.1cm、両個体とも内面に暗文が施されている。高杯435は杯部が屈曲し、436は横方向に大きく開く杯部をもつ。435は内面のみ、436は内外面をヘラ磨きしている。鉢には小型の440と大型の441がある。ともに口縁端部は内傾した面となり、体部の外面にかすかに刷毛の痕跡が残る。甕には小型の437と中型の438・439がある。437・439は刷毛調整、438は板状工具によるナデ調整である。瓶には体部は直線的で口縁端部が内側に肥厚する443・444、体部が直線的に伸びて口縁端部は丸く納まる445、体部が丸みをもつ446がある。いずれも外面は刷毛調整である。

8—2区包含層出土遺物（図版43）

土師器・須恵器・青磁があるが、須恵器が多くなっている。8—2区に比べると新しいものが多い。

土師器には壺447・448、甕449、器台450、椀451がある。甕449は口縁部から体部に叩きを残す。450は小型の器台脚部で、外面はヘラ磨きである。これらの土師器は同一の落ち込み内からの出土であり、2区あるいは3区の溝が伸びていた可能性が高い。

須恵器には杯H蓋453・杯H452・椀A454・杯A455～458・杯B蓋459～463・杯B464～468・高杯469・壺470～473・腹474・甕475・椀476～478がある。杯H蓋459は小型化しているが、天井部はヘラ削りである。杯A461は全体に丸みをもち、462は口縁部が直線的に伸びる。463・464は不整形な器形で、浅いものである。杯B蓋は口縁部が屈曲する465～468、口縁部が湾曲する469がある。杯Bは全体の形状が分かるものはないが、底部の大きさからみて、3種が存在している。壺には高台の付く476・477と、平底の478・479がある。椀も全体の形状を知りえるものはないが、体部の傾きからみて、平底になるものであろう。

8—3区包含層出土遺物（図版43）

須恵器杯G480、杯A481・482、杯B蓋483、杯B484、高杯485、壺486、椀487が出土している。480は杯Hの蓋になる可能性がある。杯Aは浅い器形481と口縁部が直線的な482がある。杯B蓋483は口縁

部が屈曲する小型の器形である。487の椀は底部は糸きりで、平底である。

8—4区包含層出土遺物（図版44 写真図版38）

須恵器・土師器・国産陶器が出土しており、量的には須恵器が多くなっている。

須恵器には杯H蓋488～490・杯H491～493・杯G蓋494～499・杯G500～505・杯A506～512・杯B蓋513・杯B514・壺515～518・鉢519・甕520が出土している。杯H蓋は大型と小型があり、大型の488は天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。489は稜が見られず屈曲するのみとなっている。490は小型化した器形であるが、天井部はヘラ削りしている。杯Hにも大型の491と小型化した492・493があり、492の底部はナテ溝整である。杯G蓋は天井部が高くカエリが口縁部より下に出た494～497と、天井部が低くカエリが内面で納まる498・499がある。杯Gは器形がバラエティに富み、杯Aに近い500・505、杯H蓋を逆転させたような501～504がみられる。口径は約10.5～11.6cm。495の蓋と505の身はセットで出土している。杯A506～512は口径約12.1～14.4センチの小型のものだけである。器形では浅い506～510、深い511がある。512は皿である可能性が高い。杯B蓋513は口縁部が湾曲し、杯B514は全体に丸みをもつ器形である。壺515～518の内、518の口縁部は拡張した面をもつ。518は台部に4方向から穿孔している。519は大型の鉢であり、体部から屈曲して口縁部が開く。甕520は口縁端部が水平な面となり内側に肥厚する特徴的な器形である。土師器の甕に類似する。

土師器甕521は体部下半を欠くが長胴になるものである。

備前焼の播鉢522は口縁部が上方に拡張され、端部は内傾した面をもつ。内面の褶目は櫛書きである。

鉄製品（図版89 写真図版68）

F-8の刀子はSH-2から、F-9の不明品はSH-4から、F-10・11・14の鉄鎌・帶止具釘は8—4区包含層から、F-12・13の杏葉・鉄鎌は8—1区の包含層から出土したものである。F-11は裏で折り曲げられた鉄2本が遺存している。F-12は鉄地金に金銅を貼った小型のハート形の杏葉で、僅かに金銅が遺存している。最大残存幅6.4cm、高さ4.1cm。

4. 小結

この地区では1—4区（南地区）と8区（北地区）の2地区に分かれて遺構が検出され、この間の1区東半や6・7区には明瞭な遺構は検出されず、両地区の間には空白域が存在する可能性が高い。

検出された遺構は古墳時代前期段階、飛鳥時代、中世前期の3時期があり、古墳時代前期段階遺構は1区SD-2、2区SH-3、3区SH-1・SR-1があり、1区SD-2と3区SR-1に囲まれた範囲の中央付近に分布している。1区SD-2と3区SR-1は集落を区画する意図があるものと思われる。北地区はこの段階の遺構は存在せず、僅かに7区の落ち込みがある程度である。

飛鳥時代の遺物を出土した遺構は南・北両地区に跨り、南地区では1区SD-1、2区SH-2・3、3区SH-2・SR-1、北地区では8区SH-1～5・SK-1などがある。南地区では前段階からの東西両側の溝が存続し、遺構もこの区画内のみに止まっている。

遺物は包含層も含めると多量に出土しており、遺構内出土のものはほぼ陶邑編年のTK209形式から飛鳥・藤原Ⅲ期後半～Ⅳ期に入るるものである。遺物の量的な中心は飛鳥・藤原Ⅲ期後半～Ⅳ期にある。

中世の遺構は3区と4区から検出されており、それぞれ遺構の密度は低く1時期に営まれたものと考えられる。3区ではそれぞれの遺構に有機的な関連がみられ、一軒の家屋として捉えることができる。遺物はさほど多くはないが、川除遺跡の中世Ⅳ期の遺物が3区を中心に出土している。（吉誠）

第5章 宮ノ後地区の調査

1. 概要

A. 概要 (図版47)

八多川と有野川の合流点付近の沖積地に面した段丘上に位置する地区であり、眼前に木之元地区を望む。段丘面は上位・下位の2面が観察されるが、地区の北半は下位面がほとんど存在せず、上位面から沖積地に向けて崖状となっている。

調査区は区画街路にあわせて設定し、下位面の段丘崖から上位面までに及ぶ。調査時にこの地区として沖積地に設定した旧1・8区の調査区は、遺構の内容や地形から木之元地区として取り扱っている。下位面では平安時代中期、平安時代末、近世の遺構が、上位面からは平安時代中期、室町時代の遺構が検出されている。遺構の分布は3区東端と6・7区に比較的多く見られるが、それ以外の地区ではほとんど遺構は認められていない。

遺物は量的には少ないものの、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・施釉陶器・輸入磁器・硯など多種多様なものが出土している。その中で平安時代中期の遺物が比較的多くなっており、他地区にはない特徴をもつ。

B. 地形 (図版47)

丘陵裾に貼りつく段丘上にあたり、沖積地とは約2.8mの崖で隔てられる。この崖が下位面の段丘崖にあたり、丘陵裾を有野川に平行するように伸びている。段丘面上は3・4区から7区隅を通り、1区中央に至る崖によって2面に分けられ、下位面と上位面とは比高差約1.4mを測る。調査区北半では下位面が狭小となり、上位面から沖積地に向かって階段状に落ちて行く地形になっている。下位面は平坦となっているが、上位面は背後の丘陵からの堆積物の影響のためか傾斜をもつ。

C. 基本層序

調査区は1区が下位段丘崖から段丘上位面まで、2・3区が段丘上位面、4~7区が段丘下位面にあたるが、すべての地区で、遺構面は段丘を形成する基盤層である黄褐色砂質シルト上にあった。耕土からそこまでの堆積は基本的には耕土と客土層であり、僅かに段丘上位面にあたる3区の西端と東端で、少量の遺物を包含した黒褐色シルトの堆積が確認されている。この層には小礫が含まれており、背後の丘陵からの堆積物とみられる。

2. 遺構

A. 1区の遺構

上位段丘面から下位の段丘崖にかけて階段状に落ちていく地区であり、遺構はほとんど検出されず、僅かに最上部のトレンチ端で溝状の遺構が検出されただけである。

S D-1 (図版49)

幅約2.4m・深さ0.6mの溝で、埋土は黒褐色砂質シルトを中心とした層である。形状からは自然流路

と見られるが、埋土中には炭化物が多く含まれ、559～561の遺物を出土している。ほぼ同時期の3区東端の遺構との関連も考えられる。

B. 2・3区の遺構（図版49 写真図版40）

2区から3区東端にかけて柱穴群と小溝が、3区西端で集石遺構と土坑を検出している。柱穴群は建物跡の一部として捉えられそうなものも見受けられたが、調査区が限定されており、確実には捉えられていない。柱穴群からは土師器・黒色土器の細片を出土している。溝群はほぼ段丘面の傾斜に平行・直交する方向である。

集石遺構（図版50 写真図版41）

調査区西端で延長約10m・幅約3mの範囲に集中したれ疊群で、北片には約40cm大の川原石が石列状に認められた。石列の南側は最大約20cmまでの小疊が敷かれ、小疊の上面は中半までが平坦で南半は南に下がる傾斜をもつ。

疊群中より564～568の土師器鍋、丹波焼、青磁、軒丸瓦が出土している。

C. 5区の遺構（図版51・52）

柱穴群・土坑・埋桶・溝が検出されたが、柱穴群以外はすべて近世以後の遺構である。また柱穴群も建物跡としては復元できなかった。

D. 4・6・7区の遺構（図版51・52 写真図版42・43）

調査の都合上、3地区に分けて調査を実施したが、遺構が連続することから、まとめて記述する。

検出された遺構には掘立柱建物跡1棟、土坑、溝、流路などがあるが、この地区でも近世以降の水田開発時の搅乱が遺構面を乱しており、柱穴群は1棟が建物跡として復元されたに過ぎない。

S B - 1（図版52）

流路S D - 1が埋没した後に営まれた建物跡で、東西1間（約2.1m）、南北3間（約6.4m）として捉えているが、北側にもう2間伸びて5間（約10.4m）になる可能性もある。南北の柱間は約210cmであり、柱穴の埋土は黒褐色砂質シルトであった。

S K - 1（図版52）

S B - 1の南東側で検出された土坑で、内部には20cm大の川原石が内蔵されていた。埋土は黒褐色砂質シルトを中心とする。埋土中から570～574の須恵器・青磁が出土している。

S D - 1・2（図版52 写真図版43）

4・6・7区にかけて検出された小枝谷状の自然流路で、7区の両流路が合流する部分が最も深く、それぞれの端部に向かって急激に深さを減じていく。埋土内部は下層が黒褐色砂質シルトを中心とした堆積であり、上層は灰褐色シルトを中心とした堆積であった。

最下層からは弥生土器、黒褐色砂質シルト層から古墳時代の須恵器、上層の灰褐色シルト層からは古墳時代から平安時代中期の遺物が出土している。

3. 遺物

A. 1区の遺物

SD-1より出土した土器の他、包含層から東播系の須恵器甕が出土している。

SD-1 出土遺物（図版53）

須恵器椀559・560、綠釉陶器561が出土している。須恵器椀559は高台部を欠くが、体部に1条の沈線が施され、底部は輪高台の貼り付け痕が観取できるもので、椀Cになる器形である。560はヘラ切りの平高台が付く、椀Aである。561は綠釉陶器の皿で、底部と体部の境の内面が屈曲する。

B. 3区出土遺物（図版53）

集石遺構の上面や内部から出土した遺物が図化されている。563は須恵器の壺底部で、底部はヘラ切りである。564・565は土師器の鍋で、ともに体部の外面は叩きである。564の内面は板ナデである。567は青磁片で、外面には櫛書きの文様が施される。568は軒丸瓦で巴文が僅かに見られる。

C. 6区出土遺物

土坑内からと自然流路内からの遺物が図化されている。土坑内からの遺物は基本的には中世前期のものであり、自然流路からの遺物は弥生・古墳・平安時代中期の遺物である。

SK-8 出土遺物（図版53）

器台の脚柱部569が出土している。脚柱部には2段に透かしが入れられ、上段は3方向、下段は4方向である。

SK-1 出土遺物（図版53 写真図版54）

須恵器椀570・571・574、青磁椀572・573が出土している。須恵器椀はいずれも底部は糸引きで平底であり、深い器形と浅い器形がある。574は口縁部の内面に沈線が施されている。青磁はいずれも椀で、ともに外面にはヘラ描きの花文が施されている。

SD-1 出土遺物（図版54 写真図版44・45）

弥生土器579・580、須恵器杯H蓋581、杯H582・583、杯A586-588、杯B590-592、椀B589、椀C593、皿A594、皿B595、小皿596-599、鉢600、土師器杯A601-605、小皿A606・607、小皿B608、白磁椀609、綠釉陶器610-612、灰釉陶器613が出土している。

弥生土器579・580は小型の甕底部で外面に叩きを残す。

須恵器杯H蓋581は天井部と口縁部の境は不明瞭である。杯H582は口縁部の立ち上がりが比較的大きく、直立する。583は口縁部の立ち上がりが短く内傾し、小型化している。杯A584-588は口径13.7-14.2cmとほぼ揃っており、口縁部が直線的な器形と口縁部が外反する器形がある。杯B590-592は小さく細い高台が付き、口径15.1-16cm。口縁部が外反する器形と、直線的な器形がある。椀B589は小型の器形で、底部はヘラ切りである。椀C593は底部は糸引きで、体部に段状の稜をもつ。皿A594は口縁部が直立した後、大きく外反する。皿B595の底部はヘラ切りである。小皿596-599は口径7.2-9.1cmで、597の底部はヘラ切り、他は糸引きである。鉢600は全体に灰を被っており調整は不明である。口縁端部は面をもつ。

土師器杯Aは口径12-14cmであり、いわゆる回転台土師器であるが、遺存状況が悪く、調整は不明。

小皿A606・607は手づくねである。608は高台を欠く。

白磁碗609は小片であるが、いわゆる端反り碗である。

施釉陶器には縁釉陶器の口縁部片610～612と灰釉陶器の底部613がある。縁釉陶器はともに薄手の造りで、610と612の口縁部内面には沈線が施されている。灰釉陶器613は高台が三日月状となるもので、口縁部の内面にのみ薄く施釉される。

D. 7区出土遺物

土坑内から須恵器壺底部576・碗577、白磁小皿578が出土している。576はSK-1の埋土から出土したもので底部はヘラ切り、577・578はSK-5の埋土から出土したもので、白磁578の内面には陰刻による花文が施されている

SD-1・2出土土器（図版55 写真図版44・45）

SD-1・2の合流部から弥生土器甕、須恵器杯A・碗A・碗B・碗C・皿A・小皿・鉢・壺・風字硯、土師器小皿、縁釉陶器、灰釉陶器、白磁、瓦器が出土している。

弥生土器甕614・615はともに外面に叩きを残す。615は極めて小型の甕である。

須恵器杯A617・618は口径14.0～14.5cmであるが、口縁部は開き器高が低くなっている。碗A619・625は高い高台が付き、大型619と小型の625がある。碗Bは底部が糸きりであり、底部が低い平高台となる620～622と、平底になる623がある。630は体部外面に墨書きされているが、判読できない。碗C624は体部中央の稜は退化している。皿626は底部ヘラ切りであり、口縁部は小さく外方に突出する。小皿627は底部糸きりである。鉢628は片口の鉢で、口縁部に面をもつ。壺629は体部に2条の凸帯をもち、体部の外面には叩きが遺存する。

土師器小皿632～634の内、633の底部はナデ調整である。634はいわゆるヘソ皿である。

施釉陶器には縁釉陶器635～637と灰釉陶器638がある。縁釉陶器635・636は削り出し高台で、635は全面に施釉され、636の底部外面は露胎である。637は薄い造りの縁釉陶器皿で、底部の高台は貼り付けである。灰釉陶器638は三日月状の高台であるが、底部は内外面とも露胎である。

639は端反り口縁の白磁碗である。640は白磁碗の底部で、内面に釉の剥ぎ取りが見られる。

瓦器碗641は内外面を丁寧に磨いている。

631は須恵器の風字硯で、縁はヘラ削りしている。陸部に磨耗しておらず、使用痕は認められない。

3. 小結

この地区の調査では6・7区の流路から多時期、多様な遺物が出土した。遺物の多くは6・7区のSD-1・2から出土したものであり、弥生時代後期末や古墳時代後期のものが僅かに出土しているが、中心は平安時代以降の須恵器・土師器である。須恵器の器種構成は退化しているものの律令期の伝統である杯A・杯Bを含む一方、碗A・碗Cなどの律令期には存在しなかった器種が含まれている。こうした器種構成の窓跡としては、周辺では三田市の相野窓跡群が知られており、6区SD-1もほぼ相野窓跡と平行する時期に位置づけられる。ただ593の碗や小皿は時期が下がる可能性が高い。また7区のSD-1・2からは底部糸きりの平底の碗が含まれており、SD-2は埋没時期が下がって、中世前期まで存続していたようである。この流路の埋没後に営まれた掘立柱建物跡などは、この中世前期になる可能性が高い。（吉誠）

第6章 上才谷地区

1. 概要

A. 概要 (図版57)

上才谷地区の調査は、平成8年度と9年度に実施した。地区内に神戸電鉄三田線の線路敷きが通っているうえ、現水田の畔を維持しなければならなかつたため、調査区は細かく分断された状況となざるをえなかつた。

B. 地形

現在は調査区の東側を八多川が北流するが、地形を観察するならば、調査区の西側により低平な平地が広がつてゐる。上才谷地区周辺は現在水田として利用されているが、東南側ほど標高が高く、北西に向かって順次段差が設けられている。標高は約165mを測る。

C. 基本層序

調査地の遺構検出面は黄褐色砂質シルト層を基本とし、その上位に中世の遺物包含層である褐灰色砂質シルト層が堆積している。古墳時代後期の遺構を充填する暗褐色砂質シルト層は、現状では遺構内にのみ遺存している。

2. 遺構

A. 1区の遺構 (図版57 写真図版46)

S H - 1 (図版58 写真図版47)

大部分が調査区外にあって、わずかに方形堅穴の一隅のみを調査できたにすぎない。平面的な規格・規模は不明であるが、深度は40cmを測る。床面では柱穴等は検出できなかつた。遺物は僅少であるが、石製の紡錘車 (S-8) 1点が埋土中より出土している。

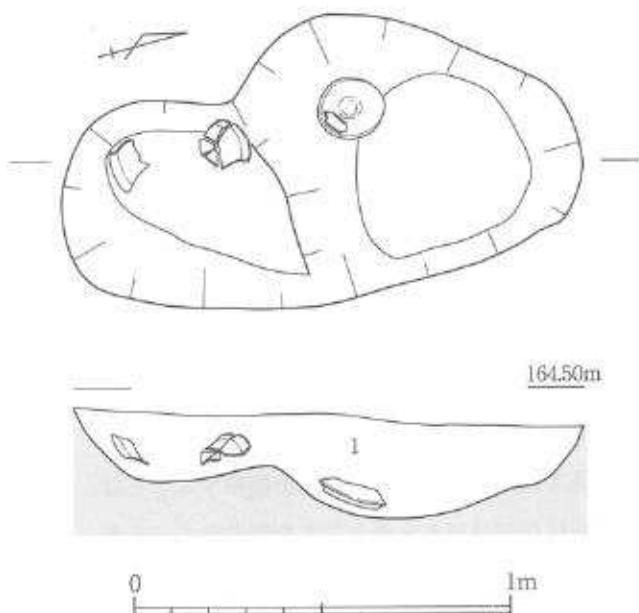
S K - 1 (図版58)

長方形の石組みを持つ土坑である。方形の堀方を掘削した後、丸太によって石組みを支持する基底部を設け、石組みを構築している。近世の陶磁器類が出土しており、18世紀後半を遡らないだろう。

B. 2区の遺構 (図版59 写真図版51)

2区では平行して延びる9条の溝が検出された。中世以降の耕作に伴うものと思われる。

溝は概ね東北東-西南西の方位を持ち、幅30cmほどの規模を有する。検出状況が断続的であったことから、上部が後世の耕作で削平されているものと考えられる。



第4図 上才谷地区3区SK-2

C. 3区の遺構（図版60）

古墳時代の竪穴住居跡1棟、土坑1基、溝1条、中世の遺構としては、多数の柱穴・溝および石組みを持つ土坑が検出された。柱穴は、特に調査区北部で密度が高かったが、調査区の制約のため、掘立柱建物跡として復元できたものはなかった。

SH-1（図版61 写真図版46・47）

竪穴住居跡は大部分が調査区外にあるため、平面的規格・規模は不明である。検出面からの深度は20cmを測る。床面には密着した状態で、須恵器壺・蓋および土師器の甕が出土している。

SK-2（第4図 写真図版47）

竪穴住居跡の北側で、不整梢円形の土坑1基が検出された。底面は2段に掘りこまれている。ほぼ底面に密着した状態で、古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

SD-1

竪穴住居跡の南で検出された。東西に延び調査区を横断しているため、調査できた範囲は、幅約4m、深さ50cmにすぎない。底面付近で古墳時代後期の須恵器が出土した。

調査区の北部で検出された溝は、平行して延びるものと、これに直交するものとで構成されており、柱穴よりも新しい時期に造られている。

石組土坑（図版61・62 写真図版47・48）

長辺2.8m、短辺2.0m、深さ50cmを測る長方形の土坑である。石組みは本来四辺ともに設けられていたものと思われるが、南・北両辺はの石材は、土坑埋土内に転落した状況で検出されている。もっとも遺存状況の良好であった西辺には、三段の石組みが認められた。土坑内は、灰色～褐灰色の砂質シルトで充填されており、少量の炭の堆積も認められた。埋土中からは少数の中世の遺物が出土したほか、西

側の石組み上に密着して包丁形の鉄器（F-22）1点が出土している。

石組みの北西角には、馬蹄形に石組みを設けた竈が構築されており、竈の中央からは、石組み土坑に向かって間隙が設けられていた。これに接して土師器鍋1個体が出土した。

石組み土坑は竈を附設していることから、本来は建物内部の構造物であったと思われる。

D. 4・5・6区の遺構（図版59 写真図版50）

中世の遺構として、柱穴・溝・土坑等が検出されたが、掘立柱建物跡等を復元することはできなかつた。溝も、2区のように相互の同時期性や規格性を感じさせる状況ではない。また遺構相互の関連性も不明であり、全体の遺構密度も低い。

3. 遺物

A. 1区の遺物（図版64 写真図版70）

豊穴住居跡（図版90 写真図版70）

S-8は、住居埋土より出土した石製紡錘車である。緑色の片麻岩を素材としているが、器表面の研磨はやや粗雑で、打撃による成形の痕跡を表裏にとどめている。表面に複合鋸歯文、裏面の一部に複合鋸歯文・梯子状文を陰刻している。

土坑出土遺物（図版64）

645~647は土坑埋土中より出土した、肥前系染め付けを中心とした陶磁器類である。

包含層出土遺物（図版64）

648~655は包含層出土の遺物で、中世前半期~近世の遺物を含む。653~655は丹波焼きである。

B. 2区の遺物（図版65）

681~684は、それぞれSD-3・4・6・9出土の遺物である。681~683は中世前半期の東播系須恵器である。684は中世後半期の丹波焼擂鉢の口縁部である。

C. 3区の遺物

SH-1出土遺物（図版64 写真図版51）

656~658は豊穴住居跡床面より検出された。天井部の膨らみが小さい蓋656・657は、陶邑編年のTK43型式に前後するものであろう。

SK-2出土遺物（図版64 写真図版51）

659~662はSK-2より出土した。豊穴住居跡の遺物とはほぼ同時期のものと思われる。

SD-1出土遺物（図版64 写真図版51）

663~667は溝出土の遺物である。豊穴住居跡出土の遺物と比較して、全体に器高が大きく、稜線が明瞭に形成されている。TK10型式前後に相当するものと考えてよかろう。668は柱穴4出土の須恵器蓋である。膨らみの大きな天井部をみせており、やはりTK10型式に相当するものであろう。

石組土坑および竈周辺出土遺物（図版65・89 写真図版52・53）

669は竈脇の検出面に密着して出土した土師器鍋である。底部付近に最大径をもち、内傾する体部を

みせる。表面に格子タタキを施す。著しい火熱を受けており、底部は粉碎した状況であろうか。

670は丹波焼拂り鉢の底部である。ヘラ描きでおろし目を設けている。671も丹波焼きの鉢である。

F-18は、二股のヤスであろうか。重厚な作りを見せ、器体の断面はほぼ正方形を呈している。F-22は、土坑の石組み上面に密着して出土した片刃の鉄器で、包丁様の機能を持つと考えている。F-19は釘であろう。

672~675は、それぞれ柱穴1・2・3・5出土の遺物である。中世前半期に属する。

F-20・21は包含層出土の鉄器である。F-20は刀子の基部、21は刀子の断片であろう。

E. その他の遺物 (図版65)

687~701は、各地区包含層出土の遺物である。687は7世紀代の須恵器である。同時期の遺構は、この地区では検出されていない。688は土師器の把手。古墳-古代に属するものであろうか。689~694は須恵器鉢で(691のみ瓦質)、中世前半期の遺物である。697~701は中世後半期-近世の遺物である。697は土師器鉢、698~700は丹波焼きである。701は青磁碗。表面に退化した雷文を陰刻している。

4. 小結

上才谷地区で検出された遺構は、4時期に大別される。

第1期は古墳時代後期である。2棟の竪穴住居跡を中心に溝、土坑がみられる。遺構の分布は調査範囲の西側に限定されており、包含層にみられる遺物の数もごく僅少であることから、遺跡の規模そのものも大きくなかったものと推察している。6世紀代後半から営まれた集落遺跡であろうが、比較的短期間で消滅したのであろう。

第2期は中世前半期である。多くの柱穴・溝などが2・3区を中心に検出されているが、調査範囲の制約から、建物の復原には至らなかった。検出された遺構の種類から推察して、当該時期の集落と、それに付属する農地であろう。

第3期は中世後半期である。石組みをもつ土坑、一部の柱穴はこの時期に相当するであろう。既述のように、石組みをもつ土坑は竈を附設していることから、屋内または建物の内外にわたる施設と考えられる。その機能は判然としないが、竈の基底部と土坑の石組みが連続して構築されていることから、竈からの廃棄物を投棄するための施設、水溜めとしての機能などが想起される。

時期はやや遡るが、隣接する八多中遺跡のふけ地区において、中世前半期の掘立柱建物跡SH-1の屋内に浅く掘り凹められた遺構が検出され、「池状遺構」と呼称したが、この内部からも多数の大型碟とともに、須恵器鉢・椀などが出土し、炊飯に関わる施設と推定している。今回の調査では、残念ながら石組みをもつ土坑周辺の柱穴からは、建物跡を復原できなかったが、今後当該時期の石組みをもつ土坑の機能や、建物跡との関連には注目してゆきたい。

第4期は近世後半である。遺構分布の中心は、1・3区とその周辺であろう。1区の石組みを持つ土坑を中心に、溝などが見られる。石組みをもつ土坑は、類似の構造・規模をもつものが、近隣の古い農家に現存している。その状況から、水を溜める機能をもつことは明白で、農業や日常生活に関連する遺構と言つてよい。(久保)

第7章 宮ノ向井地区

1. 概要

A. 概要 (図版66)

宮ノ向井地区は、八多川の右岸に接する微高地に位置する。調査は3次にわたっておこなわれ、弥生時代～中世の遺構群が検出された。遺構の分布は調査区の中央部でやや密度を増すが、概ね希薄で遺跡の辺縁部に相当するものと思われる。

B. 地形

遺跡の立地する微高地は、北側に向かって高度を増し、このために北側の調査区では遺構の削平が進んでいた。調査区中央で、南北に延びる八多川の旧河道が検出されている。この旧河道を境界として西側（1区～2区）では、微高地面が高度を下げるため、2面の遺構面が遺存していたが、東側（3区～4区）では1面のみである。

C. 基本層序

調査範囲全域に共通する基本層序は認められない。微高地の上面は概ね黄褐色の砂質シルトで構成されており、遺構もこの面で検出された。微高地面より上位には、中世の遺物を包含する灰褐色のシルト層が堆積し、表土に至るのが基本的な状況であろうが、3・4区では遺物包含層の遺存状況は劣悪で、特に4区では、表土直下が微高地面となっていた。

2. 遺構

A. 1区の遺構 (図版67・68 写真図版54)

第1面（図版67）では、柱穴、土坑および溝等が検出された。柱穴の分布は希薄で、掘立柱建物跡を復原できたものはない。

溝（SD-1）は、調査区をほぼ正しく南北に継断する。幅は最大2mを測る。土器が出土している。

第2面では、数基の柱穴、土坑3基（SK-1～3）、溝が検出された。SK-2・3は、ともに3区の西端に位置する。長径2.5m、短径1.6m前後を測る楕円形の土坑である。土坑内に拳大～人頭大の礫がややまとまって埋設されていたが、顕著な出土遺物はなく、機能は不明である。SK-3では土坑底に焼土が認められた。

B. 2区の遺構

いずれも、散漫な分布を見せる柱穴・溝が検出されたにとどまる。

C. 3区の遺構

3区では、1・2区の1～2面に相当する遺構が、微高地上面で一括して検出された。ここでは概ね中世に相当する遺構を第1面の遺構とし、弥生時代の遺構を第2面として記述する。

第1面の遺構としては、不規則な分布をみせる柱穴・溝が検出された。溝は相互に重複していることから、若干の時期差をもつものであろう。

S K-1 (写真図版55)

調査区の東端に位置する。不整方形の土坑である。土坑内には丹波焼の大甕1点が、正立状態で埋設されていた。近世後半期の遺構である。

S K-17出土遺物 (図版70 写真図版55)

S K-17は集石土坑である。不整形な平面プランをみせ、長径約2.8m、短径2mを測る。土坑内部には、人頭大以下の礫が2か所に分けて埋設されており、埋土中からは中世の遺物が出土している。

他の土坑と同様遺構の機能は不明である。礫を埋設することに意味が存在したのか、礫で構築されていた何らかの施設が破壊された結果であるのか、礫の検出状況からは判断し得なかった。

その他の土坑

S K-21・24・29・30・31・40は、いずれも調査区北端に密集する不整形な土坑である (図版67)。土坑群には重複関係がみられることから、若干の時期差をもつことは明らかであるが、出土遺物の面からは、概ね中世前半期 (12世紀後半~13世紀) に属するものとして一括できる。

特に調査区北部における、不整形な土坑の集中は顕著である。土坑の規模、形態、分布には規格性を看取ることはできず、機能を想定するに足る遺物も出土していない。周辺には柱穴がほとんど見られないことから、建物跡ないし集落中枢部の遺構ではないものと思われる。

溝

調査区の中央から南にかけて、数条の溝が検出されている。概ね南北方向の延びを見せるものである。

第2面に相当するのは、円形竪穴住居跡 (S H-1) である。調査区南部で検出され、約1/2が遺存していた。

S H-1 (図版70 写真図版55)

S H-1は、復原直径8mを測る円形住居跡である (図版70)。遺存状況は劣悪で、埋土はほとんど遺存しておらず、かろうじて周壁溝の一部と中央土坑および柱穴数基をとどめていたにすぎない。主柱穴の数は明らかではないが、5本の可能性が高い。

中央土坑は直径1mの円形で、深さは約60cmを測る。内部は自然堆積により埋没しており、底面および土坑の肩部分には、顕著な炭の堆積が認められた。

土坑の東・南側には、「L」字形の土手状の高まりが認められる。これは竪穴を掘削し、さらに中央土坑を掘削する際に、地山を意図的に削り残したものである。こうした土手状の高まりの機能は定かではない。

なお4区の調査では、S H-1の北半分が検出されるものと期待されたが、遺構はまったく遺存しておらず、住居跡に帰属するか否か判断できない柱穴数基が検出されたにとどまった。

旧河道

調査区の西側で、ほぼ南北に延びる旧河道が検出された。最大幅約12m、深さは1mまで確認できたが、以下は掘削を行えなかった。旧河道は砂ーシルトを主体とする堆積物によって埋没しているが、大規模な洪水流を示すような礫層は顕著ではない。弥生時代以前に形成されたものであろうが、最終的な平坦化は中世に至ってからであろう。

D. 4区の遺構

4区では、遺構面の削平が著しく、遺存状況の劣悪な数基の柱穴と土坑が検出されたのみであった。また4区北半は、現八多川により微高地面が著しく浸食されていた。

3. 遺物

A. 1区の遺物

S K-3 出土遺物 (図版71・90 写真図版70)

722はSD-2から出土した土師器坏である。古墳時代後期の所産であろう。

723はSD-1から出土した、白磁皿である。口縁端部を外反させる。小片のため詳細は不明である。

S-14は砥石である。4面を研磨して、断面を整った長方形に仕上げている。主たる使用面は図左面で、中央部がやや凹んでいる。重量72g。

B. 3区の遺物

S H-1 出土遺物

702~706は床面出土の遺物、705は中央土坑より出土したものである。他に石鎌(S-2)が出土している。702は壺口縁部である。端部は下垂して外方に面をもつが、装飾は施されていない。703は小型壺の下半である。704は甕の底部である。外面に斜め方向のタタキが観察される。706は高環脚柱部である。貫通しない1孔を設けている。705は中央土坑より出土した小型土器である。底部外周に指頭圧痕が顕著に認められる。S-2は、中央土坑より出土した凹基無茎式石鎌である。先端を欠損している。サヌカイトを素材とし、表裏に丁寧な二次加工を施している。重量0.4g。

土坑出土遺物 (図版71)

709・710は集石土坑SK-17より出土した。709は、外面に蓮弁を陰刻した青磁碗である。710は東播系須恵器の鉢である。

711はSK-40出土。

712・713はSK-31出土の須恵器である。712は比較的体部の立ち上がりが急斜な椀である。底部と体部の境界も明瞭であるが、高台は形成されていない。713は鉢の口縁部である。

714・715はSK-29出土。上述の須恵器椀とほぼ同様の形態を見せる。

716・717は、それぞれSK-24・30より出土した須恵器椀である。底部と体部の境界が不明瞭となり、体部も大きく開いて器高が低くなっている。同類の椀としては新しい形態を示している。

718・720はそれぞれSK-30・24出土の土師器鍋である。外面に平行タタキが認められ、口縁端部が外方に拡張されている。

719はSK-47出土の須恵器椀である。

図版91、S-13は、SK-24より出土した砥石である。2面を砥面としている。重量183g。

包含層出土の遺物 (図版73)

707はSD-39、708はSD-2からの出土である。いずれも中世遺構への混入遺物であるが、住居跡の時期と大差ないものと考えられる。

706は壺の口縁部である。口縁端部が拡張され、外面に擬凹線が施されている。

751～767は包含層出土の遺物である。概ね中世以降に属し、751～759は中世前半期の遺物である。土師器鍋類（752～757）は、口縁端部を外方に拡張する形態を顕著に示している。

760～762は青磁碗である。760は外面に退化した雷文を陰刻している。761は青磁碗の底部である。

763～766は肥前系染め付けを含む、近世後期の磁器である。いずれも18世紀後半以降の所産であろう。

767はガラス小玉である。古墳時代の遺物であろうが、当該時期の遺構・遺物は今回の調査では検出されていない。

図版90、S-3・6は3区出土の楔形石器である。サヌカイトを素材とし、上下両極からの打撃によって作出されている。

S-7は1区第2面で出土した石包丁である。石材は不明である。

4. 小結

宮ノ向井地区で検出された遺構群は、2時期に大別される。第1期は弥生時代後期、第2期は中世前半期である。この間に1・2区で認められた第1・2面の遺構群の一部が入るであろうが、残念ながら遺構の時期を示す遺物を欠いている。

宮ノ向井地区では、弥生時代後期から遺跡の形成が開始されている。弥生時代の遺構として明確なものは、3区で検出された住居跡のみであるが、続く4区の状況から判断して、これより東側では近代以降の開発による微高地面の削平が激しく、遺構そのものが消滅してしまった可能性が高い。微高地の延長方向は今回の調査では明確にできなかったが、調査区中央部で検出された旧河道の延長方向に沿った、南北に延びる自然堤防状のものであった可能性を指摘しうる。

弥生時代以降中世までの間は、明確な遺構が存在しない。その理由は明らかではないが、調査区西半で第2・3面が形成されていることから、八多川の洪水流の影響が勘案される。

中世前半期に至って、ふたたび遺構の形成が明瞭となるが、形成された遺構は、溝・不整形な密集する土坑等である。これらの機能は定かではないが、想像をたくましくするならば、耕作に伴って形成された臨機的な遺構—その時々で廃棄・貯、排水などの機能を果たさせた遺構—とも考えられる。（久保）

第8章 林ヶ鼻地区の調査

1. 概要

A. 概要 (図版78)

林ヶ鼻地区は、日下部遺跡の北東端に位置している。区画整理事業の計画街路部分について、平成7～9年度に調査を実施した。調査は遺跡の現況に合わせ、合計10地区に分割しておこなったが、7・10区を除いては顕著な遺構は検出されず、概して遺構密度の希薄な領域であるものと判断される。

調査範囲の現況は、大部分が農地（水田・畑）であり、一部に駐車場として盛土利用されていた部分がある。

B. 地形

林ヶ鼻地区は八多川の右岸に位置しており、地区の南東には、神戸層群および大阪層群により構成された南北に延びる丘陵がある。林ヶ鼻地区はこの丘陵の西～北側にひろがる平地に立地するが、遺構が分布する面は、丘陵裾に接する古期の段丘面にあたる。古期の段丘面は最終氷期に形成された可能性が高いが、今回の調査ではその明瞭な根拠を示す資料は得られなかった。

C. 基本層序

上述のように遺構が分布する地形面が多様であることから、全地区を通した基本層序は明示できない。ただし多くの地区では、遺構検出面の上位には中世の遺物を包含する層準が認められたほか、遺構検出面直上が表土層（耕作土）となっている例も少なくなかった。

2. 遺構

A. 7区の遺構 (図版75 写真図版58)

林ヶ鼻地区のほぼ中央に位置する7区では、掘立柱建物跡とこれをとり囲む溝、土坑などが検出された。

S B-1 (図版75)

S B-1 は溝に囲まれた掘立柱建物跡であり、2間×4間までが調査区内で確認された。調査区外へ広がる部分が大きいものと思われるが、溝の検出状況から判断して4間以上の延びはないだろう。柱穴の規模は25cm前後を測る。

S D-1 (図版75)

これを取り囲む溝は最大幅50cmを測り、柱穴の20～50cm外側を柱穴列とほぼ正しく平行に延びて、調査区内では「コ」の字形を呈している。柱穴列との間隙がやや狭すぎる感があるが、いわゆる雨落ち溝と考えてよかろう。

S K-1 (図版75 写真図版58)

S K-1 は、ほぼS B-1 の南東角に重なる位置で検出された土坑である。平面プランは長方形を呈し、長辺2.4m、短辺1.6m、深さ20cm前後を測る。埋土下層にはわずかに自然堆積を示す砂およびシル

トの堆積が認められるが、埋土の大半は人為的なものである可能性がある。

土坑内には拳大—最大径60cmにおよぶ砾が多量に埋設されており、これとともに中世前半期の遺物が出土している。

この土坑とSB-1との関係には、大別して2つの可能性を指摘しうる。第1は土坑肩部分を切るようにSB-1の柱穴が位置することから、土坑がSB-1より古いという判断であり、第2は土坑の方位がSB-1とほぼ一致すること、土坑が正しく柱間に位置することなどから、SB-1の屋内施設として同時に構築されたという判断である。両者の正否は即断できないが、中世の掘立柱建物跡にはしばしばこのような集石土坑が伴っており、隣接する日下部遺跡の乗安3区、八多中遺跡のふけ地区等でも同様の事例が検出されている。これらの事例を勘案するならば、SB-1の屋内施設としても大過ないだろう。

B. 10区の遺構（図版76・77）

10区は、地区の南端に位置する。多数の土坑および溝が検出された。地区は丘陵裾に貼り付くように南北に延びる細長い段丘面上に立地し、南側に向かって緩やかに高度を下げ、調査区最南端で谷に至る。遺構検出面は灰白色の砂質シルトで、その上位には中世前半期の遺物を包含する灰褐色の砂質シルト層が堆積している。

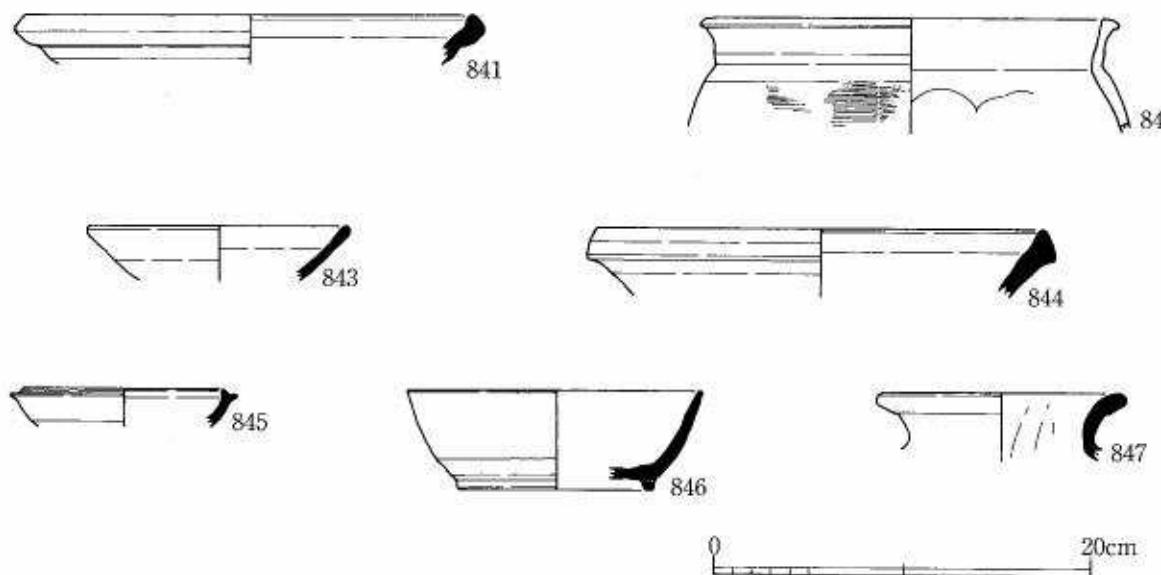
土坑群（図版82）

地区北側に密集して、土坑群が検出された。土坑の形態はいずれもきわめて不整形であり、齊一性は認められない。大きさも多様で、大型のものでは長径2m×短径1.4m、小型の例では径0.8m程度である。土坑の重複状況は複雑で、その形成順を必ずしも明確にできたとは言えない。深度は、多くの土坑が共通して30~40の間に含まれる。土坑内部は灰色~灰褐色のシルトで充填されており、堆積状況は多くの例で比較的単純である。

土坑内からの出土遺物は僅少で、図示できるものはないが、中世前半期の須恵器類が出土している。これらの土坑の機能を示す資料は、調査時点においては得ることができなかった。このような密集する不整形な土坑群の事例は、粘土探掘土坑と判断されている例が多い。一般に粘土探掘土坑の特徴としては、土坑の密集、深度における共通性などがあげられようが、本地区的土坑群も、こうした特徴を備えている。調査時点において、担当者に粘土探掘土坑という意識がなかったため、土坑底面付近に良質の粘土層が存在したか否か不明であるが、土坑の深度に共通性が見られること、土坑の底面が椀底状ではなく、平坦なもの、ないしは平坦な底面の一部が、さらに掘り凹められた形態を呈するものが多いこと、土坑群がシルト~粘土で構成される段丘面上に立地することから、粘土探掘土坑である可能性は高いものと推定している。

溝

調査区北部を横断するように、溝1条が検出された。土坑と重複しており、これより古い時期に構築されたものである。溝は幅60cm前後、深さ約40cmで測り、断面形は均整のとれた逆台形状を呈する。



第5図 林ヶ鼻地区出土遺物2

3. 遺物

A. 7区の遺物

中世を中心とした遺物が出土している。

S B - 1 (図版79)

818は掘立柱建物跡の柱穴より出土した、須恵器椀である。底部は平坦となり、体部との境界も鮮明ではない。体部の開きも大きくなっている、同種の須恵器椀の中でも新しい特徴を示している。

S K - 1 (図版79 写真図版60)

819～822、826・827は、共通する形態を示す須恵器椀である。いずれも平高台が消失して底部が平坦化し、体部との境界が不鮮明な形態をもつ。体部の開きは大きく、径が大型化し、器高が低下する特徴も共通している。

827の外底面には墨書き文字が認められる。2文字で構成され、「十」が判読可能である。下方の文字は「王」かとも思えるが判然としない。

823は土師器小皿である。平坦な底部から、屈折して短く立ち上がる体部をもつ。

824は東播磨系須恵器鉢である。底部を欠くが、直線的に外上方へ開く体部をもち、口縁端部は上下に拡張されて外方に面をもつ。

839は土師器鍋である。外面には横方向のタタキが認められる。口縁部は「く」の字形に開き、口縁端部はわずかに外方へつまみ出されて、口縁端部上方に平坦な面が形成されている。体部の膨らみは小さい。

包含層出土遺物 (図版79 写真図版60)

825、828～838、840は包含層出土の遺物である。いずれも遺構内の遺物と大差のない時期に属する。

825は須恵器皿である。平坦な底部から、屈折してやや外反気味に短く立ち上がる体部を見せる。

828～833は須恵器椀。いずれも底部は平坦化し、体部の開きが大きい。

834は青磁碗である。外面に蓮弁文を陰刻する。

835～837は東播磨系須恵器鉢である。いずれも口縁端部を拡張するが、837において上方への拡張が

顯著である。

838・840は土師器鍋である。ともに外面に横方向のタタキが施されている。口縁端部を拡張する。

B. 10区の遺物

包含層出土遺物（図版79 写真図版60）

815～817は包含層より出土したものである。

815・816は須恵器椀である。815では平高台をとどめるが、816では底部は完全に平坦化している。817は白磁碗の底部である。

C. その他の地区出土の遺物（第6図）

いずれも各地区の包含層中より出土したものである。

841・842は4区出土。841は東播系須恵器鉢、842は土師器鍋で、外面にタタキを残す。

843・844は2区出土。843は小形の須恵器椀。844は東播系須恵器の鉢である。

845～847は1区出土。845は須恵器杯Hで小形化が進んでいる。846は須恵器杯B、847は須恵器壺の口縁部である。

4. 小結

林ヶ鼻地区では、出土遺物から判断して中世前半期（12世紀代）を中心とする時期に、遺構が構築されたものと思われる。

7区においては掘立柱建物跡1棟が検出されたが、調査範囲の他の部分では、遺構分布が希薄で溝とわずかな柱穴が検出されたにすぎない。7区周辺の1～6区、8・9区でも遺構の分布がきわめて希薄であったことを勘案するならば、本地区における中世の遺構が、集落と呼べるだけの規模を有していたものか疑問である。

10区で検出された土坑群の解釈は、調査プロセスにおける担当者の意識の問題もあって、十分な結論に到達することは困難である。既述のように、土坑群に共通する特徴は深度であり、この共通する深度内に採掘対象となる良質の粘土層が存在した可能性は高い。土坑底面の多くが比較的平坦に掘られていることも、この推定と矛盾しない。

土坑の機能が粘土採掘であったとするならば、その粘土の用途として考慮されるのは、第1に土器の原料である。第2の可能性としては、建築物の壁等の材料としての粘土採掘である。中世家屋の構造の詳細については、いまだ明らかとは言い難いが、建築の一部に（例としては竈の構築）粘土を必要とする局面が存在したであろうことは、想像に難くない。（久保）

第9章 坂本垣内地区の調査

1. 概要

A. 概要

坂本垣内地区の調査は、平成8年度に実施した。調査は区画整理事業の計画街路部分について実施したが、現道路部分については、調査はおこなえなかった。遺構は2区の東半で多く検出されたが、その他の地区では極めて散漫な状態であった。3区では柱穴と溝が、5区でも溝のみが検出されたにすぎない。

B. 地形

坂本垣内地区は、1/25000の地図上でも識別できる、一辺が約60mのほぼ正方形を呈する区画をみせる。この区画の南側は丘陵に接し、北側は八多川の形成した平地に面している。平地と方形区画は約1.5mの段差をもっている。この段差そのものは、段丘化により形成されたものであろうが、現地形に見るようなほぼ正方形の段は、明らかに人為的な地形改変を示している。

C. 基本層序

坂本垣内地区では、方形区画の段上と段下では、地層の堆積が大きく異なっている。段上部分では、遺構が検出される面は明黄褐色の砂質シルト層を基本とし、その上位に褐灰色の遺物包含層と現表土が堆積している。包含層は微視的には細分できるが、中世以降に形成された耕作土と考えられる。段下部分では、現表土下は概ね八多川によって形成された礫層ないし砂層であり、遺構は検出されなかった。

2. 遺構

A. 概要 (図版80)

今回の調査では、調査範囲の南辺（2区）と北東隅（5区）でのみ遺構が検出された。検出された遺構は、柱穴・土坑・溝等であり、その時期は鎌倉時代～近世にわたる。

B. 2区の遺構 (図版81 写真図版61)

S X - 1 (図版82)

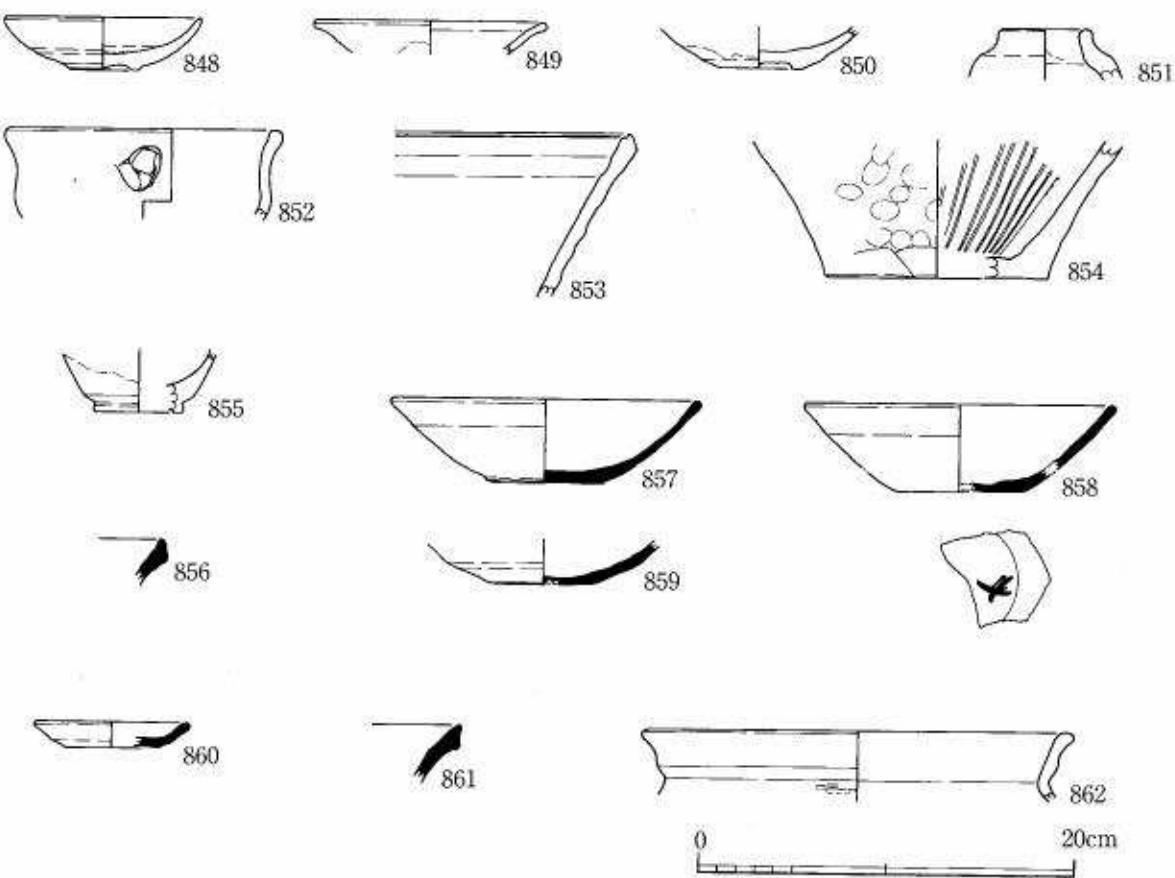
複数の遺構の複合と考えられる。浅い皿状の掘りこみを見せる二基の土坑（?）とともに、その底面から掘られた溝状のくぼみが見られるが、調査区外へ広がるため、全容は不明である。溝状の窪みの中央には、礫を配置していた形跡があるが、構築時の状況を復元することはできなかった。

S K - 2 (図版82)

S K - 2 は、長方形の土坑である。中央部が水道管埋設で破壊されていたため、明瞭ではないが、木棺墓の可能性も否定できない。

S K - 3・4 (図版83)

機能不明の集石土坑である。土坑上面付近に拳大の石を配置している。



第6図 坂本垣内地区出土遺物1

3. 遺物（第7図）

860～862は旧河道から出土した中世の遺物である。848～855は2区SX-1から出土した近世の陶器である。854は丹波焼の插鉢で、ヘラ描きのおろし目が見られる。857～859は5区の溝内から出土した中世の須恵器椀である。858は底面に「×」の墨書が見られる。いずれも中世前半期の遺物である。863～894は調査範囲全域の包含層、表土層等から出土した土器類である。

4. 小結

以上のような成果から、今回坂本垣内地区で検出された遺構群は、中世～近世の建物跡に伴うものであった可能性が高い。坂本垣内地区は、その地名と現状の地形から、中世以降の館跡に類するものの検出を期待していたが、調査の結果は必ずしも期待したものではなかった。（久保）

第10章 鳴滝掛り地区の調査

1. 概要

A. 概要

八多川と有野川の合流点に突き出した扇状地性の段丘上に位置する地区である。古墳時代前期の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡・土坑・溝などが検出されている。古墳時代の遺構は地区の東端の1区で、中世の遺構は地区の1・3区と6・9・10区の2地区に分かれて検出されている。地区中央から西半の2~4区では近世以降の搅乱が甚だしく、遺構は遺存していなかった。5・7・8区では遺構は検出されていない。また、段丘崖下の沖積低地の調査区でも遺構は検出されなかった。

遺物量は少ないが、縄文土器、古墳時代前期の土師器、中世の土師器・須恵器などがある他、中世末の丹波焼、施釉陶器、近世の陶磁器などが出土している。

B. 地形

地区は扇状地性の段丘上に位置し、1区東側には比高差約1.1mの明瞭な段丘崖が見られる。段丘面はほぼ平坦であるが、南東から北西に向かって緩く傾斜する。段丘上は水田に開発されている。

C. 基本層序

遺構の検出面は1面で、にぶい黄褐色の砂質シルト層であり、近世以降の搅乱を受けた地区以外では、この層上は水田耕作に伴う客土層であった。遺構の検出できなかった7・8区では暗褐色細砂一砂質シルトの堆積が認められた。

2. 遺構

A. 1区の遺構

古墳時代前期の竪穴住居跡と柱穴が検出されている。柱穴群は建物跡として復元はできなかった。竪穴住居跡は1棟検出できただけであるが、柱穴群の中には古墳時代の土師器を出土しているものがあり、他にも存在していた可能性が高い。

S H-1 (写真図版64)

方形の竪穴住居跡で、西壁際は近世の埋甕に切られている。住居跡の規模は約4.5mである。後世の削平により壁はほとんど失われ、最高約10cm遺存しているに過ぎなかった。床面上からは柱穴4本検出されたが、主柱穴となるかどうかは不明である。

768~770の土師器甕・高杯が出土している。

B. 6・9・10区の遺構

中世の掘立柱建物跡2棟と土坑1基、溝、柱穴が検出されている。掘立柱建物跡と溝はほぼ同方位となっており、有機的な関連を考えられる。柱穴群は建物跡の周辺でのみ検出されている。

S B-1 (写真図版66)

南北3間(約5.7m)、東西2間以上(約3.3m以上)の側柱建物で、北側に1間(約1.7m)の庇が付

く建物に復元されている。柱間は南北方向が約190cm、東西が西柱間が約170、東柱間が約150cmを測る。柱穴の掘り方は円形で、径約25cmである。

S B-2 (写真図版65)

南北4間（約8.5m）、東西2間以上（約5.4m以上）の縦柱建物で、西側の北2間（約4.3m）分に1間の庇が付く建物に復元されている。柱間は南北方向が約200～250cm、東西が約240～300cmを測る。柱穴の掘り方は円形で、径約30～40cmである。

S K-1 (写真図版65)

長径約115cm・深さ22cmの方形の土坑で、埋土は褐色～灰褐色砂質シルトである。内部には河原石が多く含まれ、781～802の須恵器・土師器・瓦器が出土している。

S D-1 (写真図版66)

幅約40cm・深さ17cm、埋土は褐灰色砂質シルトであった。長さ3.5mにわたって検出されている。

S D-2

S B-2の南側で、S B-2に平行して検出された幅約50cm・深さ20cmの溝で、埋土は褐灰色砂質シルトであった。長さ8mにわたって検出されている。

S D-3

6区の北端で検出された幅約90cm・深さ30cmの溝で、3回の改修跡が確認されている。埋土は褐灰色砂質シルトであった。

3. 遺物

S H-1 出土遺物

古墳時代の土師器甕と高杯が出土している。768は口縁端部が内側に肥厚した甕で、769も口縁端部が僅かに肥厚する。769は内外面に刷毛が残る。770は高杯の脚部部である。太い脚柱部から裾部が横方向に開く。

柱穴出土遺物（図版88）

771は土師器で高杯の杯部である。772は高杯の脚裾端部で、771・772は同一の柱穴から出土している。773～775は須恵器の椀で、773は体部に丸みをもつ。774・775の底部は平底である。776～778も須恵器の椀で、体部から口縁部は直線的に開く。779は土師器の鍋で、外面に叩きを残す。口縁部は強いナデにより、中央が膨れ、端部は外に突出する。780は土師器の鉢で、口縁部は体部から湾曲して開き、端部はさらに湾曲して横方向に開く。

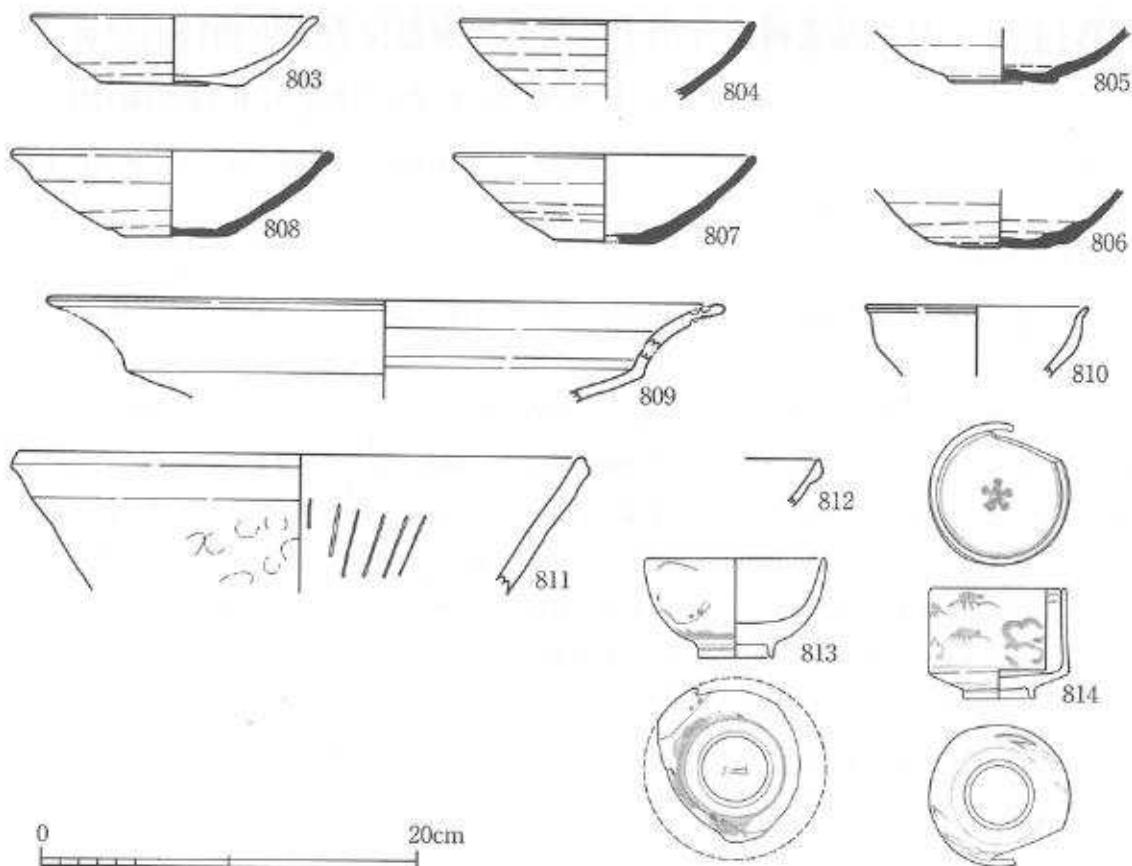
S K-1 出土遺物（図版88 写真図版67）

須恵器小皿・椀、土師器小皿、瓦器椀がある。781～783の須恵器小皿は底部は糸きりで、平底である。784～800は須恵器椀である。口径が16.5～17.5cm、器高5.0～5.3cmと大振りで深い器形、口径15～15.6cm、器高約5.0～5.3cmのやや小振りで深い器形、口径16～16.5cm、器高5.0cm前後のやや浅い器形、口径16.0～17.0cm、器高4.5cm前後の浅い器形がある。また、体部が丸みをもつものと、直線的16.5開くものがみられ、浅い器形はすべて直線的に開くものになっている。底部はすべて糸きりで、体部との間に段はもない平底である。

801は土師器の小皿で、底部は糸きりである。802は瓦器椀で、内外面をヘラ磨きしている。

包含層出土遺物（第7図 写真図版67）

縄文土器、須恵器、土師器、輸入磁器、国産陶磁器が出土している。



第7図 鳴滝掛り地区出土遺物2

809は縄文土器の浅鉢で、口縁部は斜め上方に大きく開く。内外面とも丁寧にナデている。

803は土師器杯であるが、底部は糸きり、体部は回転ナデで仕上げている。口径14.9cm、器高3.6cm。

804～808は須恵器の碗で、804は体部が丸みをもち、比較的細かくナデしている。805の底部は低い平高台で、底部の内面に段をもつ。806～808は平底で、807・808の体部は直線的である。

810は国産の天目碗で、鉄釉がかかる。811は丹波焼の擂鉢で、内面の擂り目はヘラによる1本引きである。外面に指押さえの痕を残す。

812は輸入白磁で、口縁部は玉縁である。813・814は国産の磁器である。

3. 小結

検出された主な遺構は古墳時代と中世に属する竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝である。古墳時代の遺構は1区のみで検出されている。竪穴住居跡から出土した土器は布留式の新段階に位置付けられるものであり、住居跡の時期を示すものである。この時期の土器は他に、1区東端の柱穴の中から出土しており、この住居跡以外にも周辺に住居跡が存在していた可能性が高い。

中世の遺構は1・3区と6・9・10区で検出されている。2棟の掘立柱建物跡は柱穴から出土した土器からみて中世前期の12世紀中半～12世紀末に位置付けられ、SK-1、SD-1も同時期の遺構である。また、SD-2・3も建物跡と同方位の遺構であり、建物と同時期の遺構と見られ、建物に付随した遺構と捉えられる。ただし、遺構は希薄であり、極めて存続期間は極めて短期とみられる。(吉謙)

第11章 日下部遺跡より出土した灰釉陶器付着赤色顔料の分析 - レーザーラマン分光分析法の応用 -

奈良国立文化財研究所 高妻洋成

1. はじめに

日下部遺跡より出土した灰釉陶器は、その内面がわずかに赤味を帯びており、わずかながらも赤色顔料の痕跡を認めることがあるものである（巻頭カラー2）。このような土器に付着した赤色顔料は、蛍光X線元素分析法とX線回折分析法により同定されるのが一般的である。しかしながら、遺物表面の平滑性、赤色顔料の残存量、あるいはX線照射の幾何学的条件（距離、取り出し角度）などの諸条件が十分満たされないような場合、満足のいく同定結果を得ることが困難となる場合もある。日下部遺跡より出土した灰釉陶器に付着している赤色顔料の場合、その残存量がきわめてわずかであることと容器内面という幾何学的な分析条件の制約から、上述のX線を利用した定性分析を行うことが困難であった。

そこで、灰釉陶器に付着している微量の赤色顔料を同定するために、レーザーラマン分光分析法を適用したところ、極めて良好な分析結果を得ることができた。本節では、レーザーラマン分光分析法を紹介するとともに、得られた結果について報告を行うものである。

2. レーザーラマン分光分析法

单一の振動数(ν_0)をもつレーザー光を物質に照射し、入射方向とは異なる方向に散乱されてくる微弱な光を分光器を通して観測すると、入射光と同じ振動数(ν_0)を与える散乱光と $\nu_0 \pm \nu_R$ なる振動数を与える散乱光を観測することができる。ラマン散乱光は後者の散乱光である。入射光とラマン散乱光の振動数の差 $\pm \nu_R$ をラマンシフトと呼んでおり、物質によって固有の値を示すものである。したがって、单一の振動数をもつレーザー光を物質に照射してラマンスペクトルを得ることにより、物質の定性分析が可能となる。

ラマン分光法の特徴は、励起光源として可視レーザー光を用いるため、ガラスや石英ガラスの光学素子を使うことができ、種々の光学調整を肉眼で行なうことができる。このため、顕微鏡を接続した顕微測定も可能である。また、分子の振動スペクトルを得る手段として考えた場合、ラマン散乱と赤外線吸収は互いに相補的な情報を与えるものである。特に赤外線吸収で致命的な障害となる水の影響は、ラマン散乱ではまったく問題とならない。このことは、出土直後の有機質遺物を乾燥させること



写真1 レーザーラマン分光分析装置

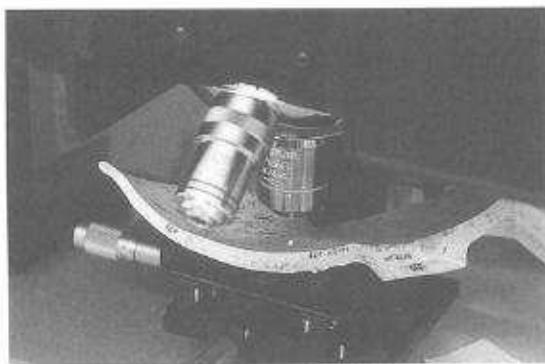


写真2 顕微測定法

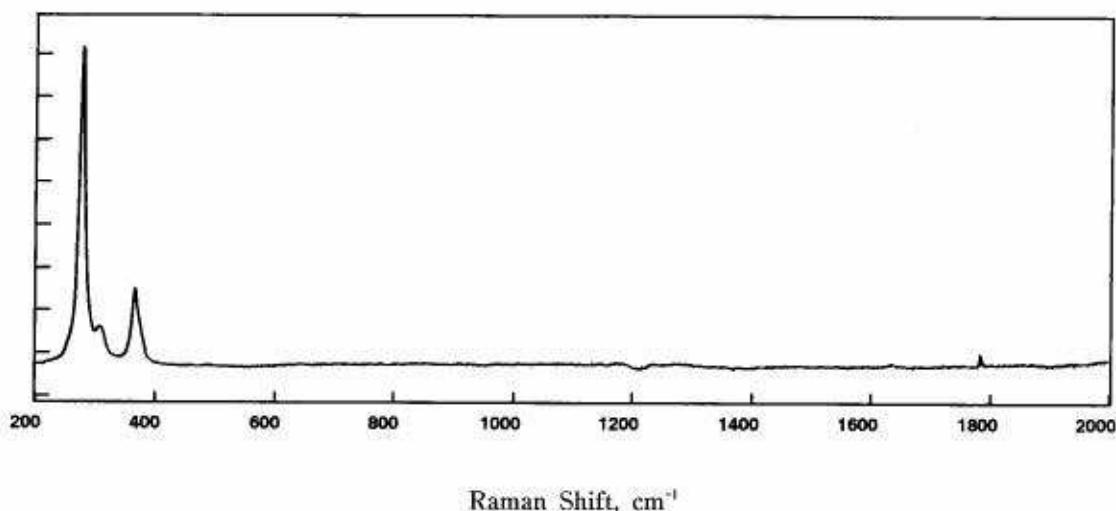


図1 灰釉陶器に付着している赤色顔料のラマンスペクトル

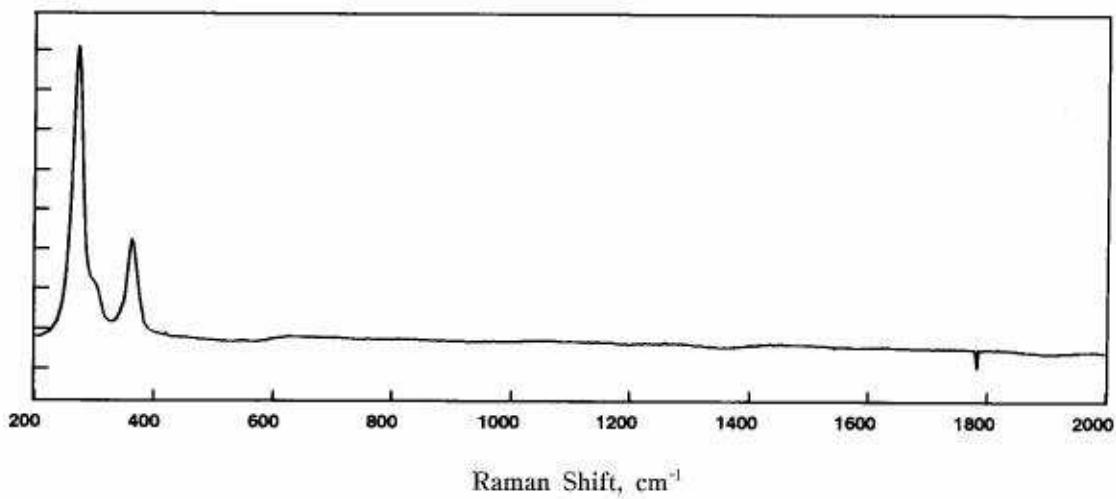


図2 水銀朱（標準試料）のラマンスペクトル

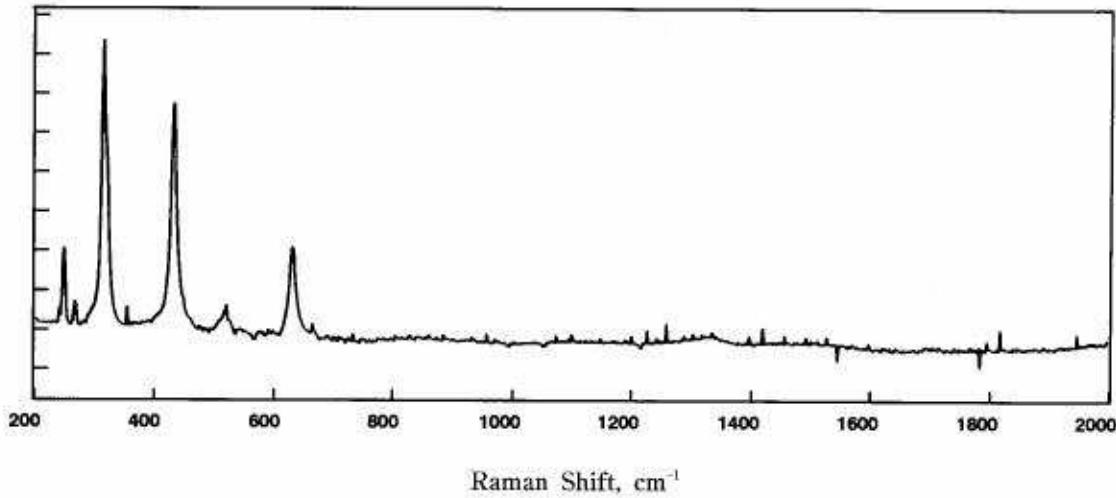


図3 ベンガラ（標準試料）のラマンスペクトル

なく非破壊的に分析できることを示すものである。

また、ラマン散乱光の検出に感度の極めて高い分散型 CCD を用いており、照射するレーザーの強度を低くすることが可能である。文化財の非破壊分析を念頭に考えた場合、レーザーラマン分光分析法は資料に対するダメージがなく、感度の高い分析結果を得ることができるものと期待できる。

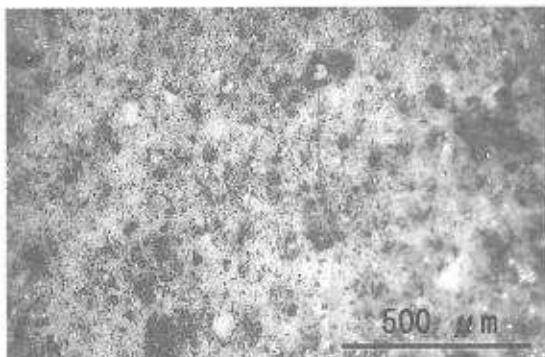


写真3 実体顕微鏡による赤色顔料の観察

3. 赤色顔料の分析

灰釉陶器内面に付着している赤色顔料を実体顕微鏡を用いて観察したところ、灰釉陶器の微細な凹凸に赤色顔料がかろうじて付着しているような状況であり、量的にも極めて少量であることが明らかとなった（写真3）。

レーザーラマン分光分析にはクロメックス社製の Raman2000 を用いた。励起レーザーは波長785nmで、出力は5 mWとした。今回は灰釉陶器内面に付着した微小な赤色顔料を分析しなければならないことから、顕微測定法を適用した。レーザーは直径10 μmまで絞り込むことが可能であるが、陶器本体のスペクトルも検出してしまったため、赤色顔料のある部分とない部分の2箇所を分析し、前者のスペクトルを後者のそれで除算することにより、赤色顔料のみのラマンスペクトルを得た。得られたラマンスペクトルを図1に示す。図2と図3には、標準試料である水銀朱（鉱物名：辰砂、化合物名：硫化水銀、化学式：HgS）とベンガラ（鉱物名：赤鉄鉱、化合物名： α -型の酸化鉄(III)、化学式： α -Fe₂O₃）のラマンスペクトルをそれぞれ示す。

スペクトルのプロフィールから、ベンガラでないことは明らかである。標準試料である水銀朱のラマンスペクトルは、275cm⁻¹付近に強いラマン散乱を示し、365cm⁻¹付近に比較的強いラマン散乱を示す。また275cm⁻¹付近の強いラマン散乱光と重なるように307cm⁻¹付近に小さなラマンスペクトルをもっている。今回分析を行った灰釉陶器の場合、277cm⁻¹に強いラマン散乱を、また366cm⁻¹に比較的強いラマン散乱を示し、309cm⁻¹に強度的には低いものの明らかなラマン散乱を示し、標準試料である水銀朱と良い一致を示した。このことから、灰釉陶器に付着している赤色顔料は、水銀朱であるということが明らかとなった。

4. まとめ

灰釉陶器にわずかに付着している赤色顔料をレーザーラマン分光分析法により分析したところ、この赤色顔料が水銀朱であることが明らかとなった。赤色顔料は灰釉陶器内側の凹面にごくわずかに付着しており、幾何学的な制約と量的な問題から、蛍光X線元素分析とX線回折分析を行うことが困難であったものである。今回、レーザーラマン分光分析法を適用することにより、このような極微量の水銀朱を同定することができたことは大変意義深い。レーザーラマン分光分析法は、レーザー出力をきわめて小さくでき、非接触でしかも非破壊で分析を行うことができるものである。今後、このような赤色顔料やその他様々な考古遺物に対して、レーザーラマン分光分析法の適用範囲を広げ、データベースの構築を図ることが必要である。

第12章 まとめ

1. 遺跡の変遷

A. 調査の概要

平成2年から平成7年にかけての神戸市教育委員会による試掘調査で、日下部遺跡は八多川と有野川の合流点付近に位置する広大な規模の遺跡であることが判明し、平成7年度から平成9年度の3ヵ年にわたり全面調査を実施した。実施した調査区は大きく8地区に分かれ、総面積は約22,384m²に及ぶ。検出された遺構は、各地区の小結で記述したように、弥生時代後期後半から中世後半・近世にかけての長期間にわたるものであり、遺物も鳴滝掛り地区や林ヶ鼻地区で縄文土器が出土しているなど、弥生時代後期後半～近世の長期にわたるのものが出土している。

しかしこれらの遺構・遺物は各地区とも広範囲に広がることは無く、比較的狭小な範囲に止まっている。また時期的にも短期間で断絶し、継続的に営まれた地区は皆無である。広大な範囲に広がるとされる日下部遺跡も、こうした点からすれば小遺跡の集合体として捉えられる。

ここでは各地区的遺構・遺物の比較から、遺跡内での集落の変遷を観ることにする。

B. 第1期

第1期は弥生時代後期後半から古墳時代前期段階と考えられる時期であるが、各遺構からの出土遺物や遺構の切りあい関係などから2段階に分けることが可能である。

第1段階 木之元地区SH-6・8・9が位置づけられ、住居跡はすべて方形で、床面に高床部が設けられている。これら住居跡の他、方形周溝墓もこの段階に入る可能性が高い。時期的にはSH-6・9の出土土器に丹波系のものとV様式系のものが混在が確認されるが、丹波系の土器の口縁部に擬凹線が認められなくなっている、川除4～5期に相当する時期が与えられる。

木之元地区あるいは宮ノ向井地区で検出された円形の竪穴住居は、これに先行する時期になる可能性が高いが、詳細な時期は不明である。また木之元5区出土遺物には明らかに先行するものが認められる。

第2段階 木之元地区SH-1・3、乗安1区SD-2、乗安2区SH-1・SK-1、乗安3区SH-1・SR-1が位置づけられ、この段階になって乗安地区に集落が進出している。乗安地区では1区SD-1と3区SR-1に囲まれた範囲で集落が営まれている。ただ木之元地区的住居は前段階同様、規模が比較的大きく、高床部が設けられている。それに対し、乗安地区的住居は規模も小さく、高床部は認められていないなど、両地区的住居の様相には差異が認められる。

出土遺物は1区SD-2、3区SR-1から多く出土おり、器種には壺・甕・高杯・鉢・器台がある。壺は量的には減少しており、甕・鉢類が多くなっている。甕類はV様式の伝統的な甕が圧倒的に多いが、庄内甕の影響を受けたもの、布留式甕の影響を受けたものが存在している。これを地域的な特徴か時間的な差と考えるかは、今後の資料の増加を待たなければならない。

C. 第2期

古墳時代後期段階に位置づけられ、木之元地区(SH-7)と上才谷地区(1区SH-1・3区SH-1・SD-1・SD-2)、乗安3区(SH-2)で竪穴住居跡や溝などが検出されている。木之元

地区的SH-7は竈が設けられており、本遺跡では初見である。この地区では他にもこの時期に属すると思われる住居跡が検出されているが、出土遺物が少なく、断定できない。上才谷地区から出土した須恵器はほぼTK-47からTK-10段階に相当するものであるが、2基の住居跡から出土しているものはTK-10段階である。上才谷地区の集落はこの極めて短期の限られた時期に営まれた可能性が高い。いずれの地区とも遺構数は少なく、検出される範囲も小規模である。

D. 第3期

7世紀の飛鳥時代に相当する時期を想定しており、ほぼ飛鳥II～飛鳥IVの時期を考えている。遺構が検出された地区は乗安地区に限られ、大きく2地区に分かれて検出されているが、その間の調査が十分でないことから、集落単位を具現しているか否かは定かでない。検出された遺構は竪穴住居跡や土坑であり、住居跡は掘り方を伴う柱はなかったようで、いずれの住居跡からも柱穴は検出されていない。また平面プランも不正形なものである。遺物は包含層からの出土が多くを占めるが、2区SH-1・2、8区SH-3・5から比較的まとまった資料が出土している。2区SH-1の須恵器は小型化の進んだ杯Hのみであり、3区SH-2、8区SH-3・5の須恵器には杯Gと杯Bがみられる。杯Bと杯Hが共伴する例は認められていない。土器以外では金銅装の杏葉や馬具の帶止具出土している。

E. 第4期

平安時代前半の時期を想定しているが、建物など明瞭な遺構は検出されていない。ただ遺物が木之元地区や宮ノ後地区で出土している。その中には縁釉陶器や灰釉陶器の他、風字硯、朱墨を磨ったと見られる灰釉陶器の転用硯などもみられる。

F. 第5期

中世前期を想定している。建物跡などの遺構が検出された地区は木之元4区、宮ノ後6・7区、鳴滝掛り6・9・10区、乗安3区、林ヶ鼻7・10区であり、本遺跡では最も広範囲で遺構が検出される時期である。建物に伴う柱穴からの遺物が少なく、建物の時期を確定するのは困難であるが、建物に関連するとみられる土坑などからは平安時代末の年代を示す遺物が出土している。

検出された建物は、いずれの地区とも狭小な範囲ではほぼ同方位ないし直交する方位をとることから、建物の有機的な配置が考えられる。また、建物以外の柱穴も少なく、建物が存在した期間は極めて短期間であったものと考えられることから、それぞれの地区で検出された建物は一軒の単位を具現している可能性が考えられる。この時期にはこうした単位が点在する景観を呈していたようである。

本遺跡の南に隣接する二郎宮ノ前遺跡では、ほぼ同時期の居館跡と考えられる遺構が検出されており、その関連性及び差異が注目される。

以上のように、本遺跡は、弥生時代後半に木之元地区で集落が営まれたのを皮切りに、中世前半期まで極めて断続的に営まれていることが判明した。その中で、第3期とした乗安地区の飛鳥時代集落では金銅装の馬具が出土しており、本遺跡の中では盛行した集落と言えよう。第5期とした中世前半期はの集落はほぼ1軒単位で転々と営まれ、散村的な景観を形成していたものと考えられる。出土遺物の点では古墳時代前半の庄内～布留式にかけての土器、7世紀代の土器・馬具など、今後に問題提起となるものが多く出土している。最後に調査の支援を頂いた方々に厚くお礼を申し上げるとともに、十分な形での報告を作成できなかつた不徳をお詫びします。

木ノ元地区土層名表

図版 3

1区 北壁

番号	土層名
1 10YR 1/2	黒色砂質シルト
2 10YR6/6	明褐色シルト
3 10YR5/1	褐色シルト
4 10YR5/2	灰褐色細砂
5 10YR5/2	灰褐色細砂
6 10YR6/4	にぶい黄褐色砂質シルト
7 2.5Y6/1	黄褐色砂質シルト
8 10YR6/4	にぶい黄褐色砂質シルト
9 10YR6/4	にぶい黄褐色砂質シルト
10 10YR5/2	灰褐色シルト
11 10YR3/2	黒褐色シルト (SH-12)
12 10YR5/2	灰褐色シルト (SH-12)
13 10YR3/2	黒褐色シルト (ピット)
14 10YR6/4	にぶい黄褐色砂質シルト
15 10YR5/2	灰褐色シルト

2区 北壁

番号	土層名
1 10YR 1/2	黒色砂質シルト
2 10YR6/6	明褐色シルト
3 10YR5/1	褐色シルト
4 10YR5/1	褐灰色シルト (SD-4埋土)
5 10YR5/2	灰褐色シルト
6 10YR5/2	灰褐色シルト
7 10YR5/2	灰褐色シルト
8 10YR5/1	褐灰色シルト
9 10YR6/3	にぶい黄褐色砂質シルト
10 10YR6/1	褐灰色シルト
11 2.5Y6/2	暗灰黄色砂
12 2.5Y5/2	明灰褐色粗砂
13 2.5Y5/2	明灰褐色細砂
14 10YR5/1	黄灰色砂質シルト
15 2.5Y6/2	暗灰黄色砂質シルト
16 10YR4/1	褐灰色シルト
17 2.5Y6/2	暗灰黄色砂質シルト
18 10YR5/1	褐灰色シルト

3区 北壁

番号	土層名
1 混乱	
2 10YR 1/2	黒色砂質シルト
3 10YR6/6	明褐色シルト
4 10YR5/1	褐色シルト
5 2.5Y6/1	黄灰色砂質シルト
6 10YR6/3	にぶい黄褐色砂礫
7 10YR6/1	褐灰色シルト
8 2.5Y6/3	にぶい黄褐色砂質シルト
9 10YR5/2	灰黃褐色砂質シルト
10 2.5Y5/2	暗灰黄色砂礫
11 2.5Y5/2	暗灰黄色砂
12 10YR5/2	黄灰色砂質シルト
13 10YR5/1	褐灰色砂質シルト
14 10YR4/1	褐灰色シルト
15 10YR5/1	黄灰色砂質シルト
16 2.5Y6/2	灰黃褐色砂質シルト
17 10YR5/1	褐灰色シルト
18 2.5Y6/2	灰黃褐色シルト
19 10YR5/1	褐灰色砂礫
20 2.5Y6/1	黄灰色砂質シルト

4区 東壁

番号	土層名
1 10YR2/1	黒色砂質シルト
2 10YR3/3	暗褐色シルト黄褐色細砂
3 2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト質細砂
4 10YR4/3	にぶい黄褐色シルト質細砂
5 7.5YR4/3	褐色シルト質極細砂
6 10YR3/3	暗褐色シルト質極細砂
7 2.5Y4/4	オリーブ褐色シルト質細砂
8 10YR2/1	黒色砂質シルト
9 10YR4/3	にぶい黄褐色シルト質極細砂
10 2.5Y4/2	暗灰黄色シルト質極細砂
11 2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト質細砂
12 2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト質細砂
13 2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト質細砂
14 10YR3/3	暗褐色シルト質細砂
15 2.5Y4/2	暗灰黄色シルト質細砂
16 10YR4/2	にぶい黄褐色シルト質細砂
17 10YR4/1	褐灰色シルト質極細砂
18 2.5Y4/1	黄灰シルト質極細砂
19 2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト質細砂
20 2.5Y5/2	暗灰黄色シルト質板細砂
21 2.5Y3/2	黒褐色シルト質細砂
22 2.5Y4/1	黄灰シルト質極細砂
23 2.5Y3/2	黒褐色シルト質細砂
24 2.5Y4/2	暗灰黄色シルト質細砂
25 2.5Y3/2	黒褐色シルト質細砂
26 2.5Y4/4	オリーブ褐色シルト質細砂
27 10YR5/1	褐灰色シルト質板細砂
28 10YR6/1	褐灰色シルト質細砂
29 10YR5/2	灰黃褐色シルト質板細砂
30 10YR5/2	灰黃褐色シルト質板細砂
31 10YR6/3	にぶい黄褐色シルト質極細砂
32 10YR4/2	にぶい黄褐色シルト質極細砂
33 7.5YR4/4	褐褐色シルト質極細砂
34 2.5Y4/1	黄灰シルト質極細砂の混層
35 10YR3/2	黑褐色シルト
36 10YR3/1	黑褐色シルト質極細砂
37 10YR3/2	黑褐色シルト
38 10YR4/1	褐灰色シルト質極細砂
39 10YR3/2	黑褐色シルト質極細砂
40 10YR3/2	黑褐色シルト質極細砂
41 7.5YR5/6	明褐色シルト質極細砂
42 2.5Y3/2	黒褐色シルト質極細砂の混層
43 2.5Y4/3	にぶい黄褐色シルト質板細砂
44 10YR4/1	褐灰色シルト質極細砂
45 10YR5/6	黄褐色シルト質細砂
46 10YR3/2	黑褐色シルト質極細砂

図版 4

SH-1-9

1 10YR-7/3	にぶい黄橙シルト
2 10YR-5/2	灰黄褐色シルト
3 10YR-3/1	黑褐色シルト
4 10YR-3/2	黑褐色シルト
5 10YR-5/1	褐灰色シルト
6 10YR-3/1	黑褐色粘土
7 10YR-5/1	褐灰色シルト (炭化物多く含む)
8 10YR-5/1	褐灰色シルト (シルトブロック含む)
9 10YR-5/1	褐灰色粘土
10 10YR-5/1	褐灰色粘土
11 10YR-6/1	褐灰色シルト (灰白シルトブロック含む)
12 10YR-8/2	灰白色シルト微細ブロック
13 10YR-8/2	灰白色シルト微細ブロック
14 10YR-6/1	褐灰色シルト
15 10YR-8/2	灰白色シルト微細ブロック

SH-9中央土坑

1 7.5Y3/2	オリーブ黒粘土
2 10YR-2/1	黒褐色粘土
3 10GY6/1	綠灰細砂
4 10YR-2/1	黒褐色粘土
5 10YR-2/1	黒褐色粘土
6 7.5GY6/1	綠灰極細砂

SH-1排水溝

1 2.5Y4/2	暗灰黄色シルト
2 7.5Y5/1	灰色シルト
3 7.5Y5/1	灰色粘質シルト
4 5Y4/2	灰オリーブ色粘質シルト
5 7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質シルト
6 10YR2/1	黑色粘質シルト
7 10YR-7/2	灰白色シルト (褐灰色シルト含む)
8 10YR5/1	褐灰色シルト
9 10YR-8/1	灰白色板細砂 (褐灰色シルト含む)
10 10YR4/1	褐灰色粘土
11 10YR4/1	褐灰色粘土

SH-3+8

1 10YR2/1	黑色シルト
2 10YR4/1	褐灰色シルト
3 10YR5/1	褐灰色シルト
4 10YR5/1	褐灰色シルト (灰白色ブロック含む)
5 10YR5/1	褐灰色シルト (炭化物含む)
6 10YR5/1	褐灰色シルト
7 10YR5/1	褐灰色シルト (炭化物多く含む)
8 10YR5/1	褐灰色シルト (灰白色ブロック含む)
9 10YR5/1	褐灰色シルト (炭化物多く含む)
10 10YR5/1	褐灰色シルト (炭化物含む)
11 10YR5/1	褐灰色シルト (炭化物少量含む)
12 10YR5/1	褐灰色シルト (灰白色シルト含む)
13 10YR5/1	褐灰色シルト (褐灰色シルトブロック含む)
14 10YR7/1	灰白色シルト (褐灰色シルト含む)
15 10YR4/1	褐灰色シルト
16 10YR6/1	褐灰色シルト (褐灰色シルトブロック多く含む)
17 10YR6/1	褐灰色シルト (褐灰色シルトブロック多く含む)
18 10YR6/1	褐灰色シルト (褐灰色シルトブロック含む)
19 10YR6/1	褐灰色粘土
20 10YR6/1	褐灰色シルト (褐灰色シルトブロック含む)
21 10YR6/1	褐灰色粘土
22 10YR6/1	褐灰色粘土 (炭化物多く含む)

SH-3中央土壤

1 10YR6/1	褐灰色粘土 (黄橙色シルト含む)
2 10YR5/1	褐灰色粘土 (炭化物含む)
3 2.5GY	灰白粘土と黄橙色粘土ブロック
4 10YR5/1	褐灰色粘土 (灰白粘土含む)
5 N5/0	灰色シルト (オリーブ灰シルトブロック含む)
6 7.5GY6/1	綠灰極細砂 (オリーブ灰シルトブロック含む)
7 N5/0	灰色シルト (オリーブ灰シルトブロック含む)
8 N5/0	灰色シルト (オリーブ灰シルトブロック 炭化物含む)
9 10GY6/1	綠灰色シルト (オリーブ灰シルトブロック含む)
10 2.5GY	灰白粘土と黄橙色粘土ブロック
11 5GY6/1	オリーブ灰極細砂

SH-3壁際土壤

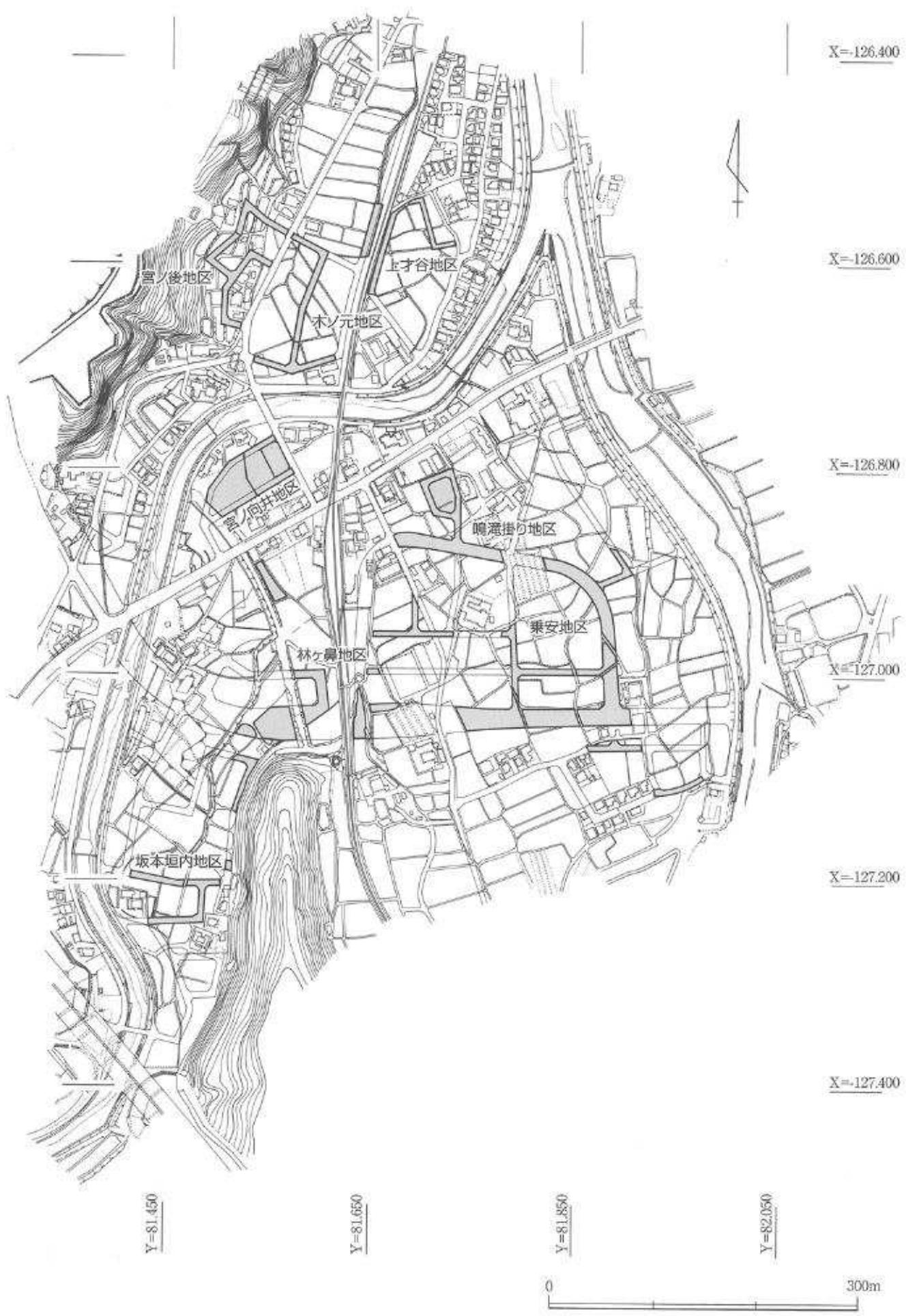
1 10YR5/1	褐灰色シルト (灰白色シルトブロック含む)
2 10YR-7/1	灰白色シルト
3 10YR4/1	褐灰色シルト (炭化物多く含む)
4 10YR-8/1	灰白色板細砂 (褐灰色シルト含む)
5 10YR5/1	褐灰色シルト (灰白粘土含む)

SH-8中央土坑	SH-10
1 10YR-6/2 灰黄褐色シルト	1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(耕土)
2 10YR4/1 暗灰色シルト(炭化物多く含)	2 10YR6/8 黄褐色砂質シルト(床土)
3 10YR-6/2 反黄褐色シルト	3 10YR5/6 暗灰黄褐色砂質シルト
4 10YR4/1 暗灰色シルト(炭化物多く含)	4 10YR4/1 黑褐色シルト
5 10YR5/1 暗灰色シルト(灰黄褐色シルト含)	5 10YR3/2 黑褐色シルト
6 10YR-2/1 黑褐色粘土	6 10YR3/2 黑褐色砂質シルト
7 10YR5/1 暗灰色粘土(炭化物少量含)	7 10YR3/2 黑褐色シルト
8 7.5YR-8/2 灰白色極細砂	8 10YR3/2 黑褐色シルト
SH-2壁際土坑	9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト	10 10YR5/2 にぶい黄褐色極細砂
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト(灰白色シルトブロック含)	11 10YR4/1 黑褐色砂質シルト
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト	SH-11
4 10YR7/1 灰白色シルト(灰黄褐色シルトブロック含)	1 10YR3/1 黑褐色砂質シルト(耕土)
5 10YR7/1 灰白色シルト(灰黄褐色シルトブロック含)	2 10YR5/1 暗灰色極細砂
SH-4	3 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
1 10YR2/2 黑褐色シルト	4 10YR5/2 反褐色砂質シルト
2 10YR2/1 黑褐色シルト	5 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト
3 10YR5/2 暗灰色シルト(灰黄褐色シルトブロック含)	6 10YR3/2 黑褐色シルト
4 10YR3/2 黑褐色シルト(にぶい黄橙色シルトブロック含)	7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
5 10YR4/2 灰黄褐色シルト	8 10YR3/1 黑褐色シルト
6 10YR5/2 暗灰色シルト(灰黄褐色シルトブロック含)	9 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
7 10YR3/2 黑褐色シルト(にぶい黄橙色シルトブロック含)	10 10YR3/1 黑褐色砂質シルト
SH-6	11 10YR3/1 黑褐色シルト
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト	12 10YR5/2 灰褐色砂質シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト(明褐色シルトブロック含)	13 10YR4/1 暗灰色シルト
3 10YR4/1 暗灰色シルト	14 10YR4/1 暗灰色砂質シルト
4 10YR4/3 にぶい黄橙極細砂	15 10YR2/1 黑色シルト
5 10YR4/3 にぶい黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	SH-12
6 10YR4/3 にぶい黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	1 10YR2/1 黑褐色砂質シルト(耕土)
7 10YR7/4 にぶい黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	2 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
8 10YR7/4 にぶい黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	3 10YR5/1 暗灰色シルト
9 10YR7/4 にぶい黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	4 10YR5/1 反褐色細砂
10 10YR7/4 にぶい黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	5 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
11 10YR5/6 黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	6 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト
12 10YR5/6 黄橙極細砂(明黃褐極細砂ブロック含)	7 10YR3/2 黑褐色砂質シルト
13 10YR5/6 黄橙極細砂(にぶい黄橙極細砂ブロック含)	8 10YR5/2 反褐色シルト
14 10YR5/6 黄橙極細砂(明黃褐極細砂ブロック含)	SH-13 回版7 5区北壁 北壁
SH-7	1 耕土 2 5B6/1 青灰色砂質シルト
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト	3 2.5Y6/3 にぶい黄橙色砂質シルト
2 10YR2/2 黑褐色シルト	4 5G6/1 緑灰砂質シルト(旧耕土)
3 10YR8/2 灰白色極細砂(褐灰シルトブロック含)	5 7.5Y6/1 灰色砂質シルト
4 10YR8/2 灰白色極細砂(褐灰シルトブロック含)	6 2.5Y6/3 にぶい黄橙色砂質シルト
5 10YR4/1 暗灰色シルト	7 2.5Y6/3 にぶい黄橙色砂質シルト
6 10YR4/1 暗灰色シルト灰白シルト含)	8 10YR5/1 暗灰色シルト
7 10YR5/1 暗灰色シルト	9 2.5Y6/3 にぶい黄橙色砂質シルト
SH-7電	10 7.5YR6/2 灰褐色粘質シルト
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト	11 7.5YR4/1 暗灰色シルト(細砂混じり)
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト(褐灰シルトブロック含)	12 10YR4/2 暗灰黄色シルト(細砂混じり)
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト(灰黄褐色シルトブロック含)	13 2.5Y2/1 黑色砂質シルト
4 10YR3/1 黑褐色シルト	14 10YR3/2 黑褐色砂質シルト(細砂混じり)
5 2.5Y6/3 にぶい黄橙色極細砂(褐灰極細砂ブロック含)	15 7.5YR3/2 黑褐色粘質シルト(細砂混じり)
6 10YR5/2 灰黄褐色極細砂	16 10YR5/2 灰黄褐色シルト(細砂混じり)
7 10YR7/4 にぶい黄橙極細砂	17 5Y6/3 オリーブ黄色砂壤
8 2.5Y6/3 にぶい黄橙色極細砂(褐灰極細砂ブロック含)	18 2.5GY7/1 灰白色粘質シルト(細砂混じり)
9 10YR5/2 灰黄褐色極細砂	19 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト(細砂混じり)
10 10YR5/2 灰黄褐色極細砂	21 2.5Y6/2 灰黄色細砂～粗砂
11 10YR5/2 灰黄褐色極細砂	22 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト(細砂混じり)
12 10YR5/2 灰黄褐色極細砂	6区北壁 1 5B6/1 青灰色砂質シルト
	2 2.5Y6/3 にぶい黄橙色砂質シルト
	3 5B6/1 青灰色砂質シルト
	4 10YR5/1 暗灰色シルト(耕土)
	5 10YR4/1 暗灰色シルト(床土)
	6 10YR6/1 暗灰色粘質シルト(床土)
	7 10YR7/2 にぶい黄褐色粘質シルト
	8 10YR5/1 暗灰色シルト
	9 10YR4/1 にぶい黄褐色砂質シルト
	10 10YR5/2 反黃褐色シルト(礫混じり)
	11 10YR5/2 反黃褐色シルト(礫混じり)
	12 10YR4/2 反黃褐色シルト(小礫混じり)
	13 10YR4/2 反黃褐色シルト(小礫混じり)
	14 10YR3/1 黑褐色粘質シルト
	15 10YR3/1 黑褐色粘質シルト
	16 10YR3/1 黑褐色粘質シルト

秉安地区土層名表

図版12 1区 北壁 番号 土 層 名 1 盛土 2 耕土 3 10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂 4 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト質極細砂 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 7 10YR3/2 黑褐色シルト質極細砂 8 10YR3/3 黑褐色シルト質極細砂 9 10YR1.7/1 黒色砂質シルト (炭化物多く含) 10 10YR4/2 灰黃褐色シルト 11 10YR4/2 灰黃褐色シルト質細砂 12 10YR3/3 黑褐色シルト質極細砂 13 10YR2/3 黑褐色シルト質極細砂 14 10YR3/3 黑褐色シルト質極細砂 15 10YR4/2 灰黃褐色シルト質細砂 16 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 17 7.5YR4/4 褐色シルト質細砂 18 10YR4/2 灰黃褐色シルト質細砂	図版15 2区 SH-1 1 暗褐色砂質シルト 2 暗褐色砂質シルト (炭化物多く含) 3 暗褐色砂質シルト 4 暗褐色砂質シルト 5 黑褐色砂質シルト 6 黄褐色砂質シルト (黑褐色シルト混じる) 7 暗灰褐色砂質シルト 8 黄褐色砂質シルト (黑褐色シルト混じる)	SH-3 1 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト質極細砂 3 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 4 7.5YR3/1 黑褐色シルト質極細砂 5 7.5YR3/1 黑褐色シルト質極細砂 6 7.5YR3/4 暗褐色シルト質極細砂
2区 南壁 1 黑褐色シルト 2 灰色砂質シルト 3 灰色砂質シルト 4 灰色砂質シルト 5 灰色砂質シルト 6 明灰色砂質シルト 7 灰色砂質シルト 8 灰色砂質シルト 9 灰色砂質シルト 10 黑褐色砂質シルト 11 暗灰色砂質シルト 12 黑灰色砂質シルト 13 明褐色砂 14 明褐色砂 15 暗褐色砂 16 暗褐色砂砾 17 暗褐色砂 18 暗褐色砂 19 灰黃褐色砂 20 灰黃褐色砂 21 暗褐色砂砾 22 灰黃褐色砂 23 砂砾	2区 SH-2 1 褐色砂質シルト 2 暗褐色砂質シルト 3 灰褐色砂質シルト 4 黑褐色砂質シルト 5 灰褐色砂質シルト (炭化物含) 6 灰褐色砂質シルト 7 暗褐色砂質シルト 8 暗褐色砂質シルト 9 褐色粘質シルト 10 暗褐色砂質シルト 11 増褐色砂質シルト 12 褐色シルト (黄褐色シルトブロック含) 13 褐色シルト	SH-5 南北畔 1 10YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 2 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 3 10YR2/1 黑色シルト質極細砂 4 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 5 7.5YR4/3 褐色シルト質極細砂 6 10YR3/1 黑褐色シルト質極細砂
2区 SH-3 1 暗褐色砂質シルト 2 紅褐色粘質シルト 3 暗褐色砂質シルト (炭化物含) 4 暗褐色砂質シルト 5 暗褐色砂質シルト (黄褐色シルトブロック含) 6 灰褐色砂質シルト (炭化物含) 7 暗褐色砂質シルト 8 暗褐色砂質シルト 9 褐色粘質シルト 10 暗褐色砂質シルト 11 增褐色砂質シルト 12 褐色シルト (黄褐色シルトブロック含) 13 褐色シルト	2区 SH-4 1 褐色砂質シルト	SH-5 東西畔 1 10YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 2 10YR2/3 黑褐色シルト質極細砂 3 10YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 4 10YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 5 7.5YR4/3 褐色シルト質極細砂 6 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 7 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂
2区 SK-1 1 黄褐色粘土 2 黑褐色砂質シルト 3 暗灰褐色砂質シルト 4 暗褐色砂質シルト	図版24 8区 東壁 番号 土 層 名 1 横乱 2 2.5Y2/1 黑色シルト (耕土) 3 10YR5/2 灰黃褐色 (繊含) 4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 5 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 7 2.5Y3/3 暗オーリーブ褐色砂質シルト 8 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト 9 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト 10 2.5Y2/2 オーリーブ黒砂質シルト 11 10YR5/2 灰黃褐色シルト 12 7.5Y5/6 明褐色シルト 13 10YR5/2 灰黃褐色シルト 14 10YR3/2 黑褐色シルト 15 10YR5/6 黄褐色粘質シルト 16 10YR4/1 暗灰色砂質シルト 17 2.5YR1.7/1 赤黒砂 (砂礫含) 18 10YR2/2 黑褐色粘質シルト 19 2.5Y3/2 黑褐色砂質シルト 20 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (灰白極細砂・繊含)	図版24 8区 東壁 番号 土 層 名 1 横乱 2 2.5Y2/1 黑色シルト (耕土) 3 10YR5/2 灰黃褐色 (繊含) 4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 5 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 7 2.5Y3/3 暗オーリーブ褐色砂質シルト 8 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト 9 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト 10 2.5Y2/2 オーリーブ黒砂質シルト 11 10YR5/2 灰黃褐色シルト 12 7.5Y5/6 明褐色シルト 13 10YR5/2 灰黃褐色シルト 14 10YR3/2 黑褐色シルト 15 10YR5/6 黄褐色粘質シルト 16 10YR4/1 暗灰色砂質シルト 17 2.5YR1.7/1 赤黒砂 (砂礫含) 18 10YR2/2 黑褐色粘質シルト 19 2.5Y3/2 黑褐色砂質シルト 20 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (灰白極細砂・繊含)
図版14 1区 SD-2 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 2 10YR3/3 黑褐色砂質シルト 3 10YR4/2 灰黃褐色砂質シルト 4 10YR4/4 褐色砂質シルト 5 10YR5/2 灰黃褐色砂質シルト 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 7 10YR6/2 灰黃褐色砂質シルト 8 7.5YR3/2 黑褐色砂質シルト 9 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	図版25 SH-1 1 10YR5/2 灰黃褐色砂質シルト (繊多く含) 2 10YR3/2 黑褐色砂質シルト 3 10YR3/2 黑褐色砂質シルト	SH-2 1 10YR3/2 黑褐色シルト質極細砂 2 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 3 10YR3/2 黑褐色シルト質極細砂 4 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 5 7.5YR2/2 黑褐色シルト質極細砂 6 10YR3/2 黑褐色シルト質極細砂

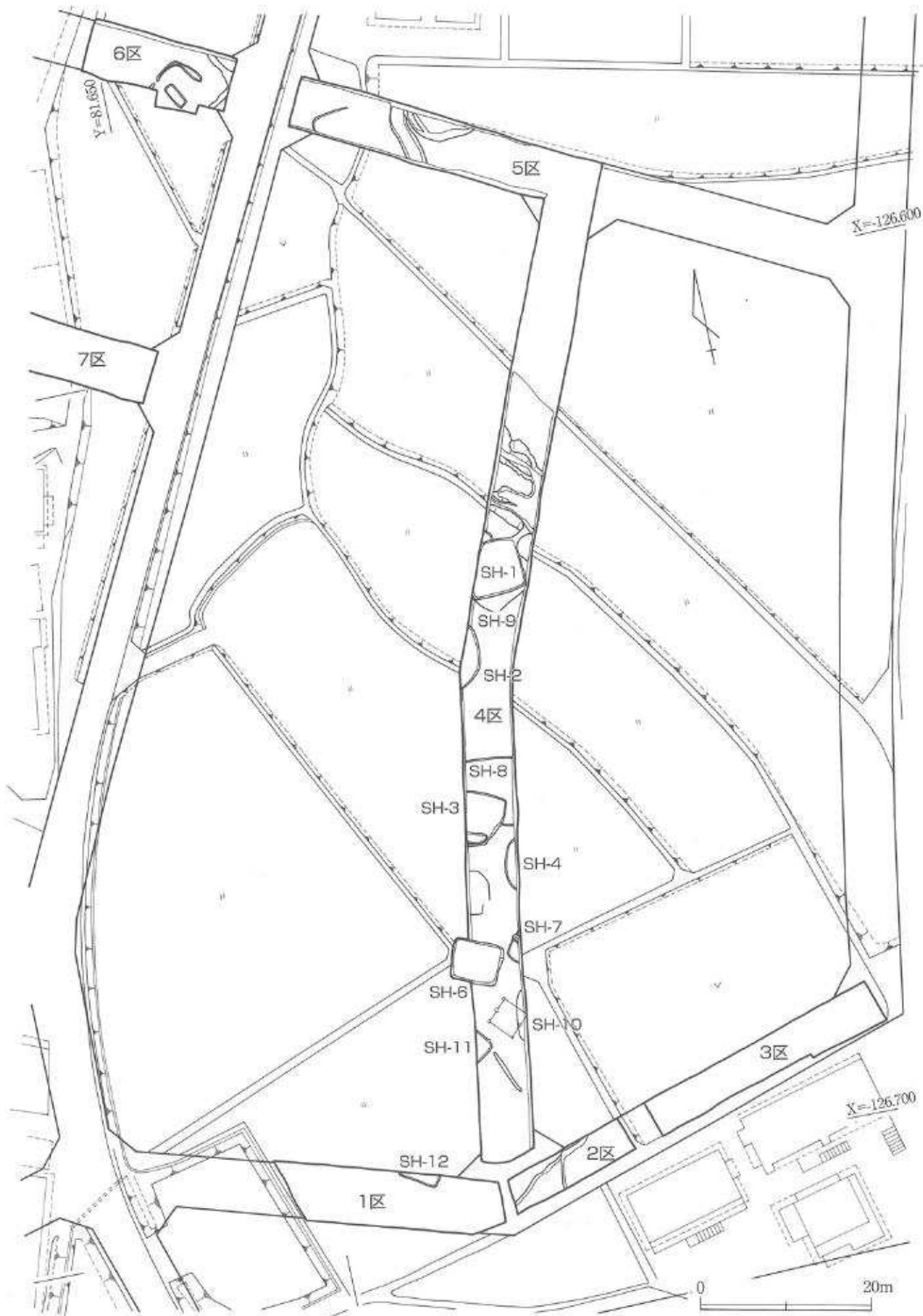
図 版



全面調査区位置図

図版2

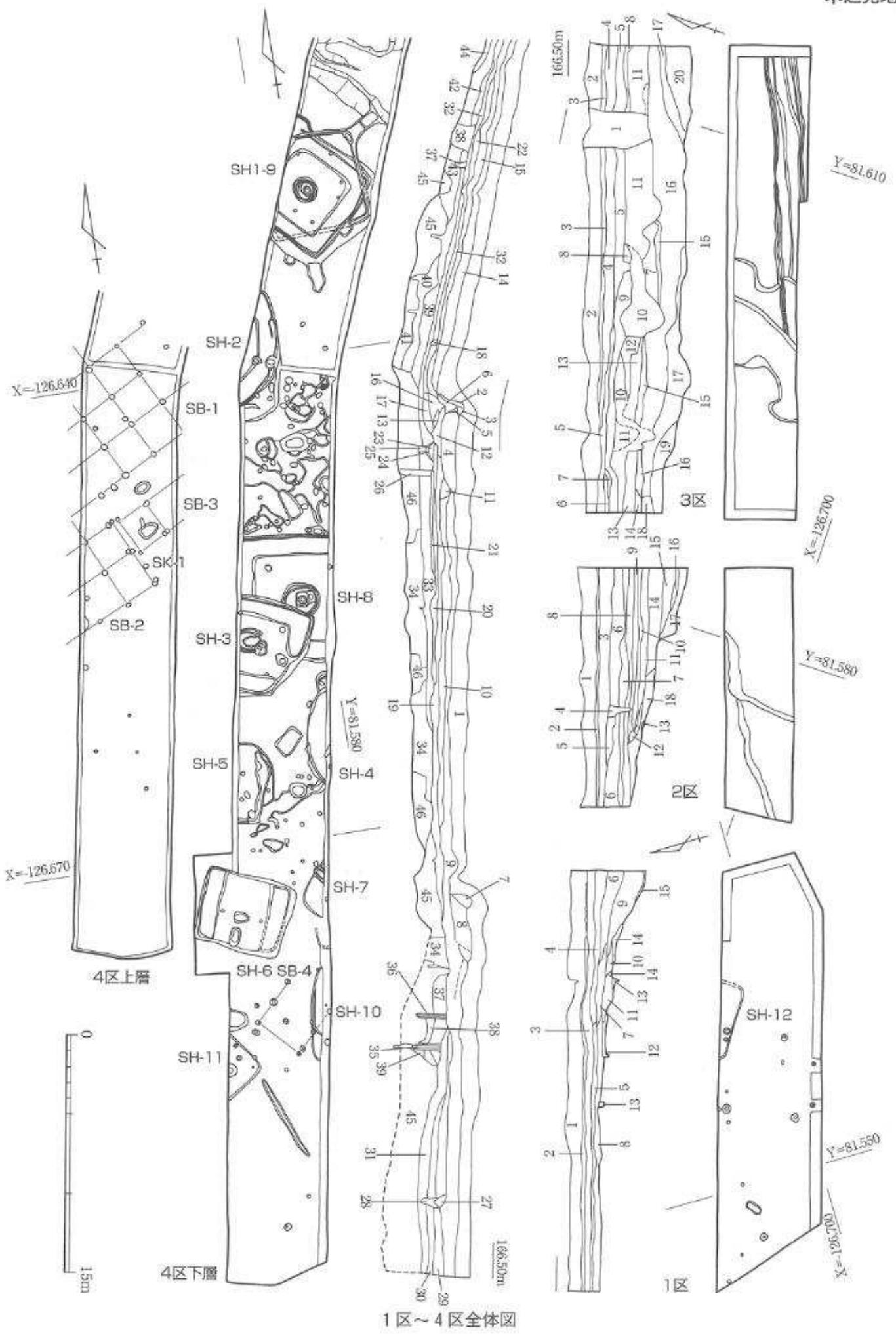
木之元地区



全体図

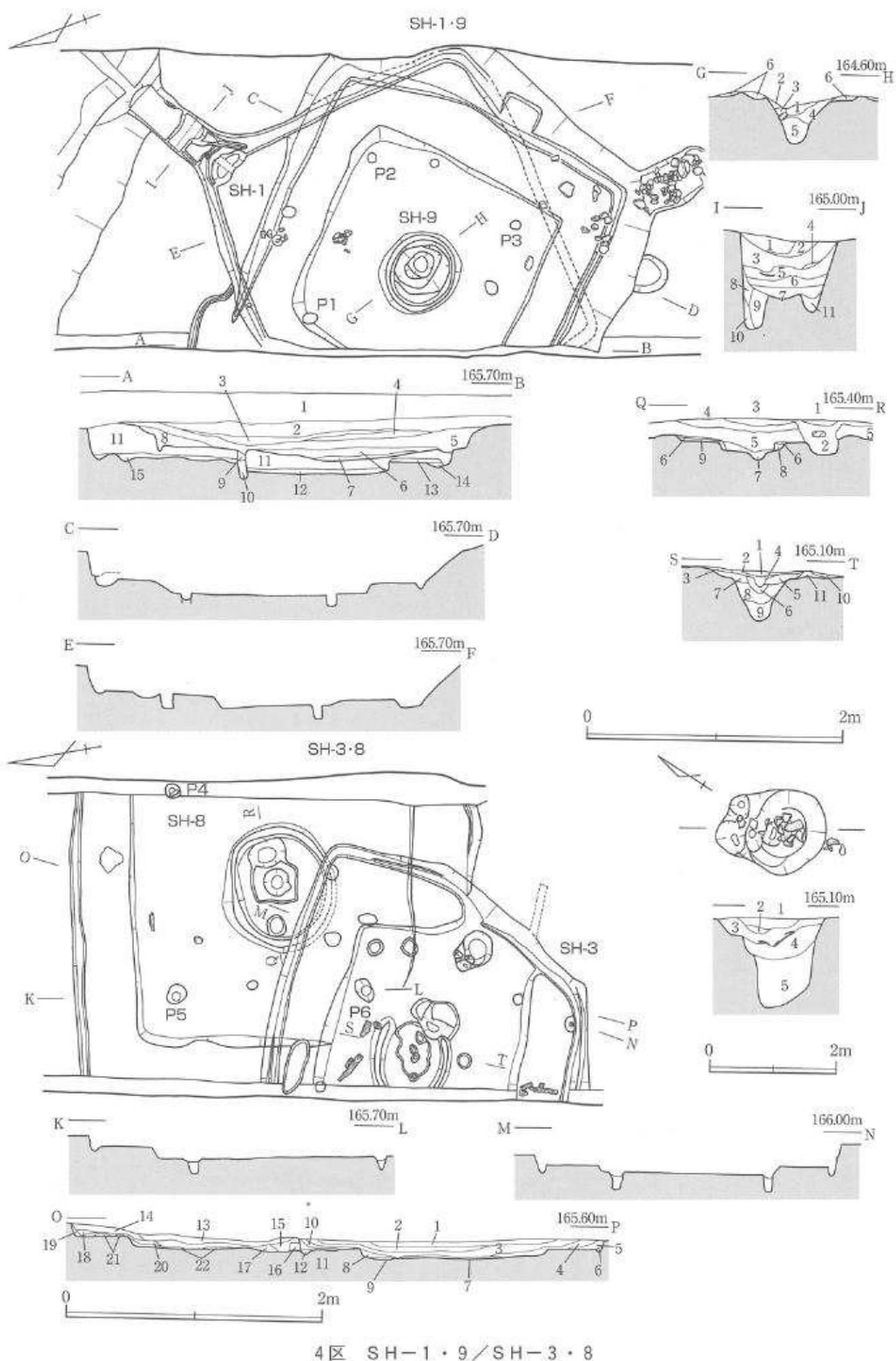
図版 3

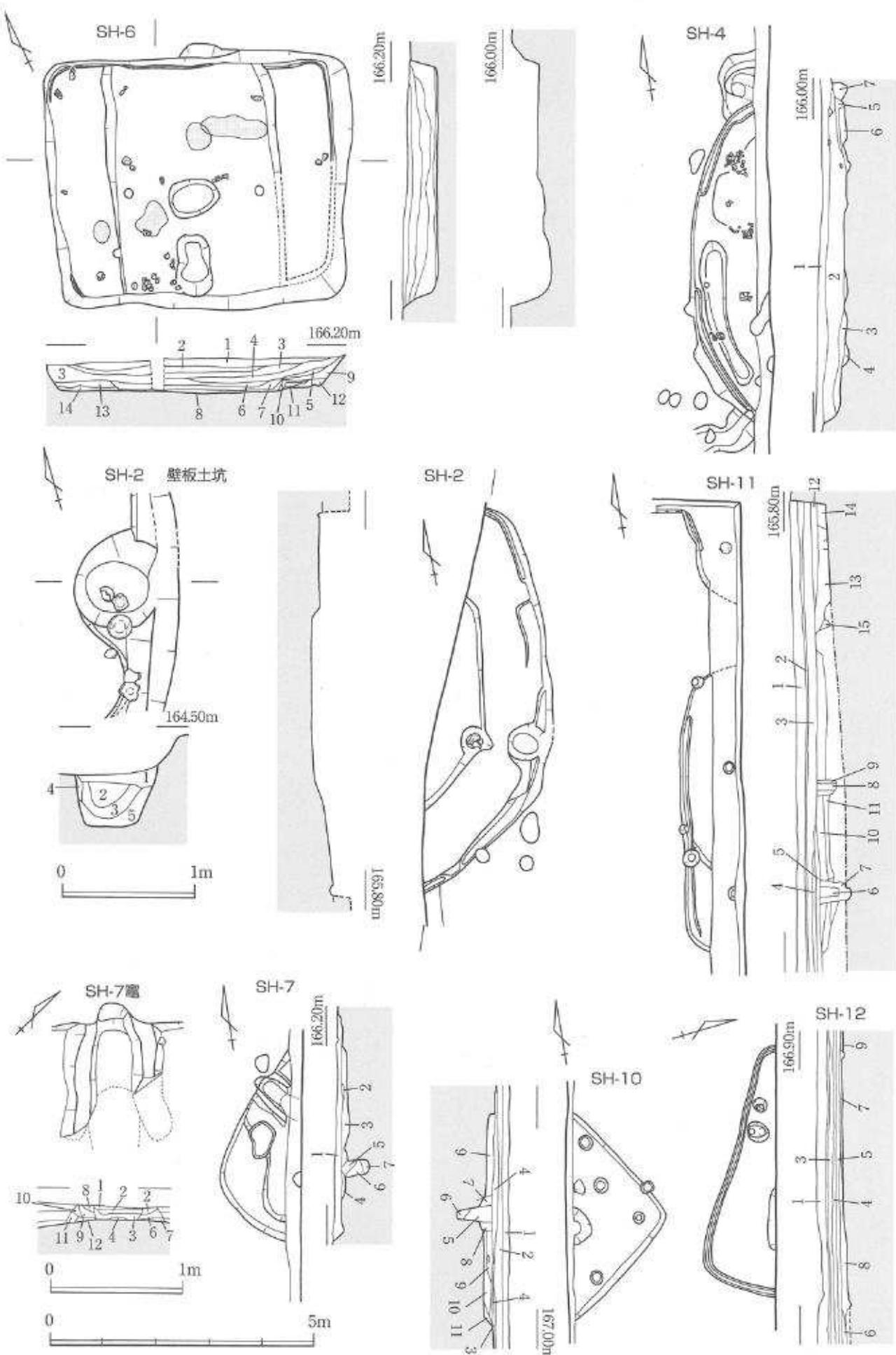
木之元地区



図版4

木之元地区

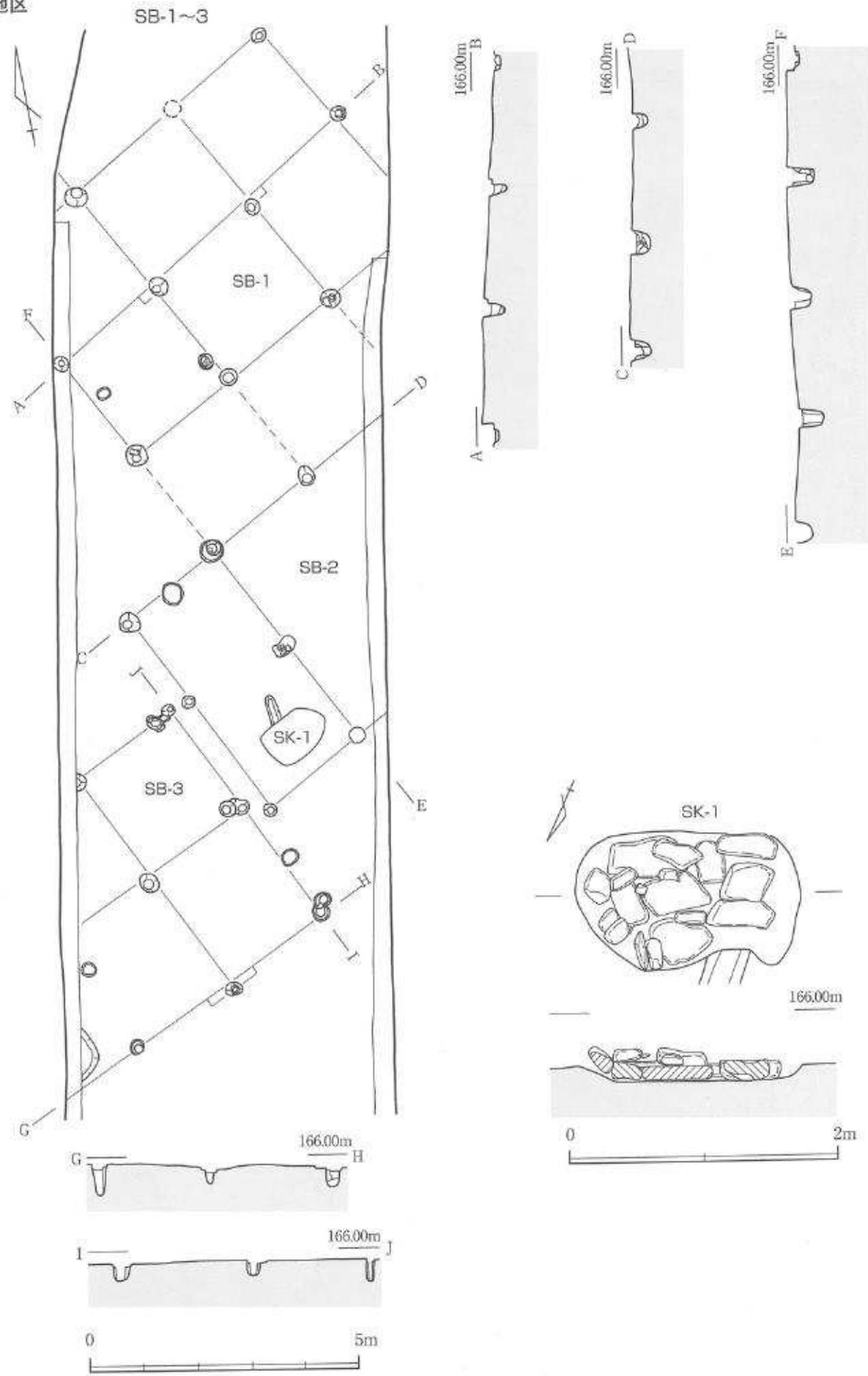




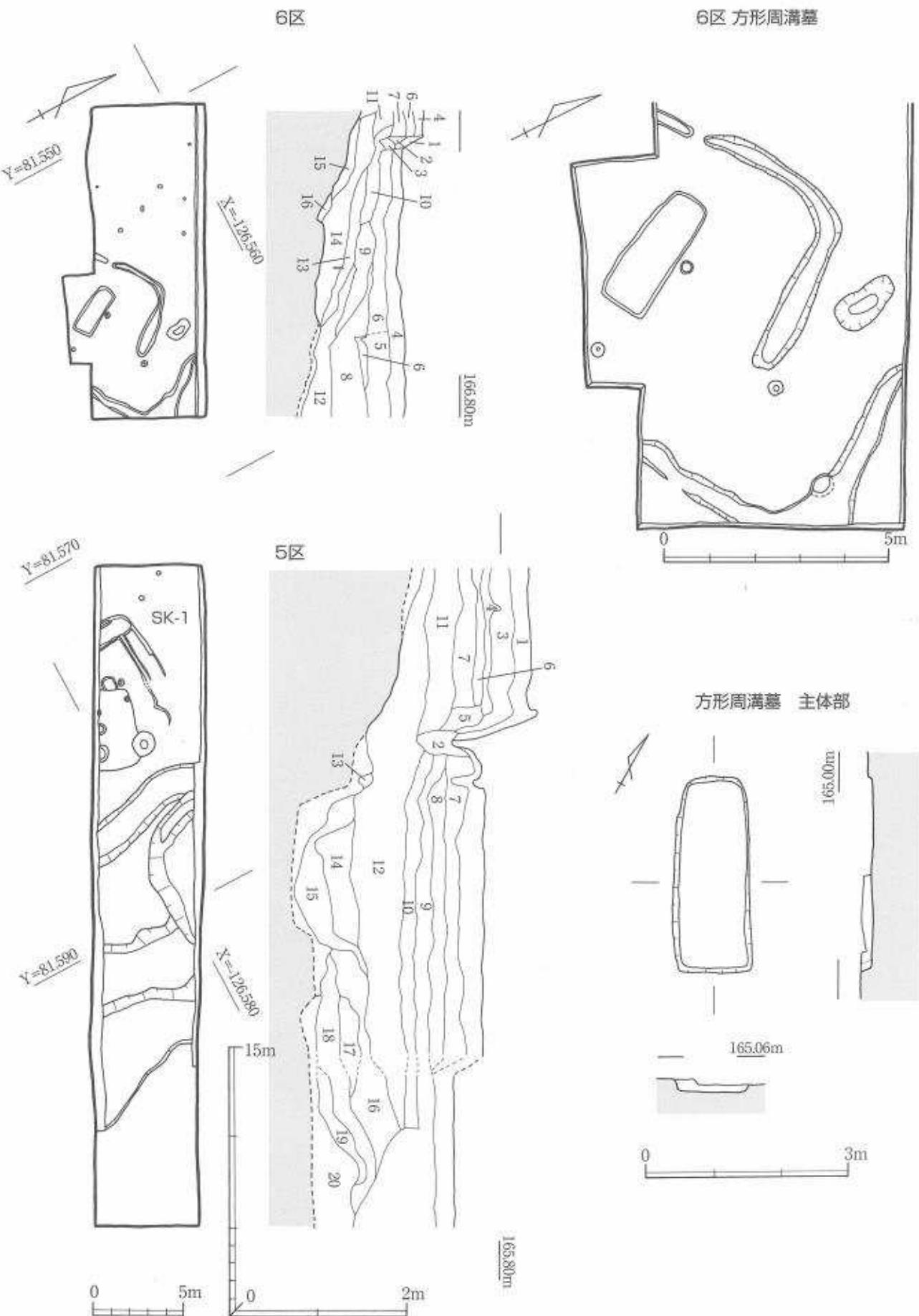
4区 SH-2 / SH-4 / SH-6 / SH-7 / SH-10 / SH-11 / SH-12

図版6

木之元地区



SB-1~3 / SK-1

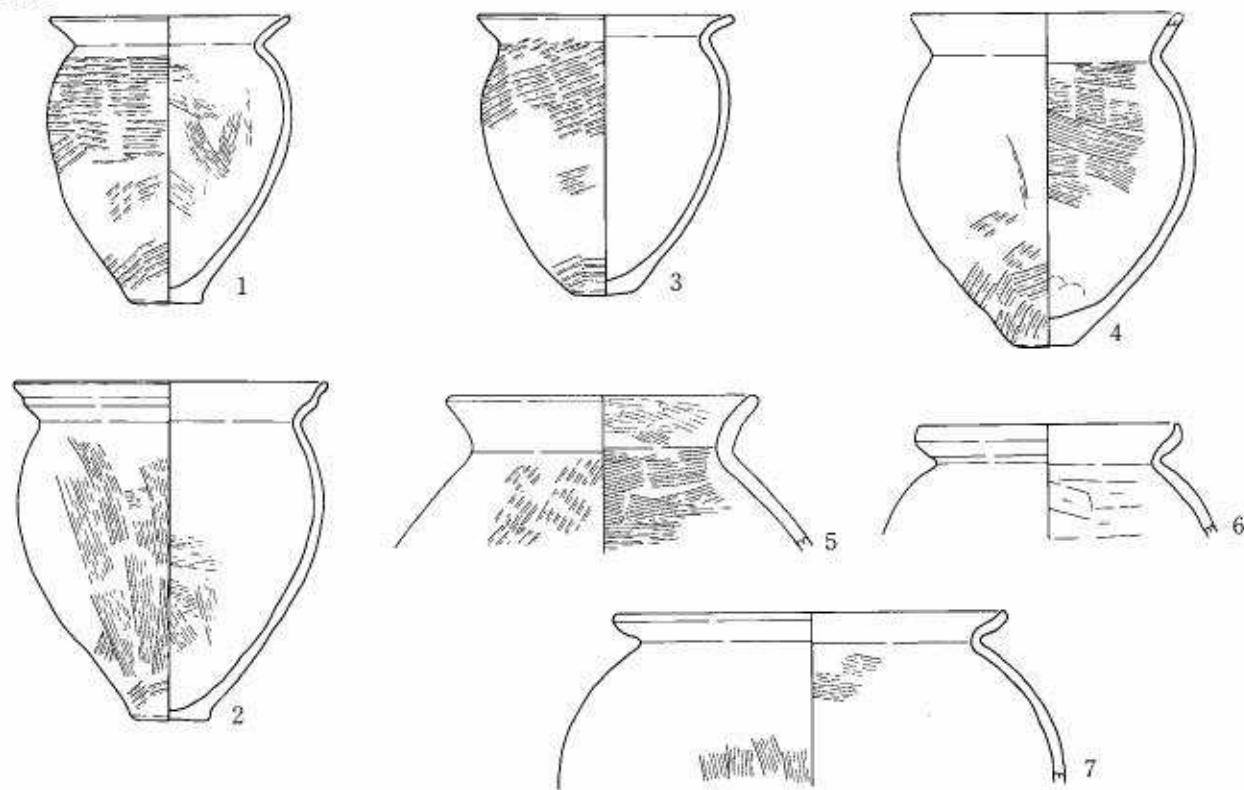


5区全体図／6区全体図／方形周溝墓／方形周溝墓主体部

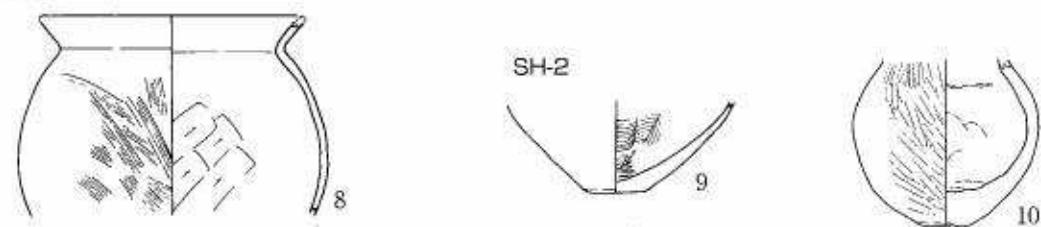
図版 8

木之元地区

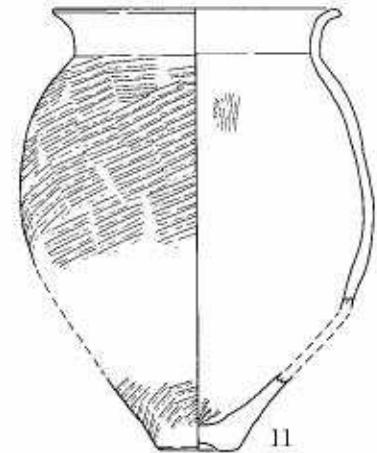
SH-9



SH-1



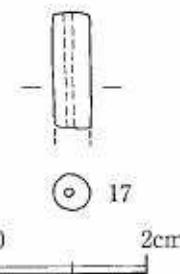
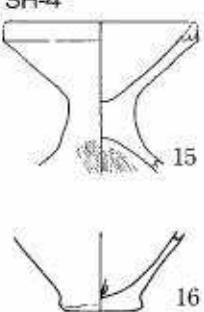
SH-3

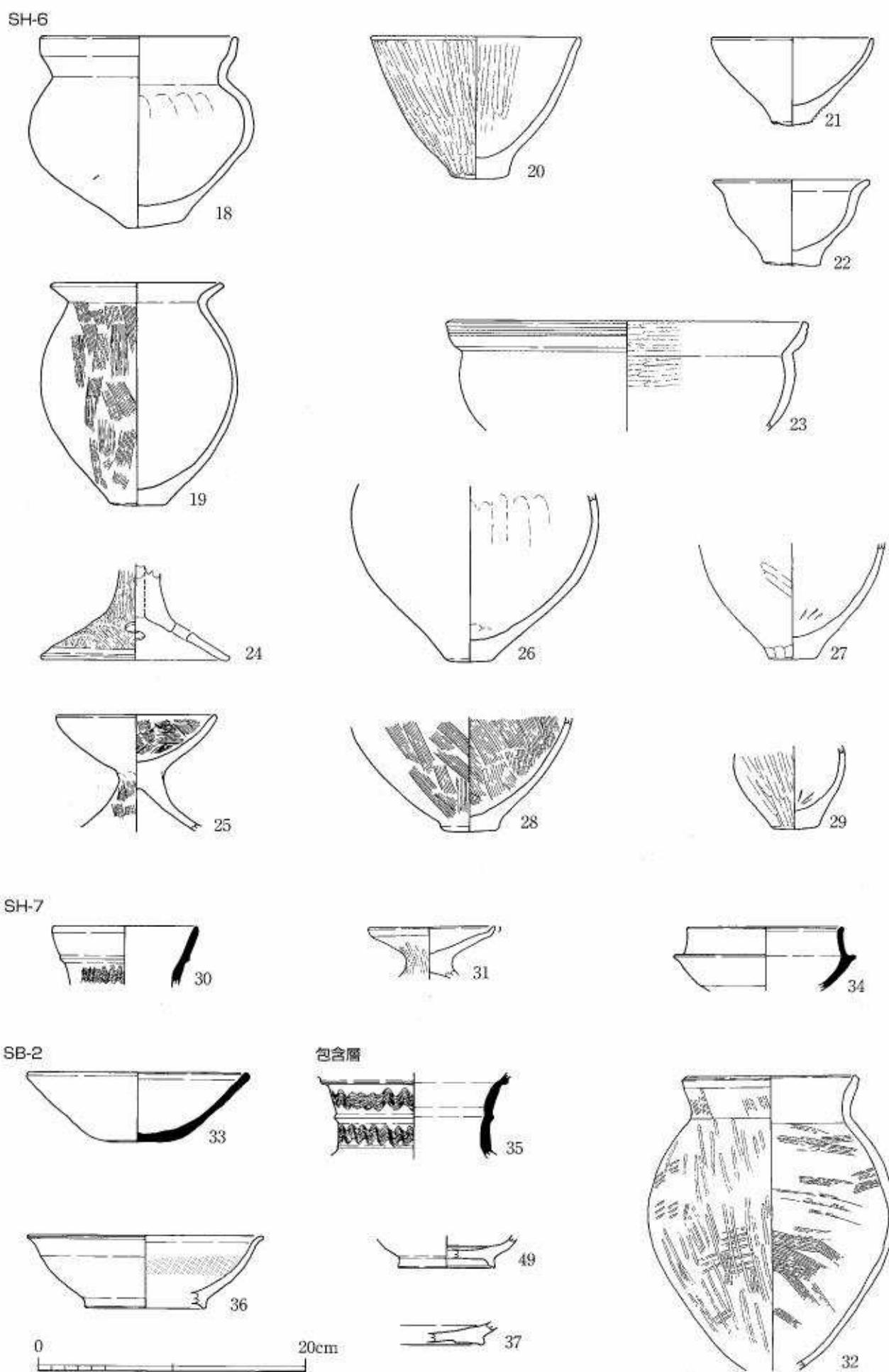


SH-2



SH-4



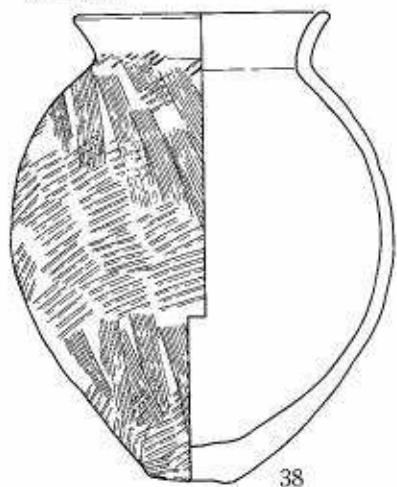


出土遺物 2

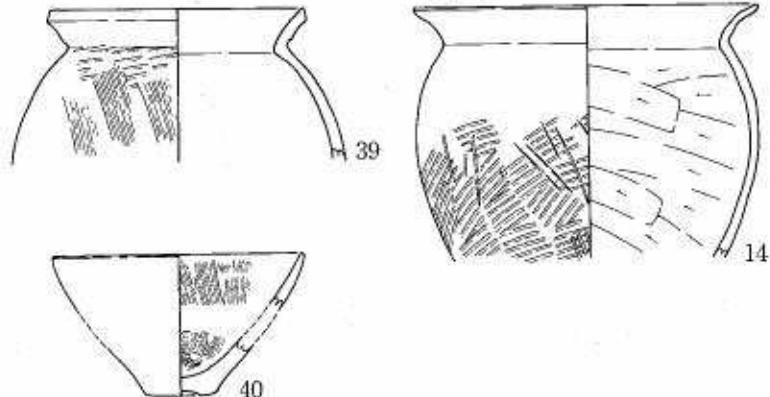
図版10

木之元地区

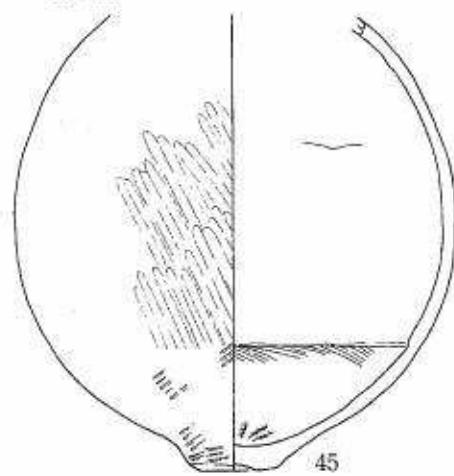
5区 SK-1



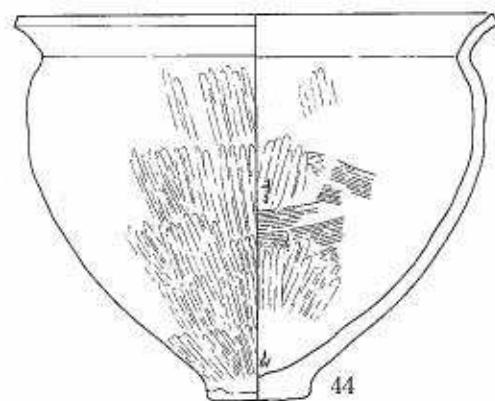
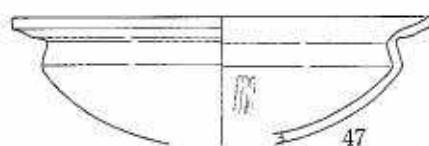
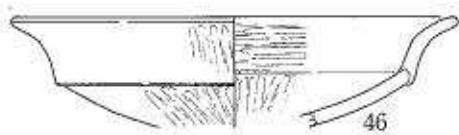
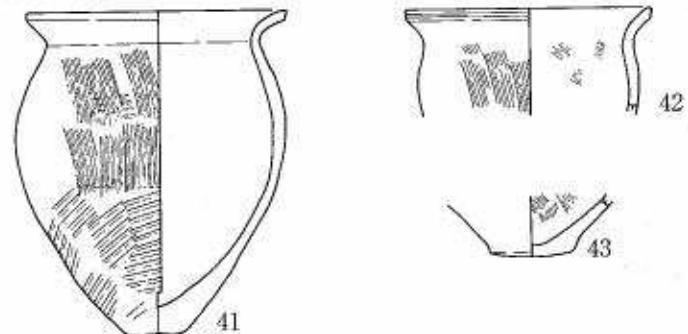
SH-4

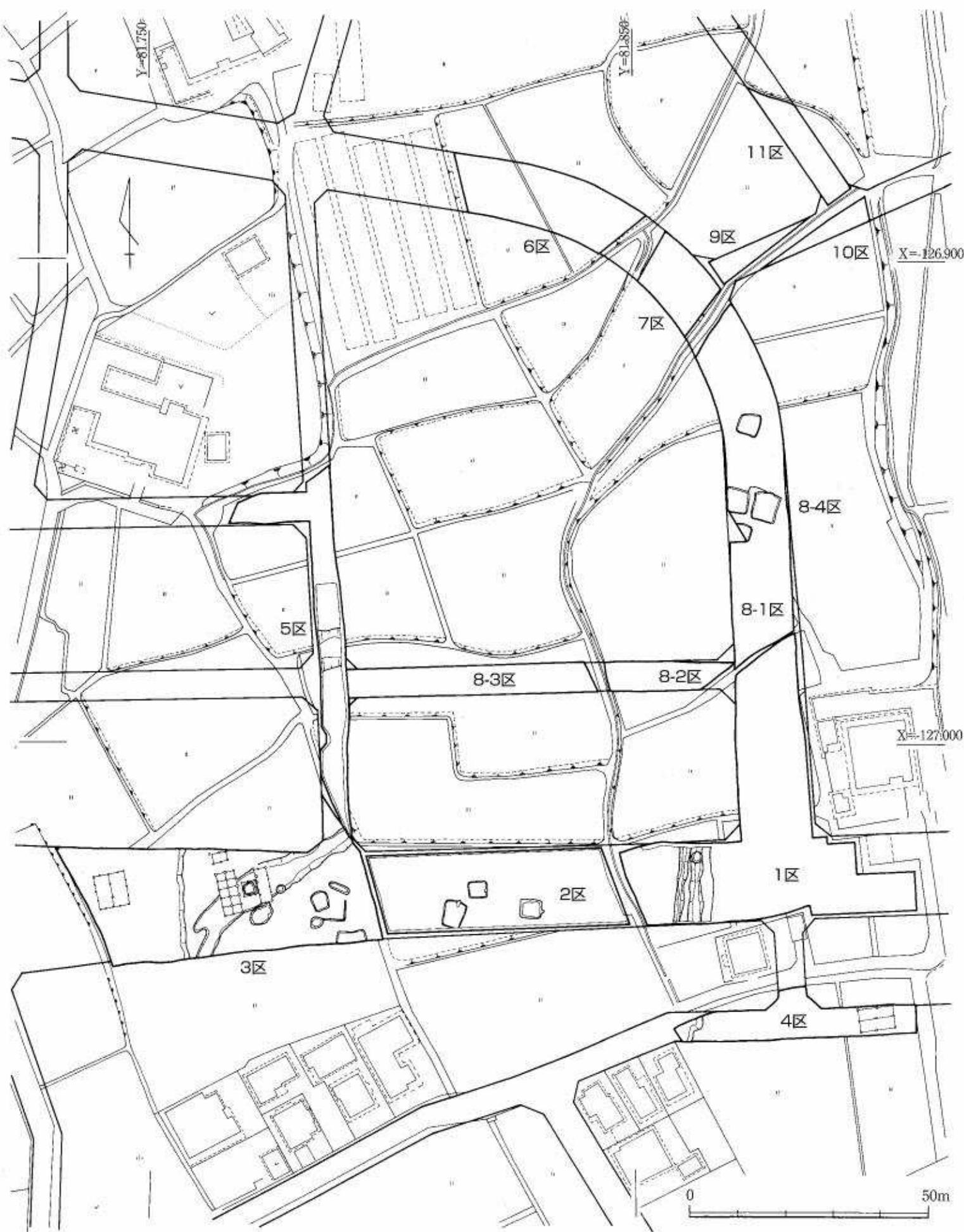


包含層



池状遺構

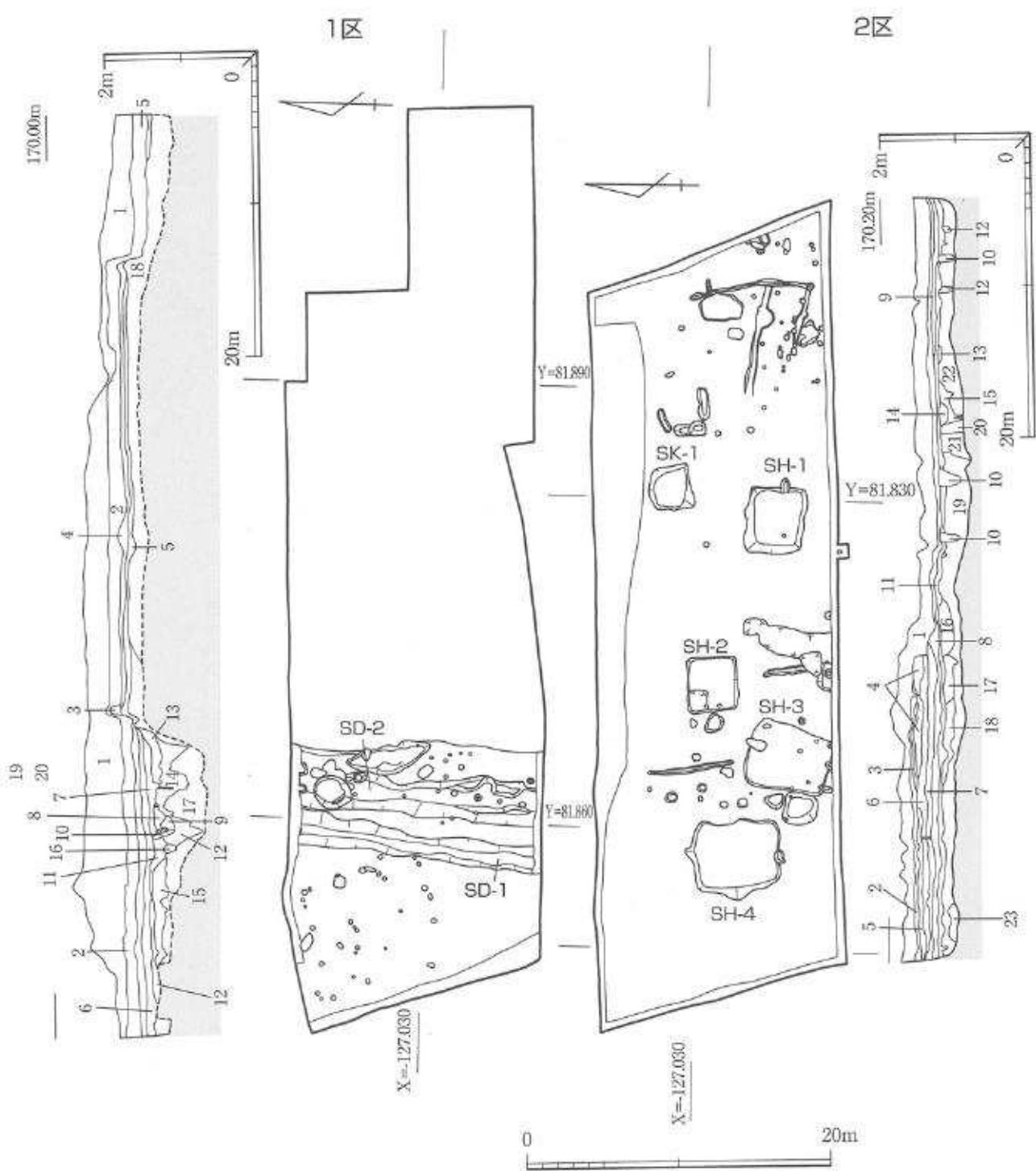




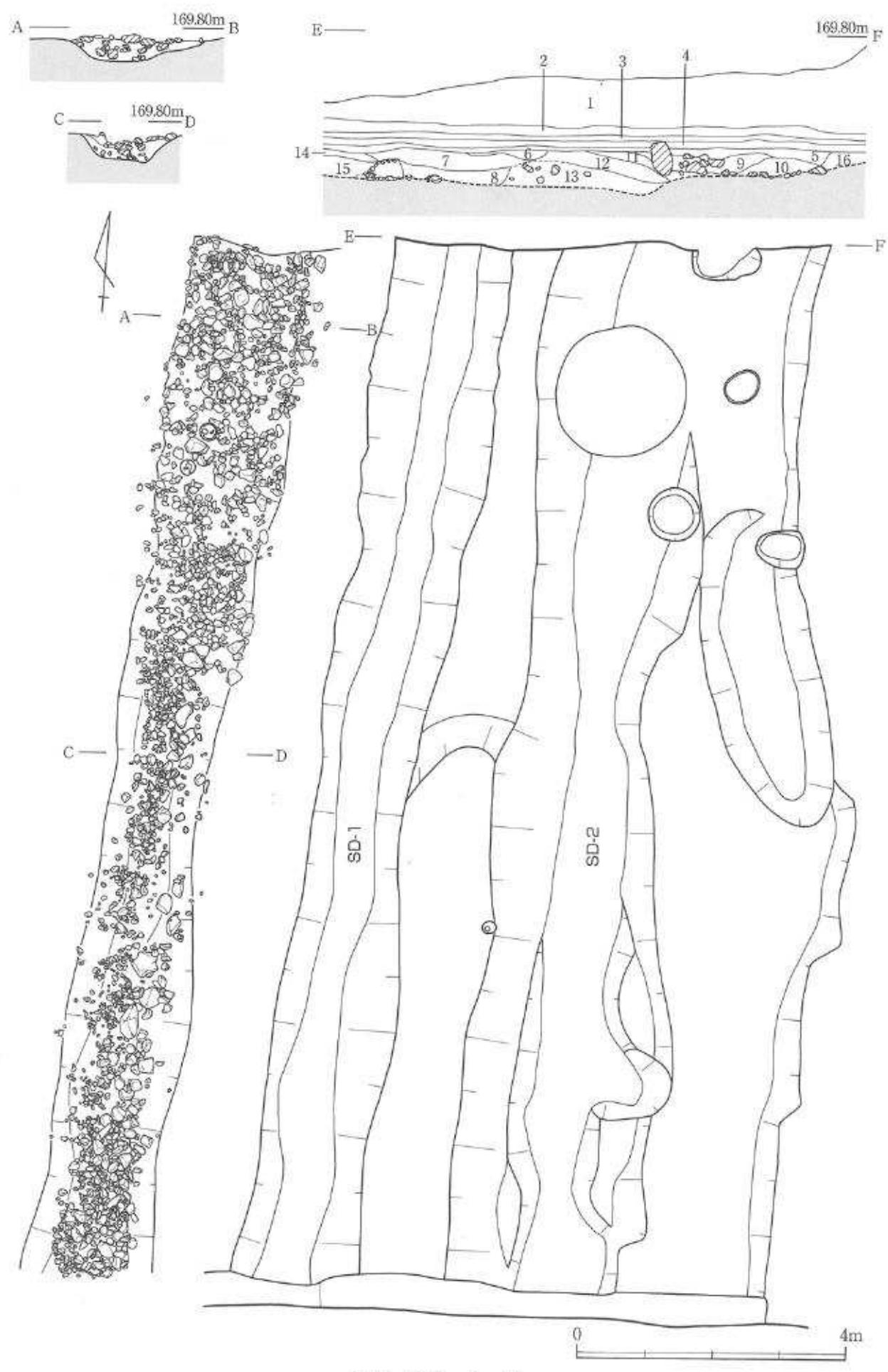
全体図

図版12

乗安地区



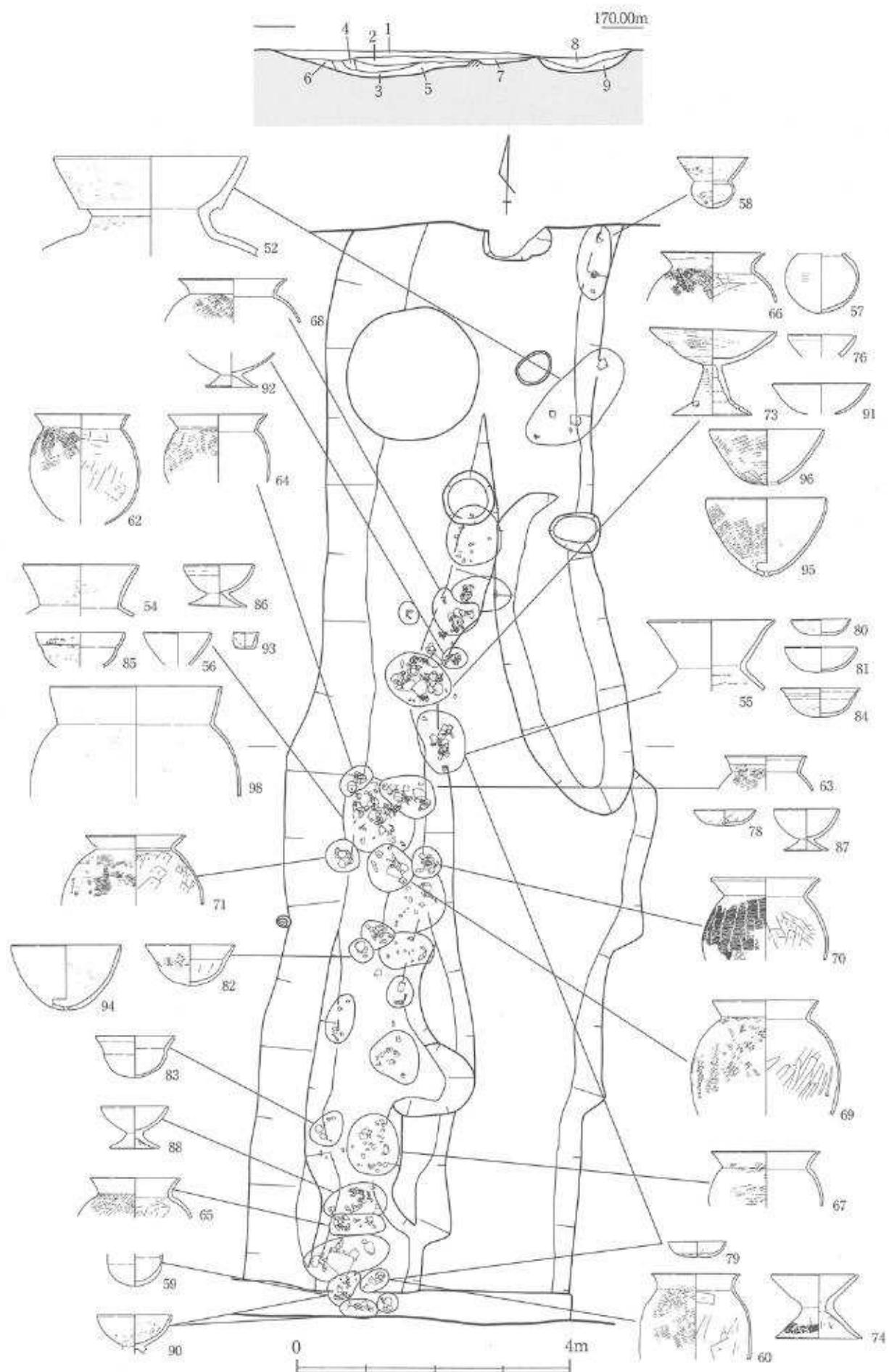
1区全体図／2区全体図



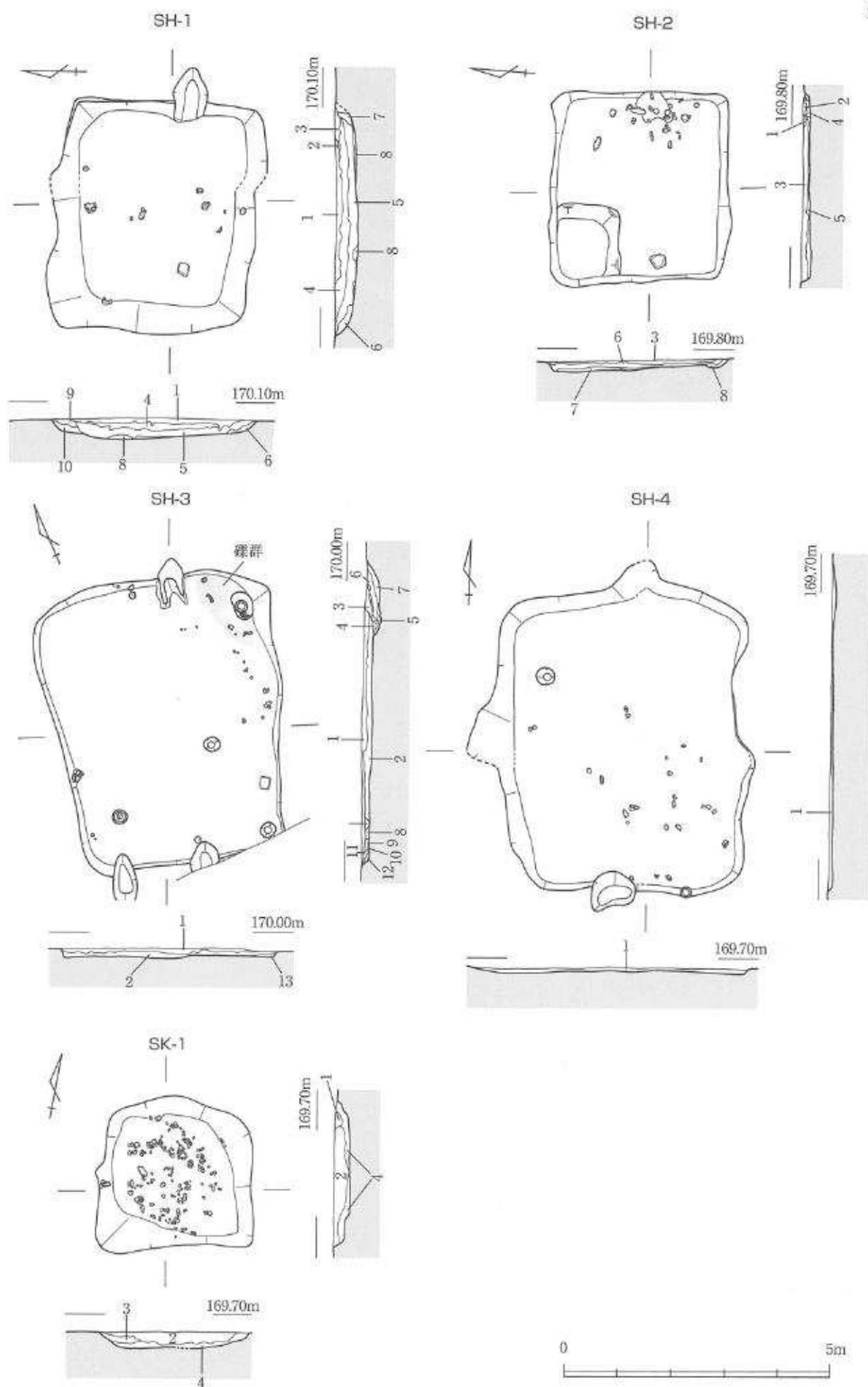
1区 SD-1・2

図版14

乗安地区



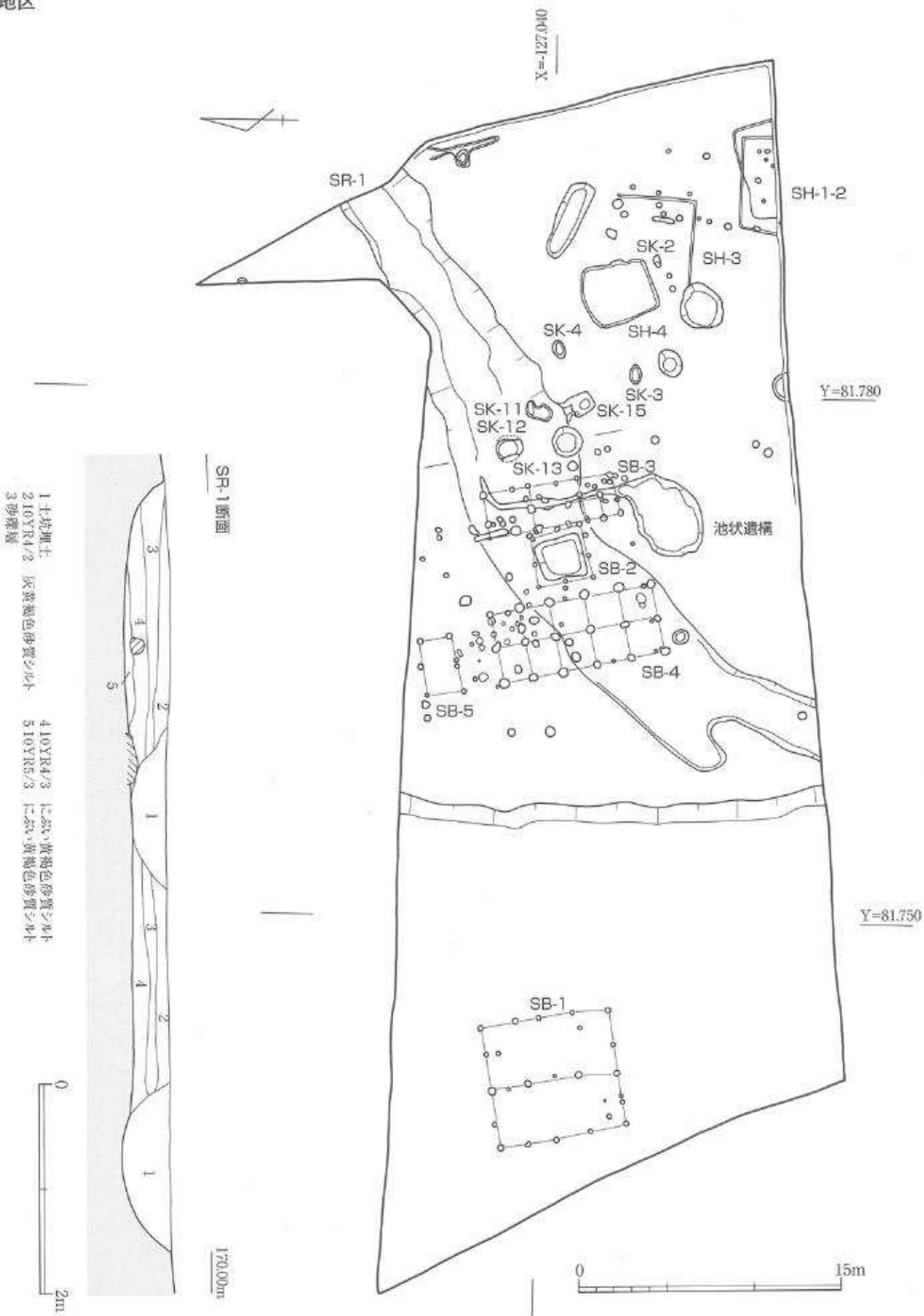
1区 SD-2 遺物出土状態



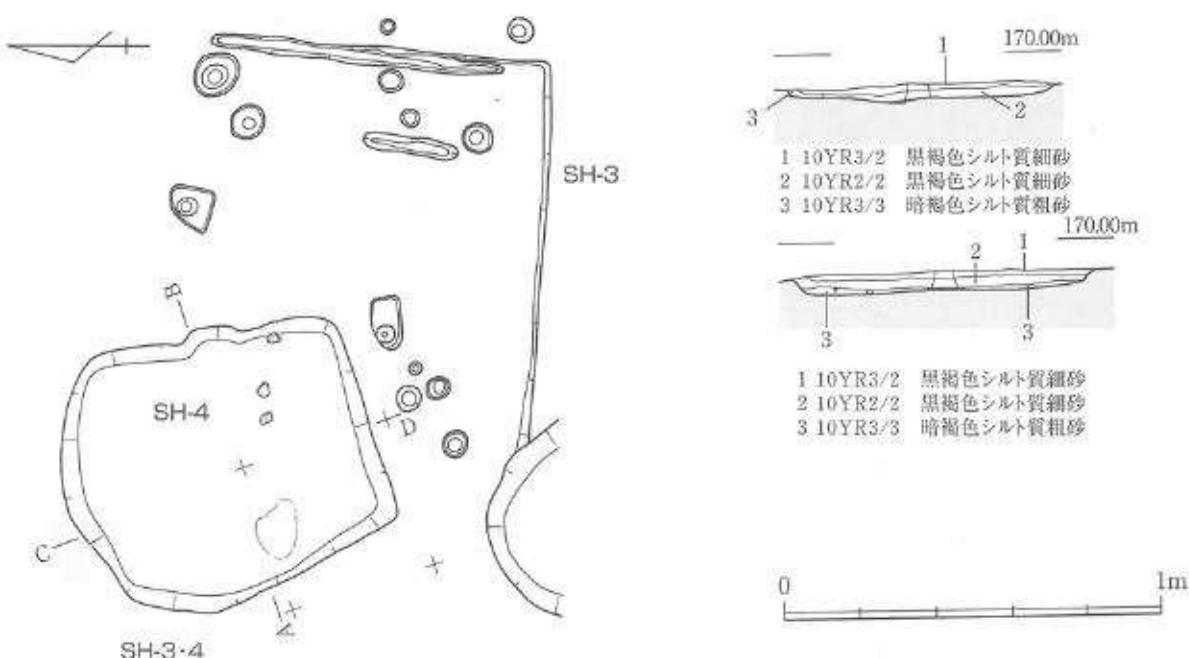
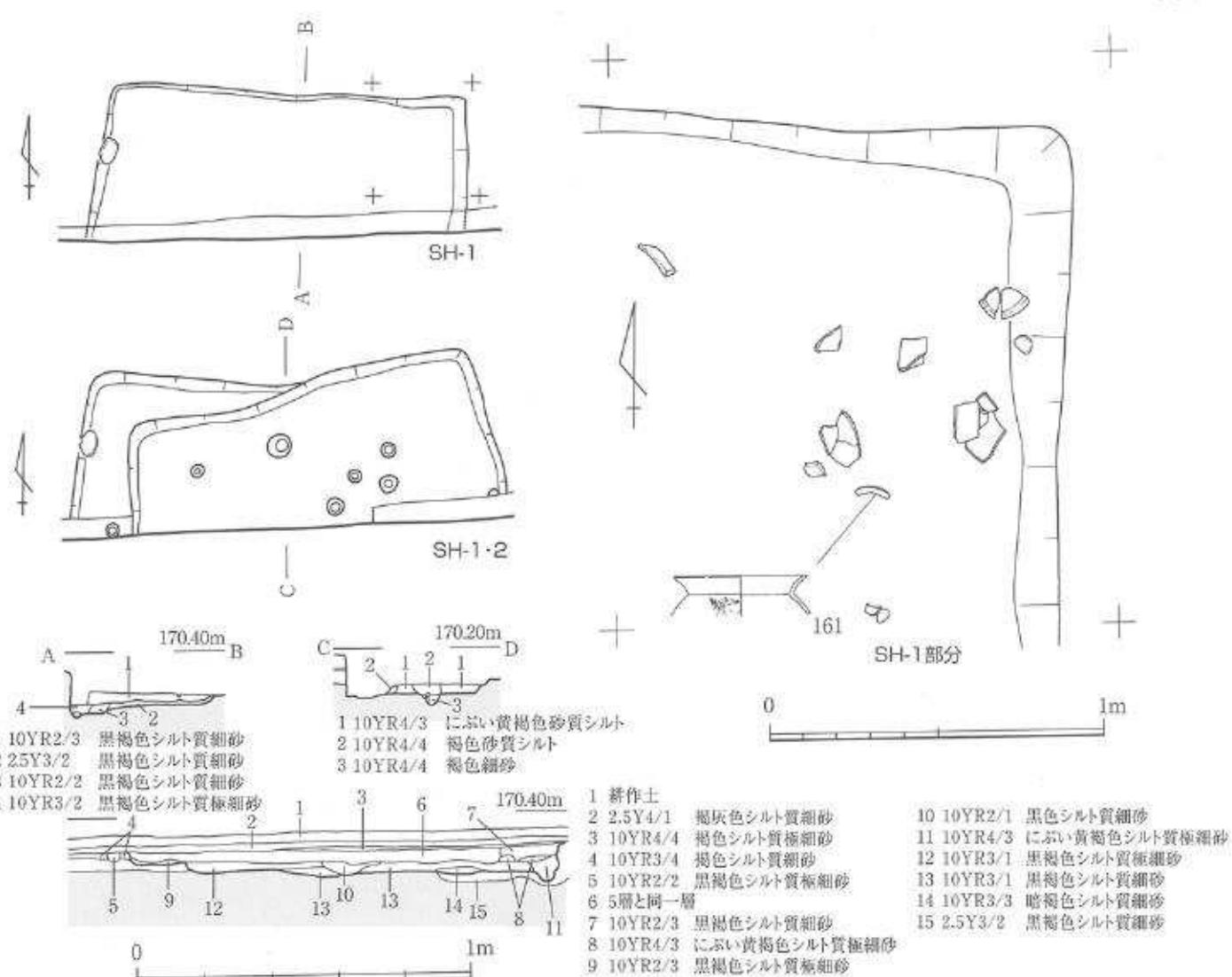
2区 SH-1 / SH-2 / SH-3 / SH-4 / SK-1

図版16

乗安地区

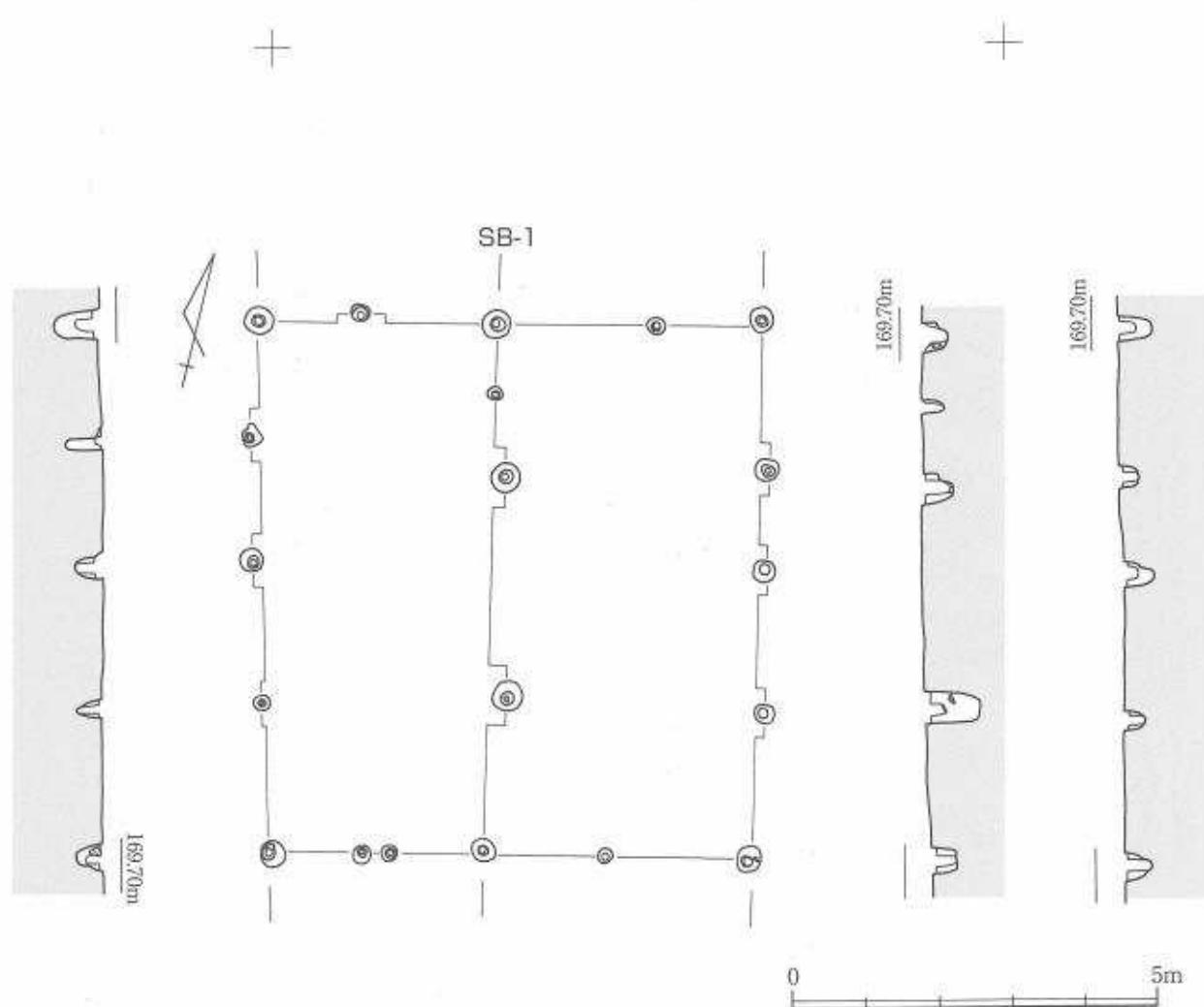
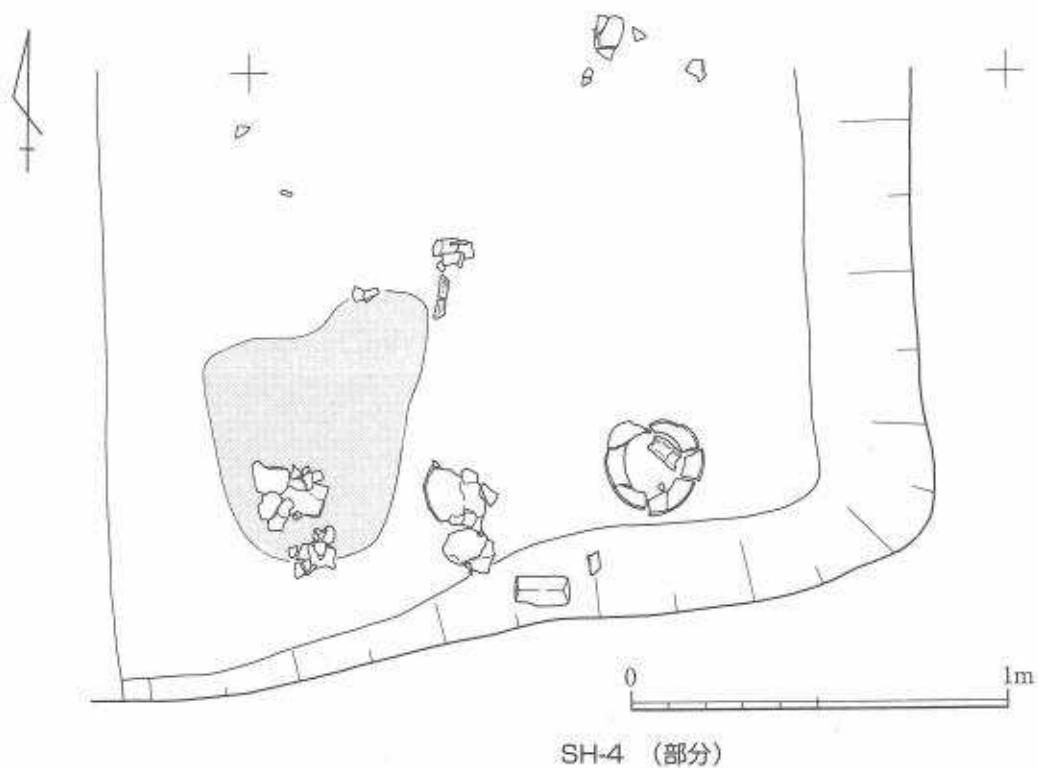


3区 全体図

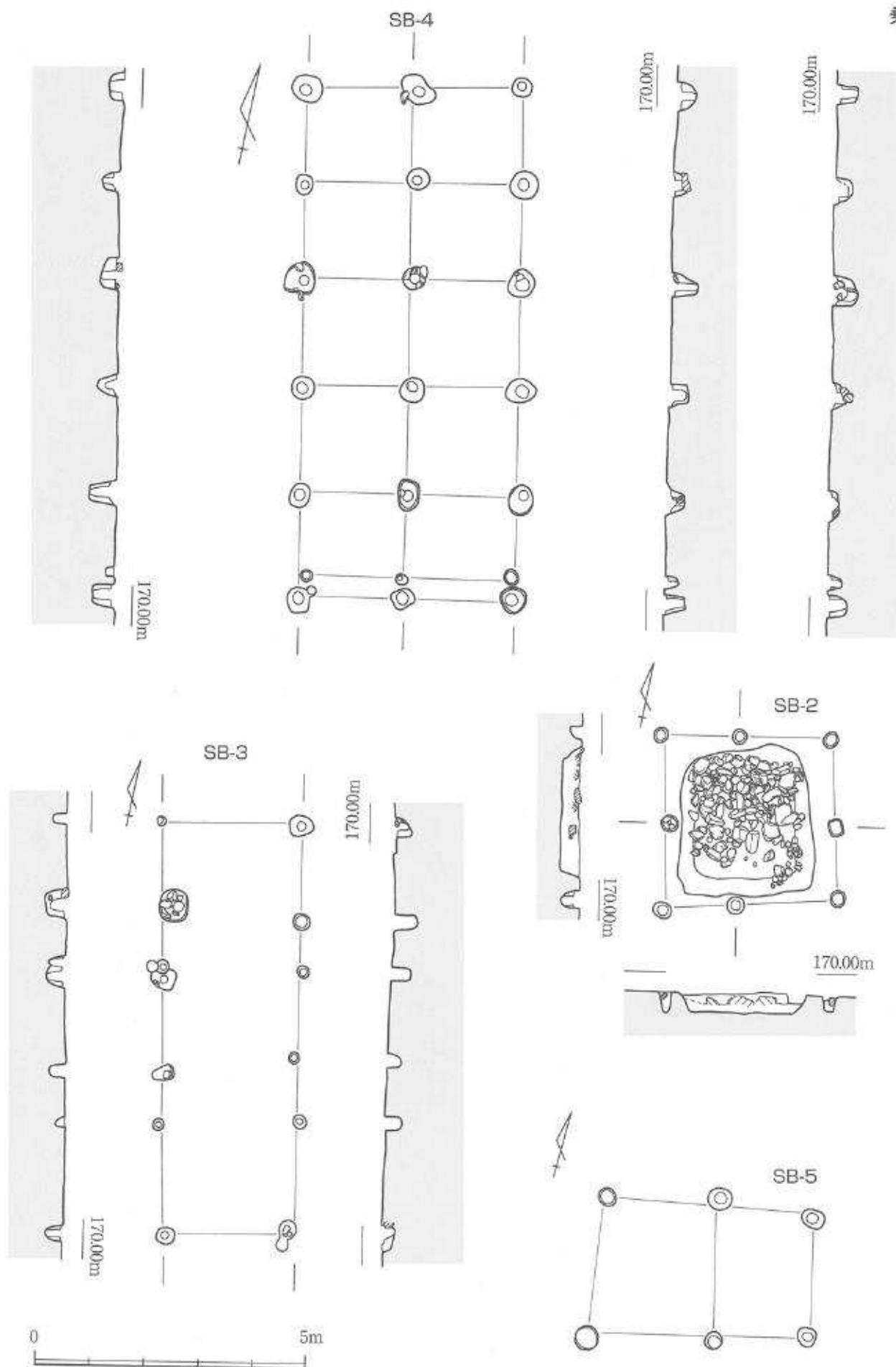


図版18

乗安地区



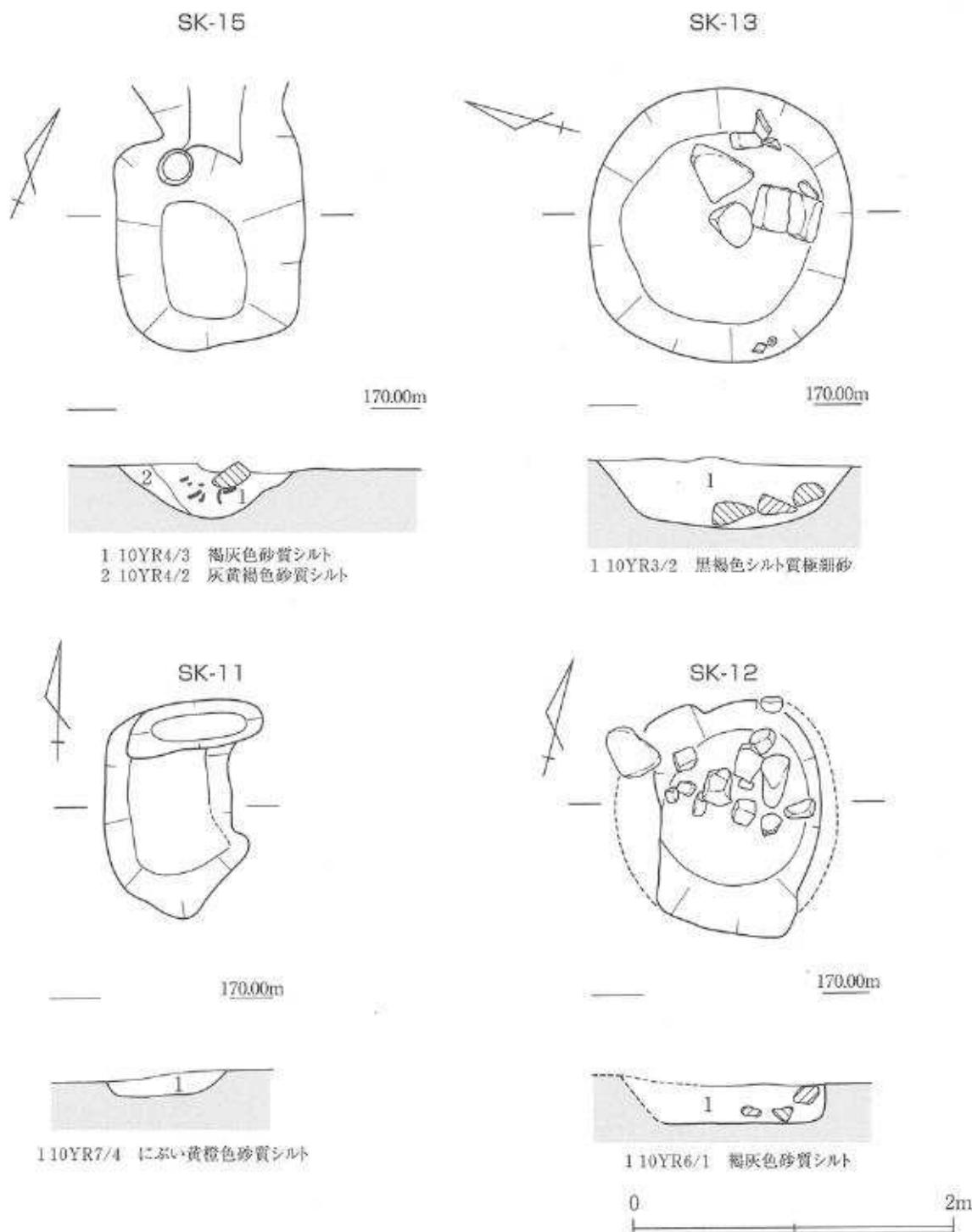
3区 SH-4 遺物出土状態／SB-1



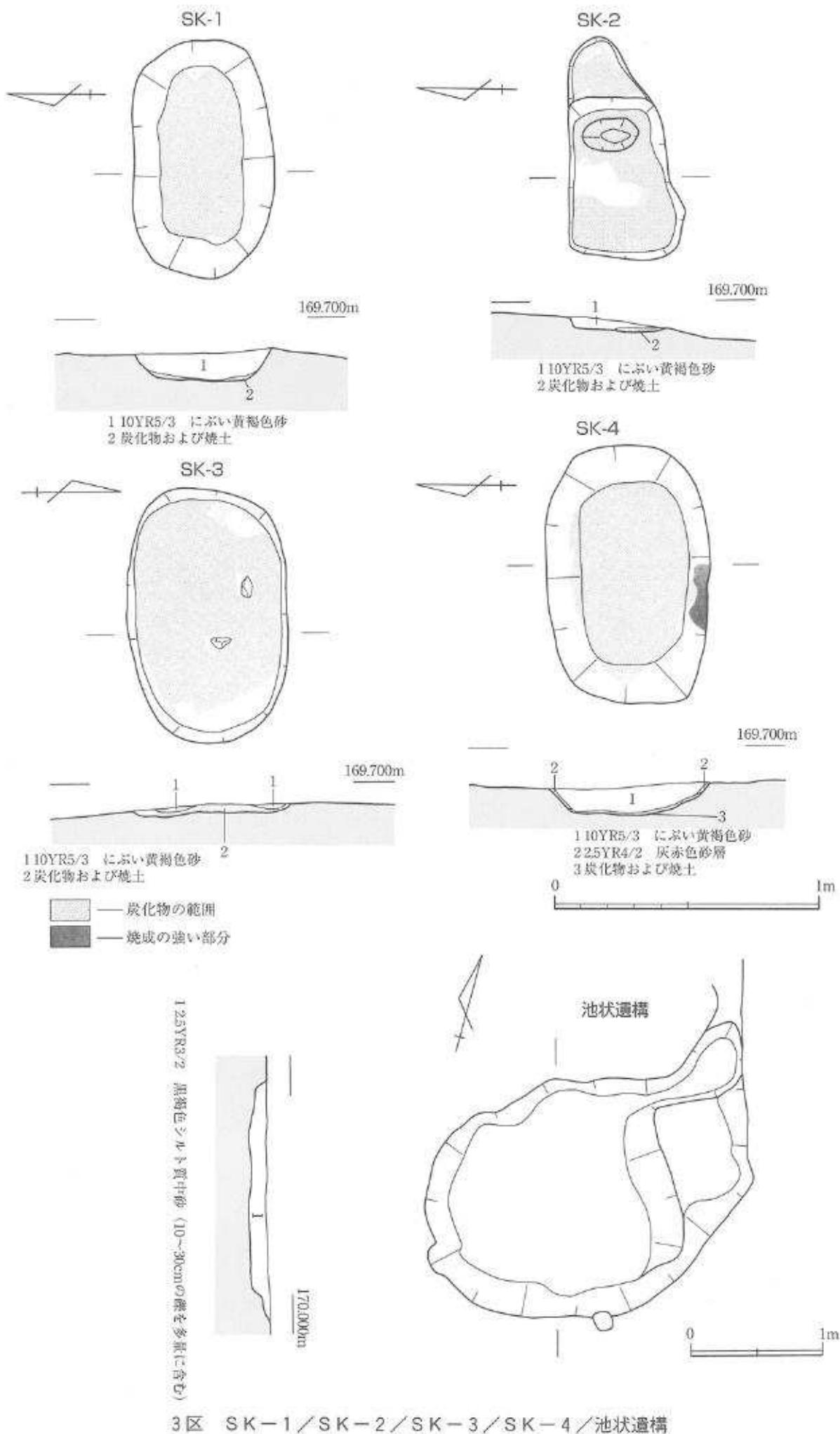
3区 SB-2/SB-3/SB-4/SB-5

図版20

乗安地区

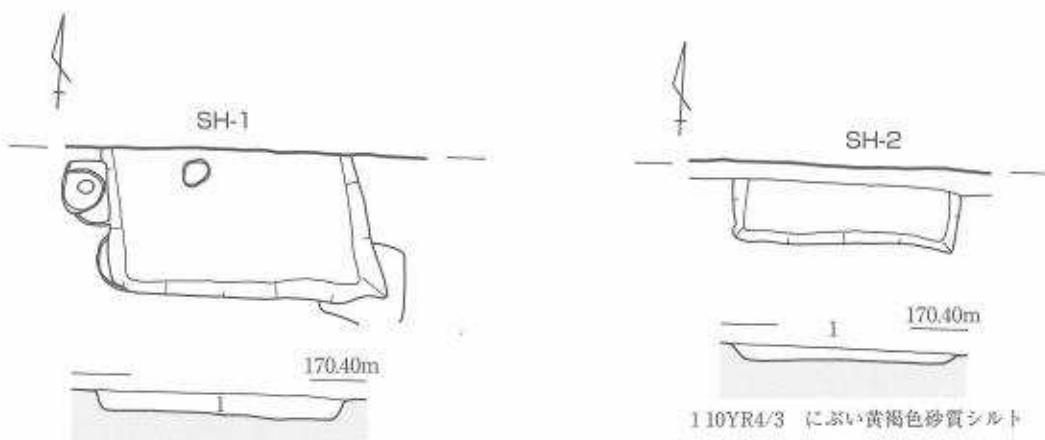
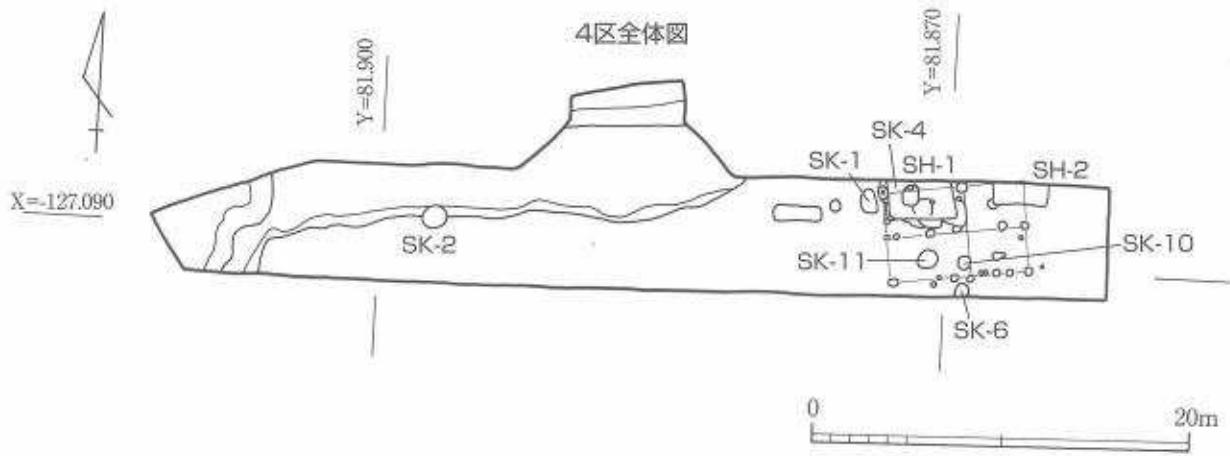


3区 SK-11/SK-12/SK-13/SK-15

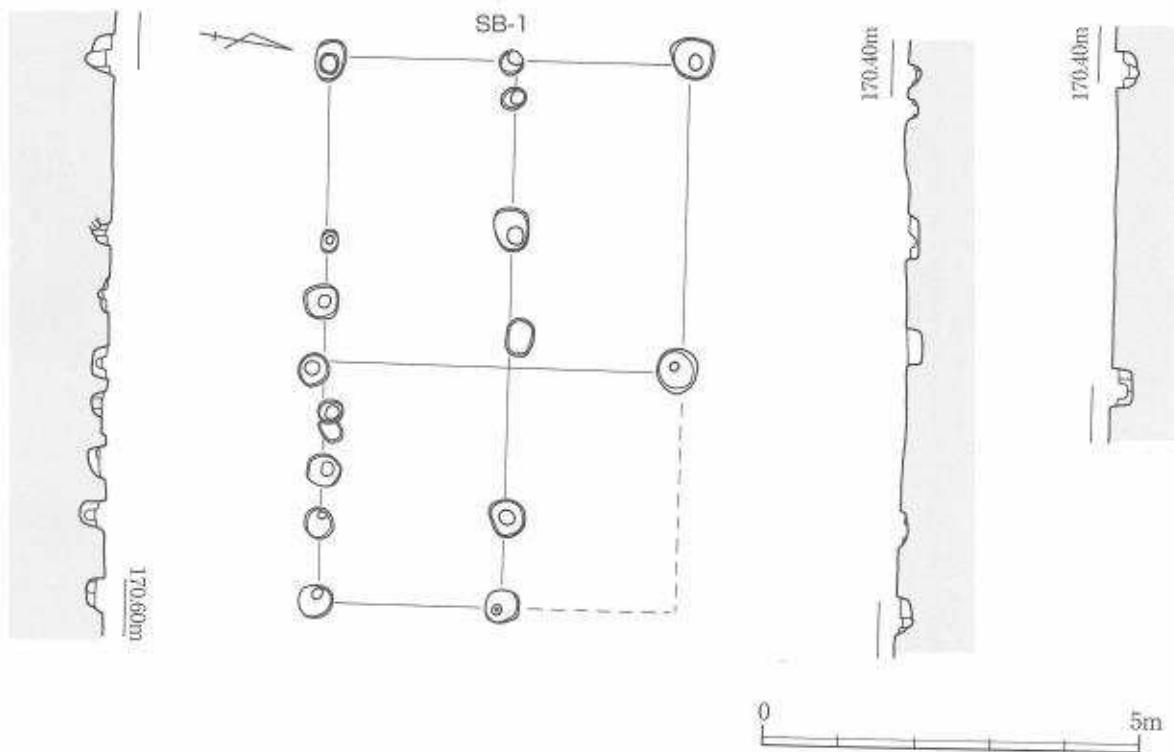


図版22

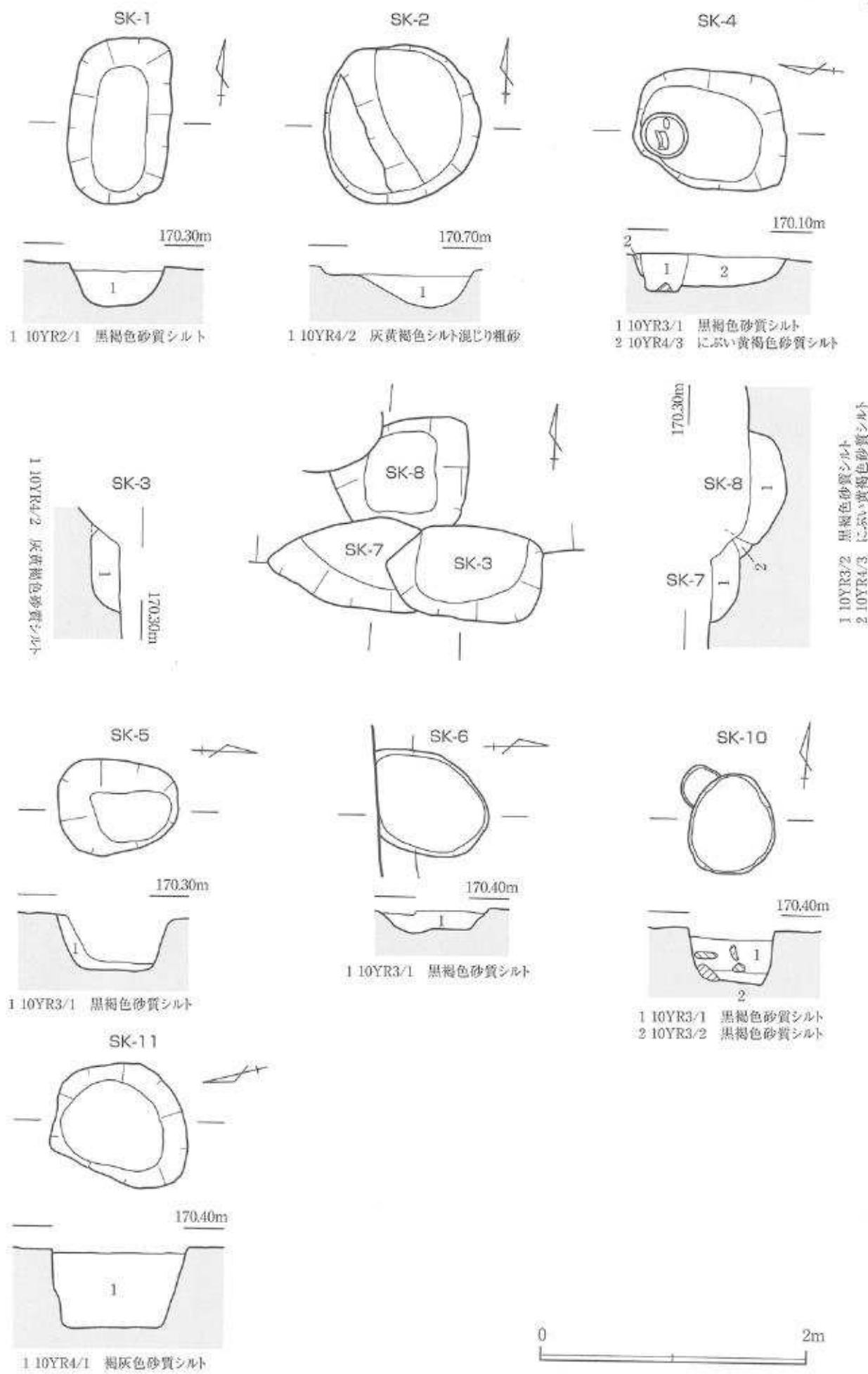
乗安地区



110YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト



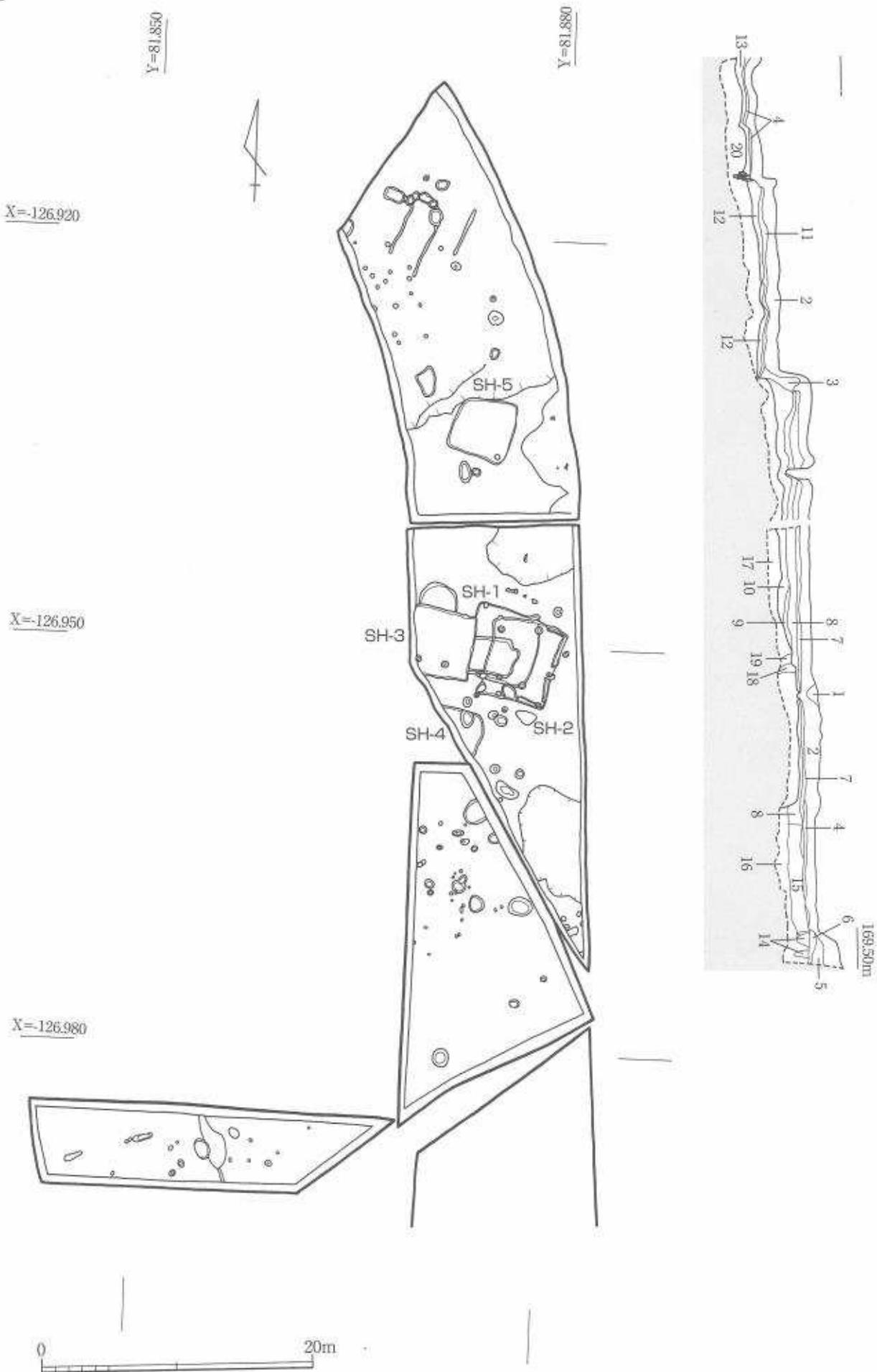
4区 全体図／SH-1／SH-2／SB-1



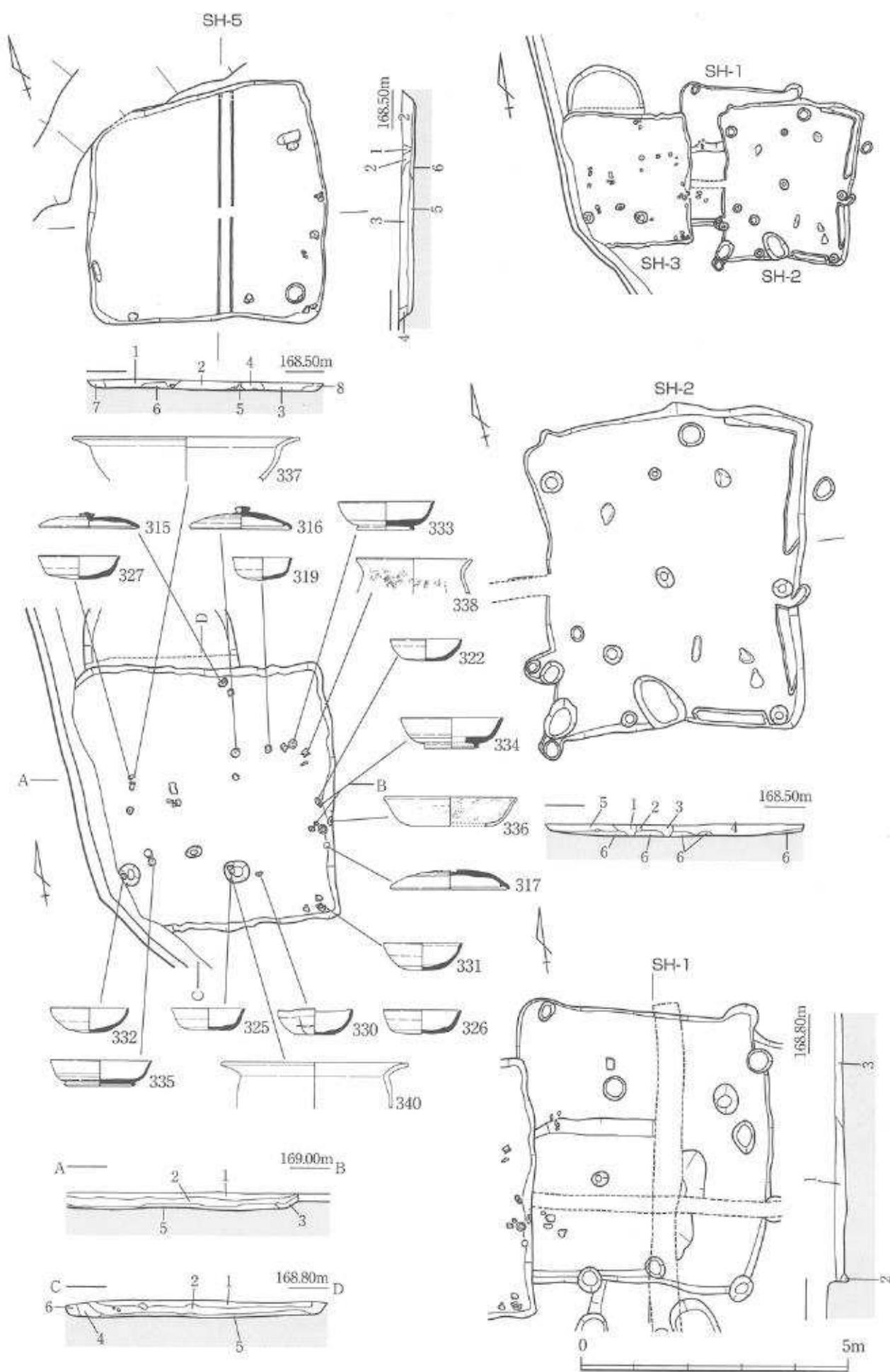
4区 SK-1 / SK-2 / SK-3・7・8 / SK-4 / SK-5 / SK-6 / SK-10 / SK-11

図版24

乗安地区



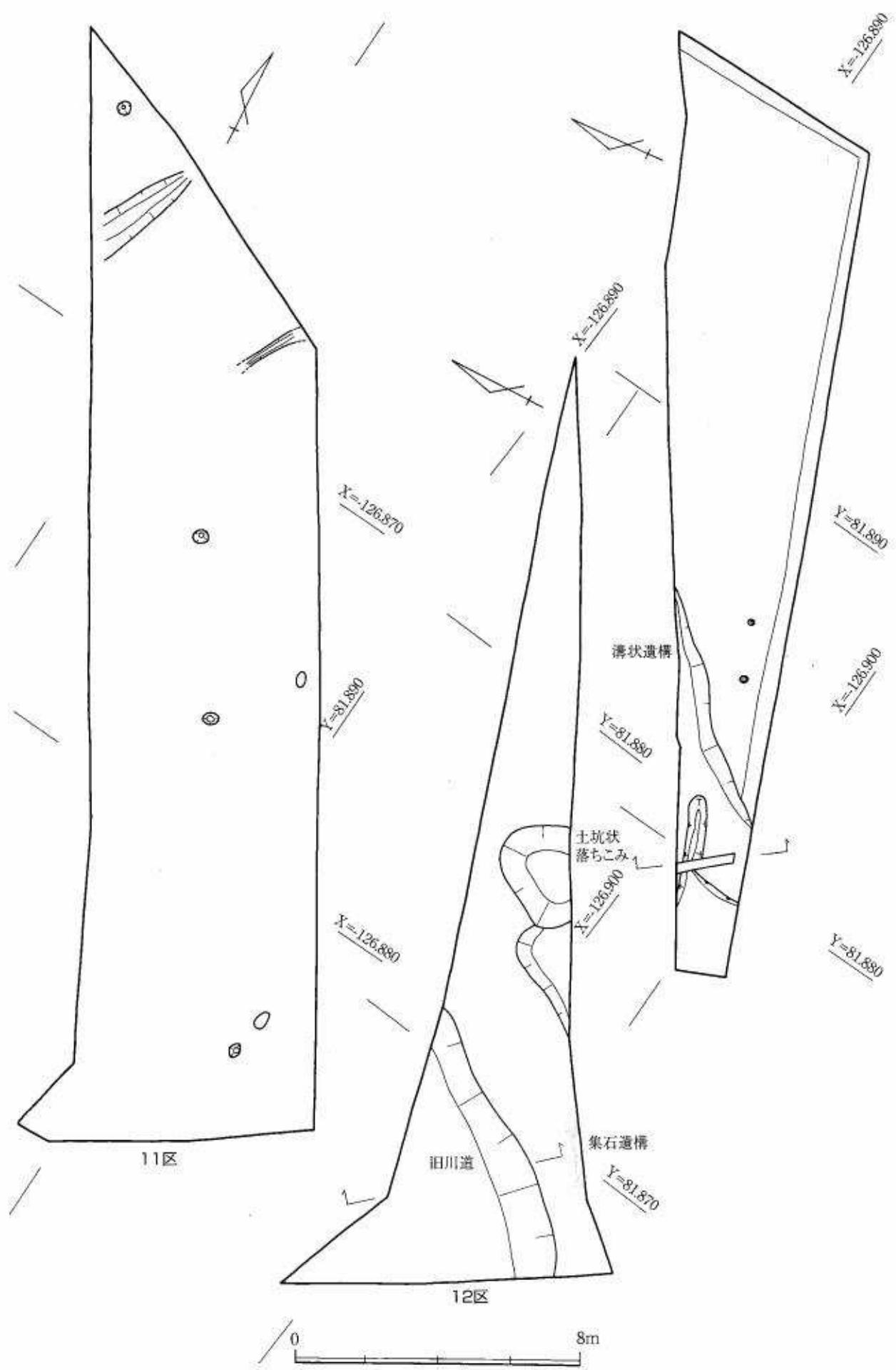
8-1・2・4区 全体図



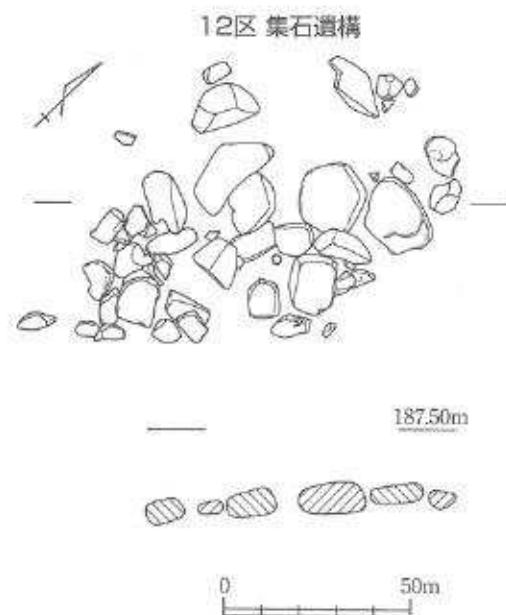
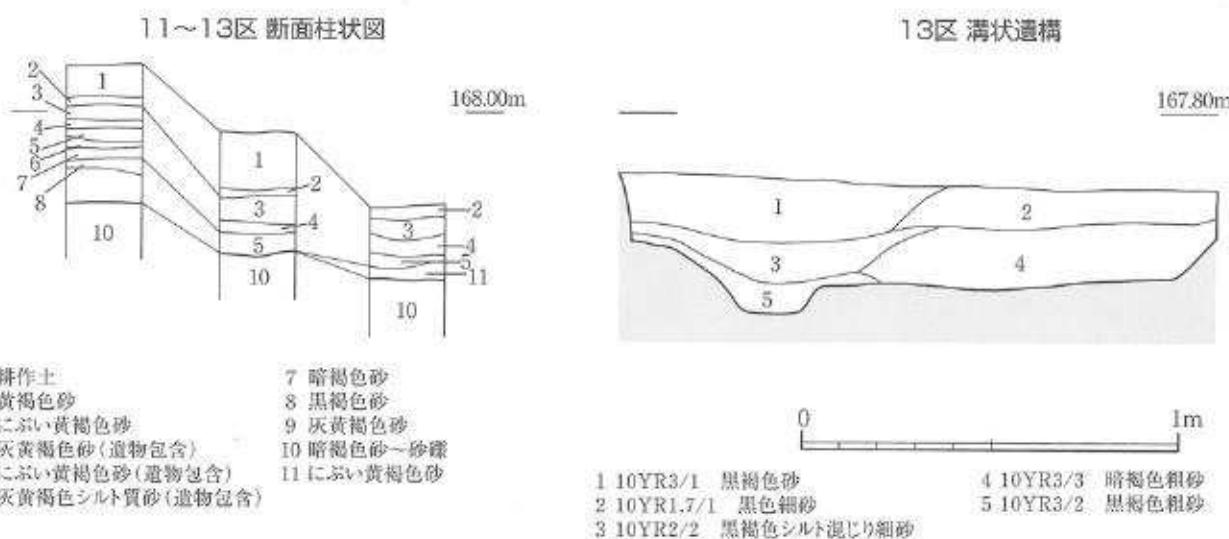
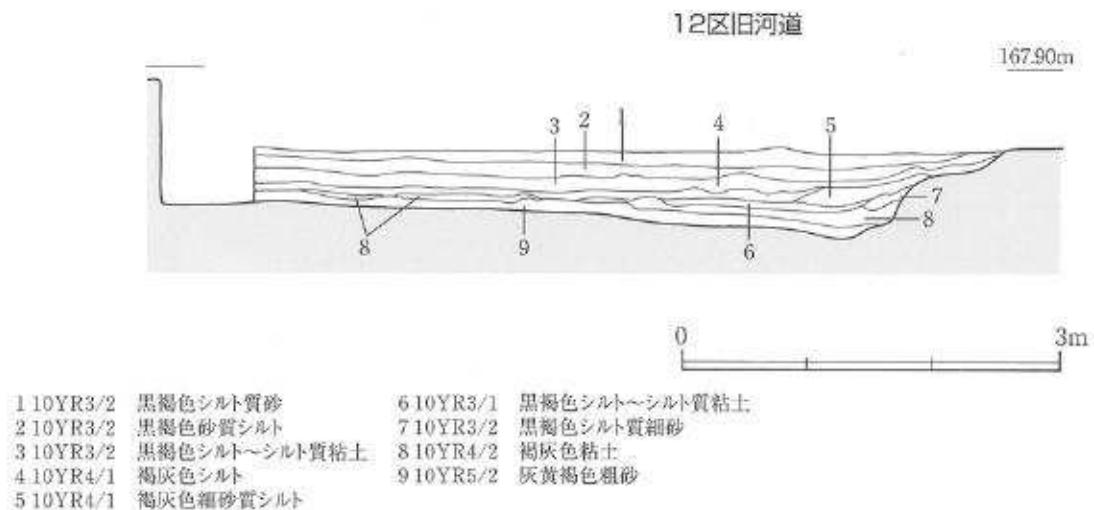
8区 SH-1 / SH-2 / SH-3 / SH-5

図版26

乗安地区



11区～13区 全体図

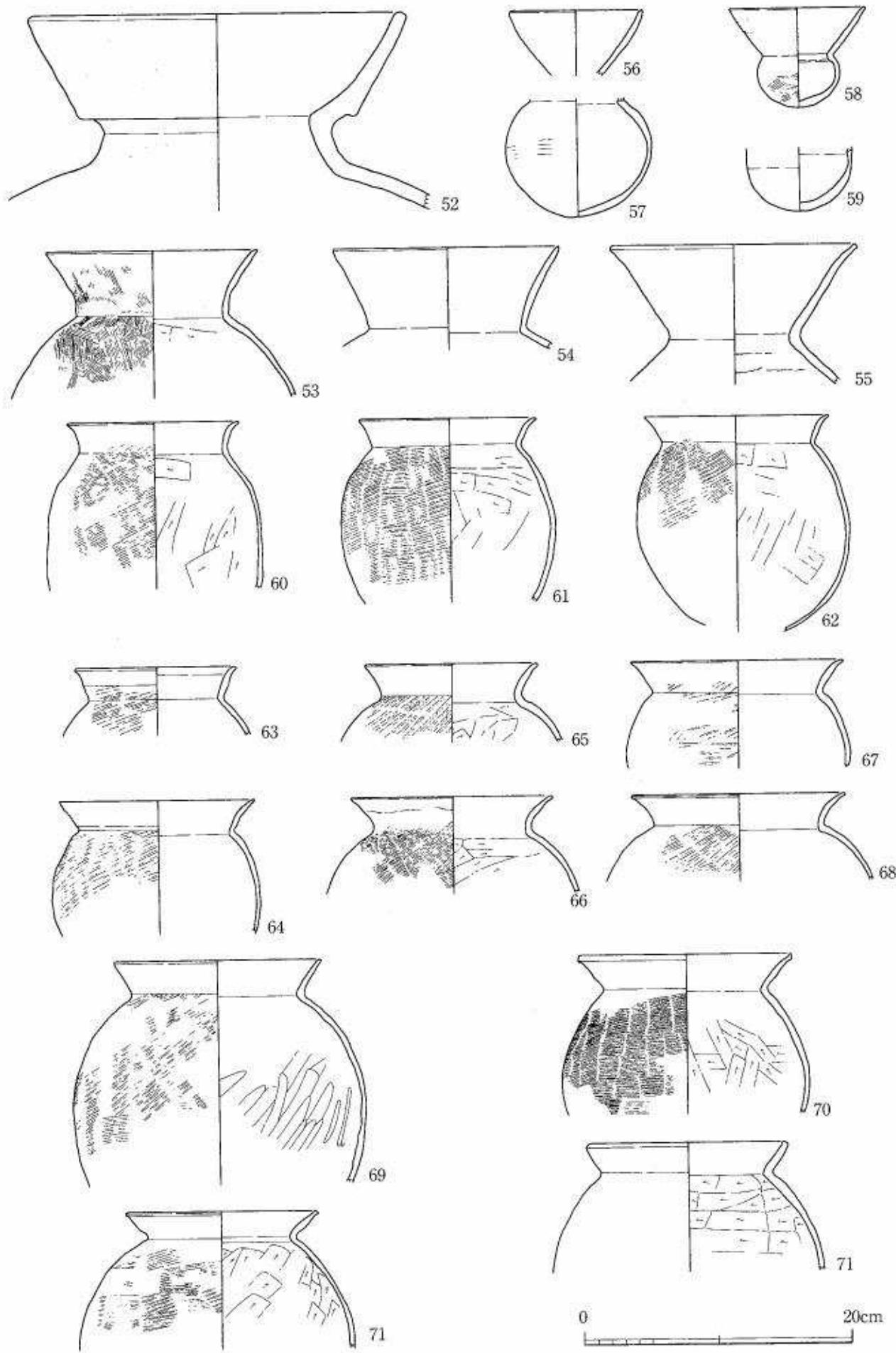


11区～13区 土層図／集石遺構

図版28

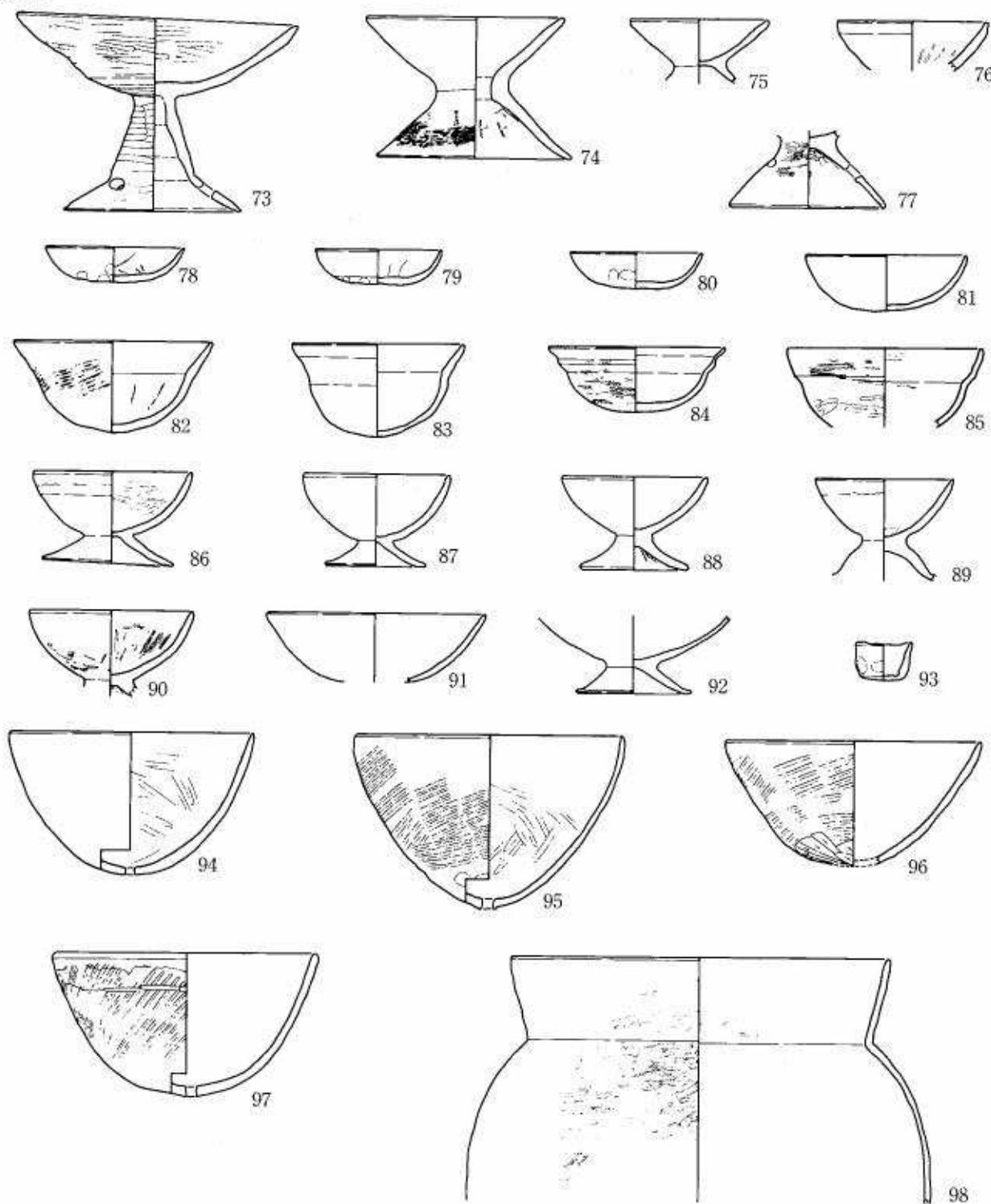
秉安地区

1区 SD-2

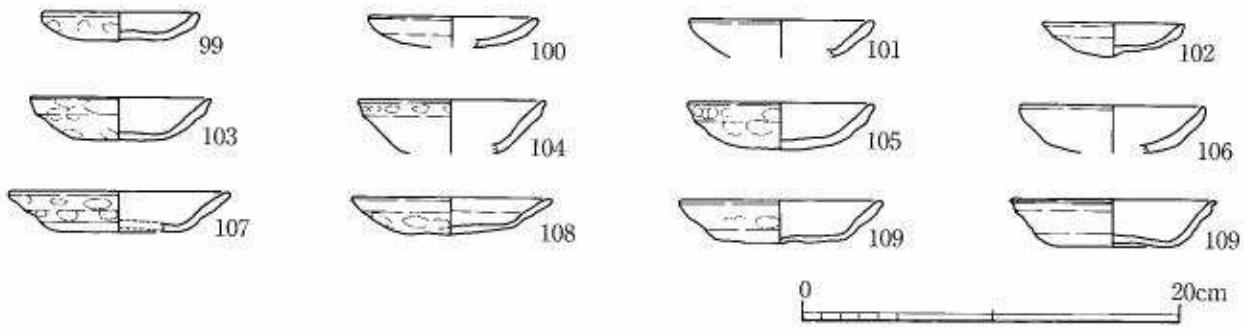


1区出土遺物1

SD-2



SK-1

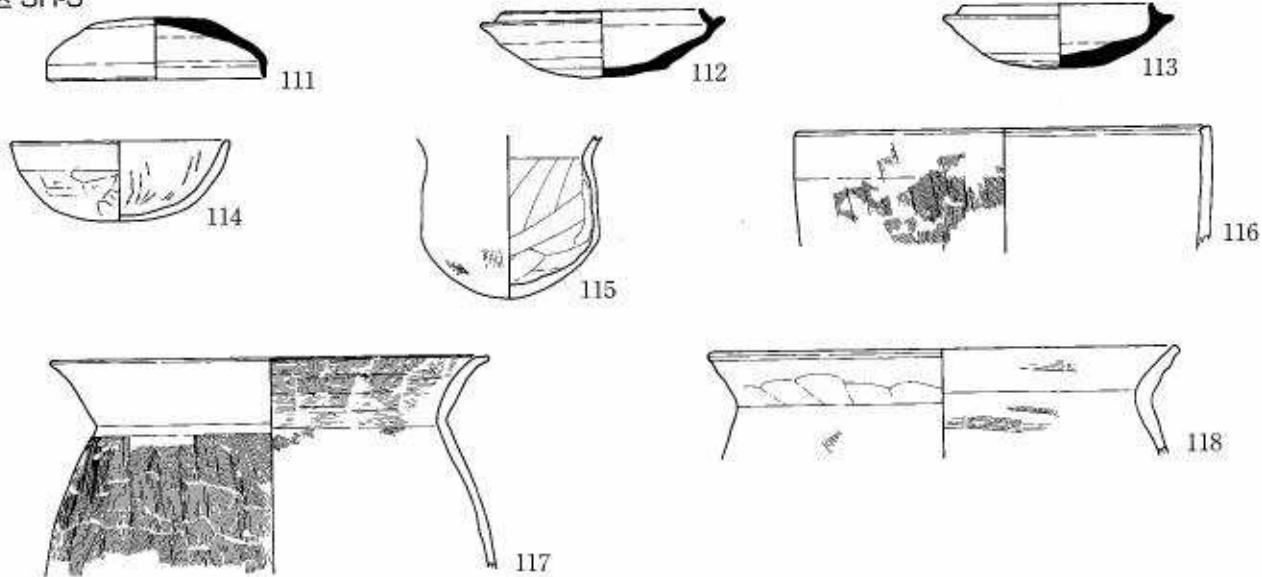


1区出土遺物2

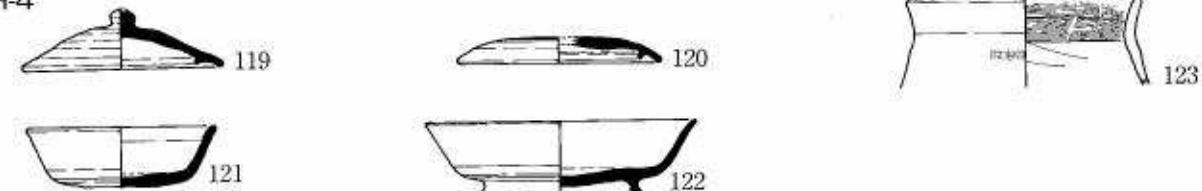
図版30

乗安地区

2区 SH-3



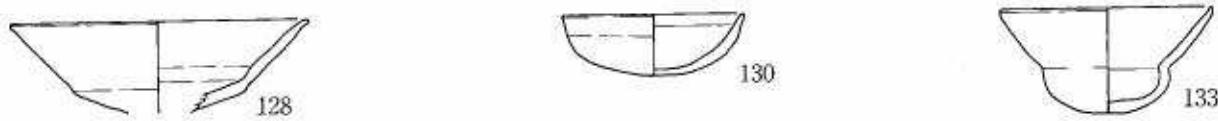
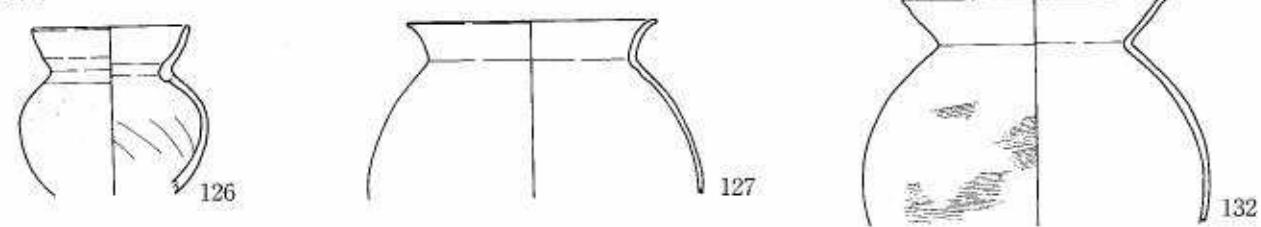
SH-4



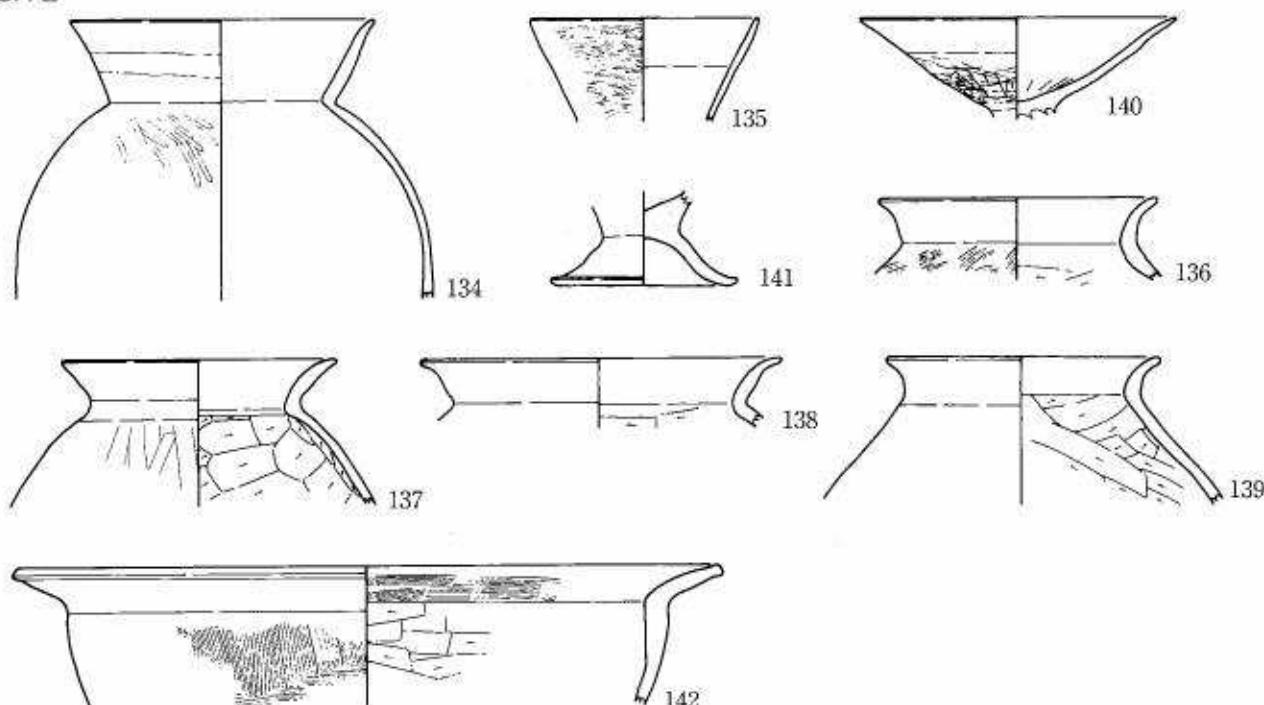
SK-1



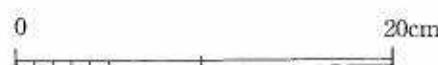
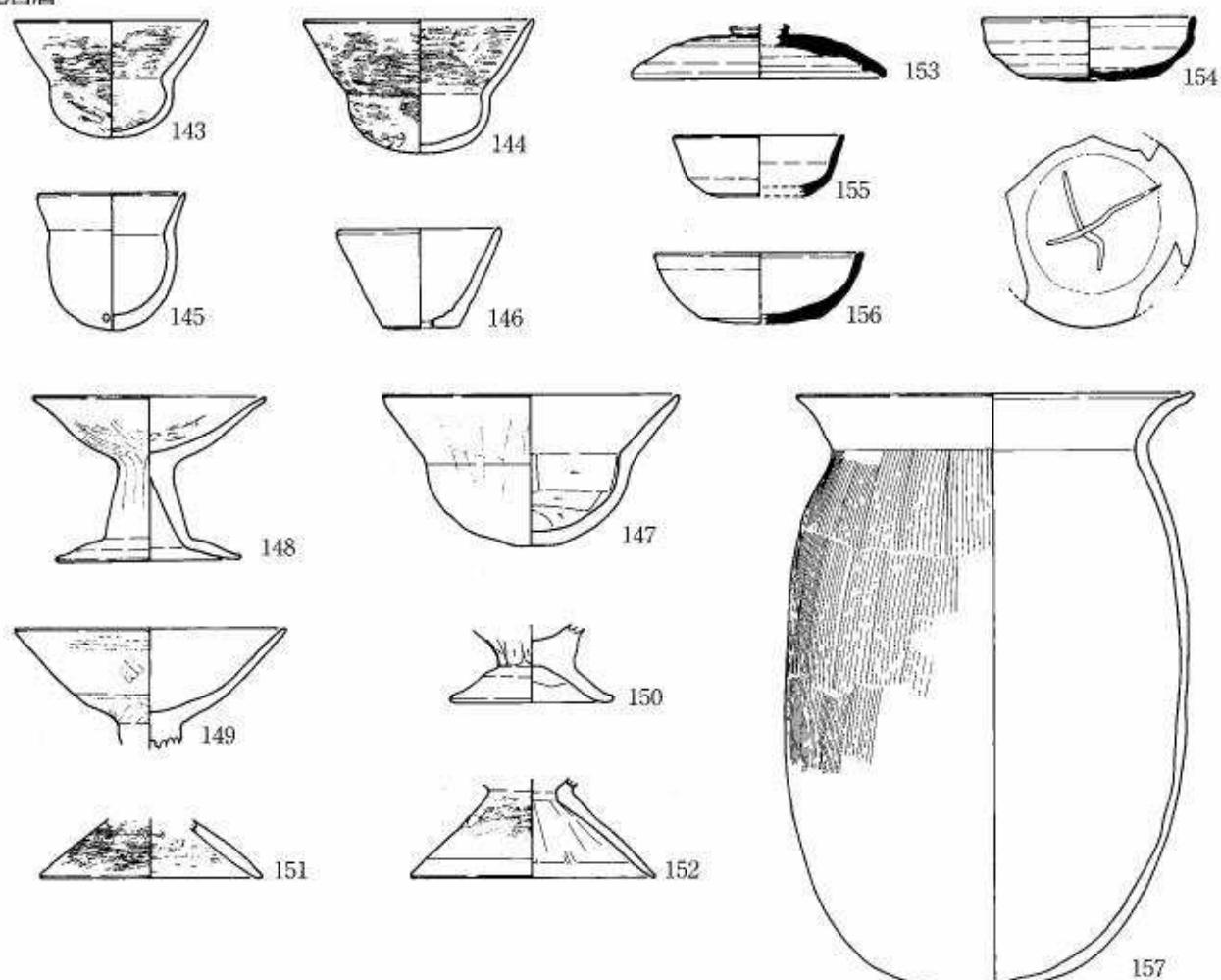
SH-1



SH-2



包含層



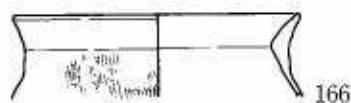
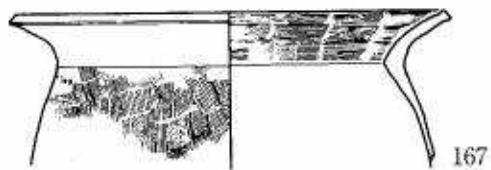
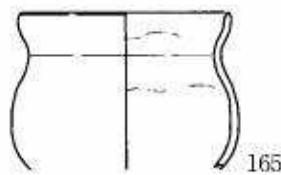
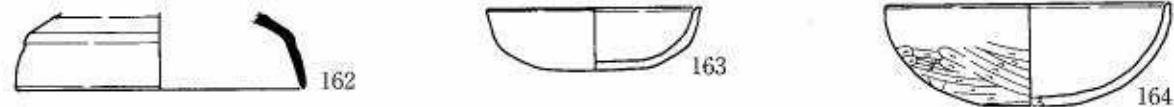
図版32

秉安地区

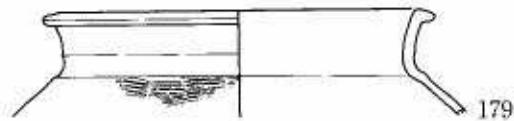
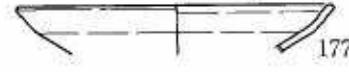
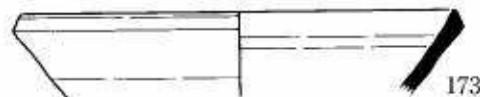
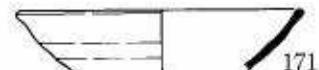
3区 SH-1



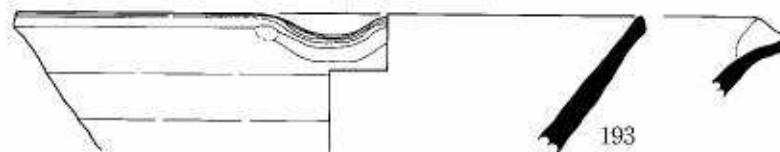
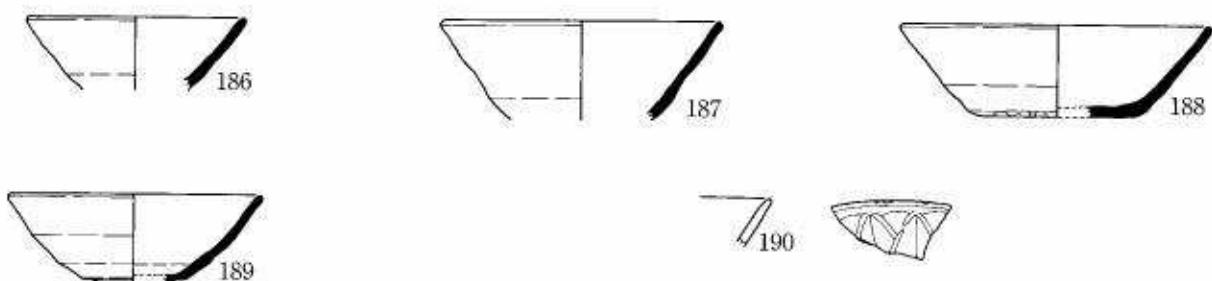
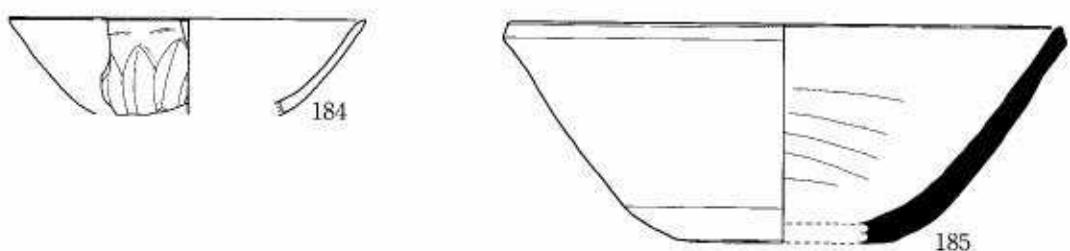
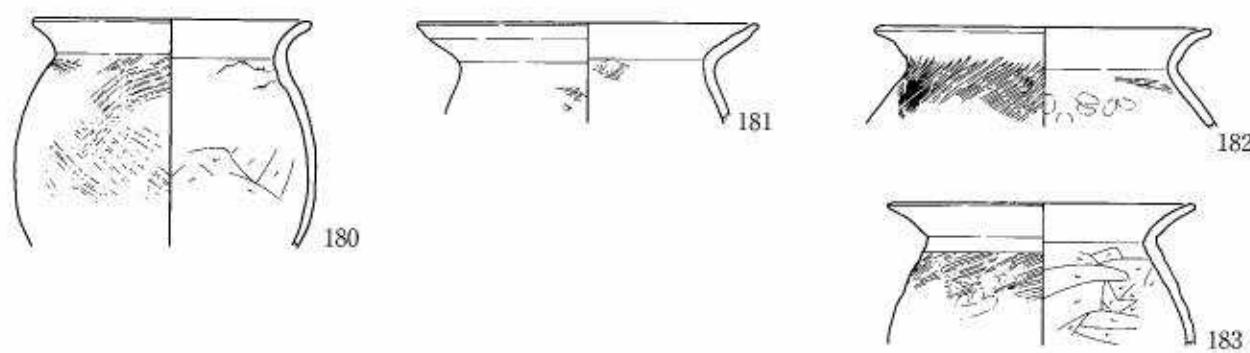
SH-2



その他の遺構



3区出土遺物 1



0 20cm

図版34

乗安地区

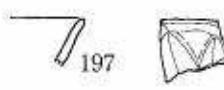
SR-1



195



196



197



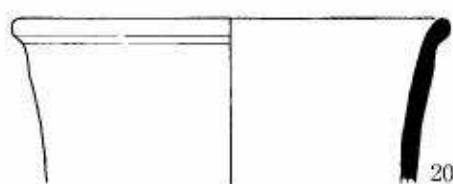
198



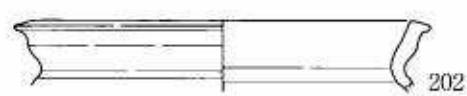
199



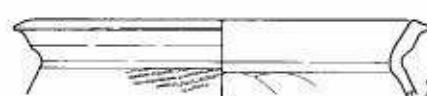
200



201



202



203



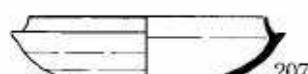
204



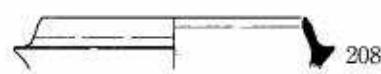
205



206



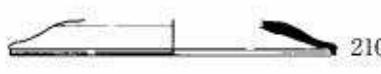
207



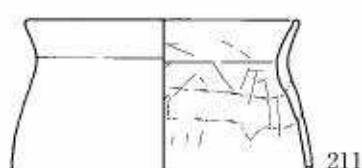
208



209



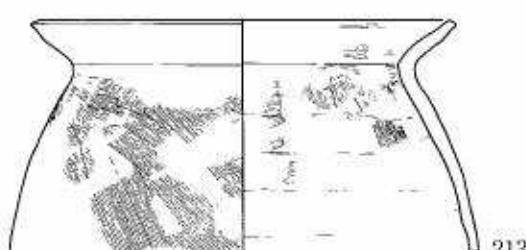
210



211



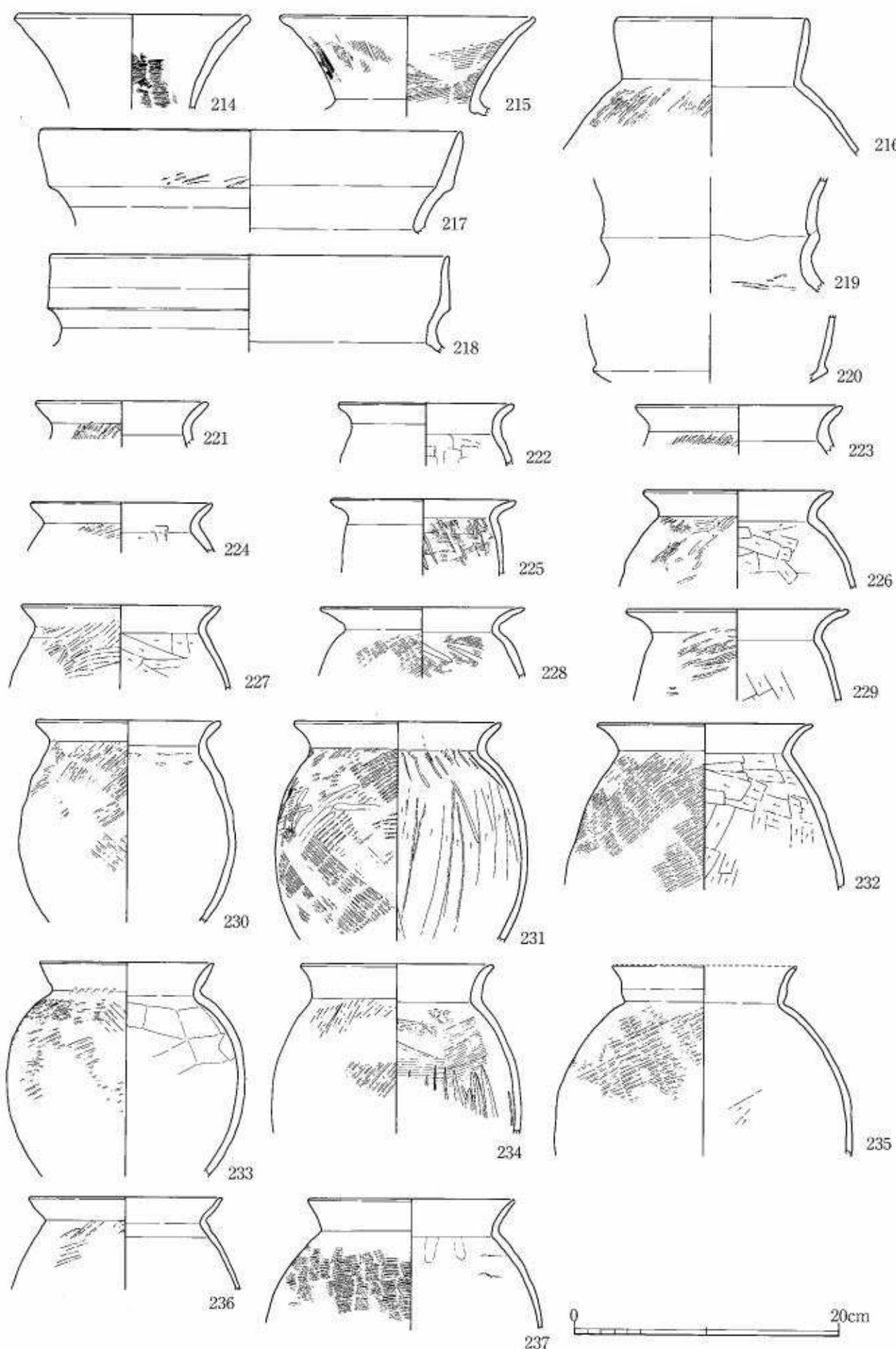
212



213



SR-1

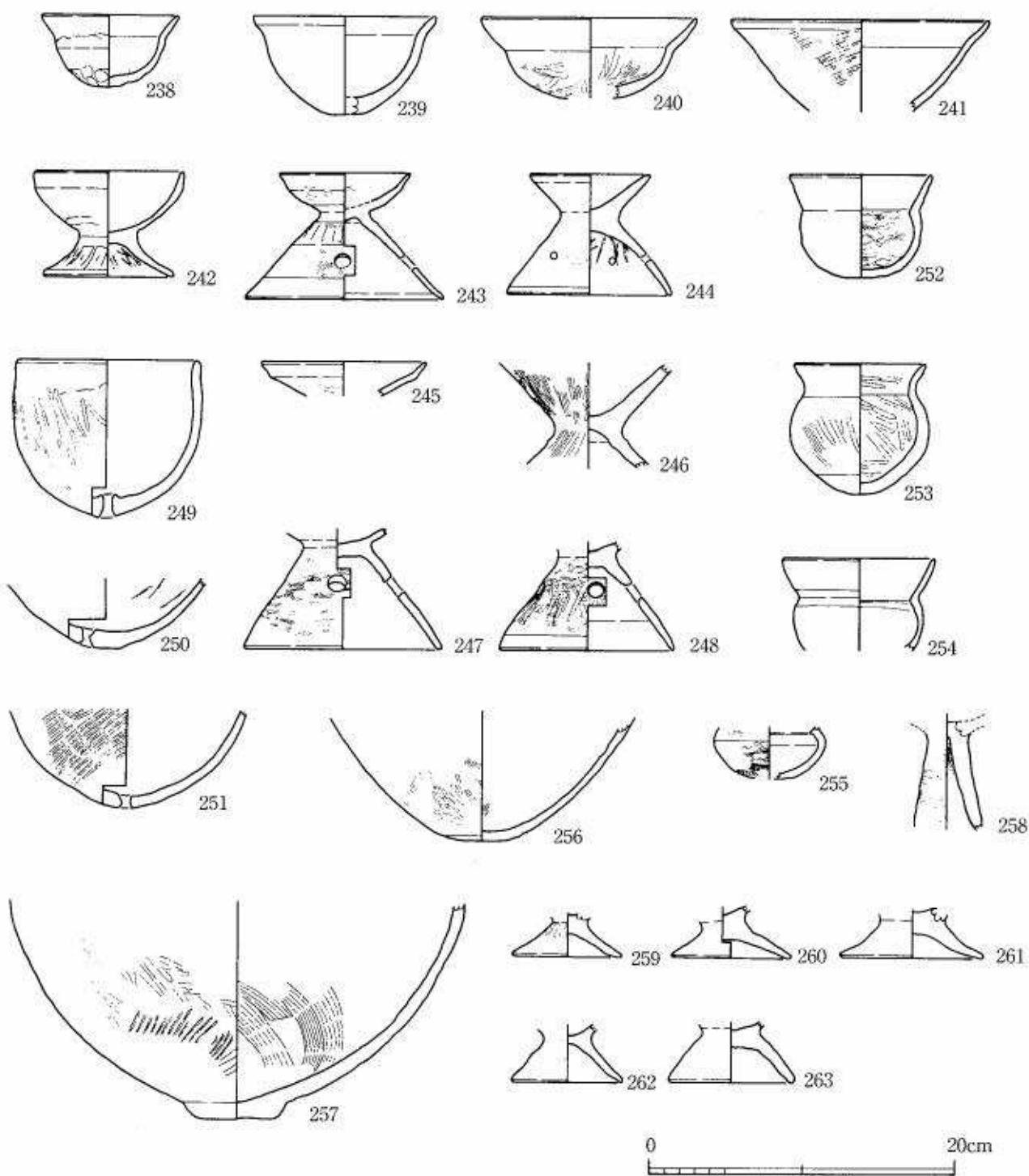


3区出土遺物4

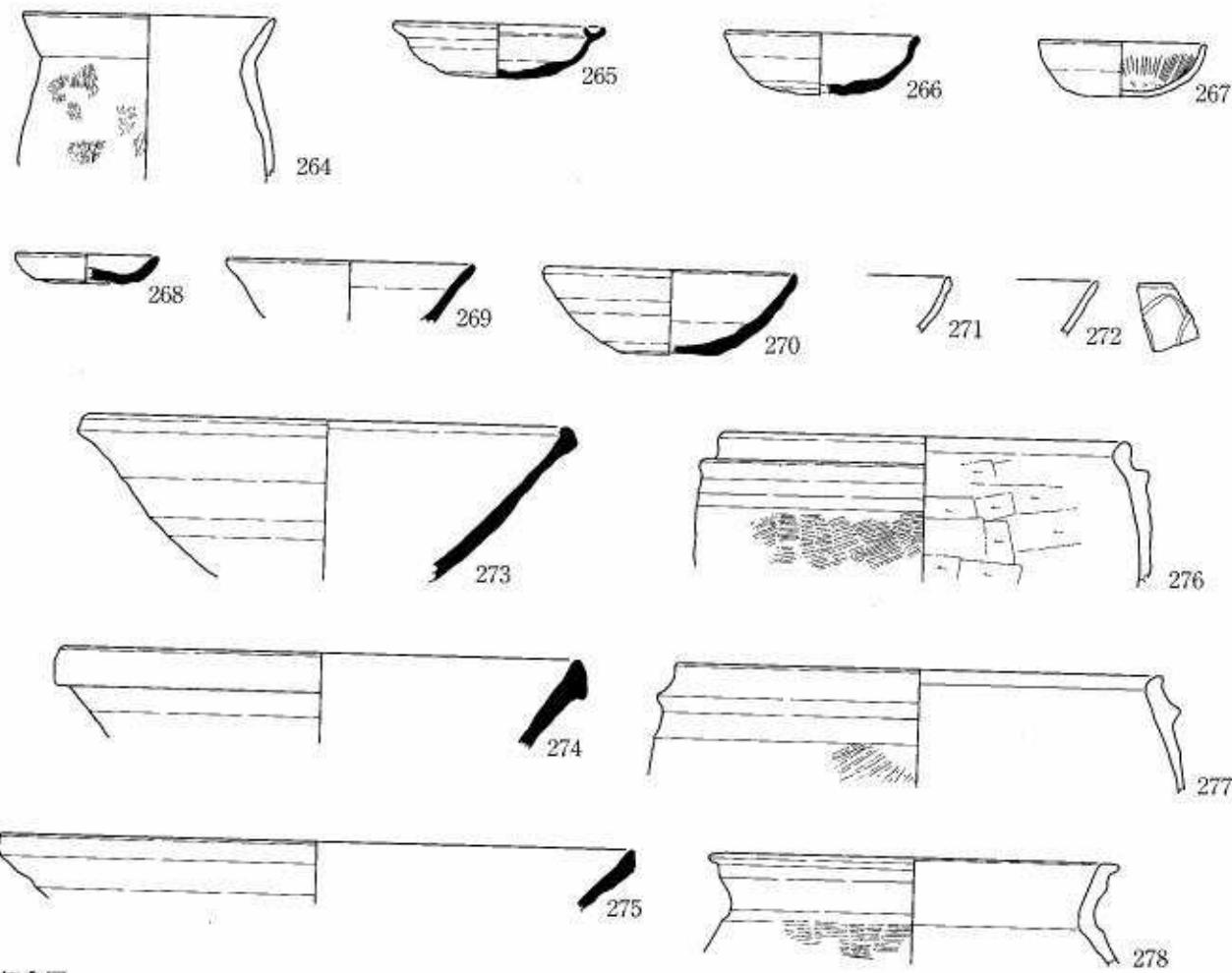
図版36

乗安地区

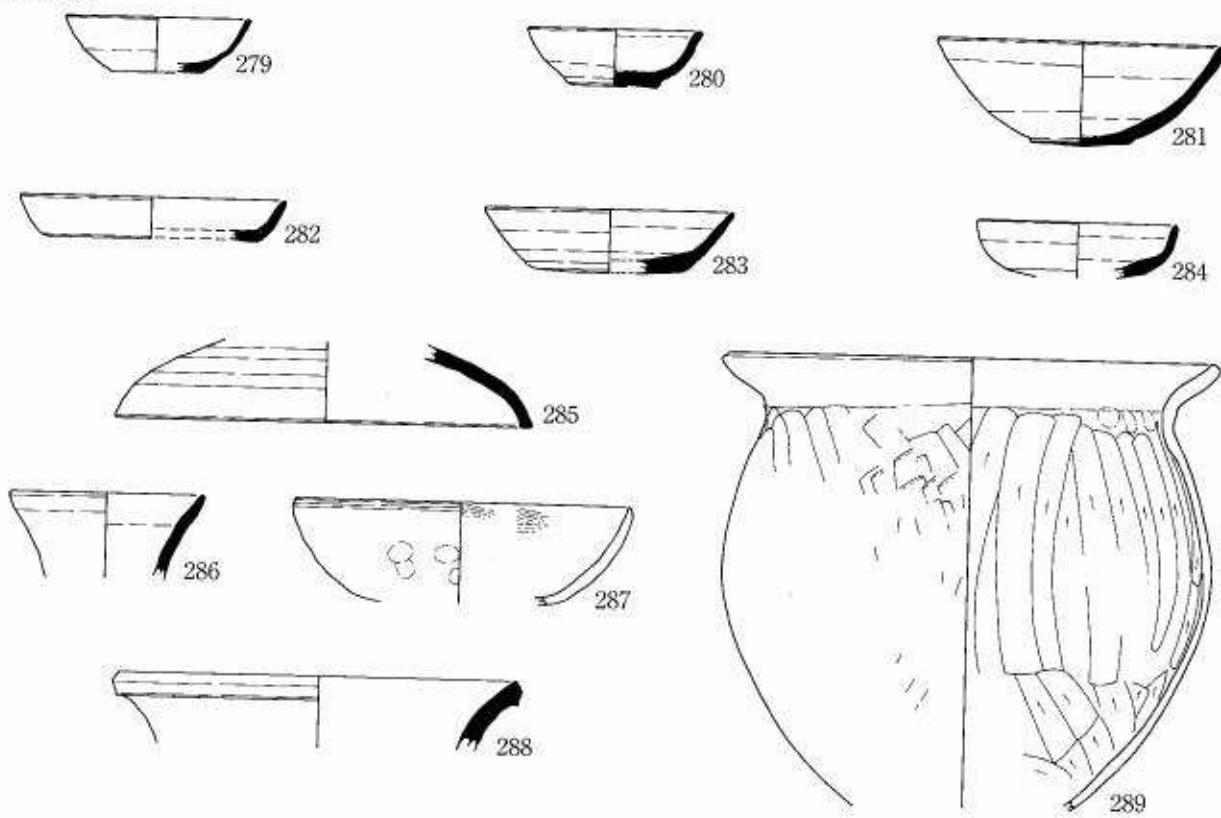
SR-1



3区 包含層



4区 包含層



3区出土遺物 6 / 4区出土遺物

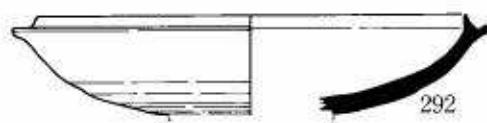
図版38

乗安地区

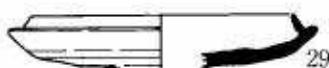
SH-1



290



292



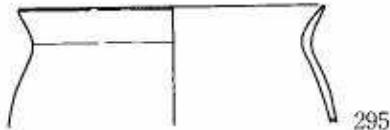
291



293



294



295

SH-2



296

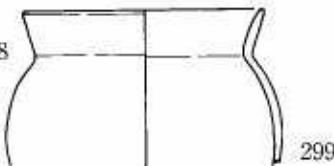


297

SH-4

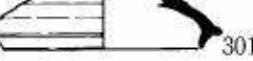


298



299

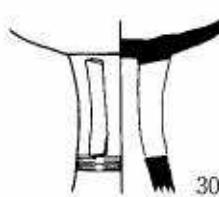
SH-5



301



302



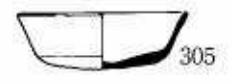
306



303



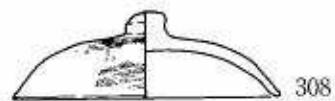
304



305



307



308



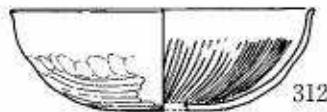
309



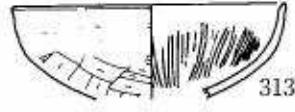
310



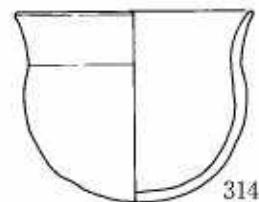
311



312



313



314

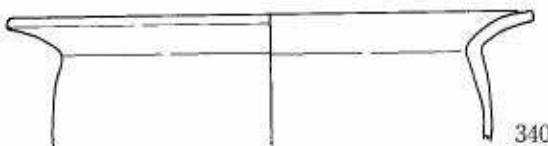


338



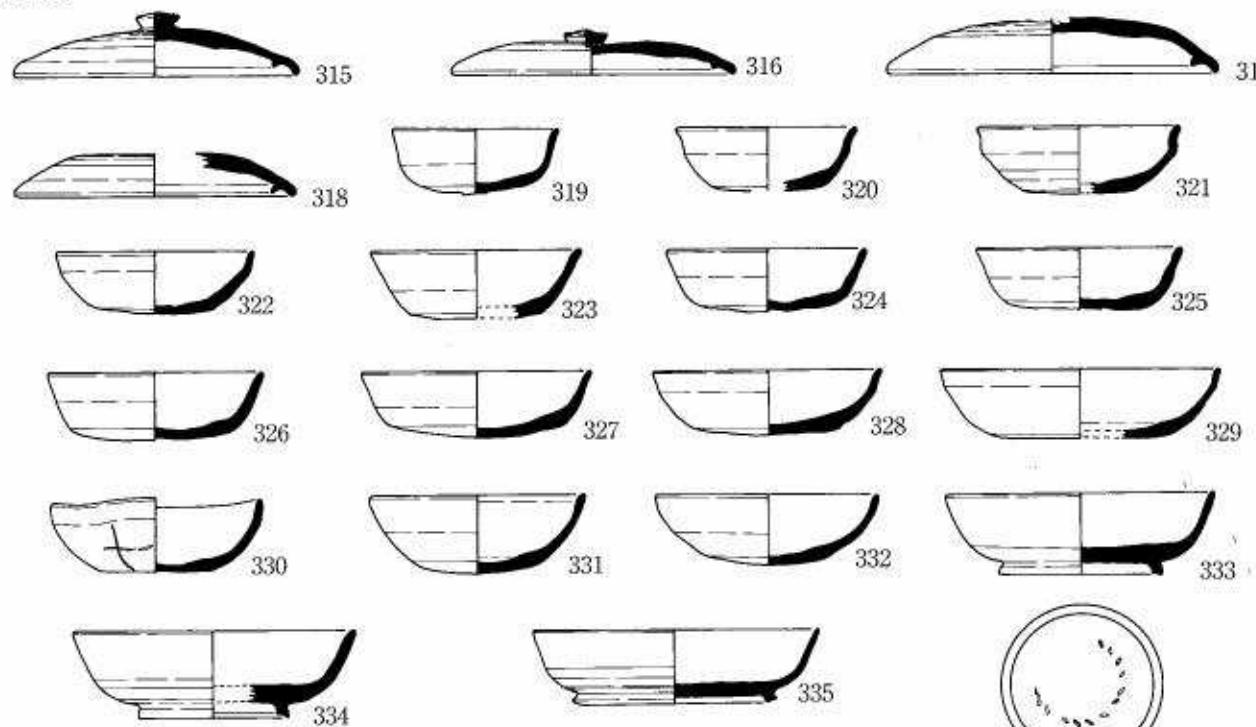
339

0 20cm

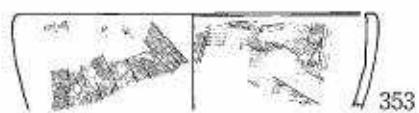
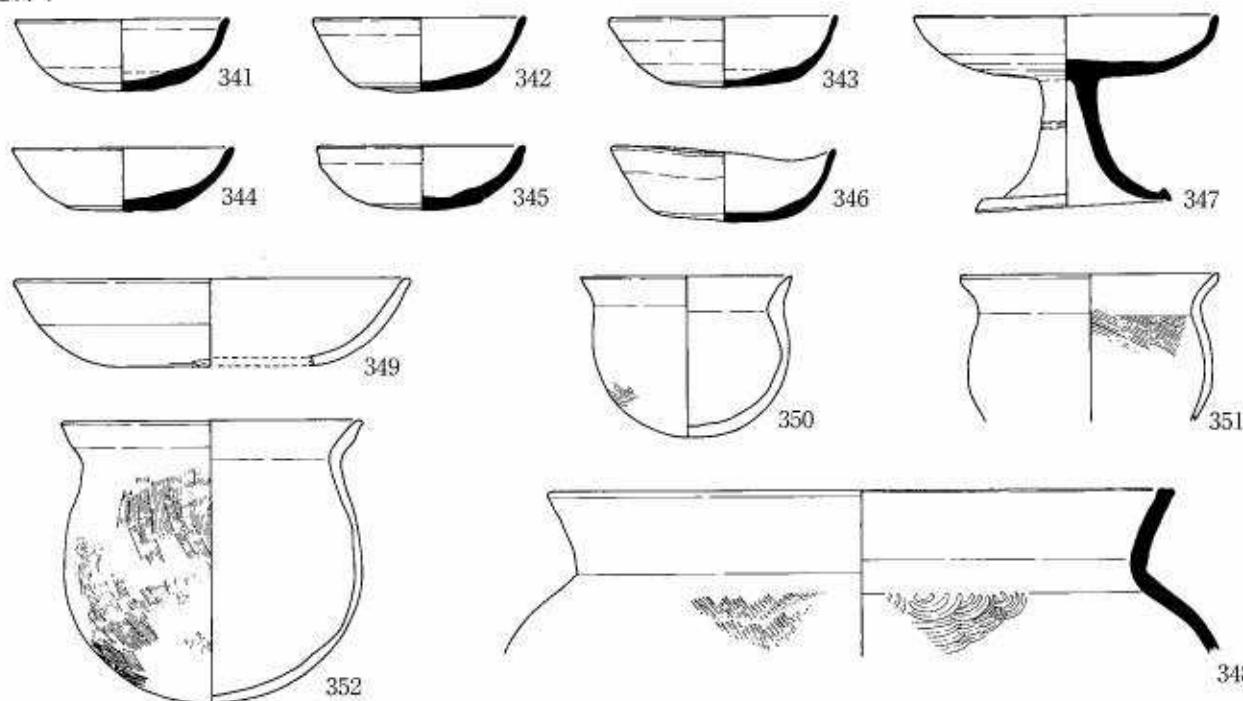


340

SH-3

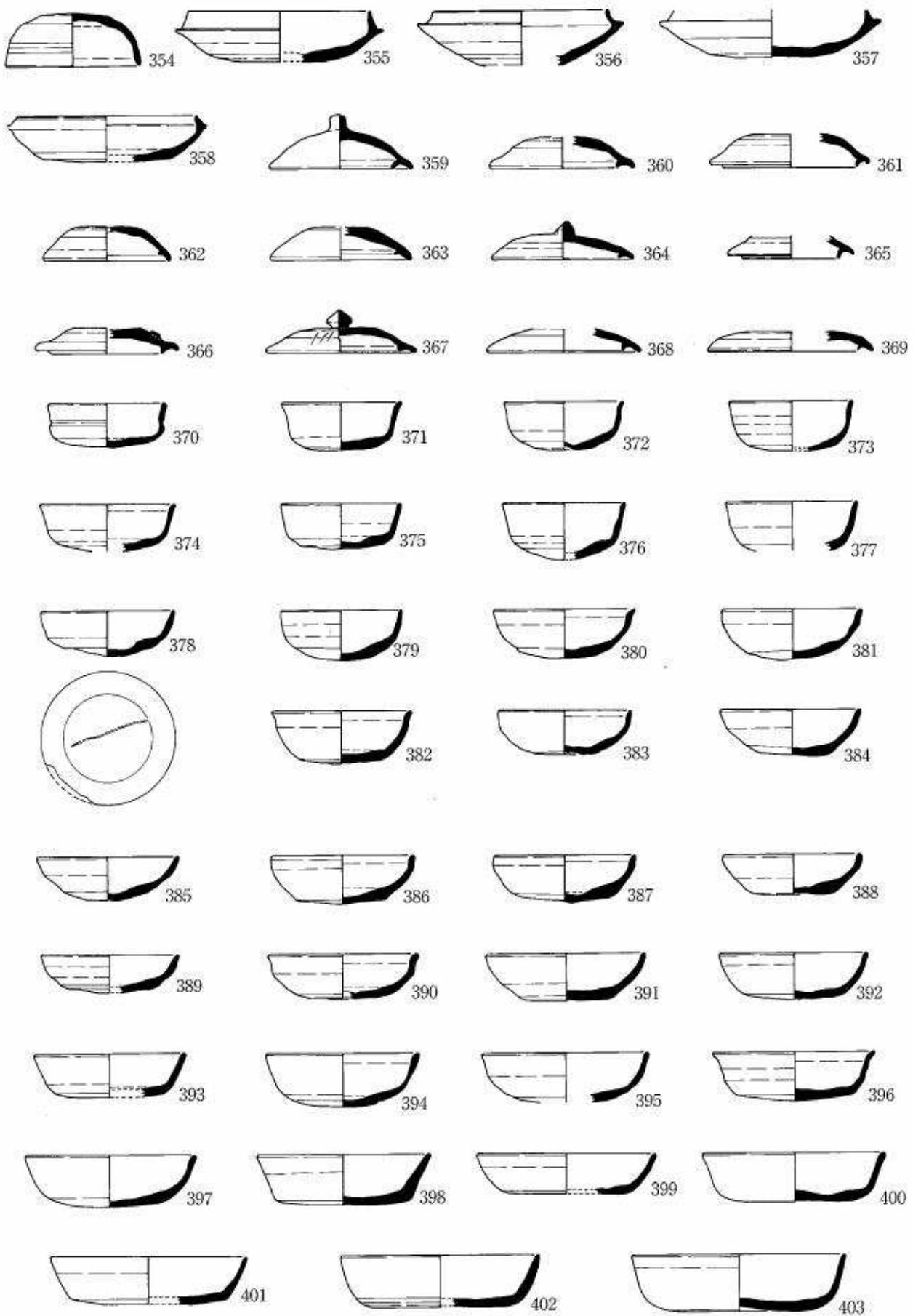


SK-1

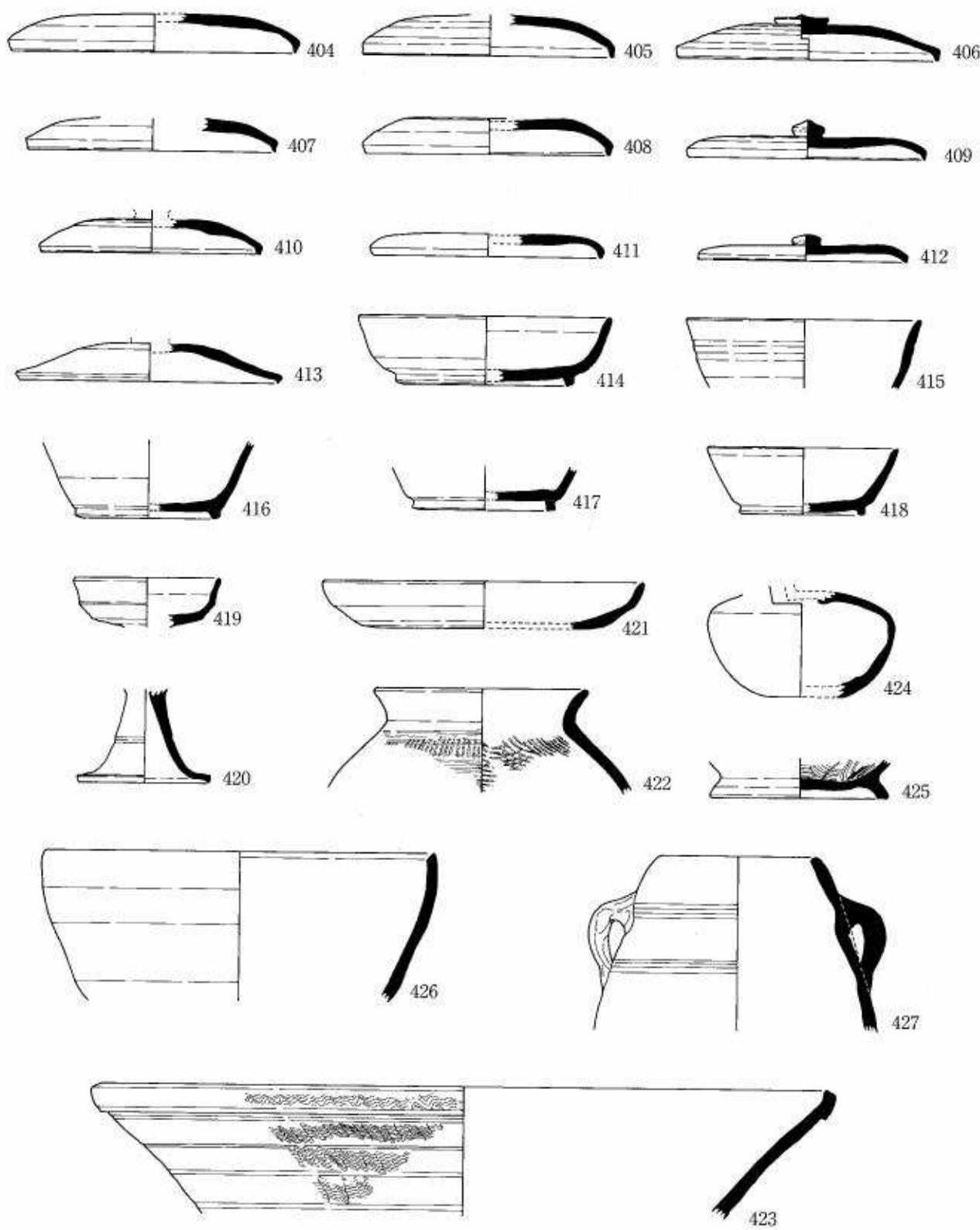


図版40

乗安地区



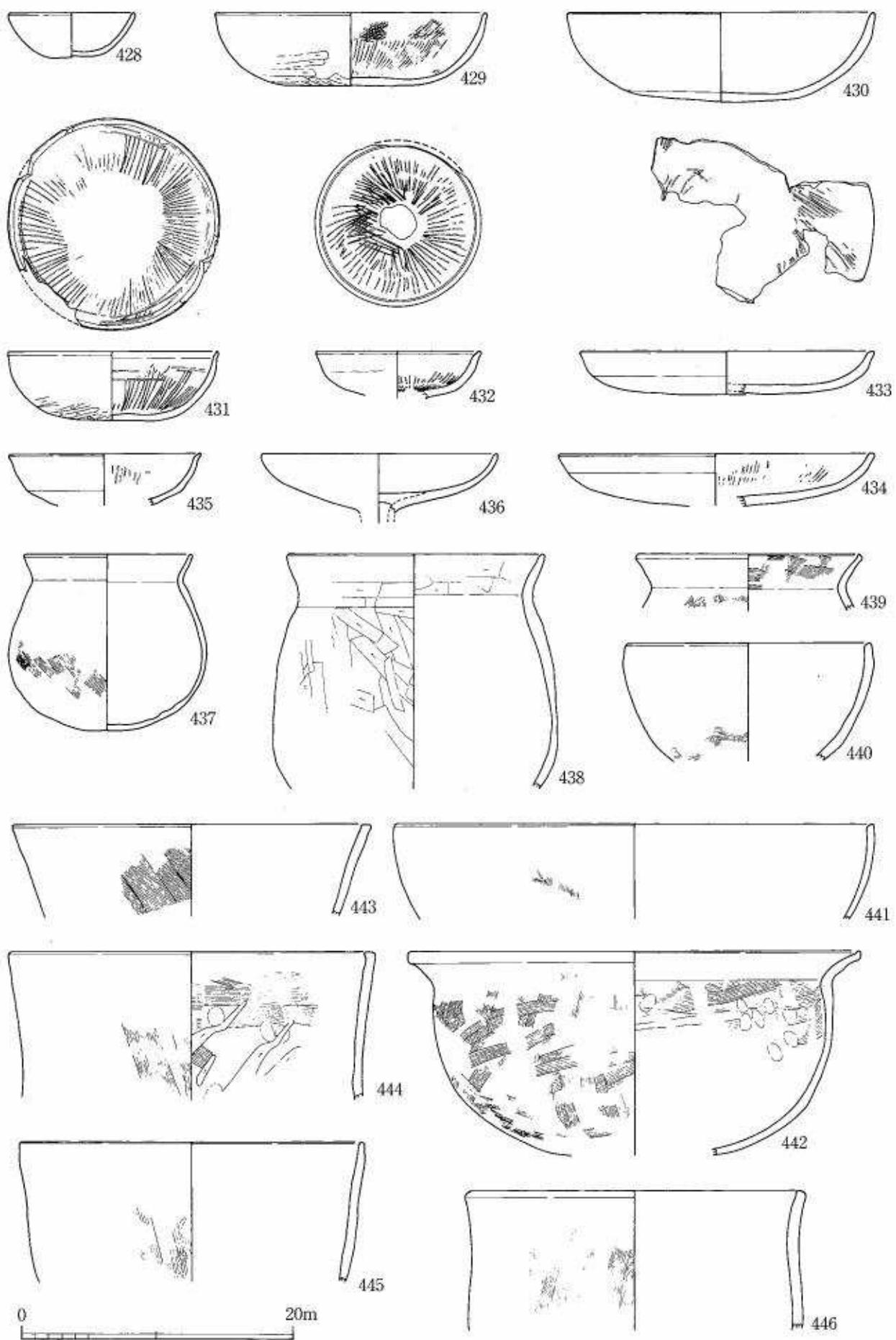
0 20m

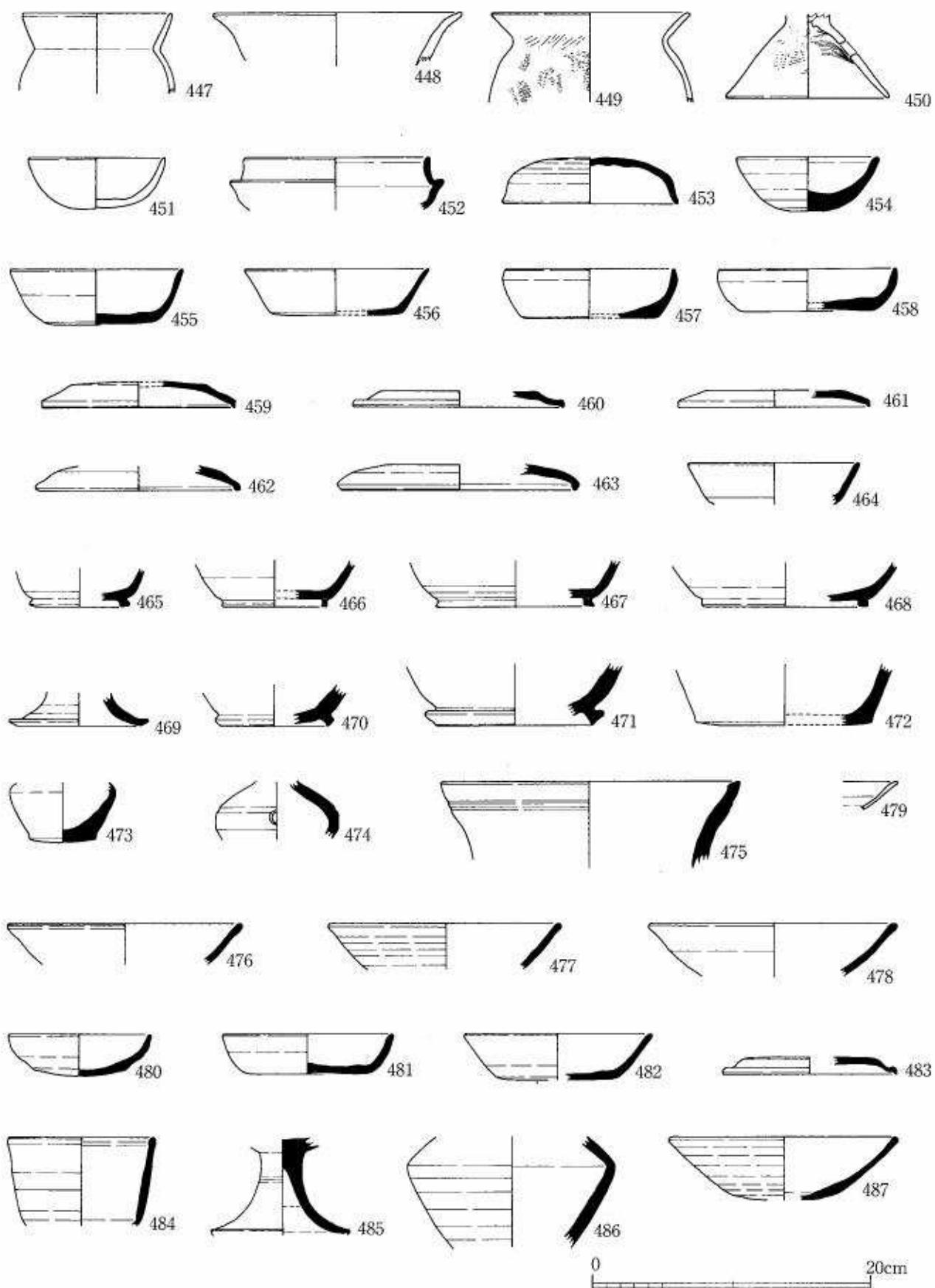


0 20cm

図版42

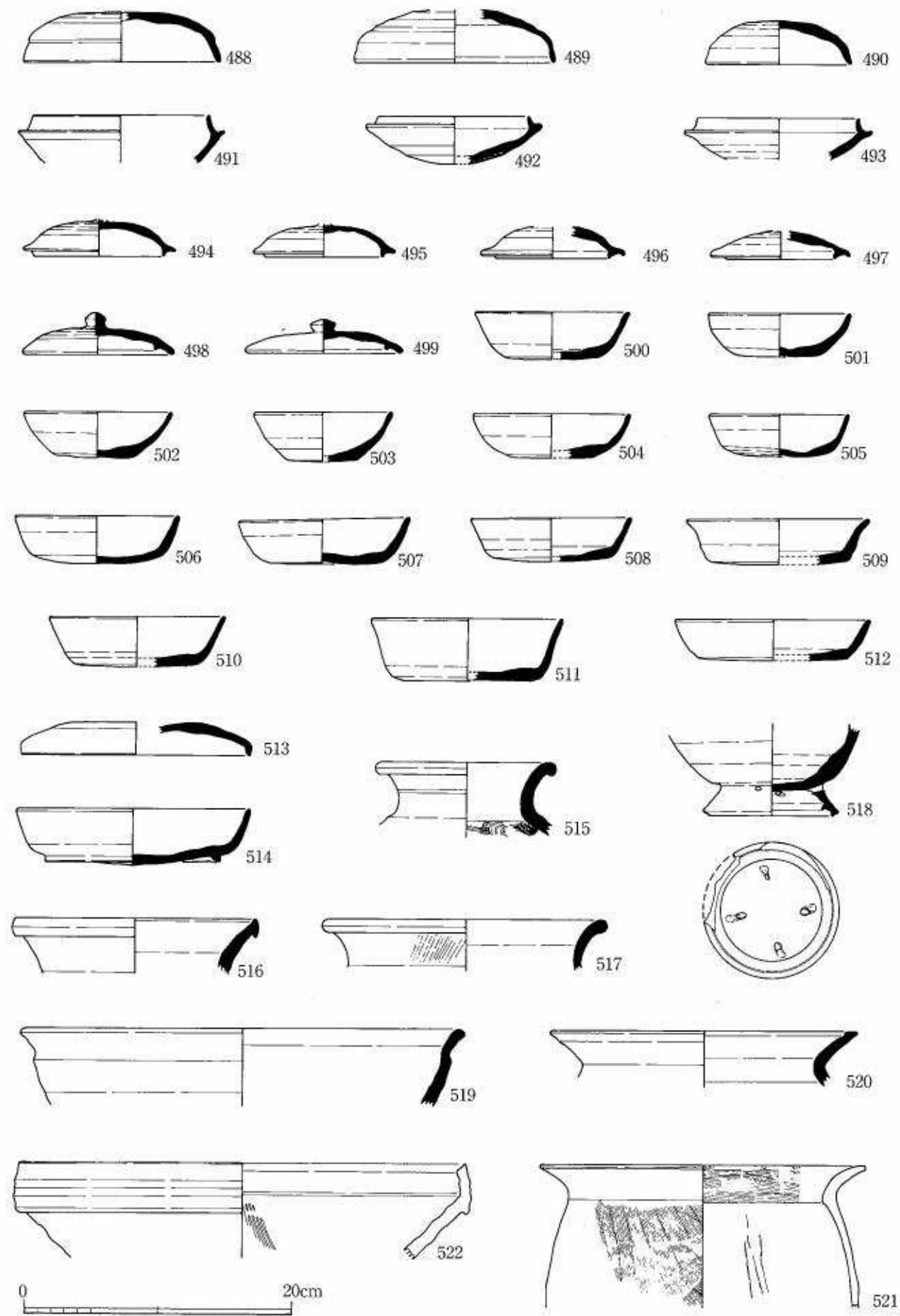
乗安地区

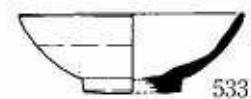
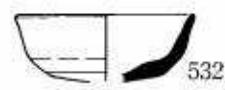
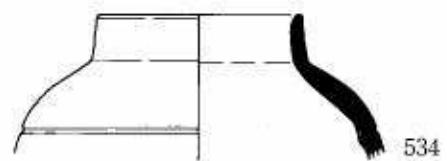
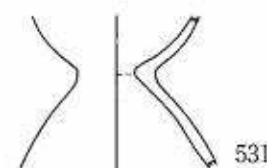
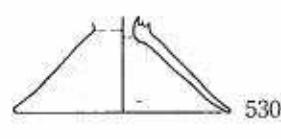
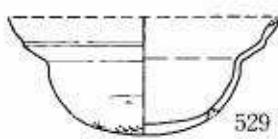
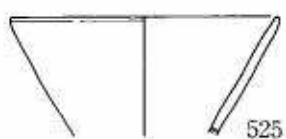
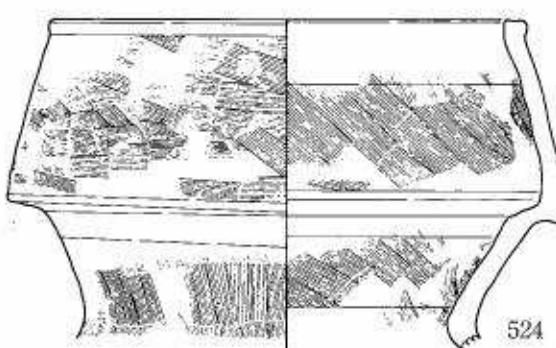
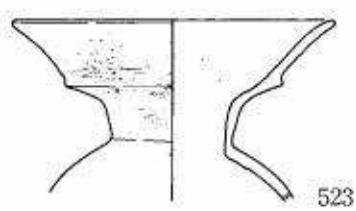




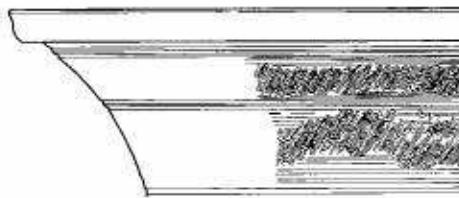
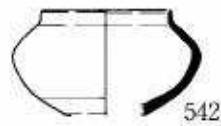
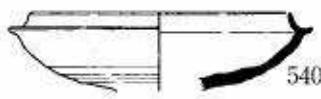
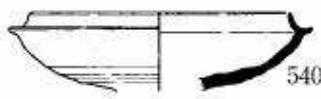
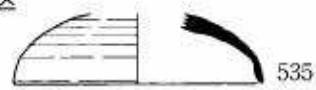
图版44

乘安地区





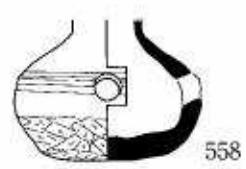
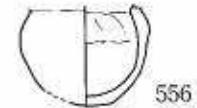
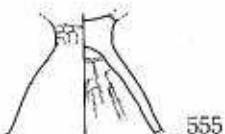
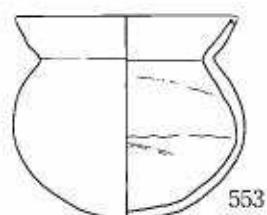
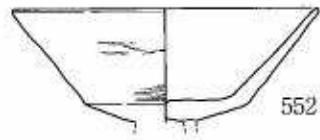
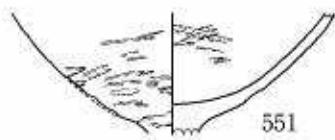
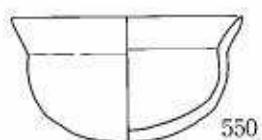
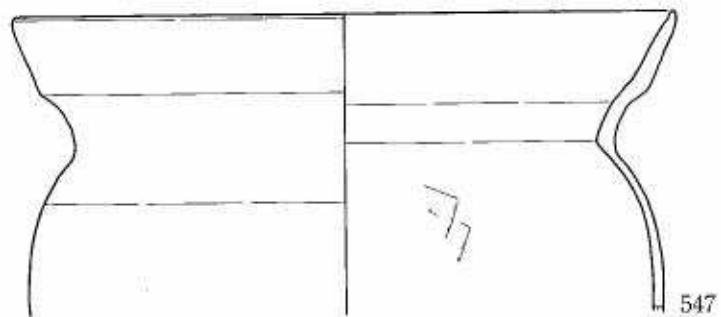
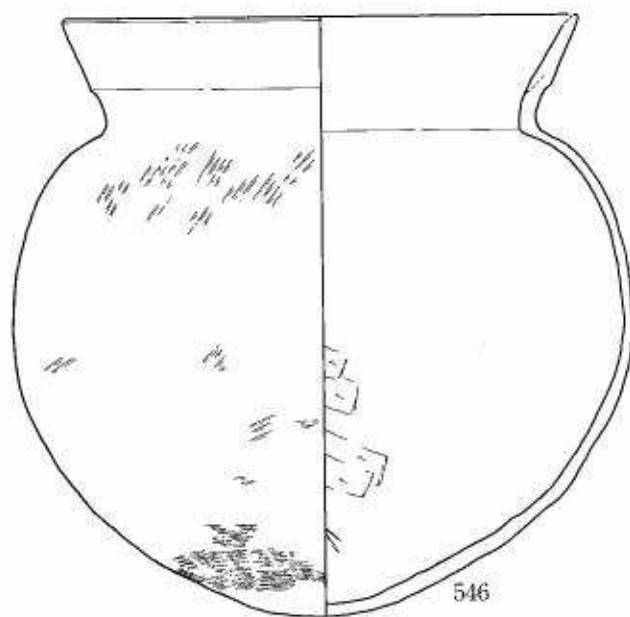
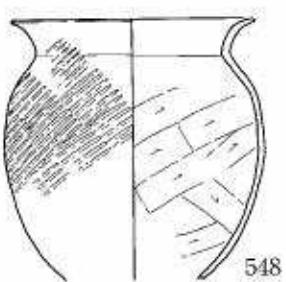
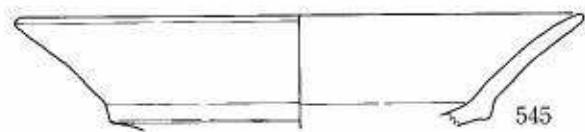
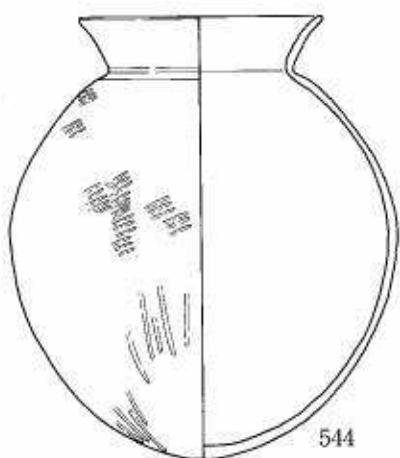
13区



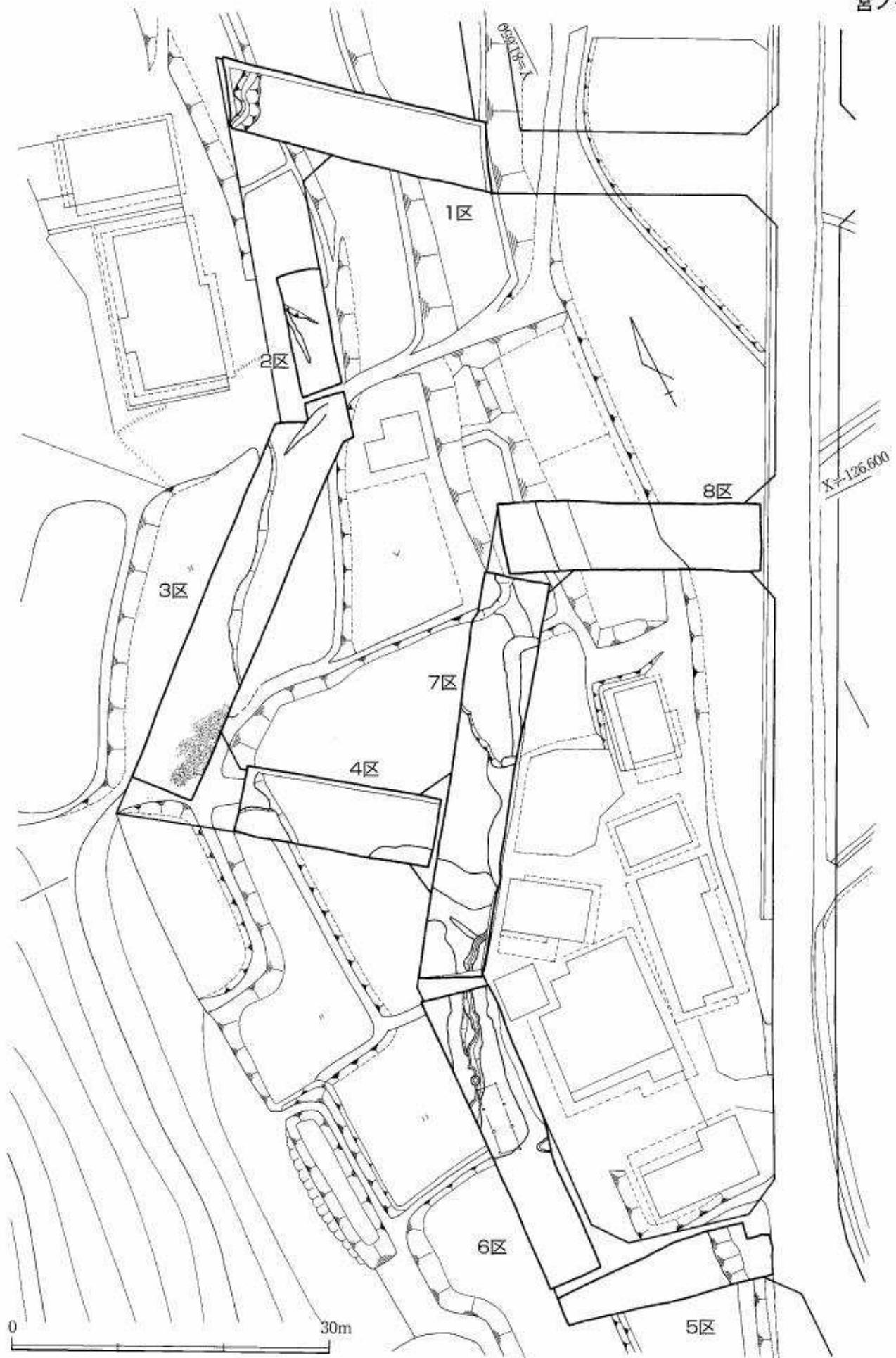
0 20cm

図版46

乗安地区



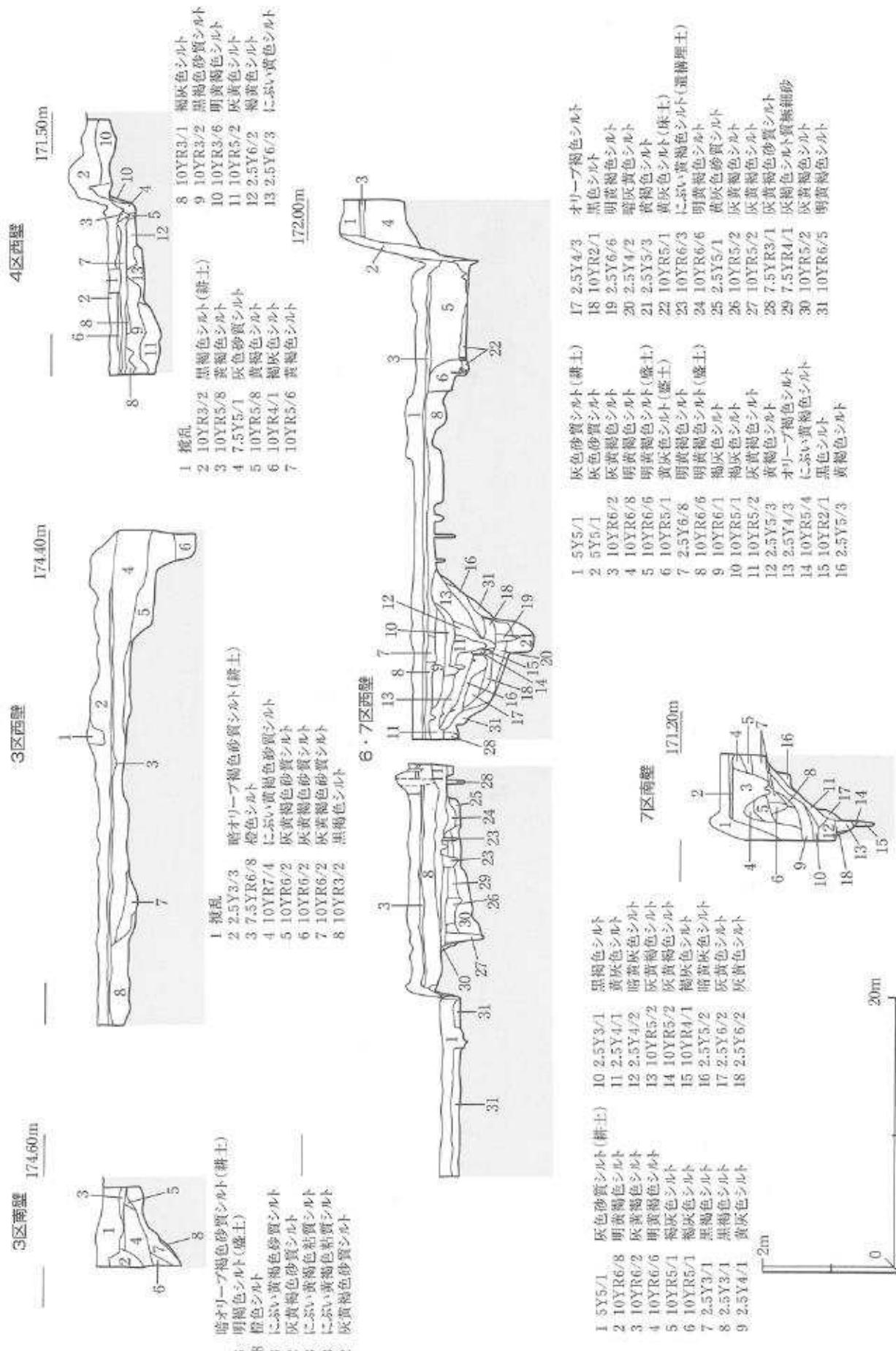
12区出土遺物



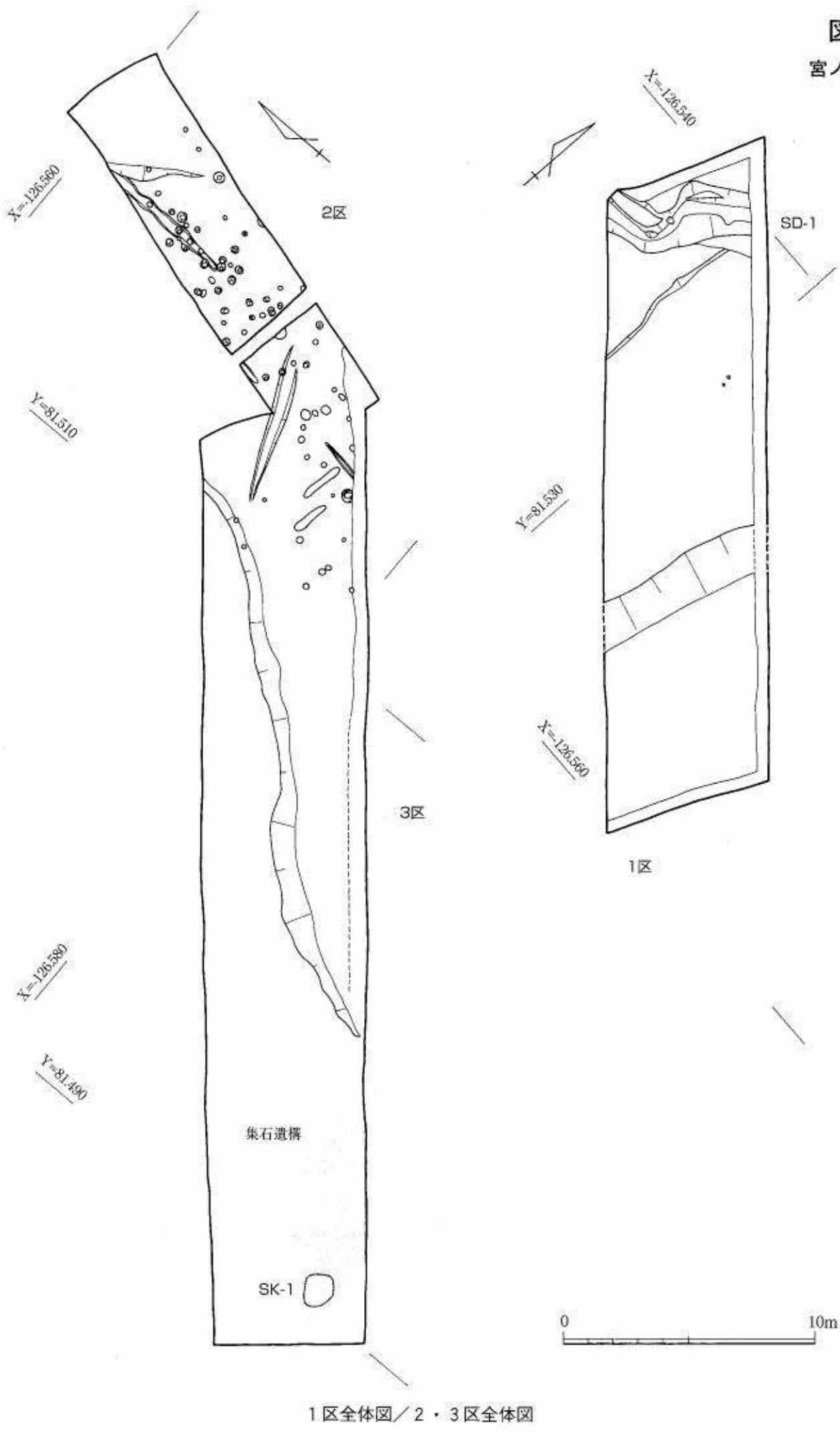
宮ノ後地区全体図

図版48

四ノ後地区

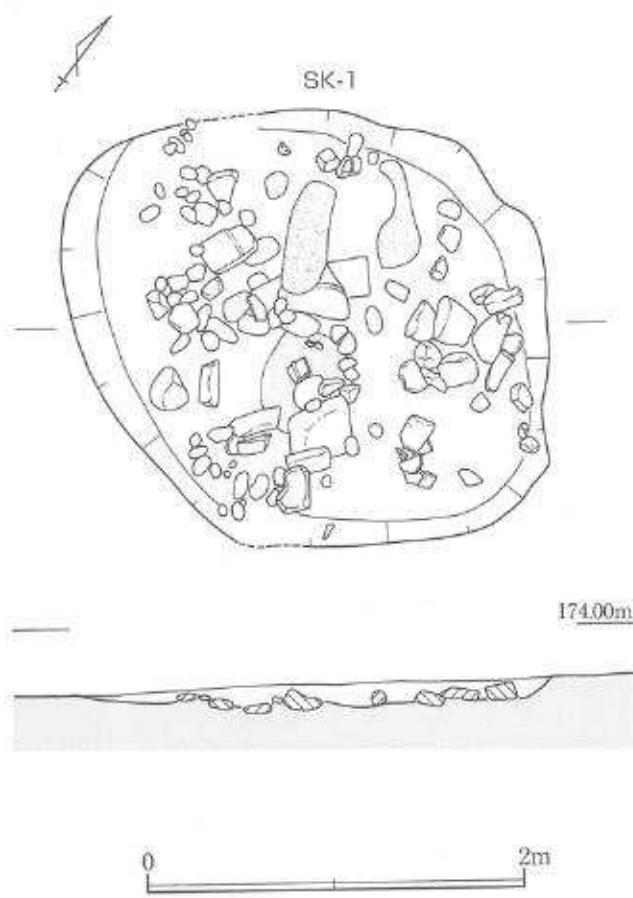
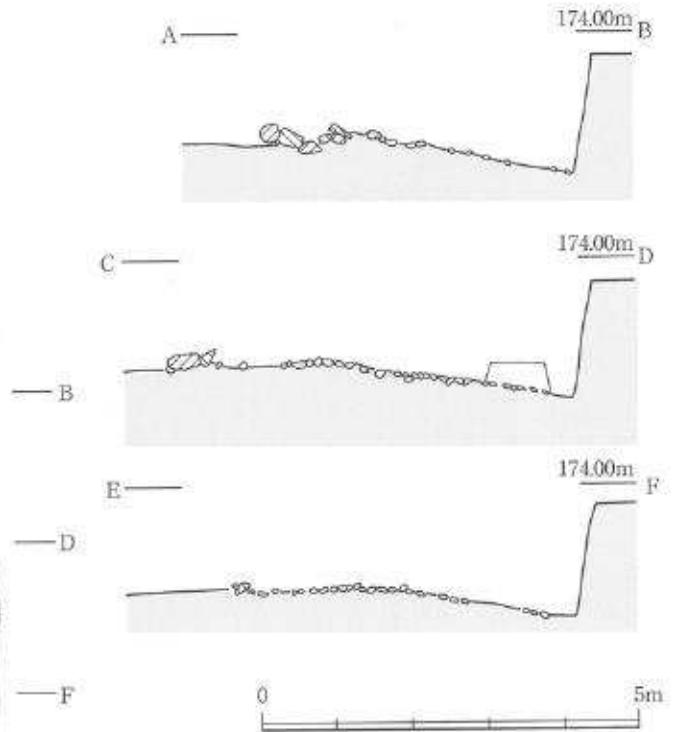
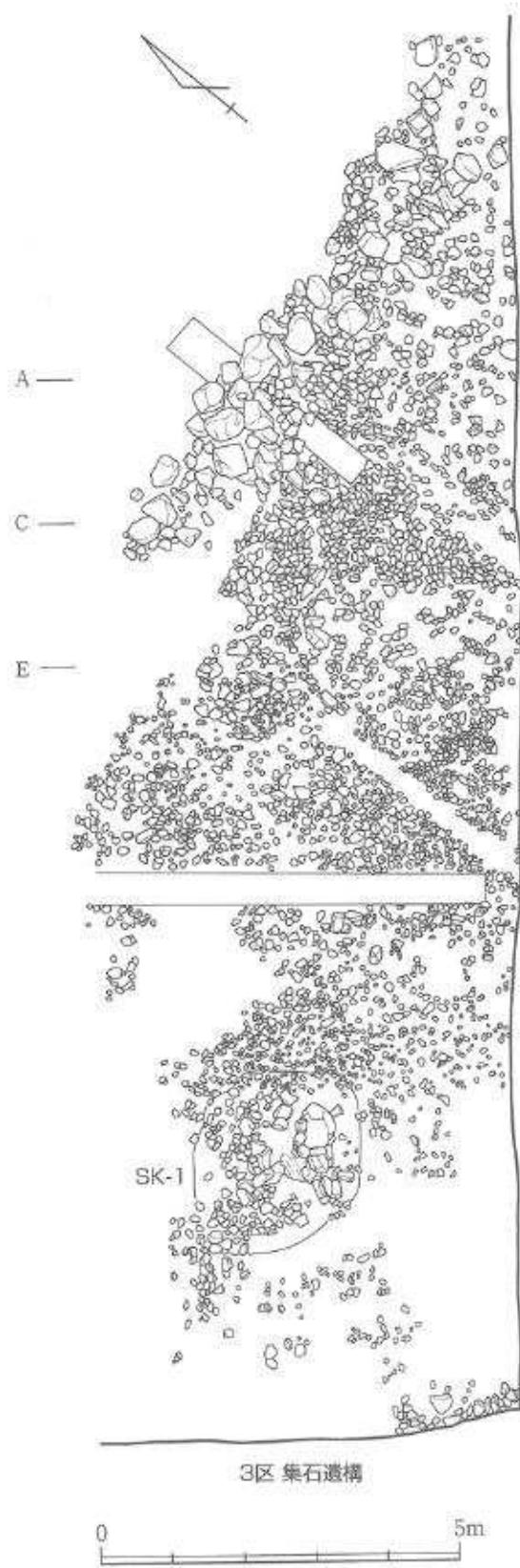


3～7区土壌図

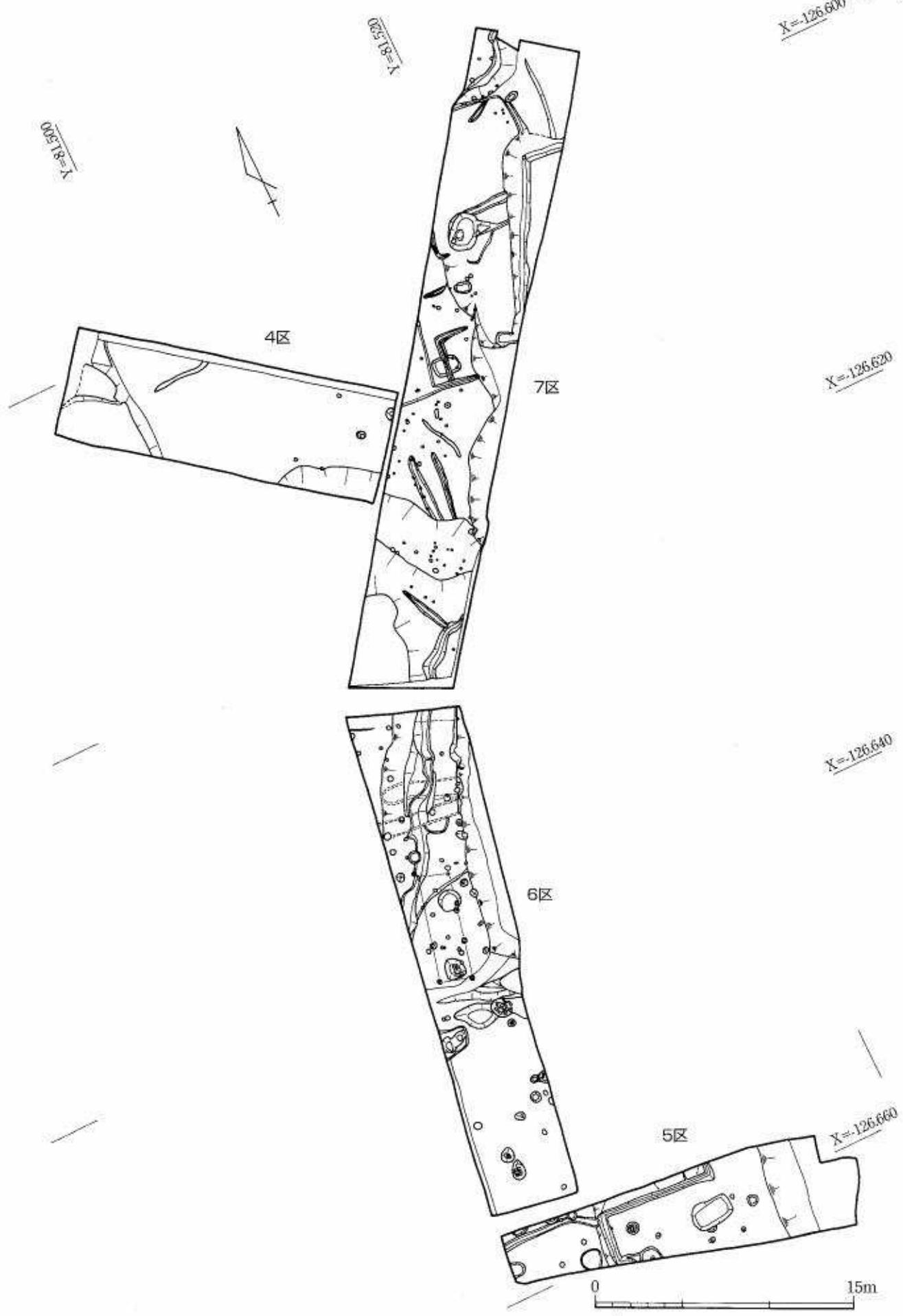


図版50

宮ノ後地区



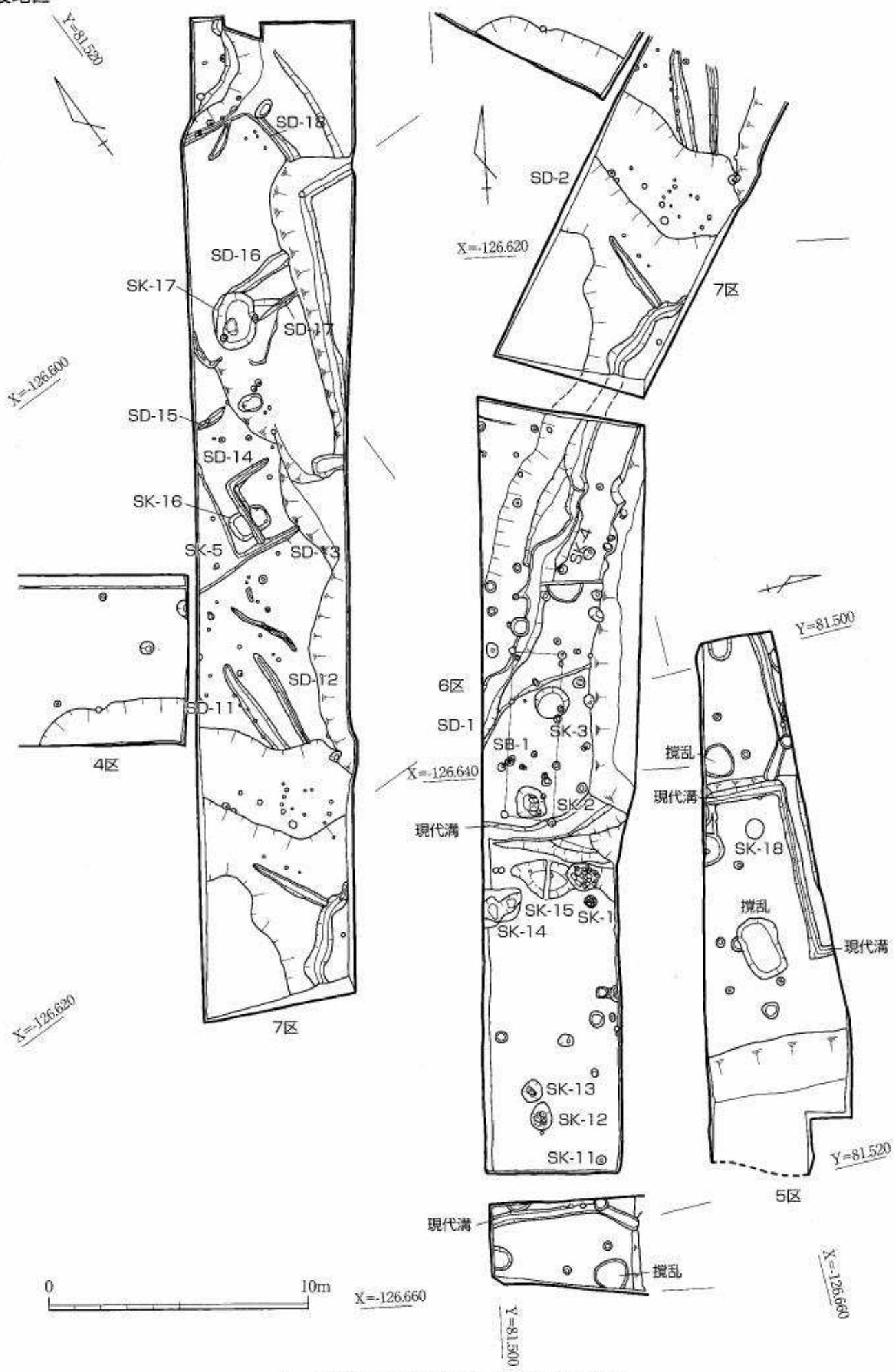
3区集石遺構／SK-1



4・5・6・7区全体図

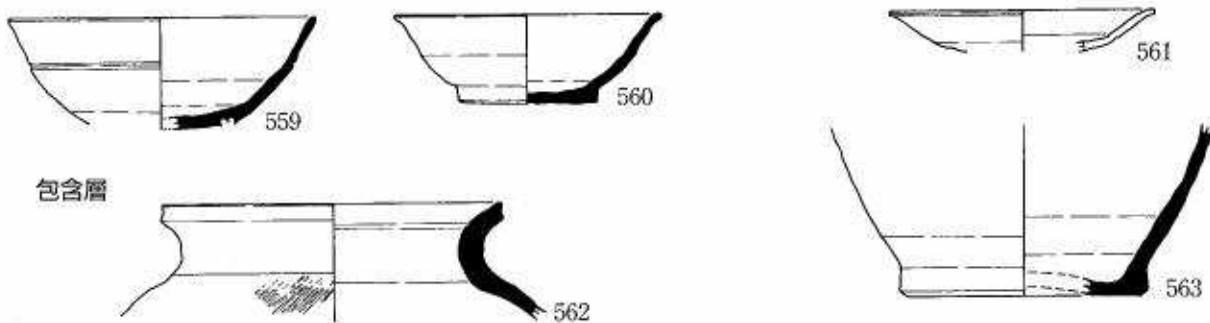
図版52

宮ノ後地区

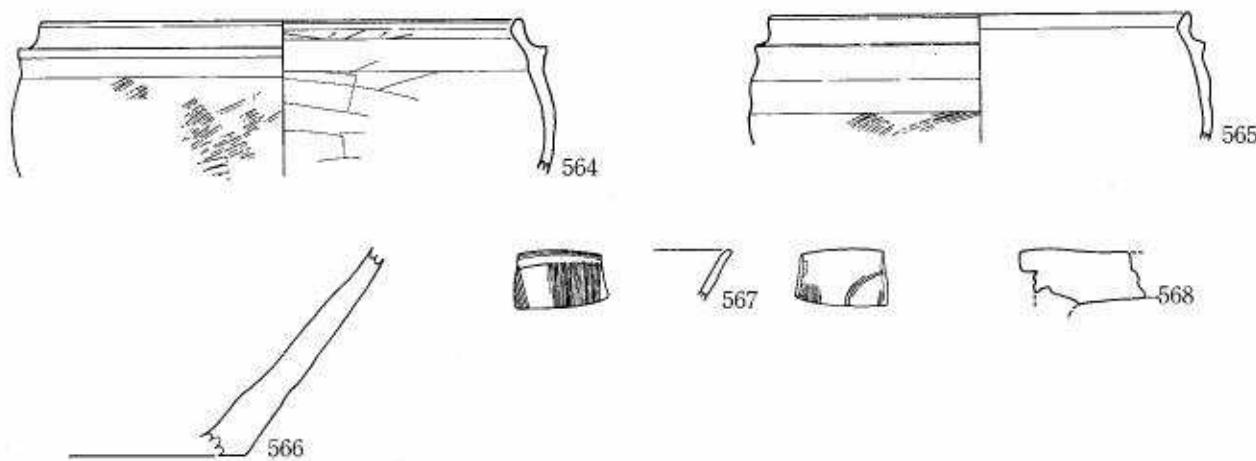


4・7区平面図／5区平面図／6区平面図

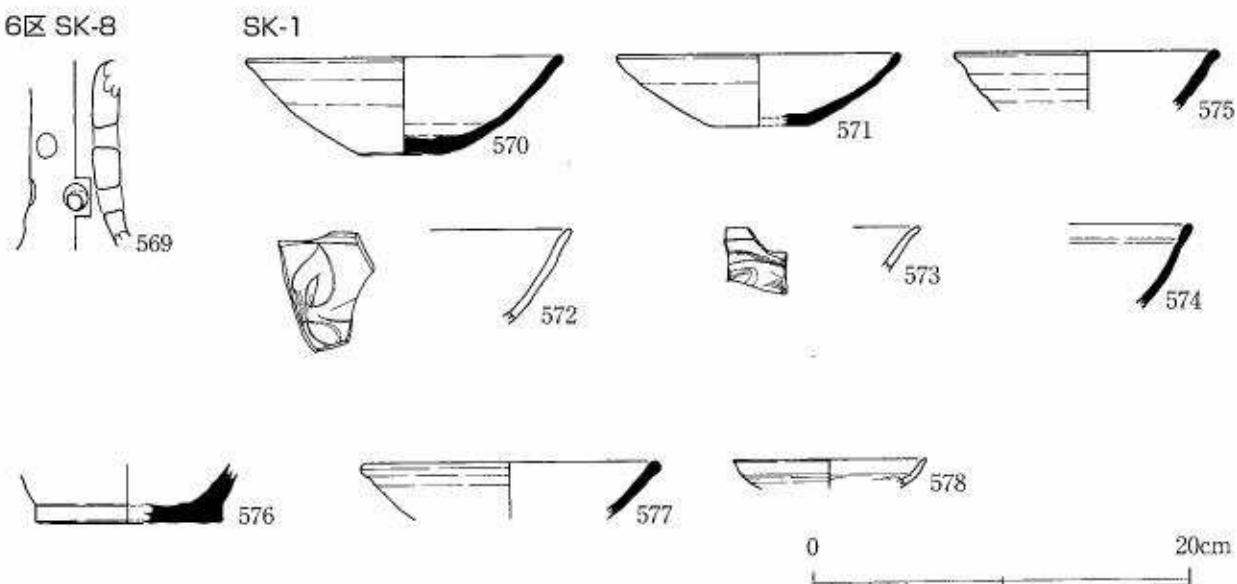
1区 SD-1



3区 集石遺構



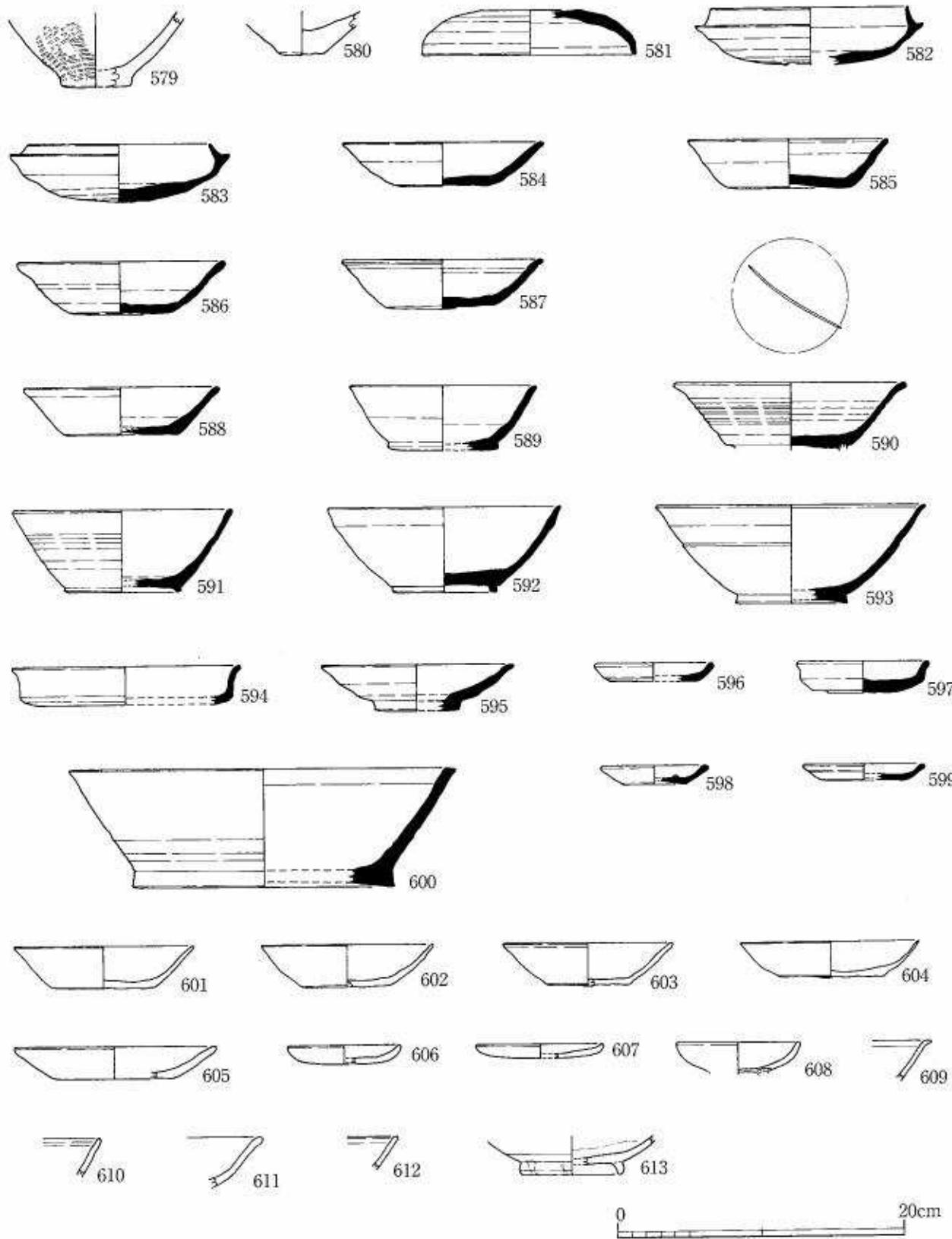
6区 SK-8



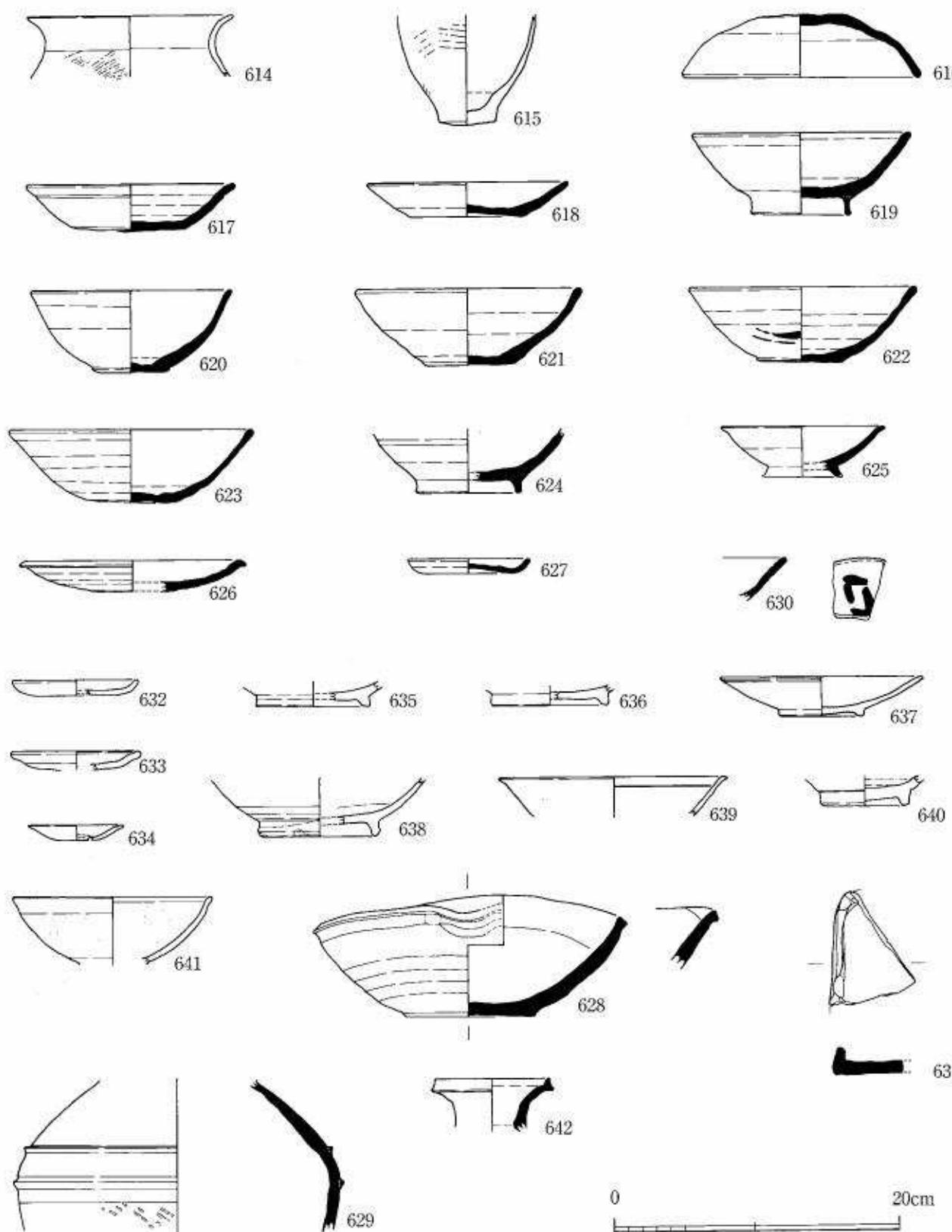
図版54

宮ノ後地区

6区 SD-1



7区 SD-1・2

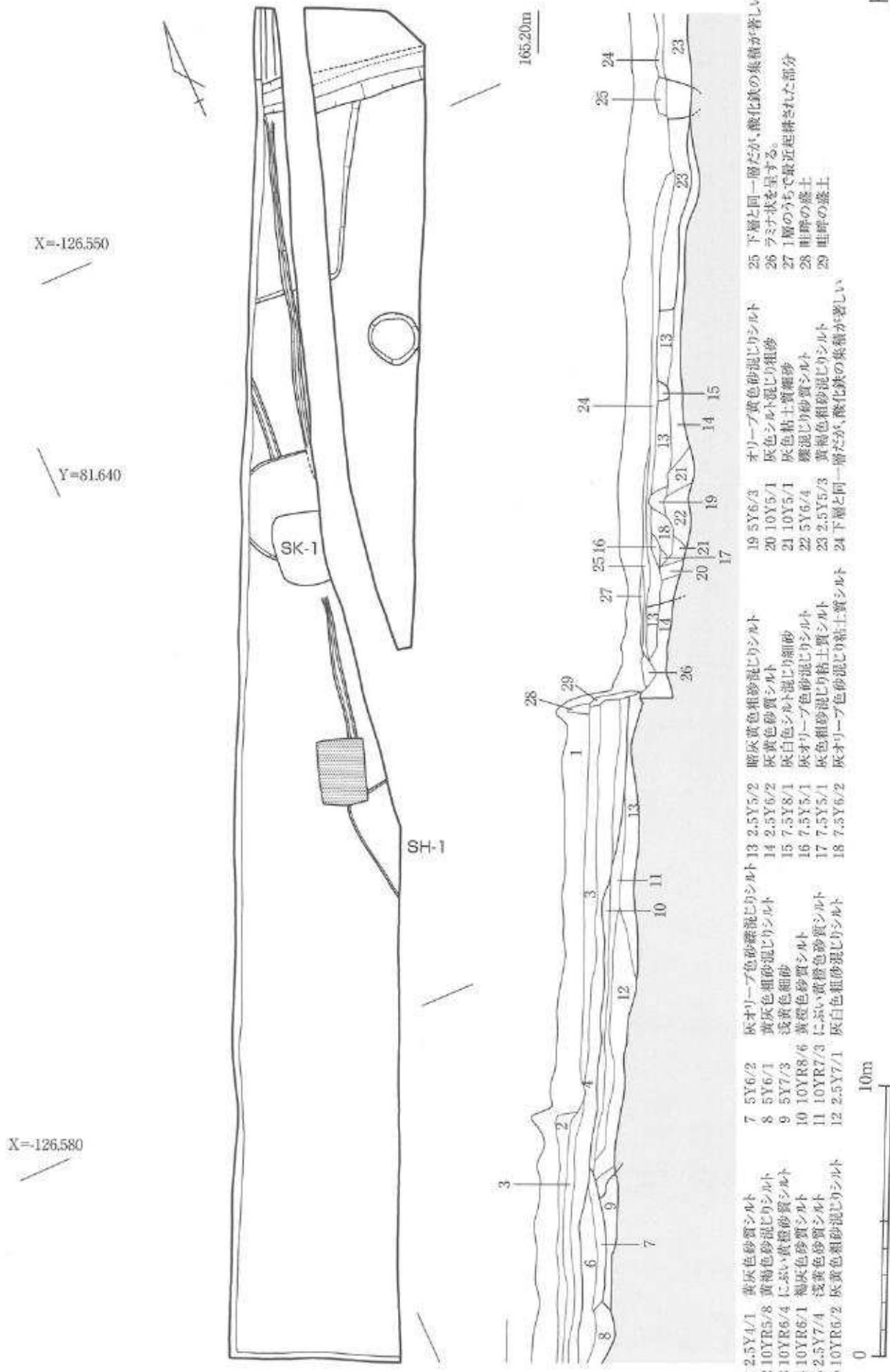


図版56

上才谷地区



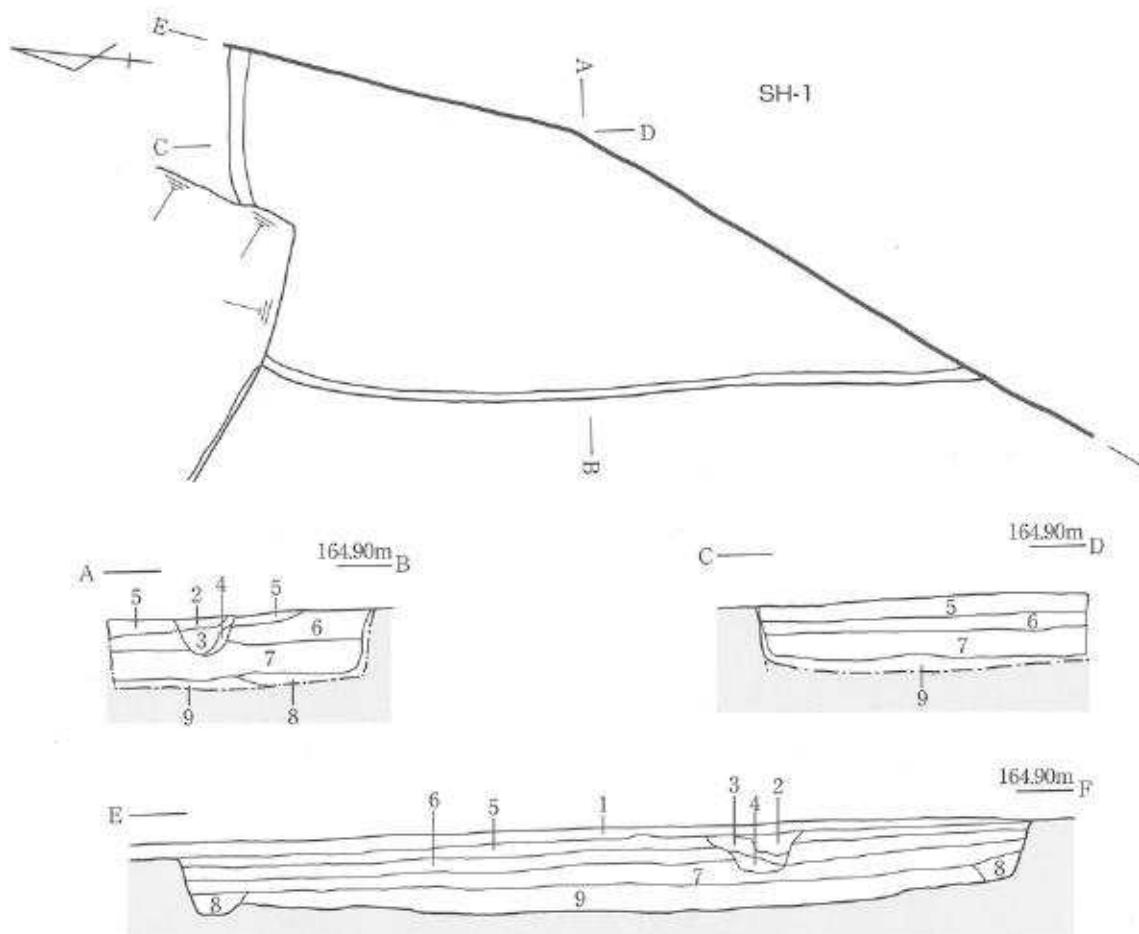
全体図



1区全体図

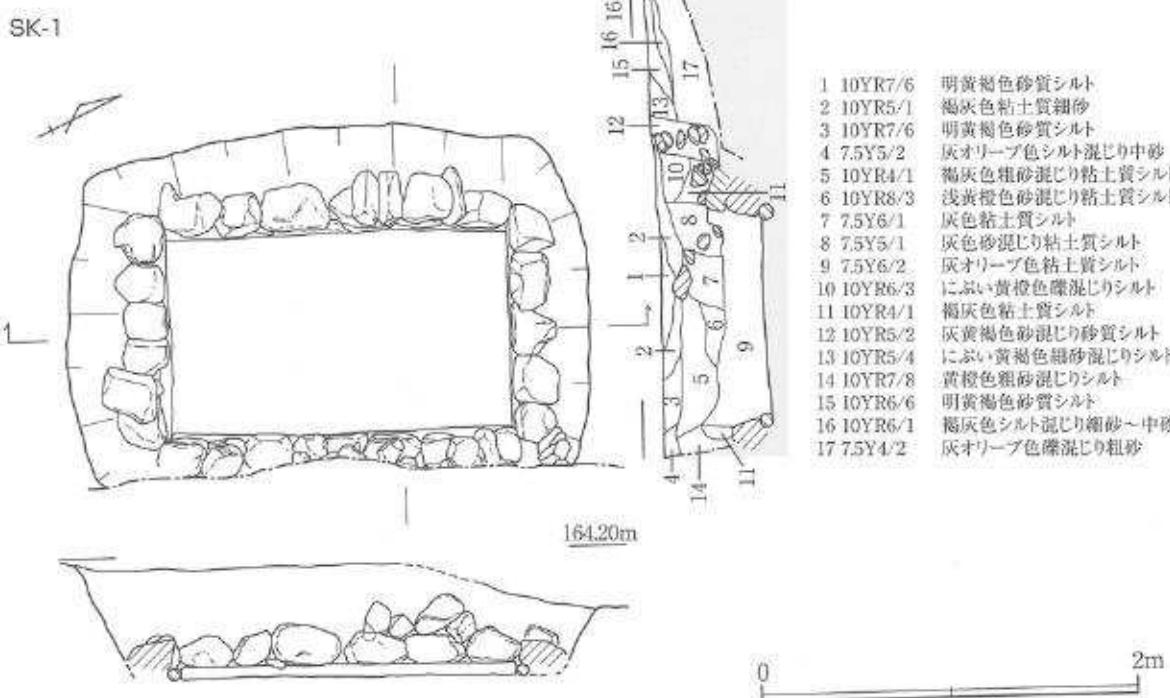
図版58

上才谷地区

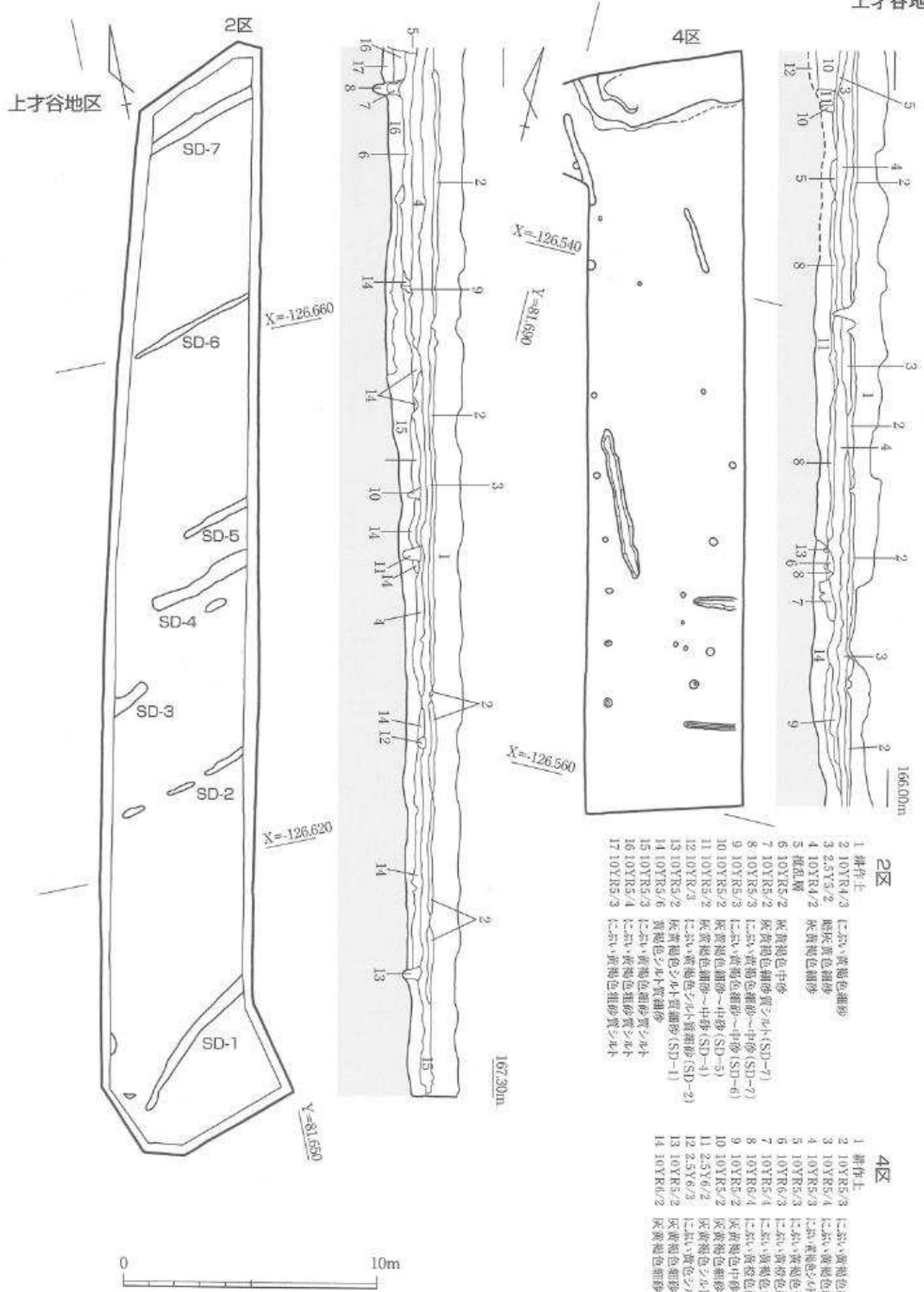


- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 25Y7/6 明黄褐色砂質シルト | 6 10YR5/2 塗黄褐色粘土質シルト |
| 2 25Y8/4 淡黄色シルト質細砂 | 7 10YR7/4 にぶい黄橙色粗砂混じり粘土質シルト |
| 3 10YR8/3 浅黄橙色シルト質中砂 | 8 10YR6/2 塗黄褐色粘土質細砂 |
| 4 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂 | 9 10YR7/2 にぶい黄橙色粗砂混じり粘土質シルト |
| 5 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト | |

- | |
|---------------------------|
| 1 10YR7/6 明黄褐色砂質シルト |
| 2 10YR5/1 塗灰色粘土質細砂 |
| 3 10YR7/6 明黄褐色砂質シルト |
| 4 7.5Y5/2 灰オーブ色シルト混じり中砂 |
| 5 10YR4/1 塗灰色粗砂混じり粘土質シルト |
| 6 10YR8/3 浅黄橙色砂混じり粘土質シルト |
| 7 7.5Y6/1 灰色粘土質シルト |
| 8 7.5Y5/1 灰色砂混じり粘土質シルト |
| 9 7.5Y6/2 灰オーブ色粘土質シルト |
| 10 10YR6/3 にぶい黄橙色礫混じりシルト |
| 11 10YR4/1 塗灰色粘土質シルト |
| 12 10YR5/2 灰黄褐色砂混じり粘土質シルト |
| 13 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト |
| 14 10YR7/8 黄橙色粗砂混じりシルト |
| 15 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト |
| 16 10YR6/1 塗灰色シルト混じり細砂～中砂 |
| 17 7.5Y4/2 灰オーブ色礫混じり粗砂 |



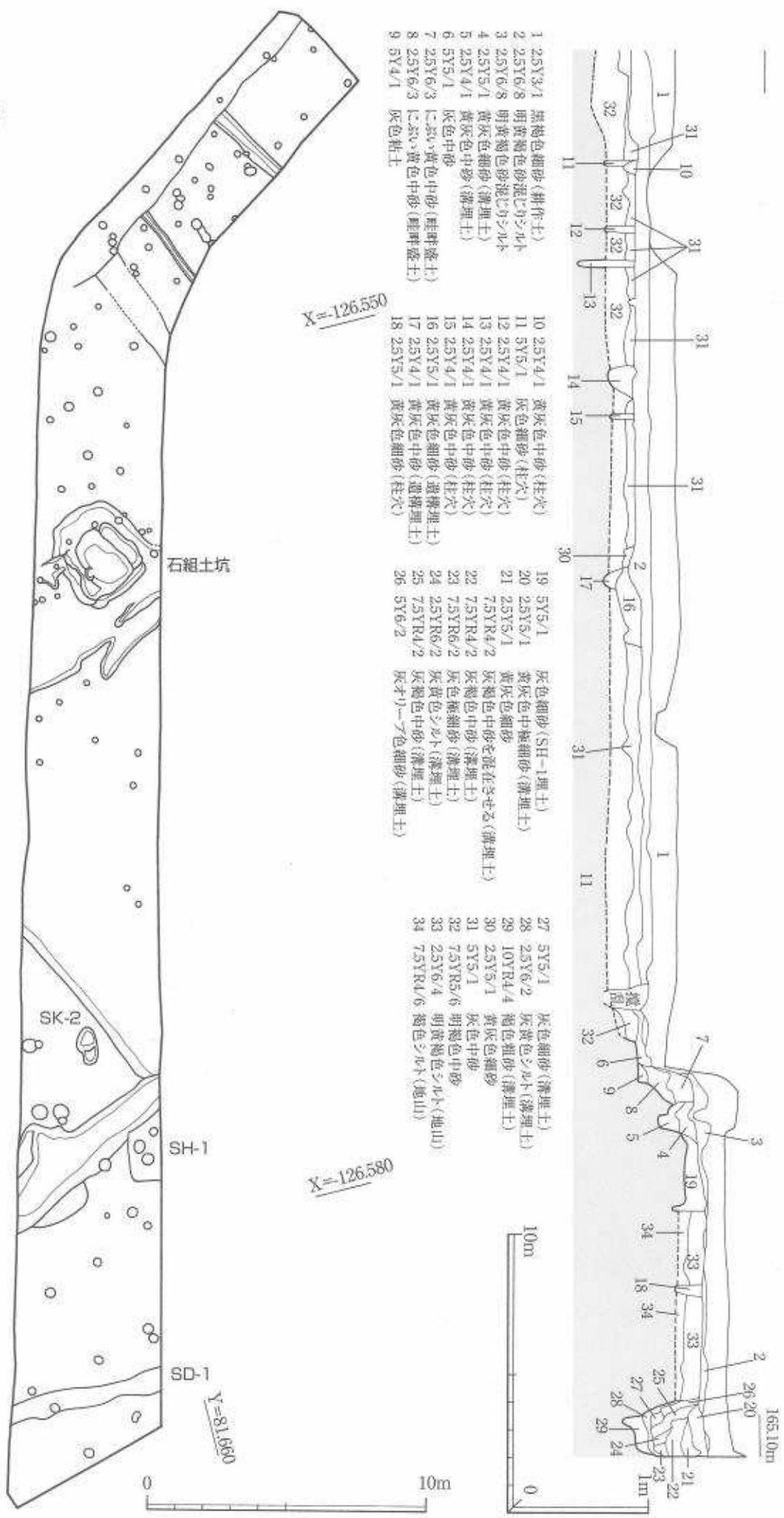
1区 SH-1 / SK-1



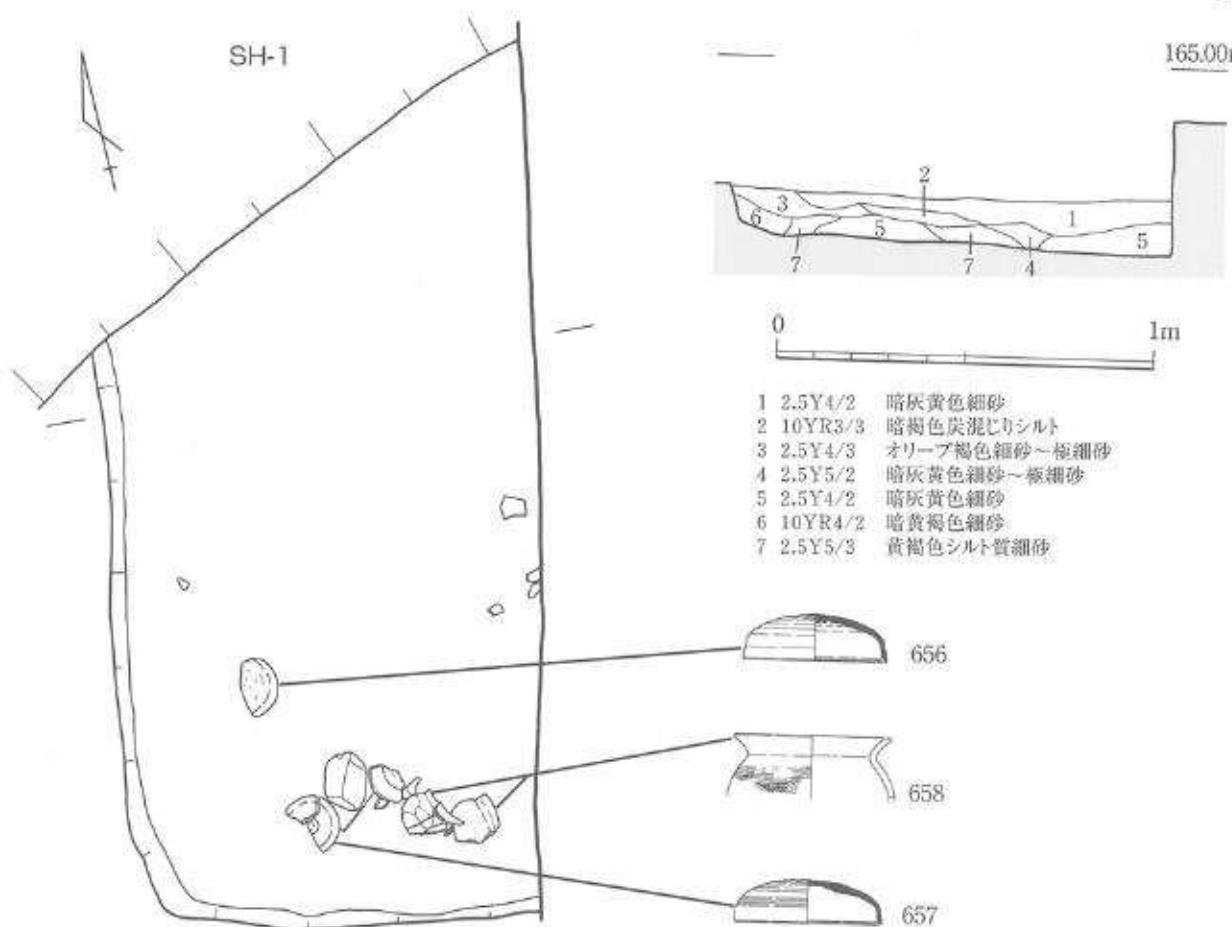
2区全体図 / 4区全体図

図版60

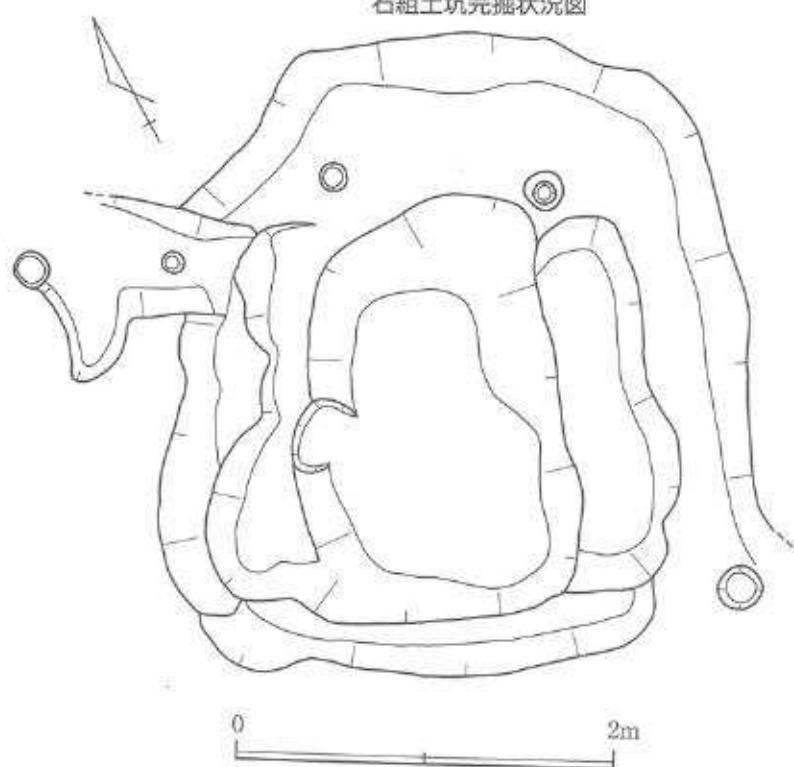
上才谷地区



3区全体図



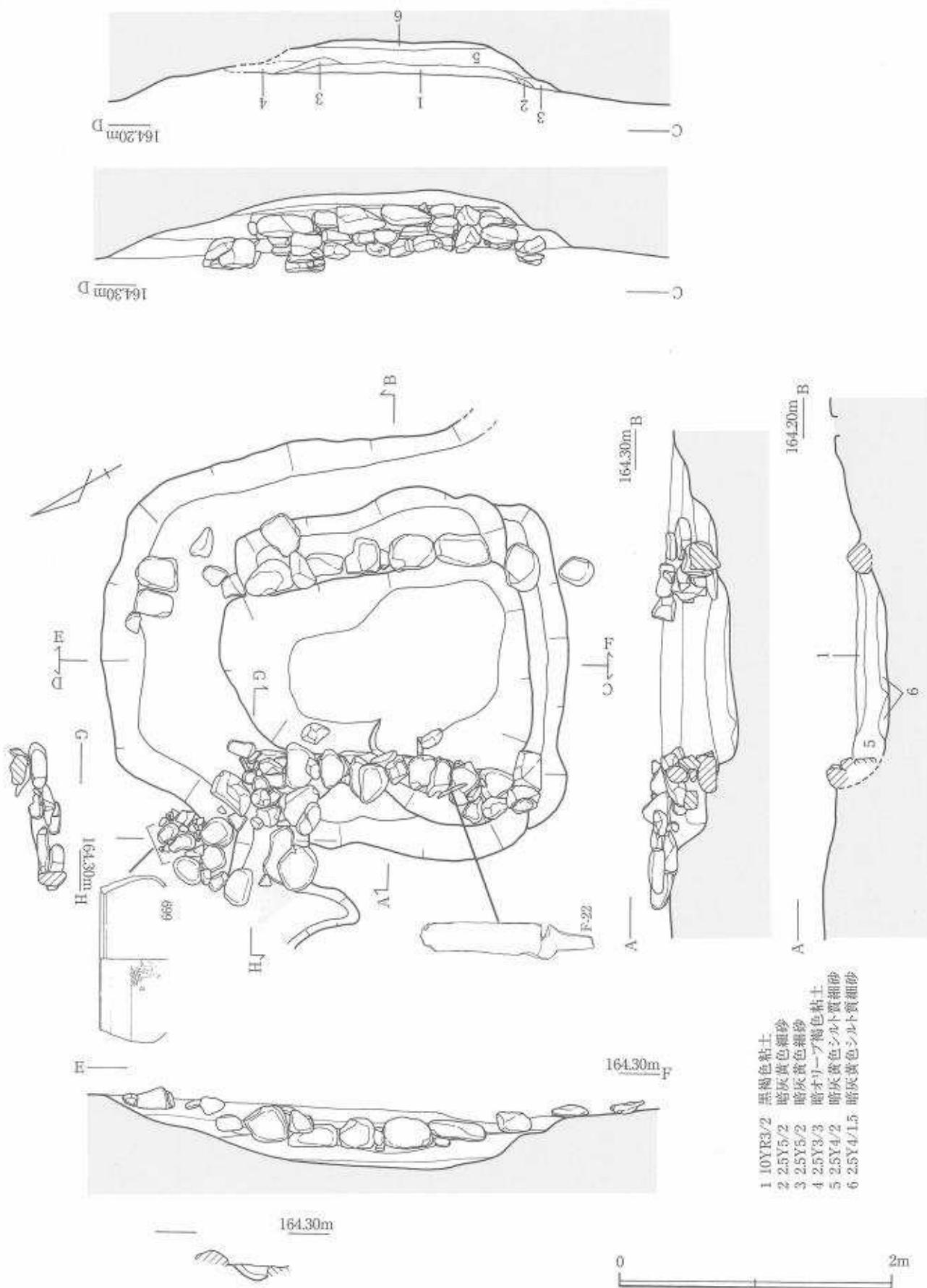
石組土坑完掘状況図



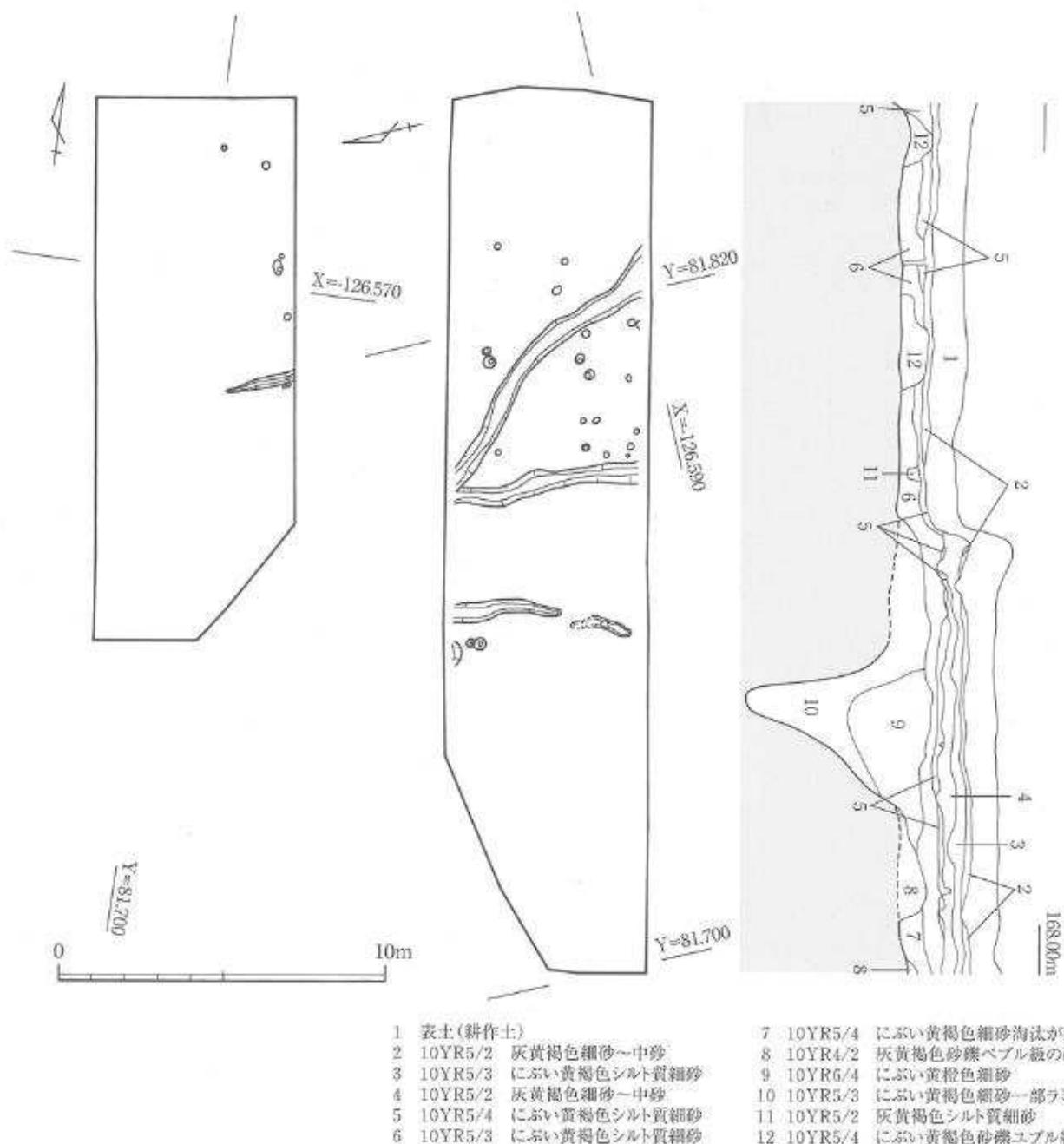
3区SH-1／石組土坑完掘状況図

図版62

上才谷地区



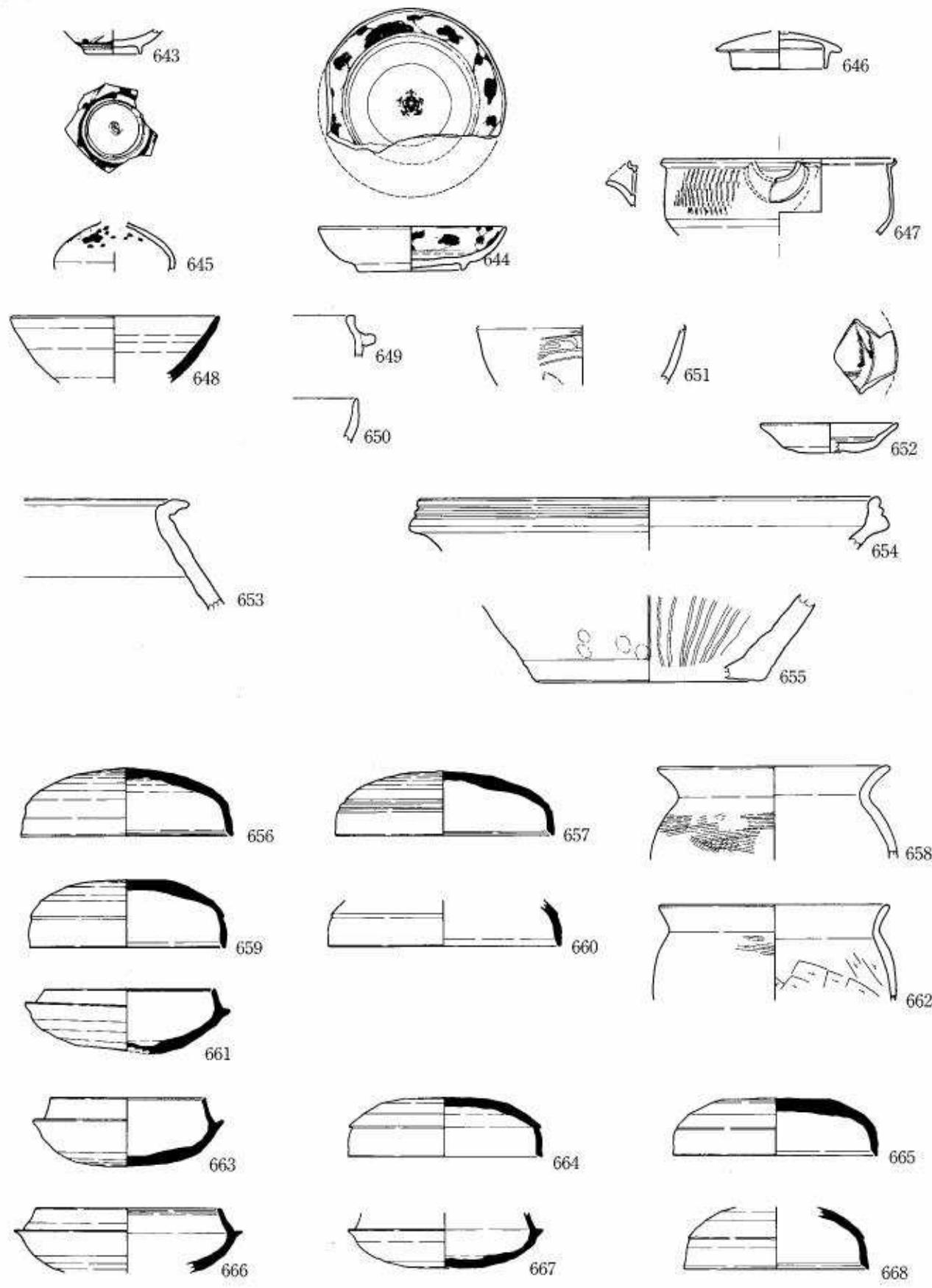
3区石組土坑



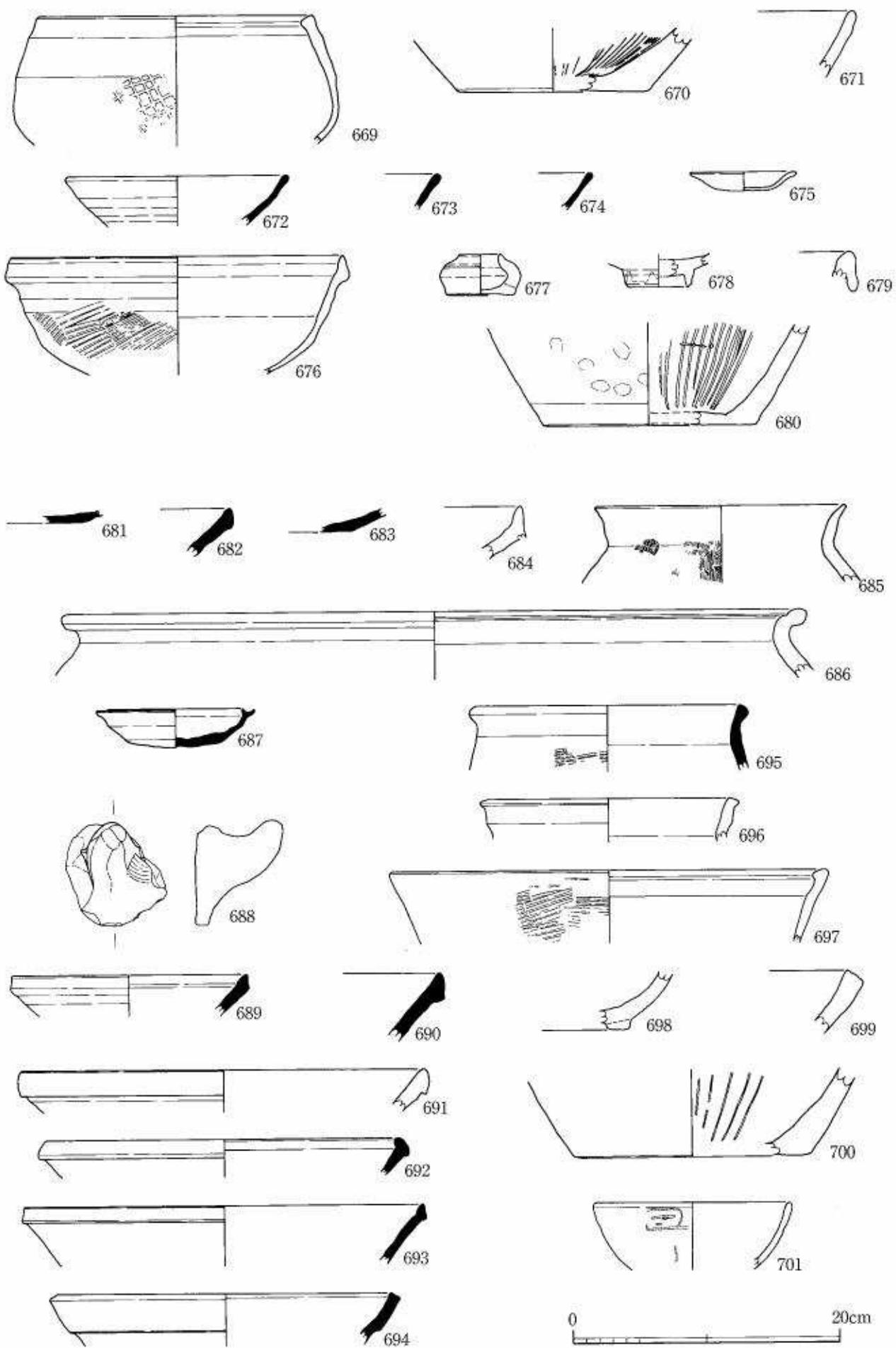
5区全体図／6区全体図

图版64

上才谷地区



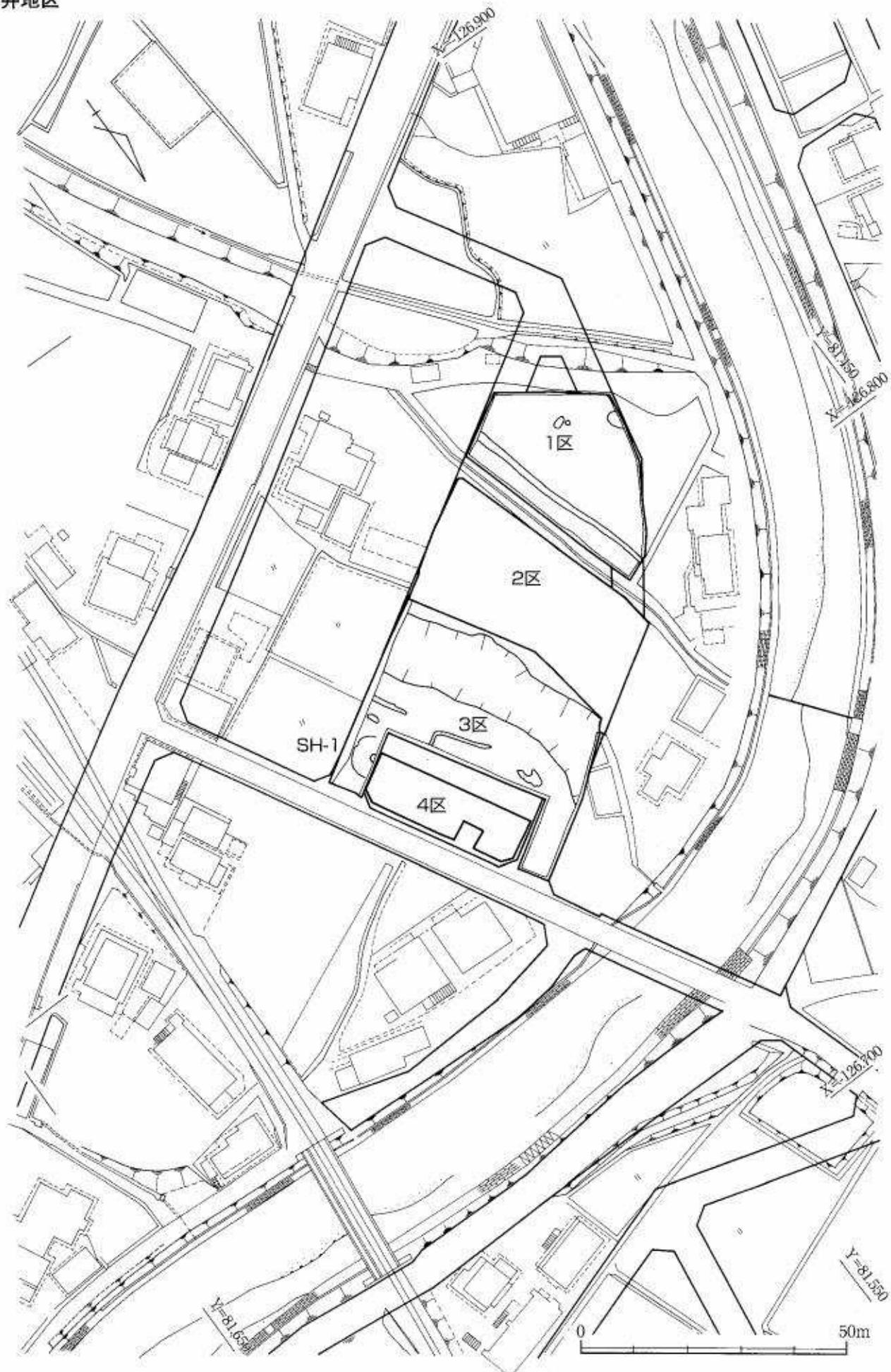
0 20cm



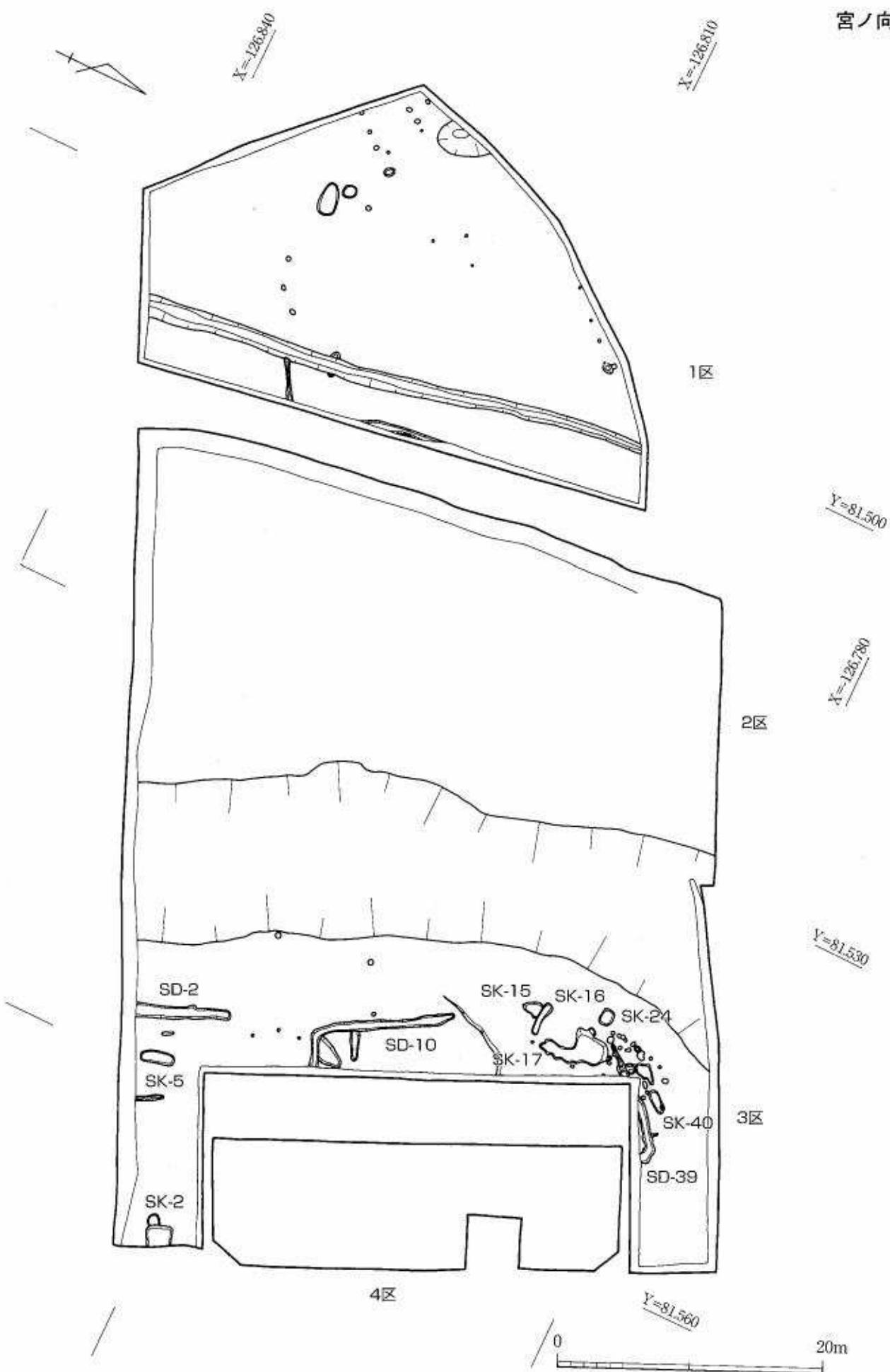
出土遺物 2

図版66

宮ノ向井地区



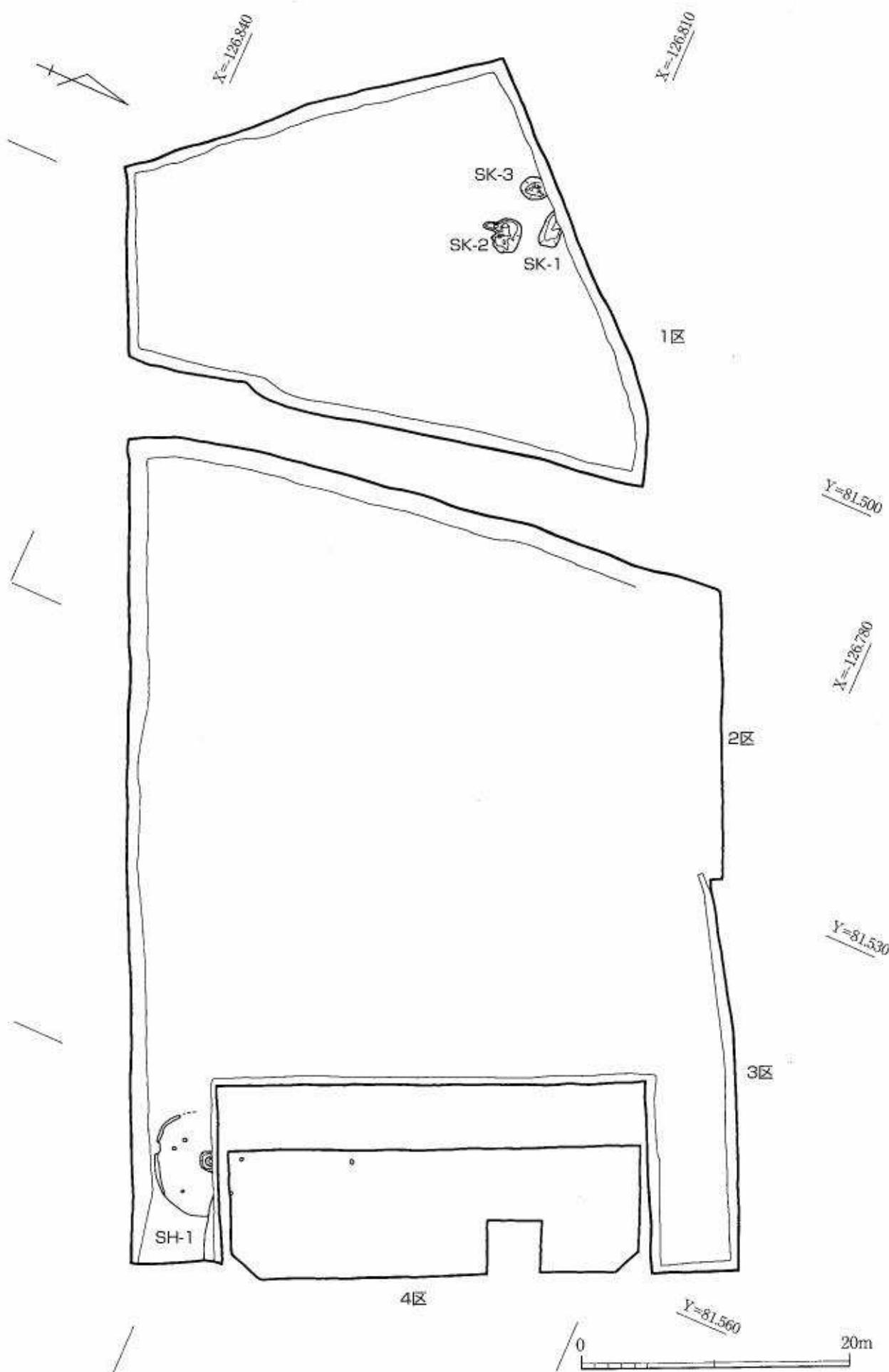
全体図



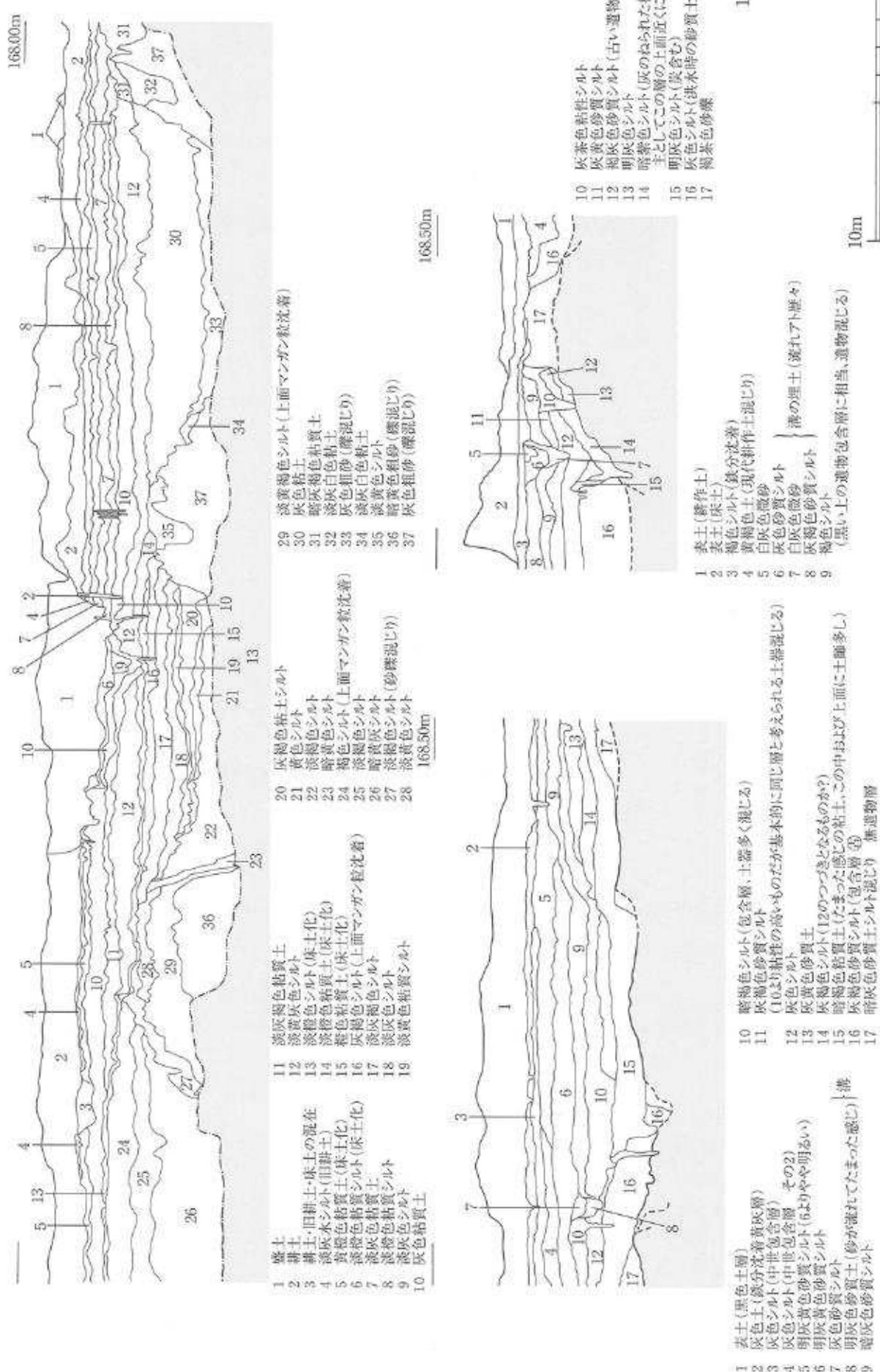
第1 遺構面平面図

図版68

宮ノ向井地区



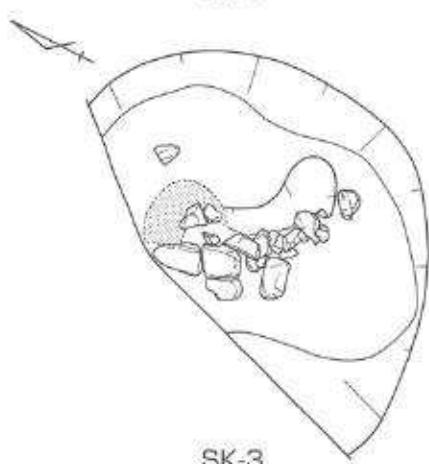
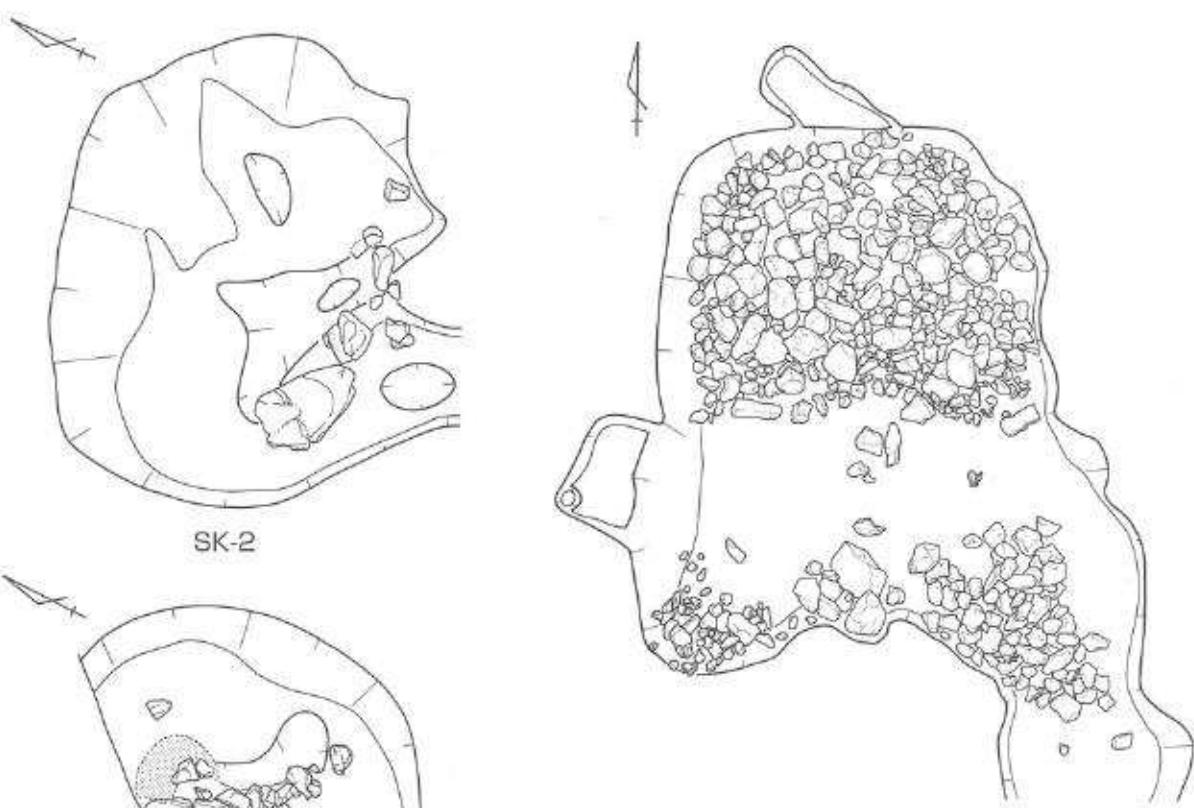
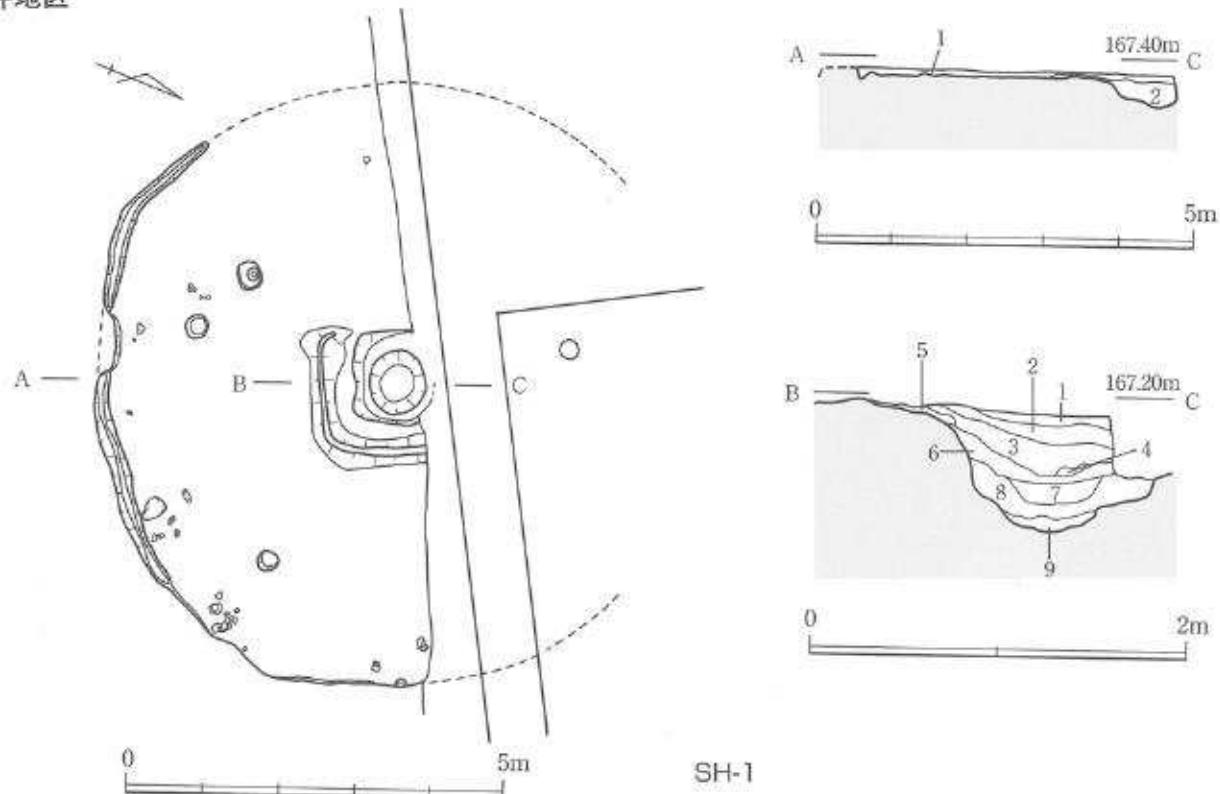
第2遺構面平面図



地質断面図

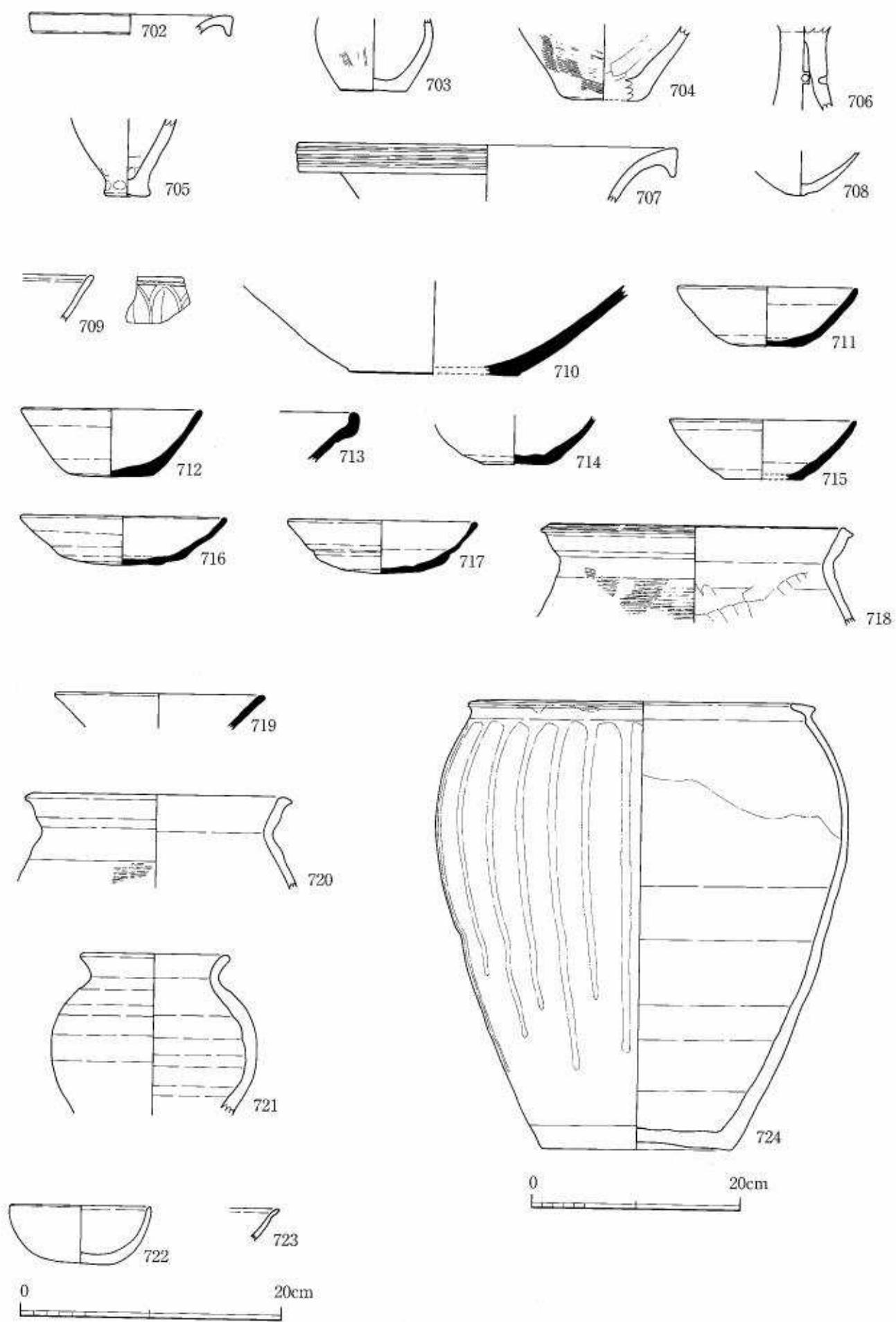
図版70

宮ノ向井地区



0 2m

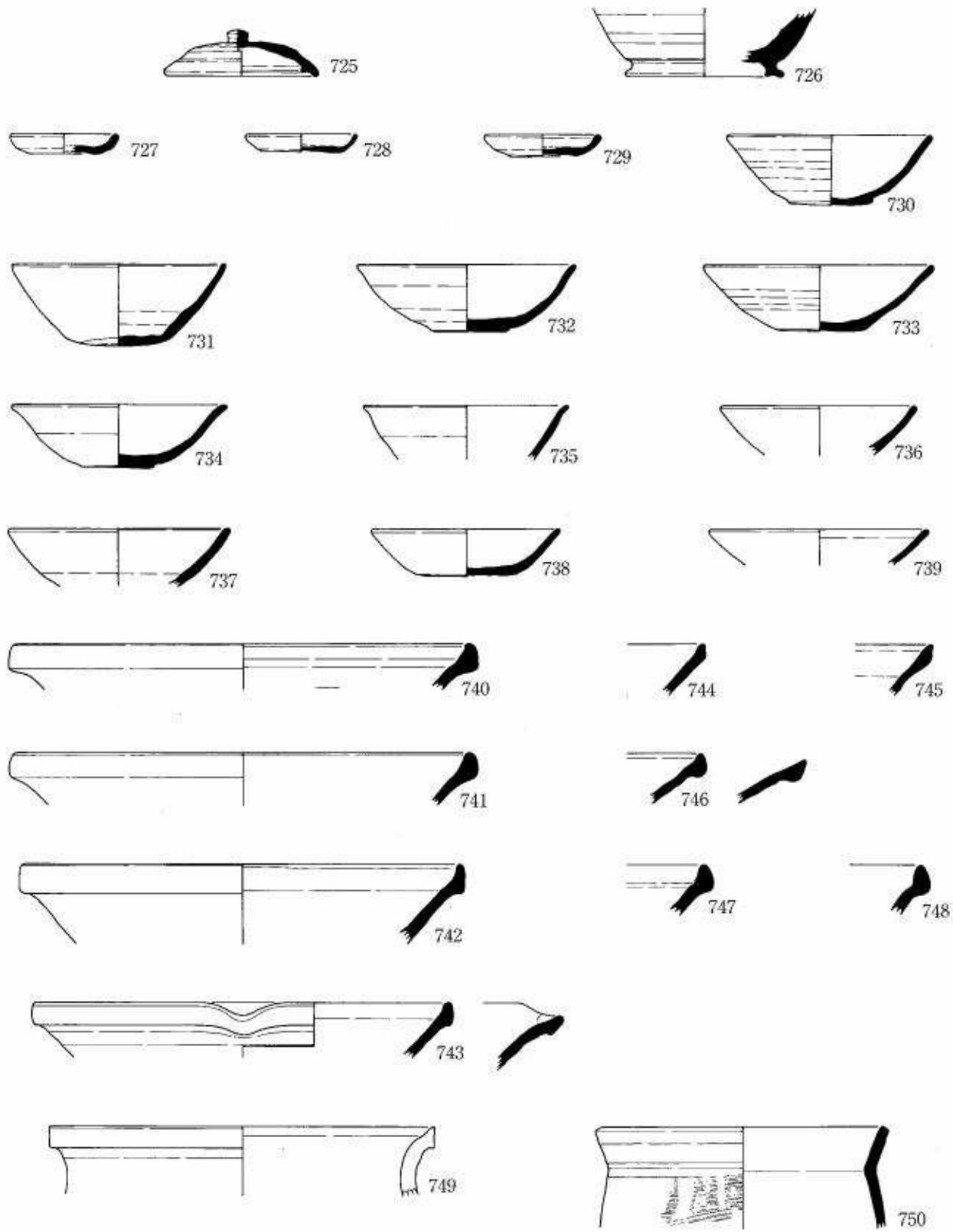
SH-1 / SK-2 / SK-3 / 集石土坑



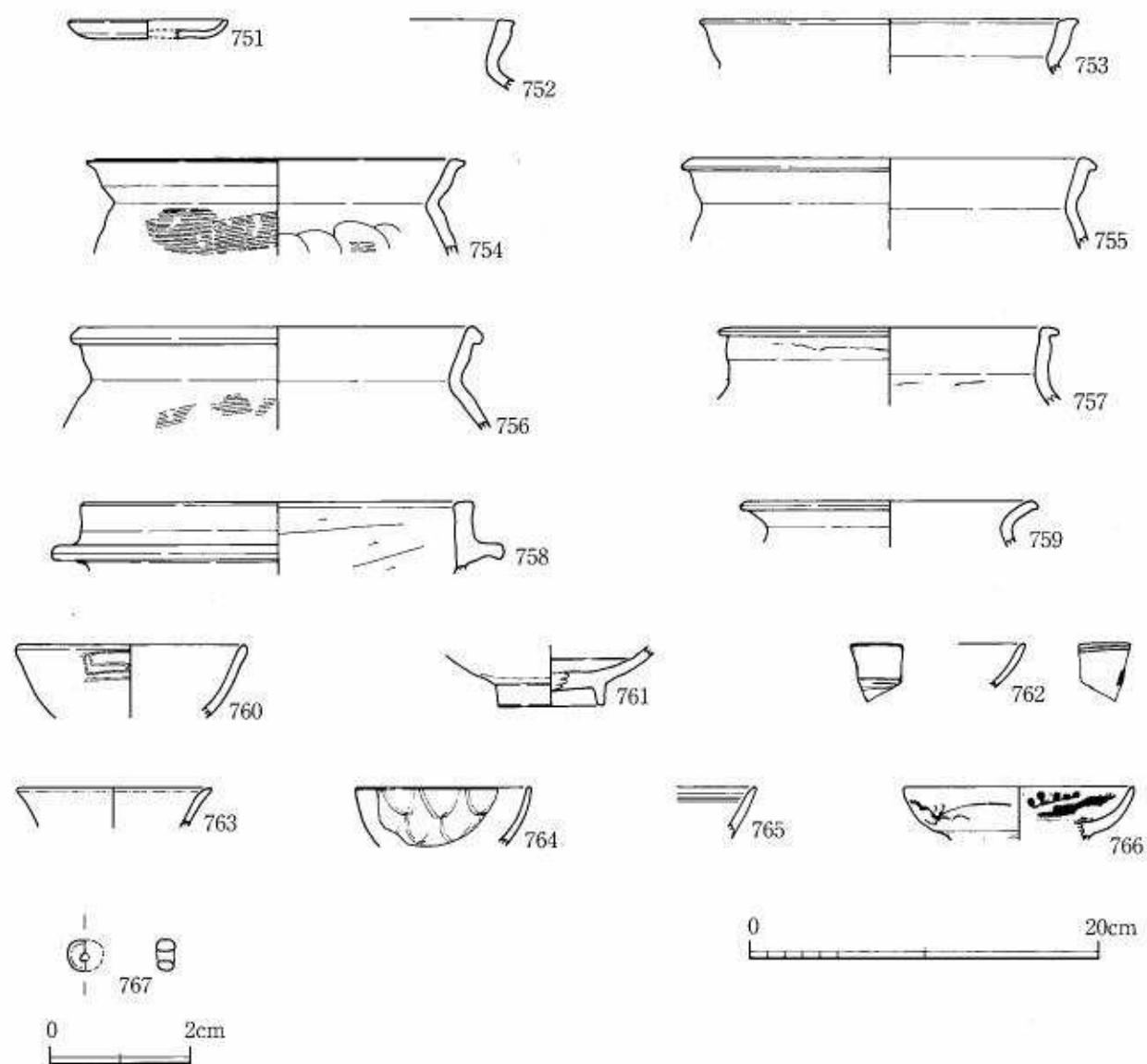
出土遺物 1

図版72

宮ノ向井地区



0 20cm

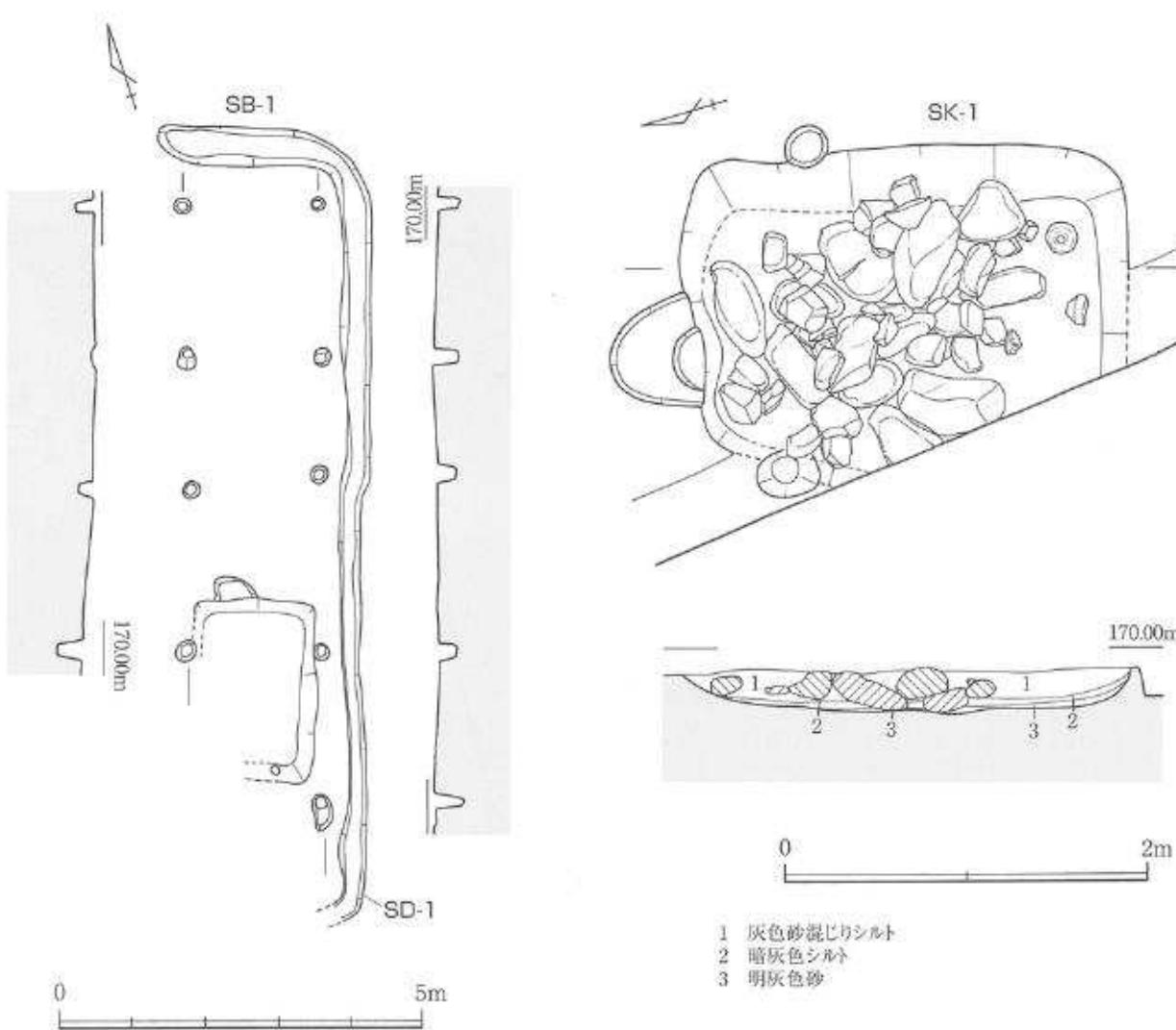
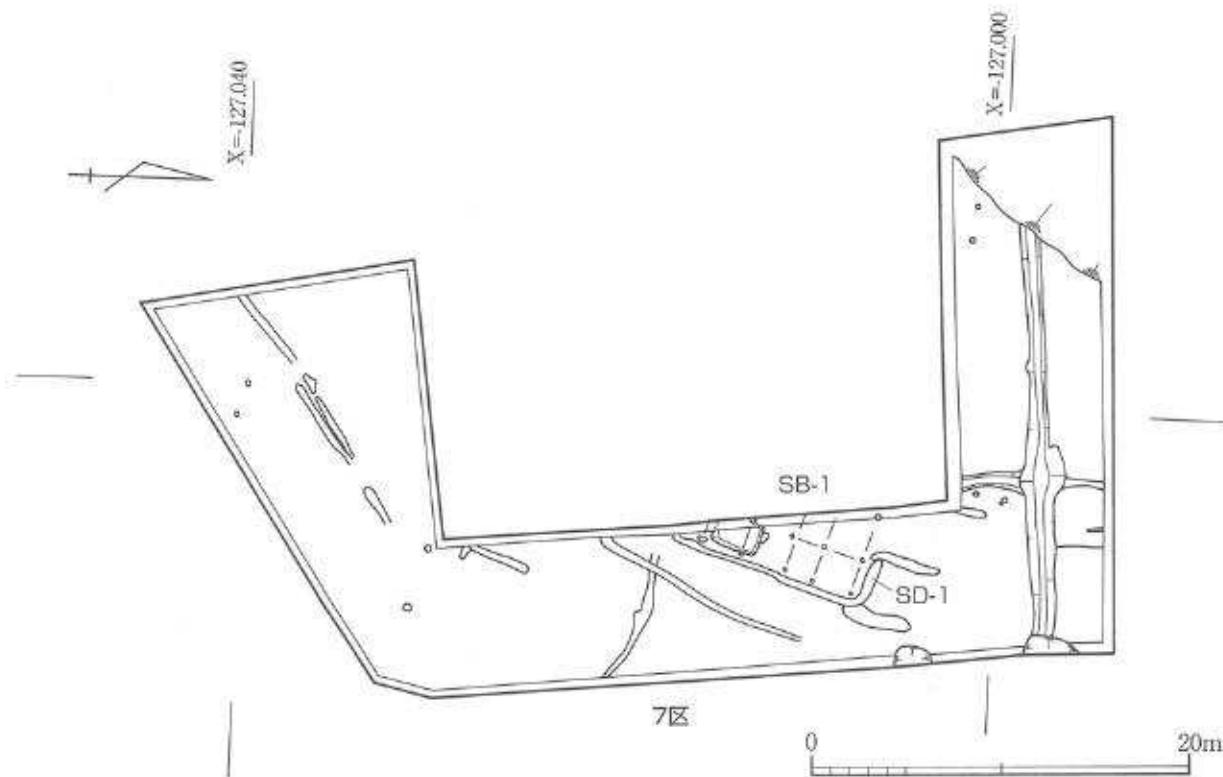


図版74

林ヶ鼻地区



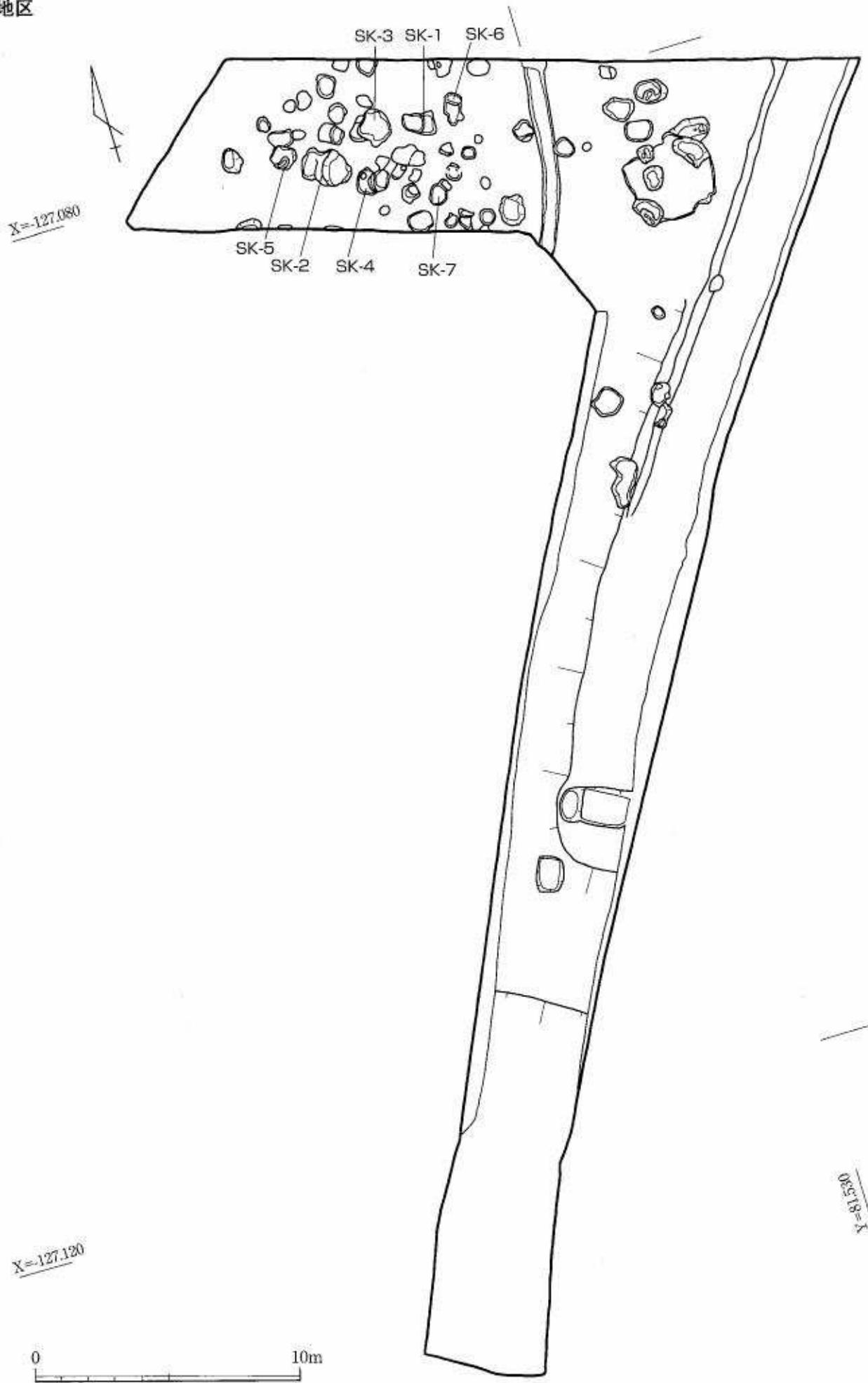
全体図



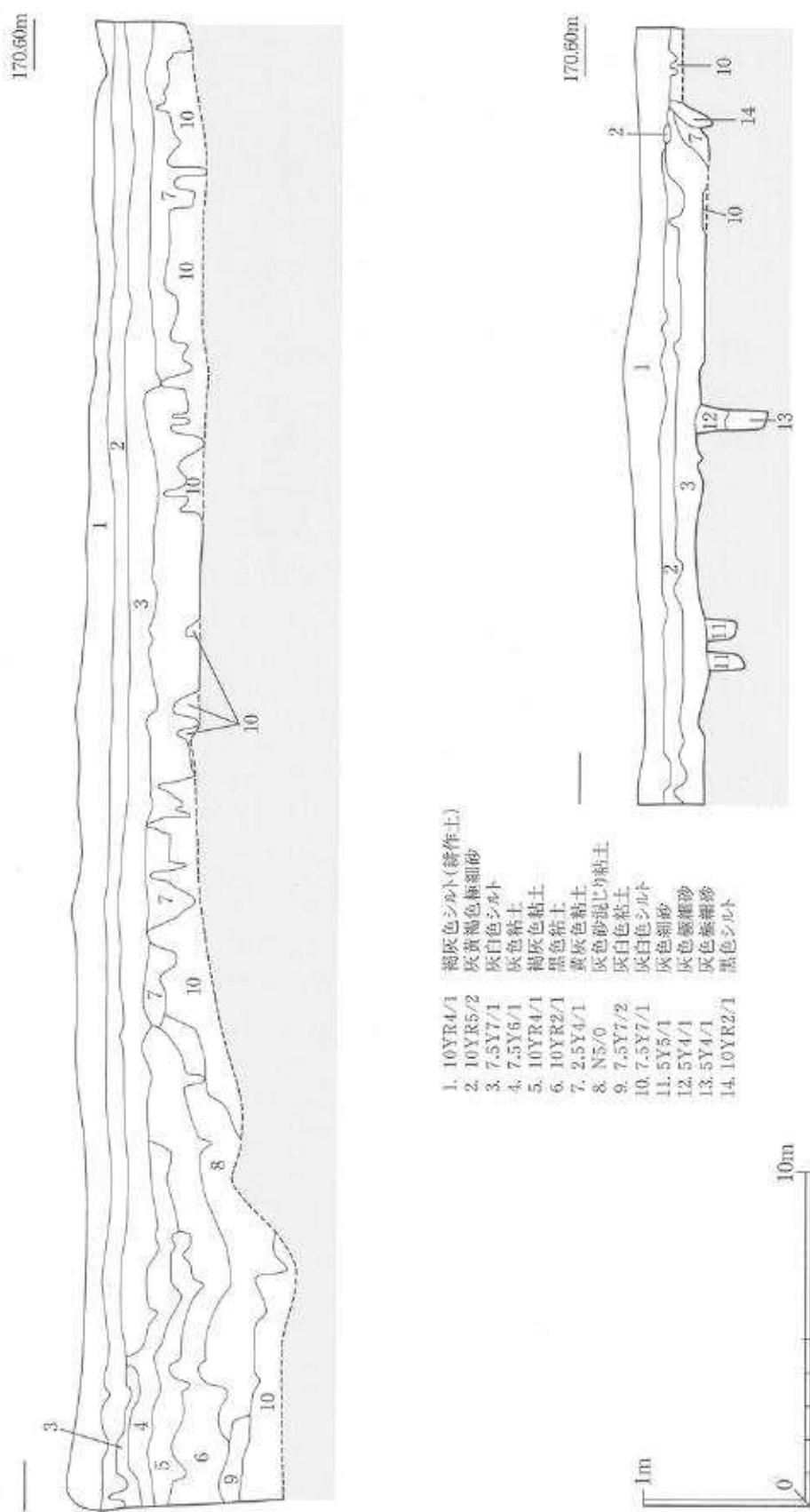
7区全体面図／SB-1／SK-1

図版76

林ヶ鼻地区



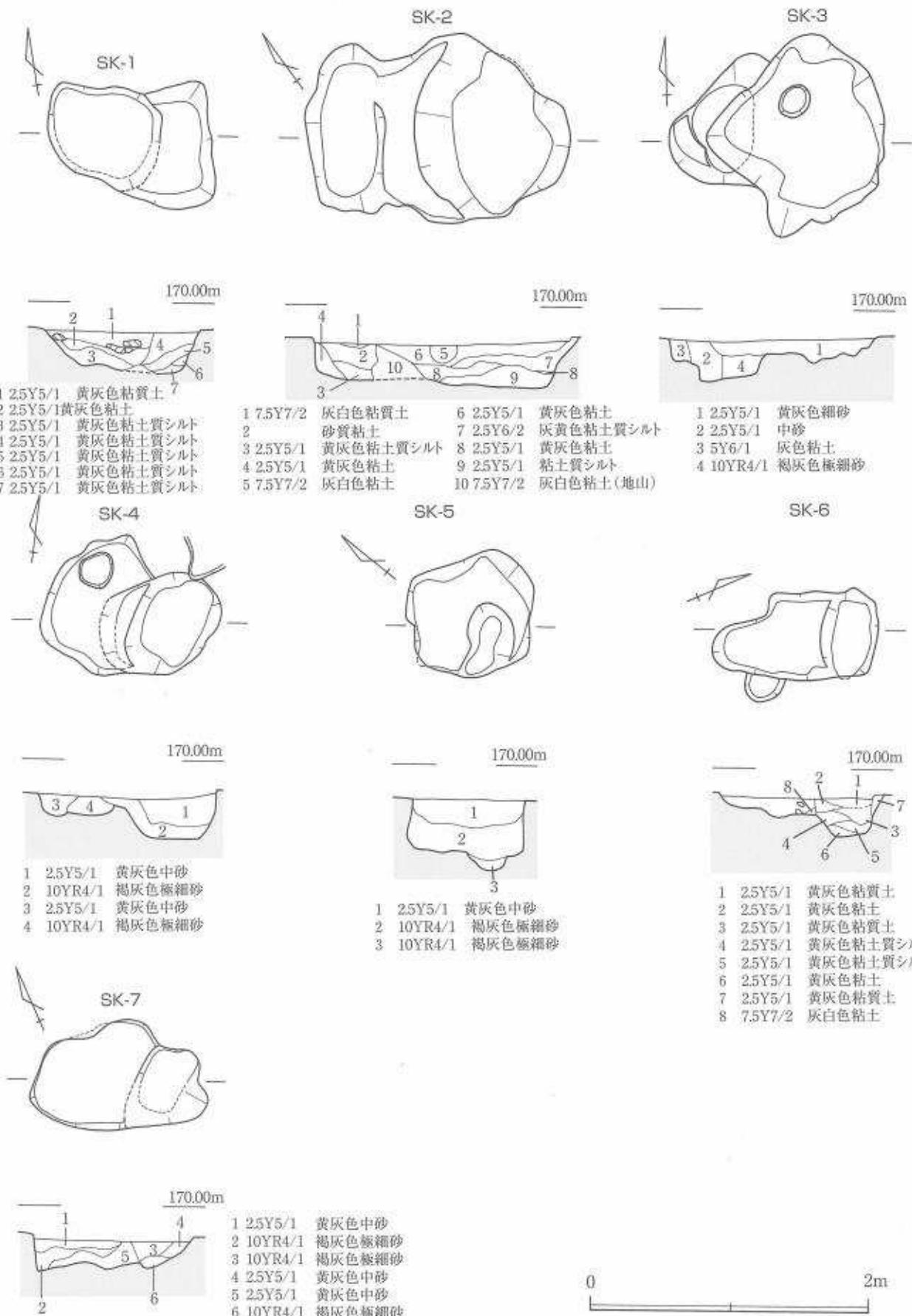
10区全体図

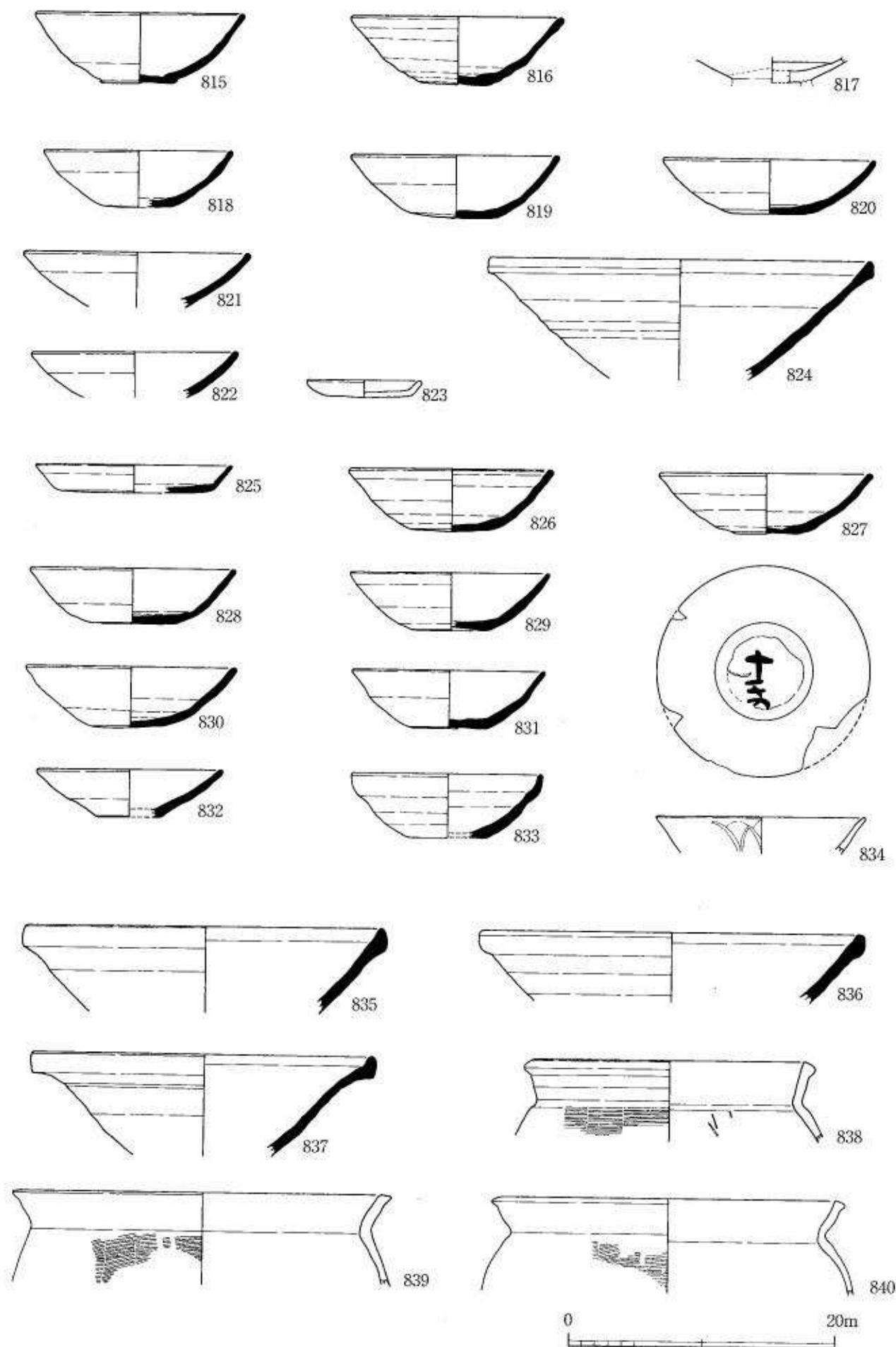


10区土層図

図版78

林ヶ鼻地区

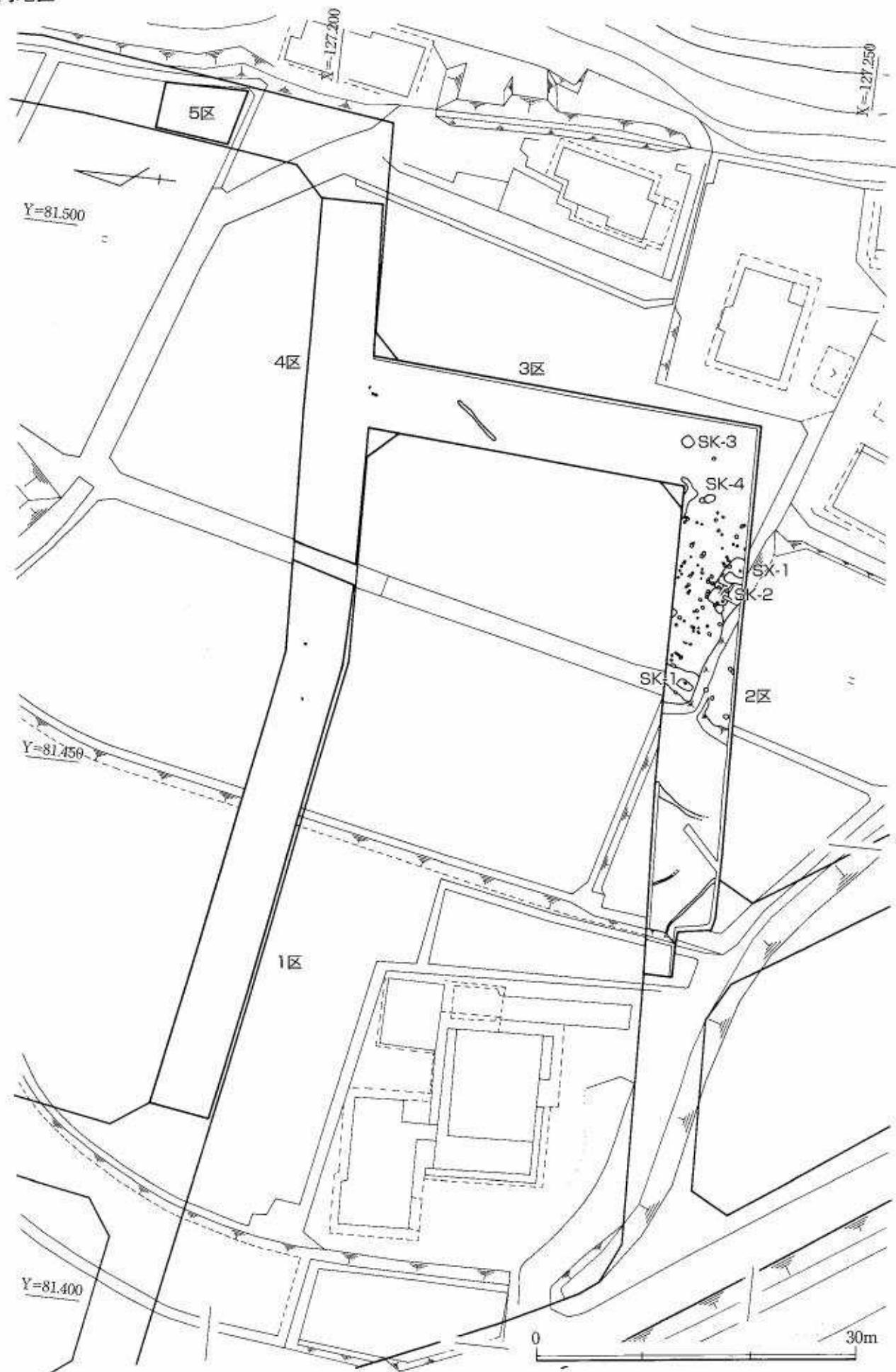




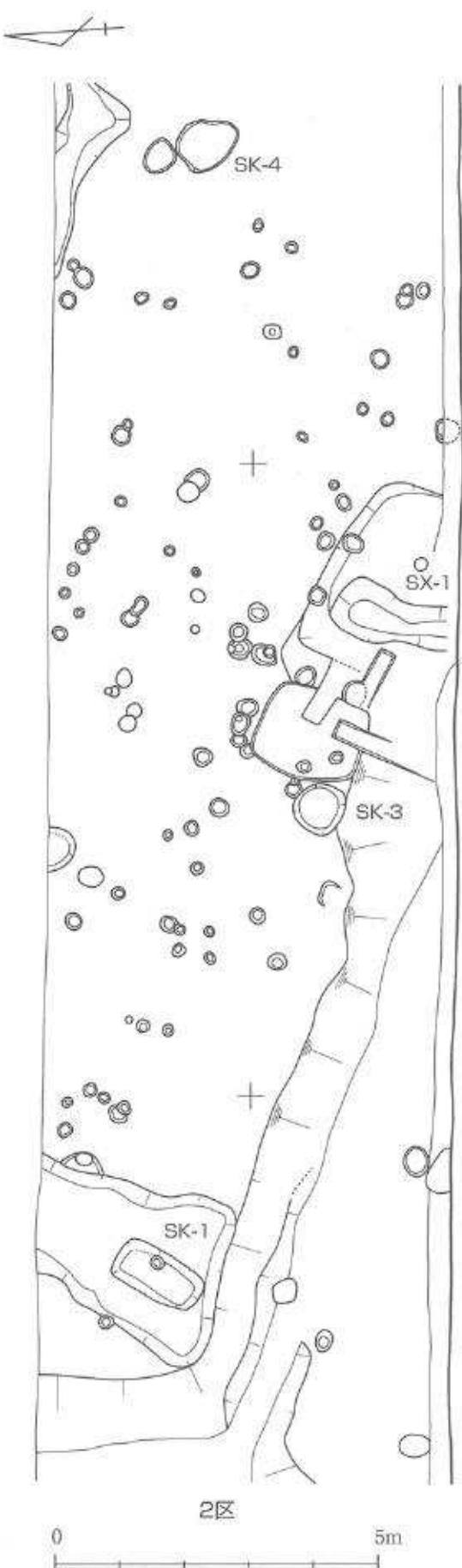
出土遺物

図版80

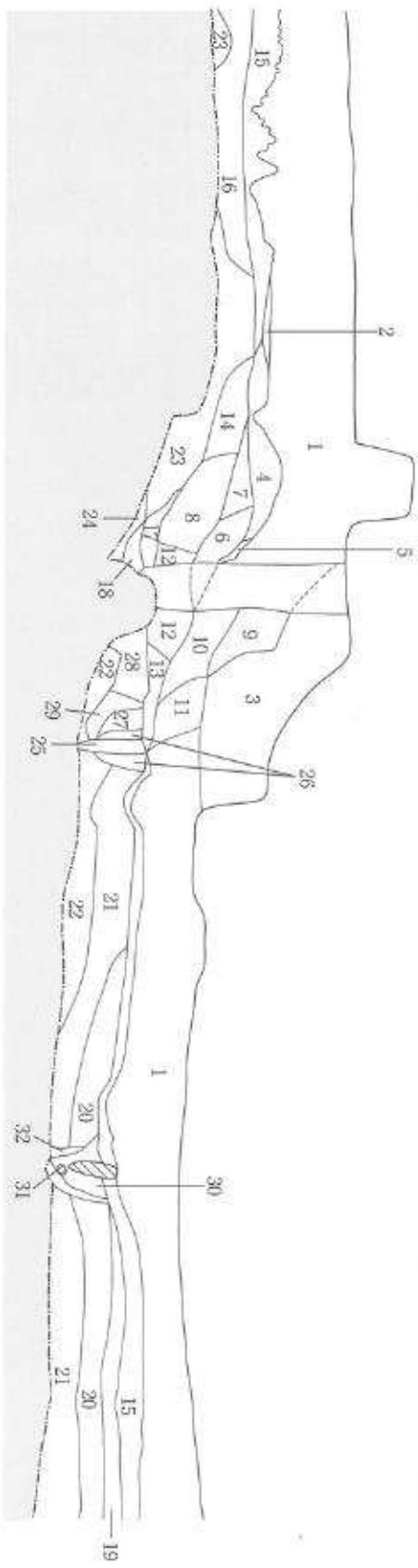
坂本塙内地区



坂本塙内地区全体図



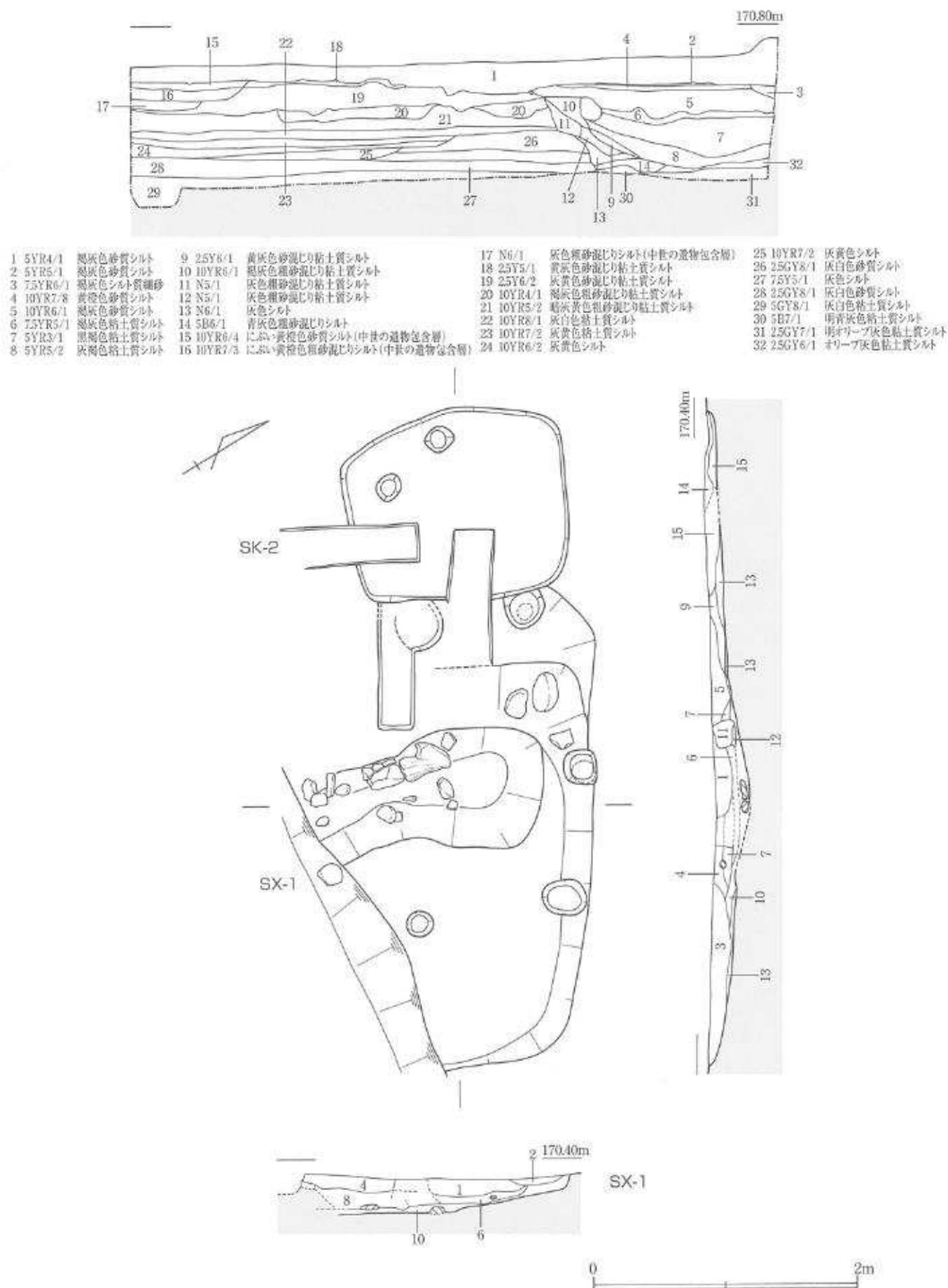
- | | | | |
|-----------|----------------|------------|------------------|
| 1 5YR4/1 | 褐色色帶質シルト(耕作土) | 9 10YR6/2 | 灰黃褐色帶質シルト(耕作土) |
| 2 10YR5/1 | 褐色色帶質シルト(耕作土) | 10 10YR7/2 | にさび黄褐色帶質シルト(耕作土) |
| 3 10YR4/1 | 褐色色帶質シルト(耕作土) | 11 10YR8/8 | 黄褐色帶質シルト |
| 4 10YR6/8 | 明黄褐色シルト質細砂 | 12 10YR7/1 | 灰白色シルト質細砂 |
| 5 10YR6/1 | 褐色色シルト質細砂 | 13 25Y8/1 | 灰白色細砂～中砂 |
| 6 10YR7/2 | にさび黄褐色粗砂Eりシルト | 14 5Y8/1 | 灰白色シルト質細砂 |
| 7 10YR7/2 | 灰白色シルト混じり細砂～中砂 | 15 10YR8/8 | 黄褐色シルト |
| 8 25Y8/3 | 淡黄色シルト | 16 10YR8/8 | 黄褐色シルト |



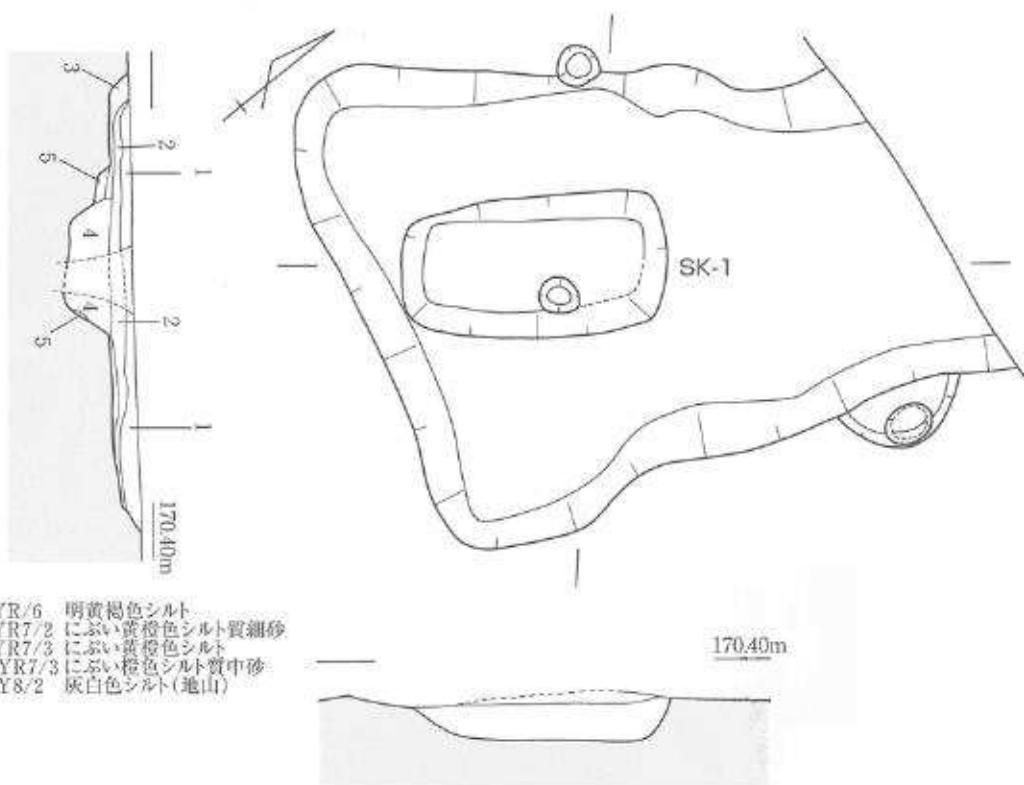
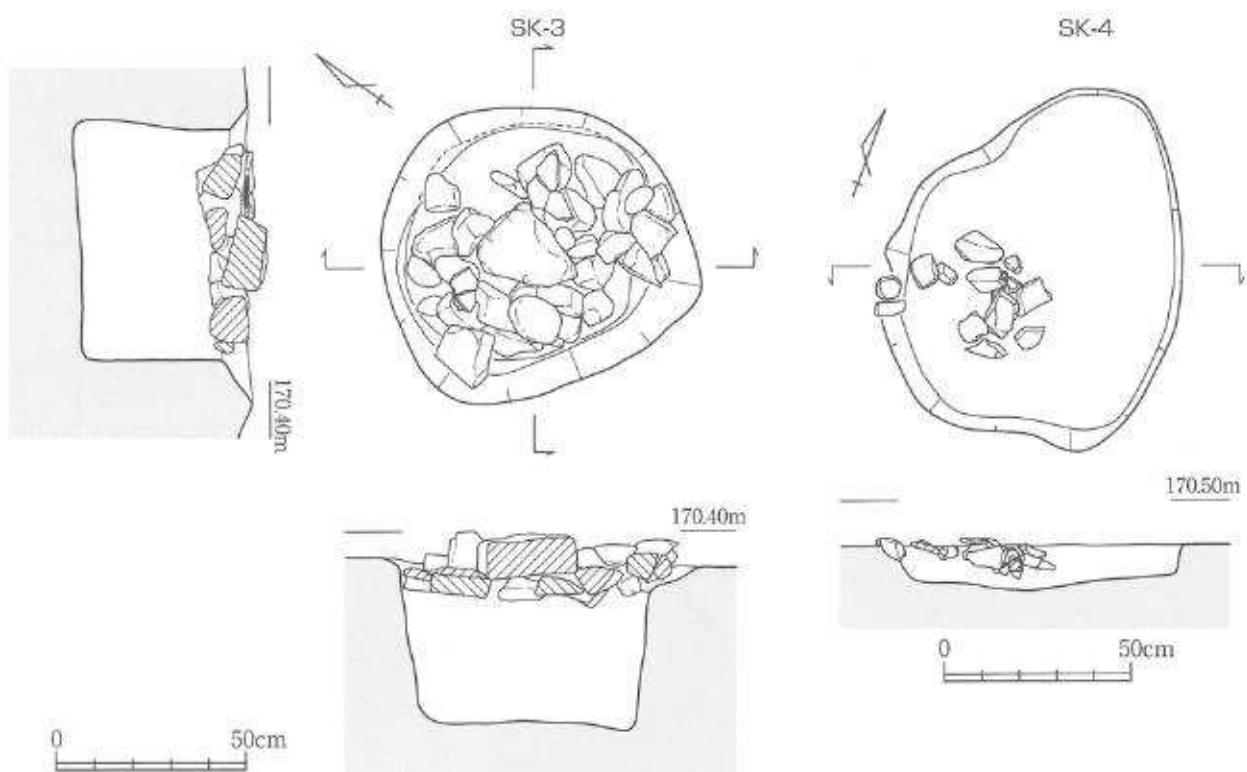
2区主要遺構全体図

図版82

坂本壠内地区



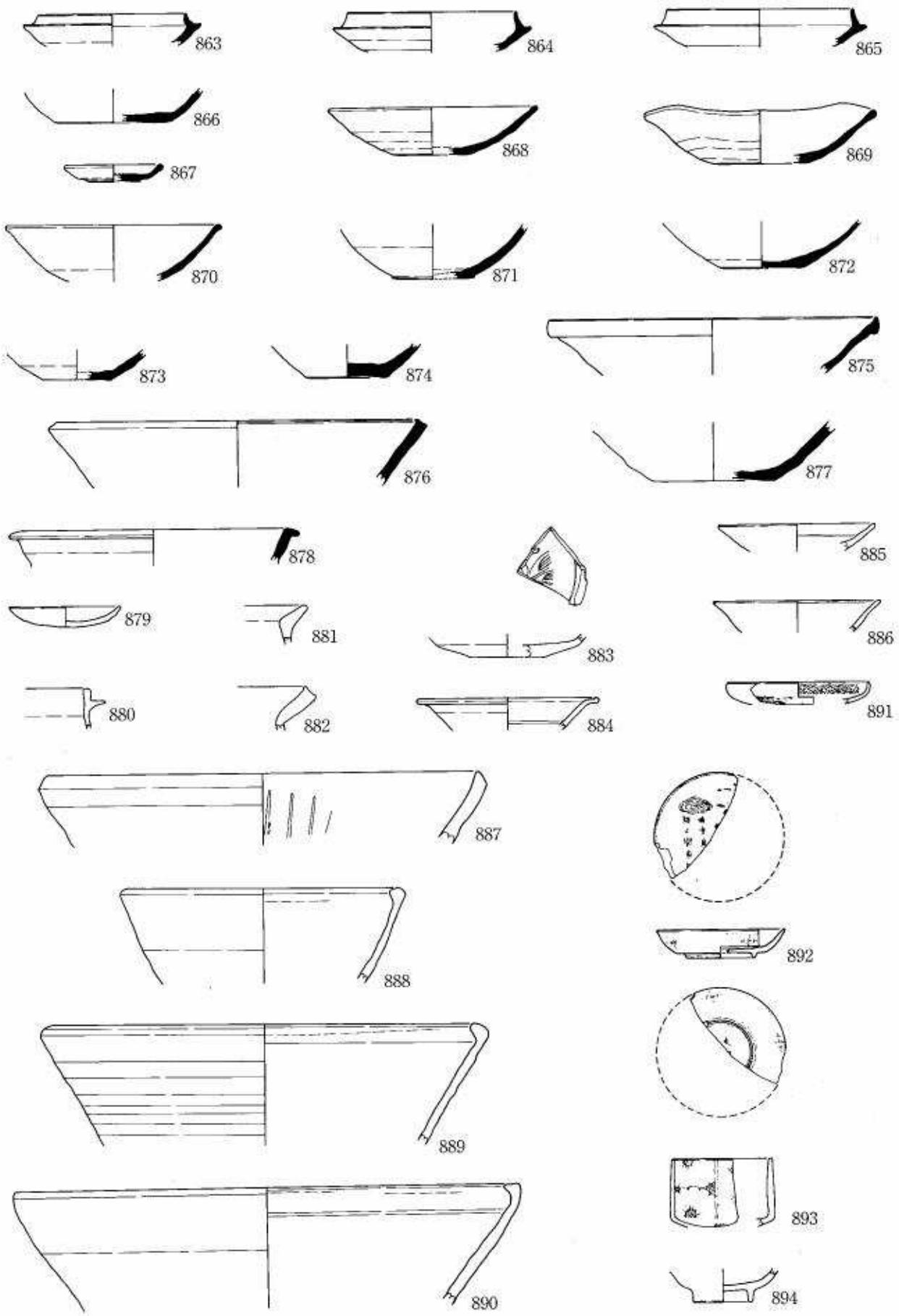
5区土層図／SX-1

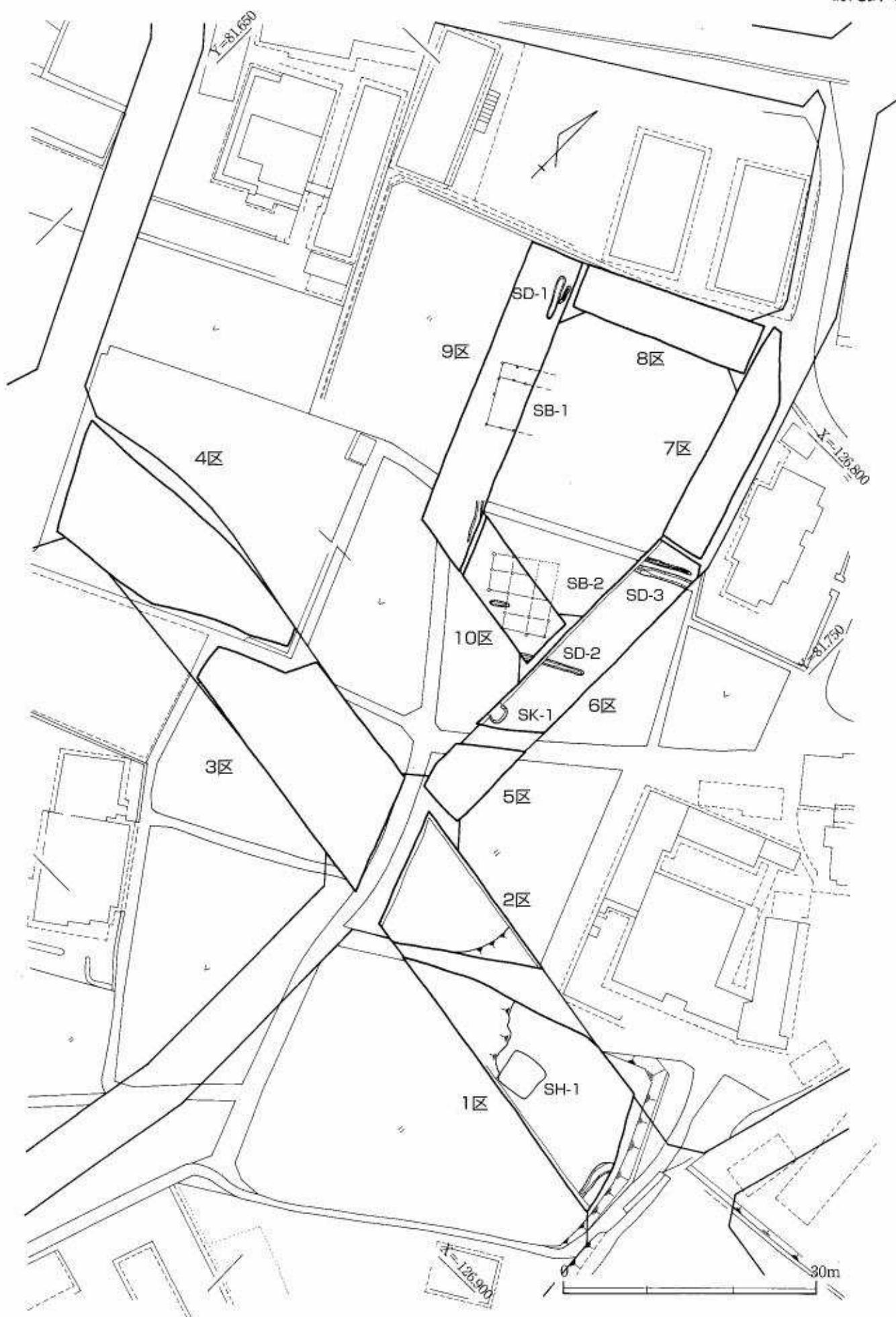


SK-1 / SK-2 / SK-3

図版84

坂本壙内地区

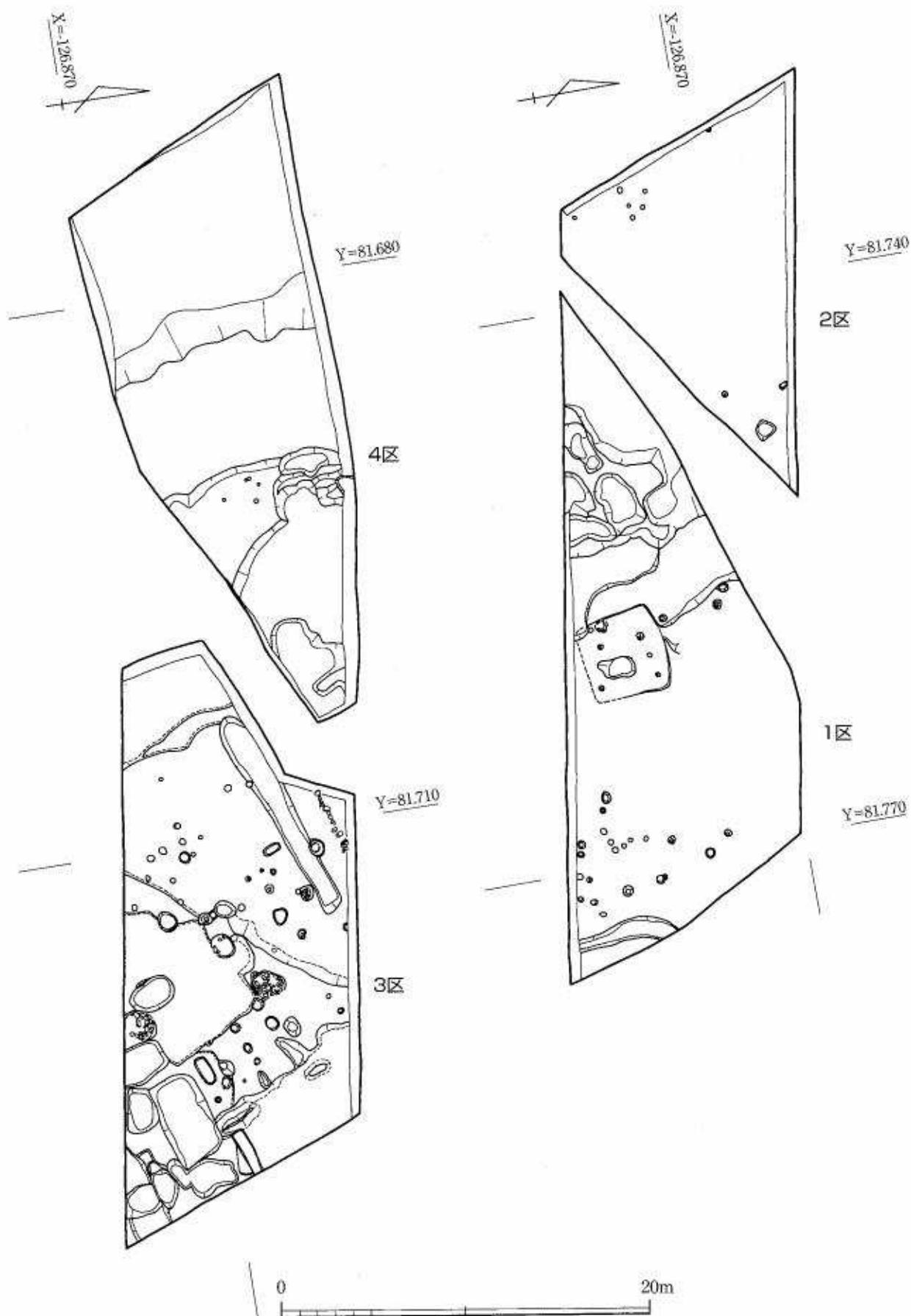




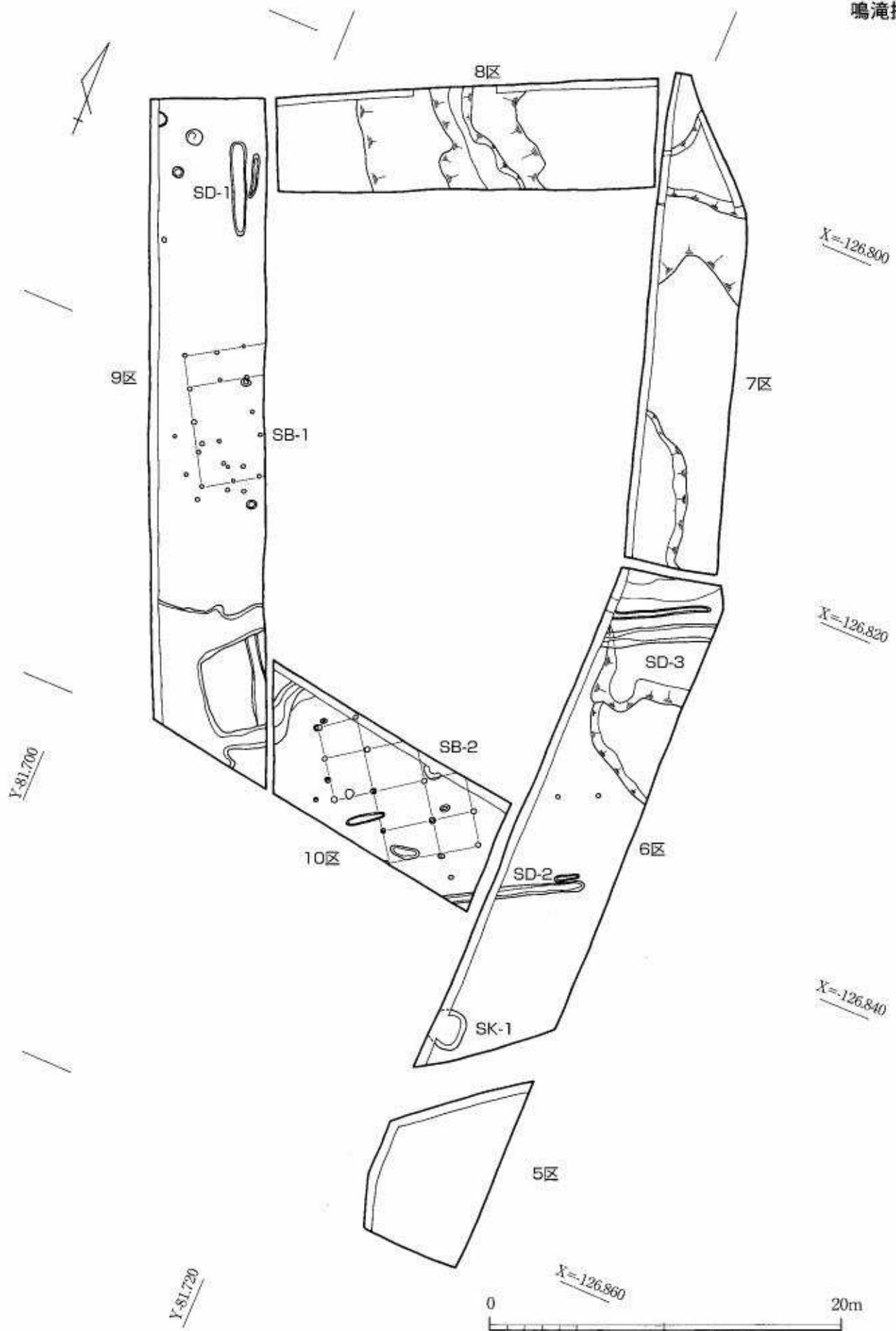
全体図

図版86

鳴滝掛り地区



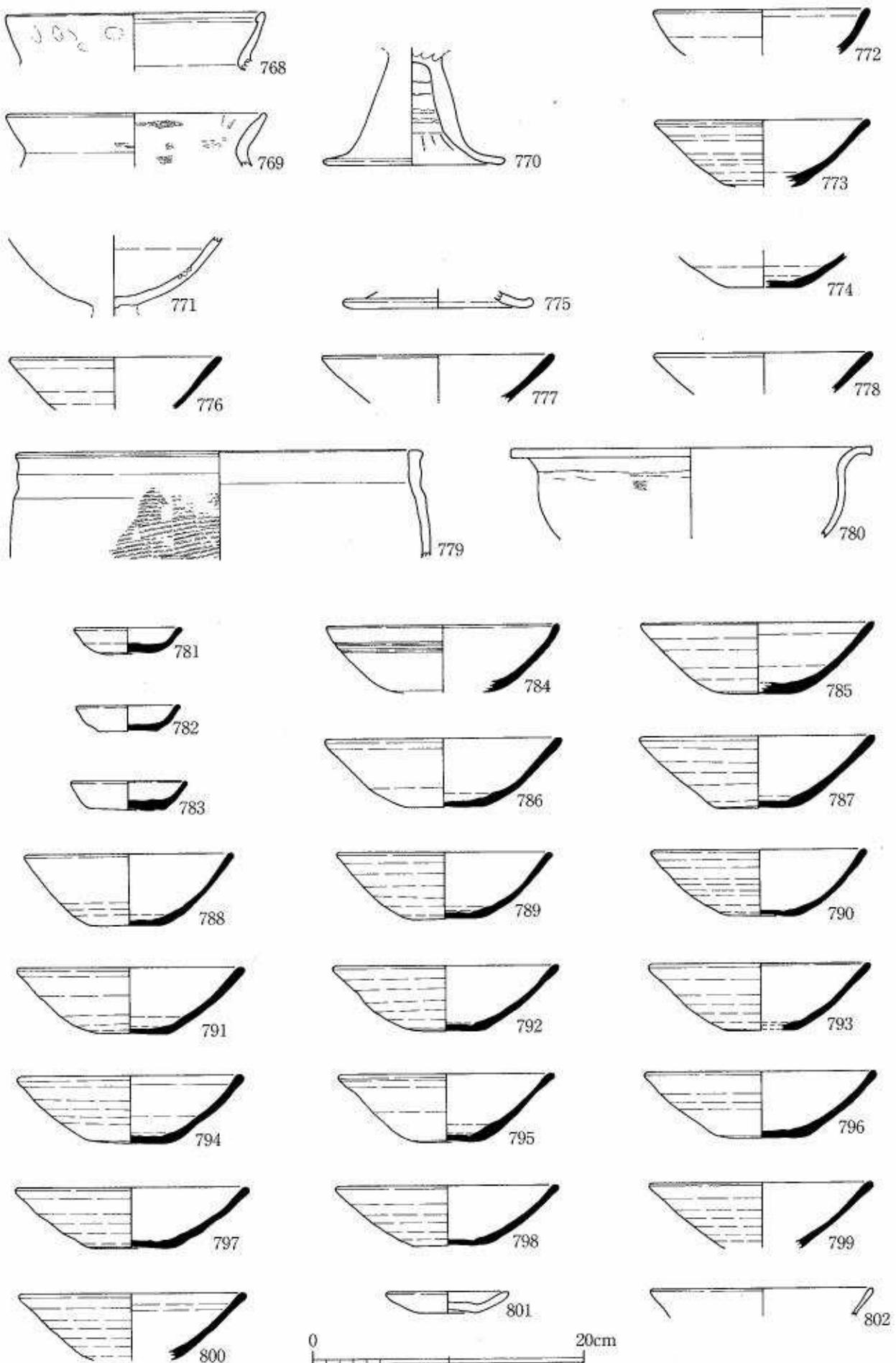
1・2区全体図／3・4区平面図



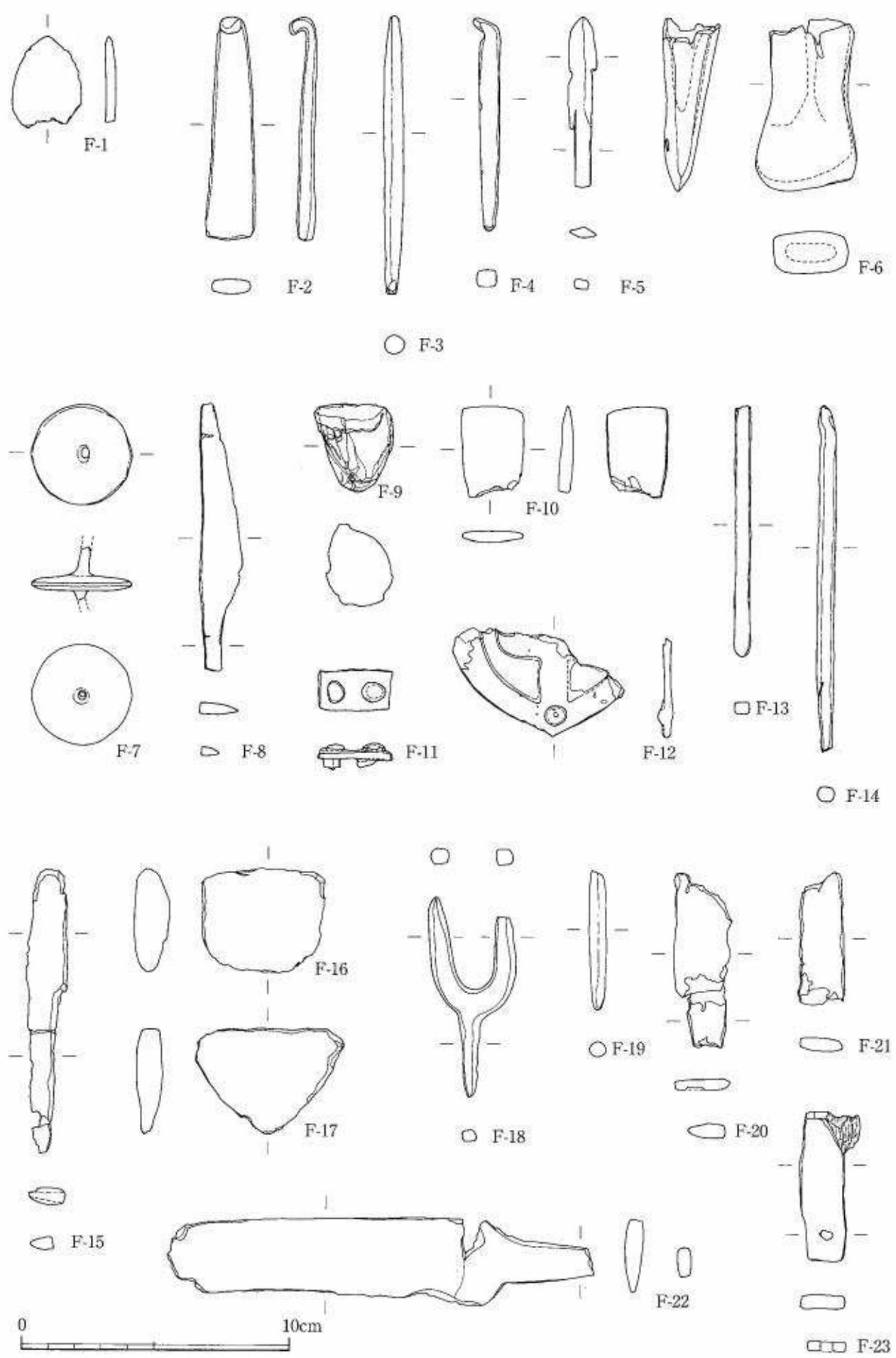
5・6・7・8・9・10区全体図

図版88

鳴滝掛り地区

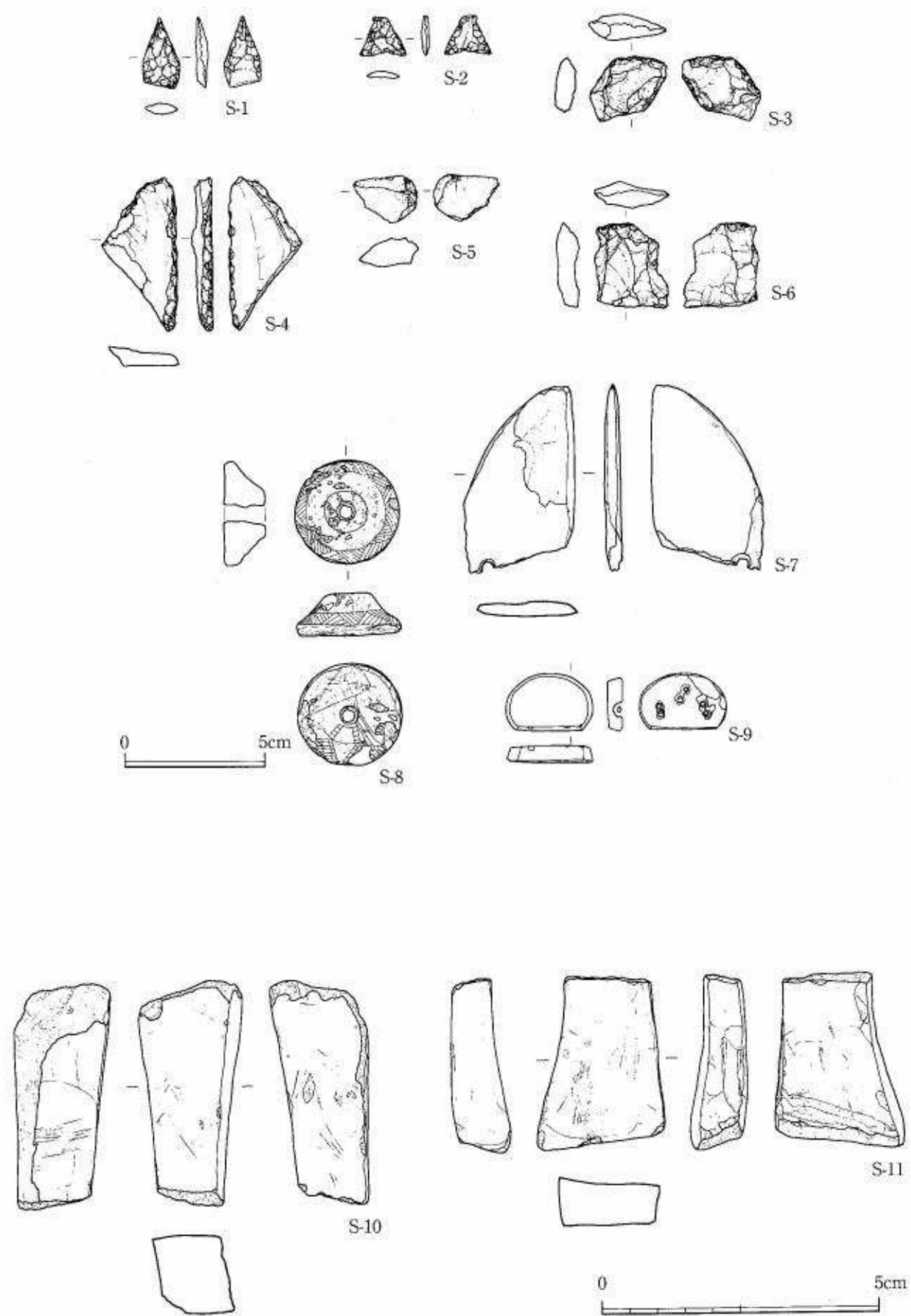


出土遺物 1



各地区出土鉄製品

図版90



各地区出土石製品

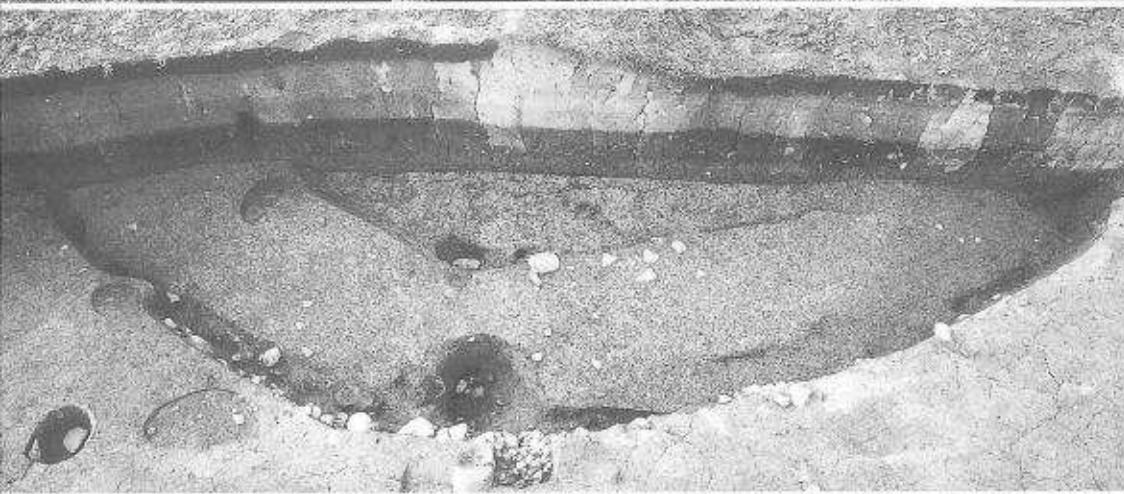
写真図版

木之元地区 4区

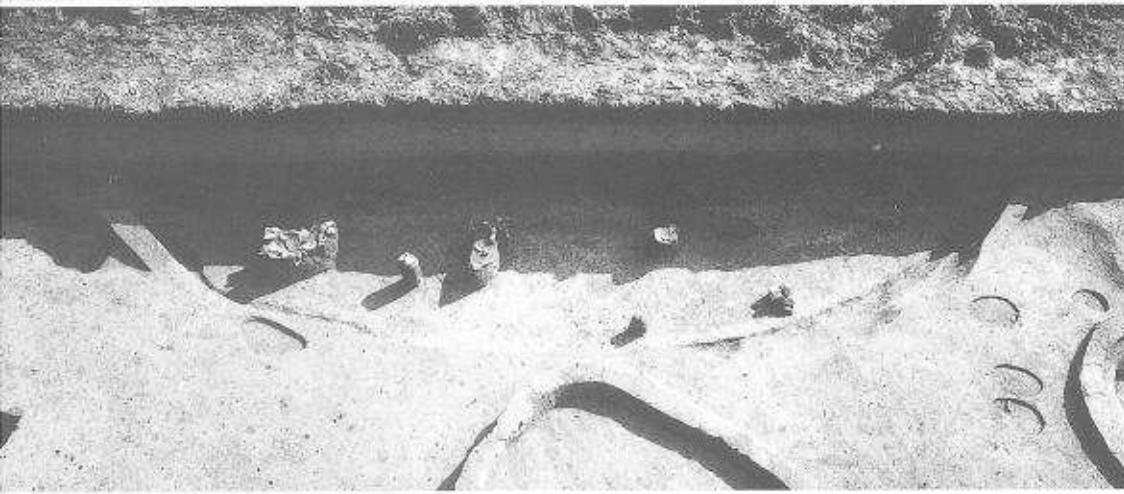




S H - 1 + 9



S H - 2

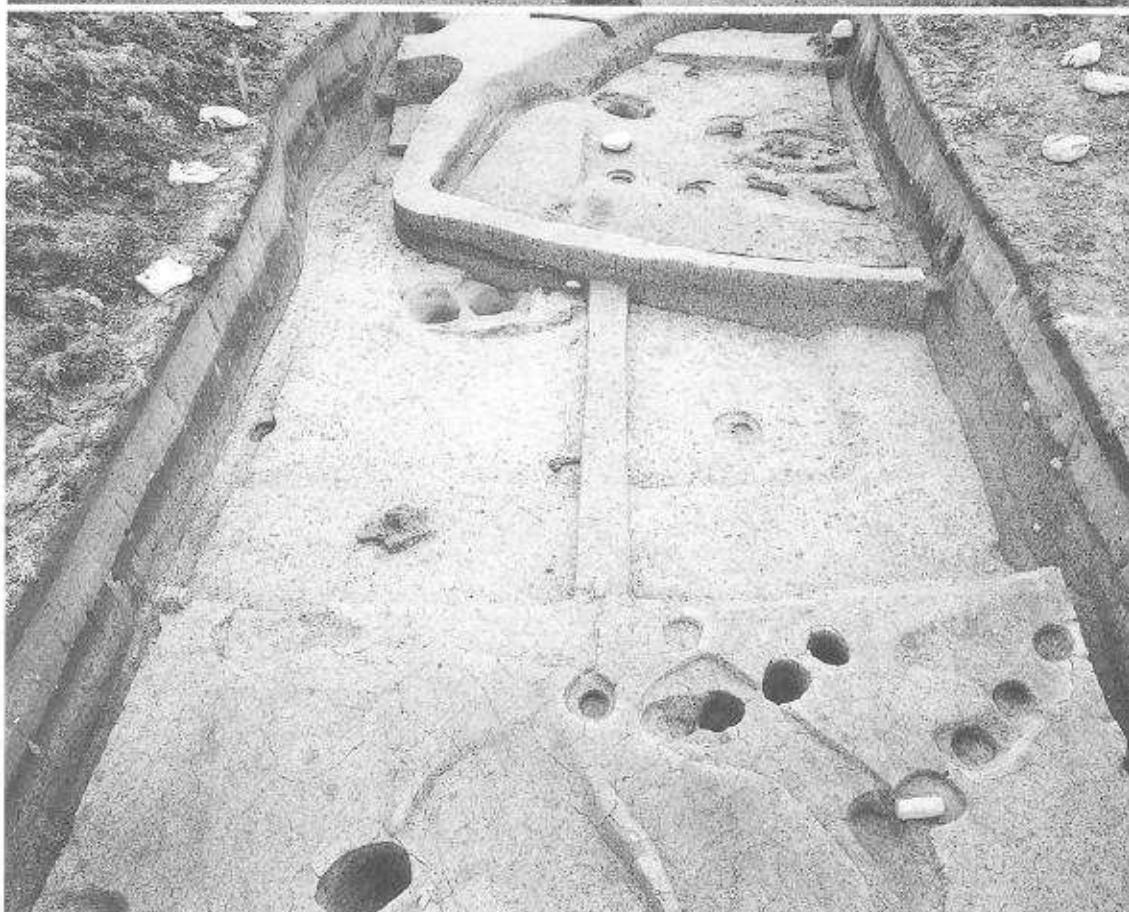


S H - 4

木之元地区 4 区



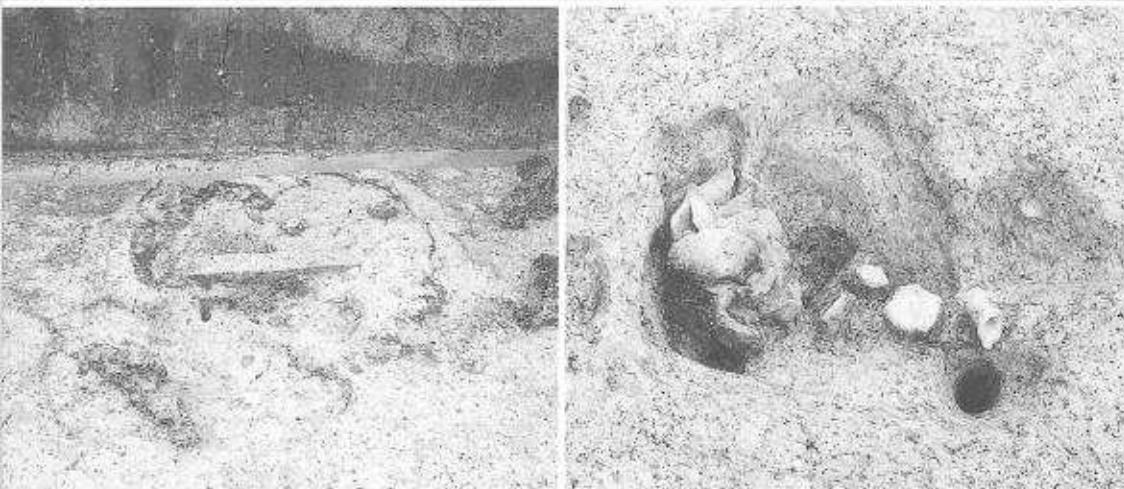
SH - 6



SH - 3・8



S H - 3

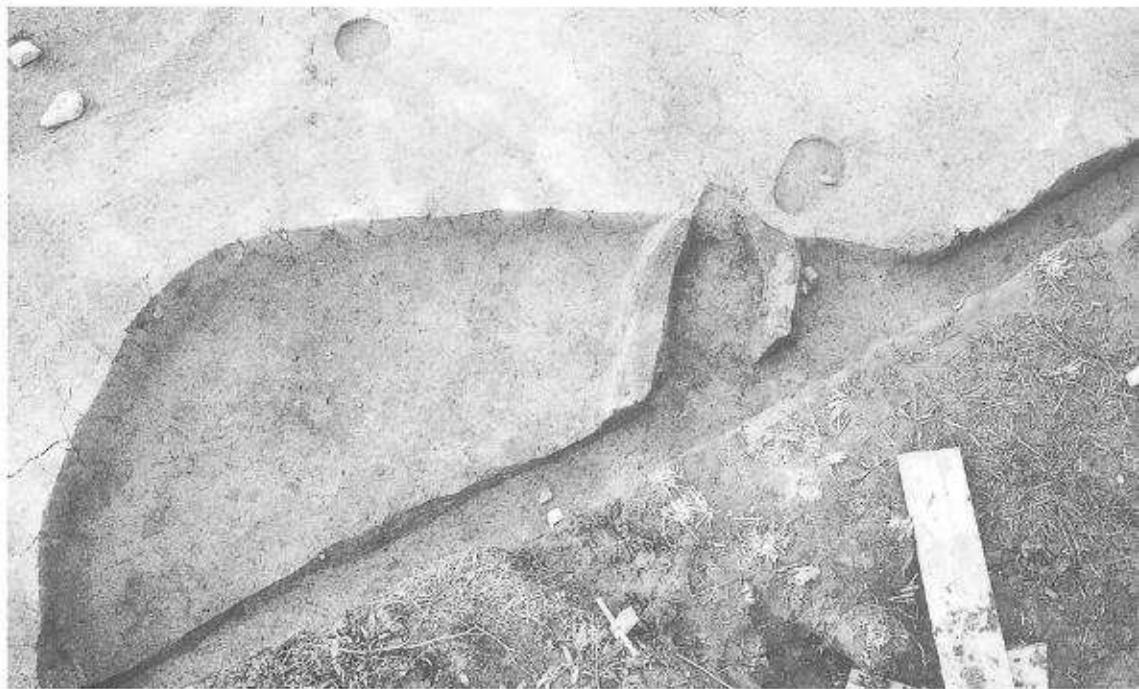


左) S H - 3 中央土坑
右) S H - 3 壁際土坑

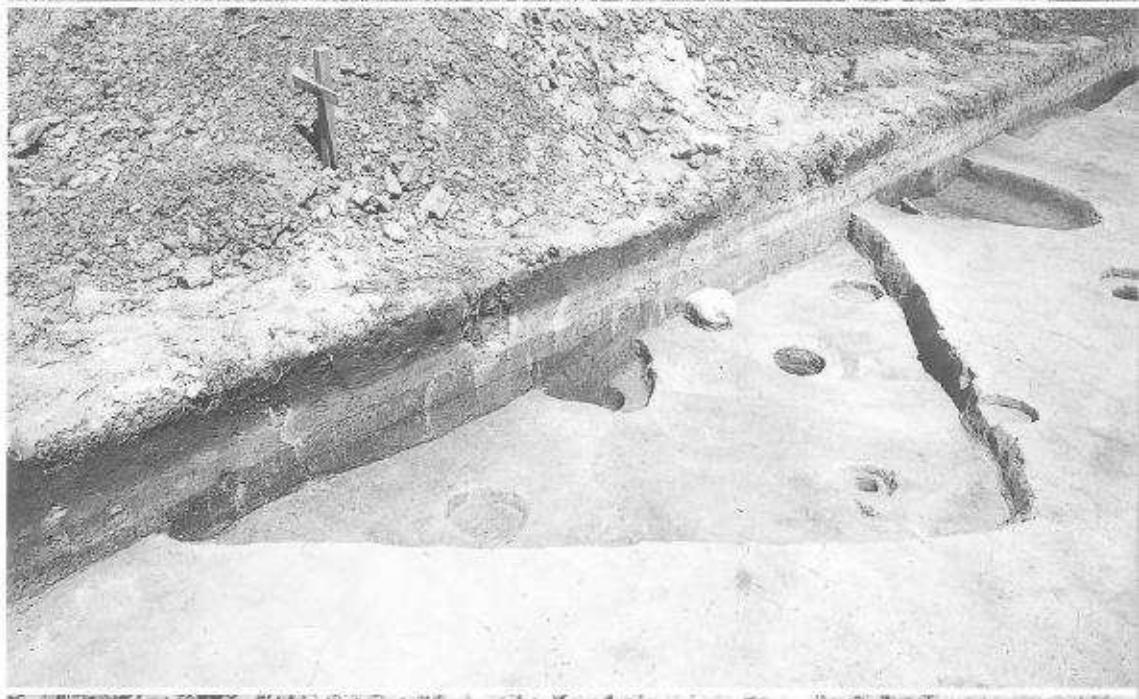


S H - 8

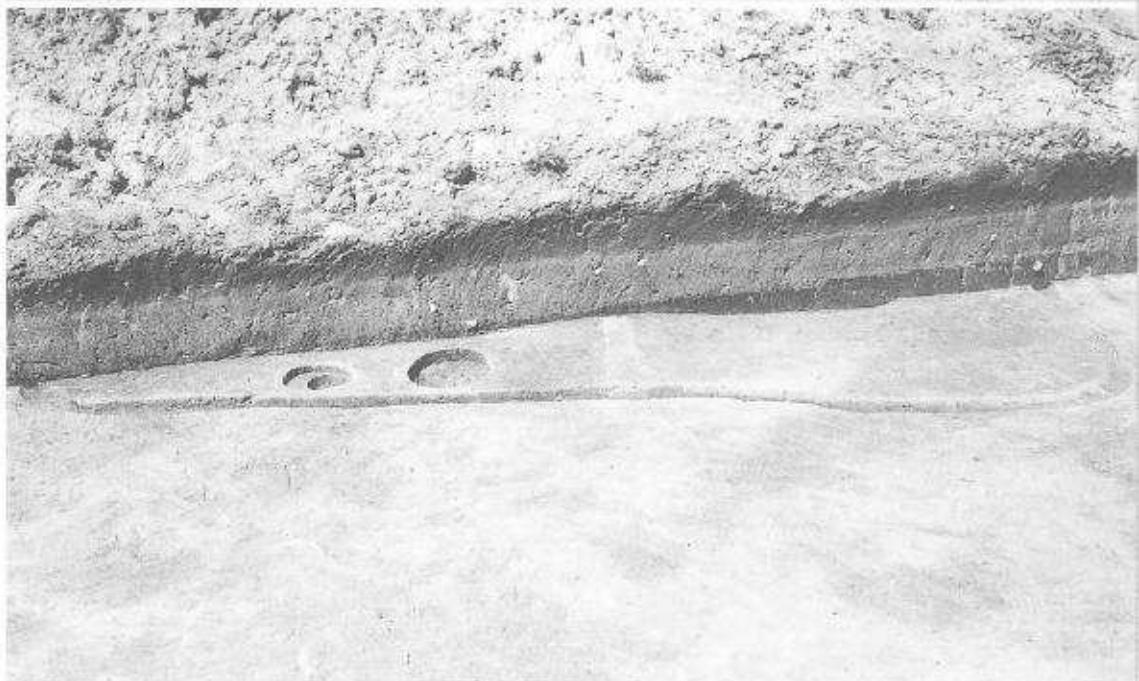
木之元地区 4 区



S H - 7



S H - 11



S H - 12

写真図版 6

木之元地区 5区



5区全景

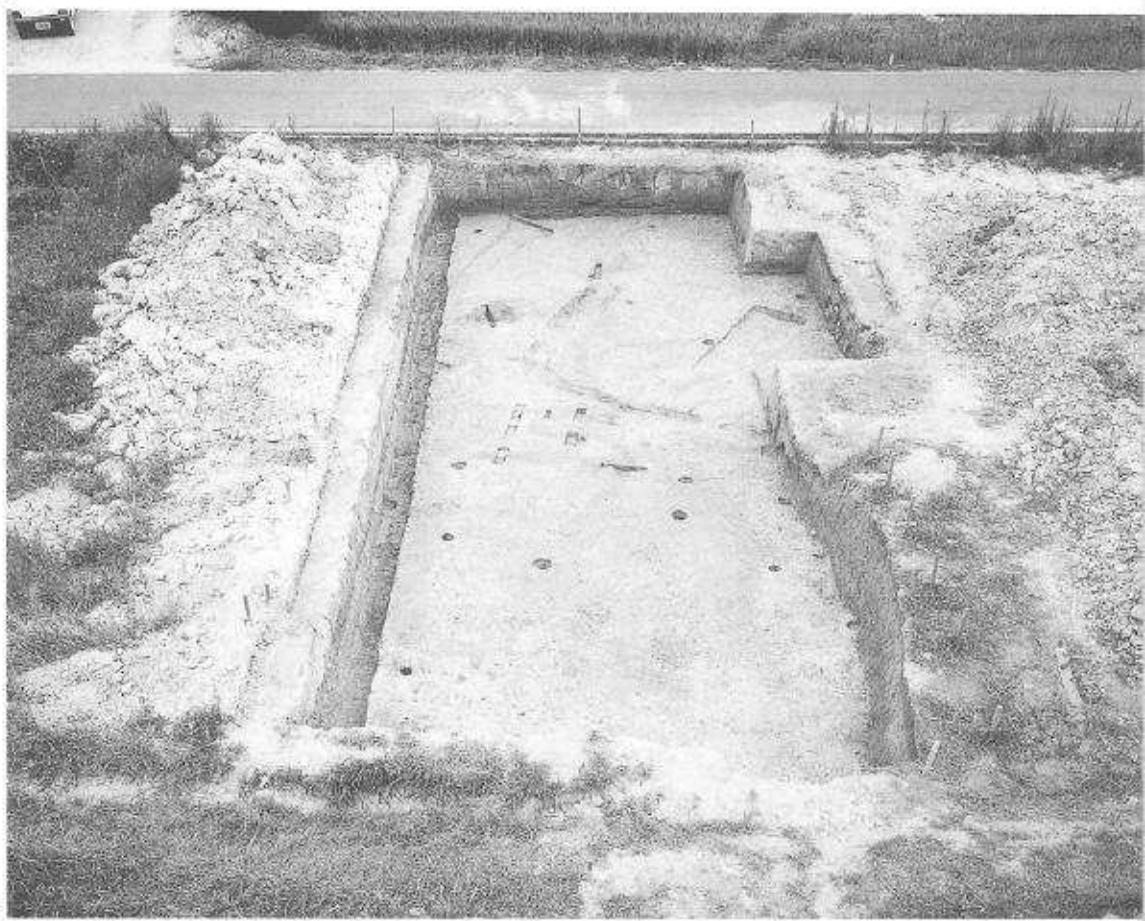


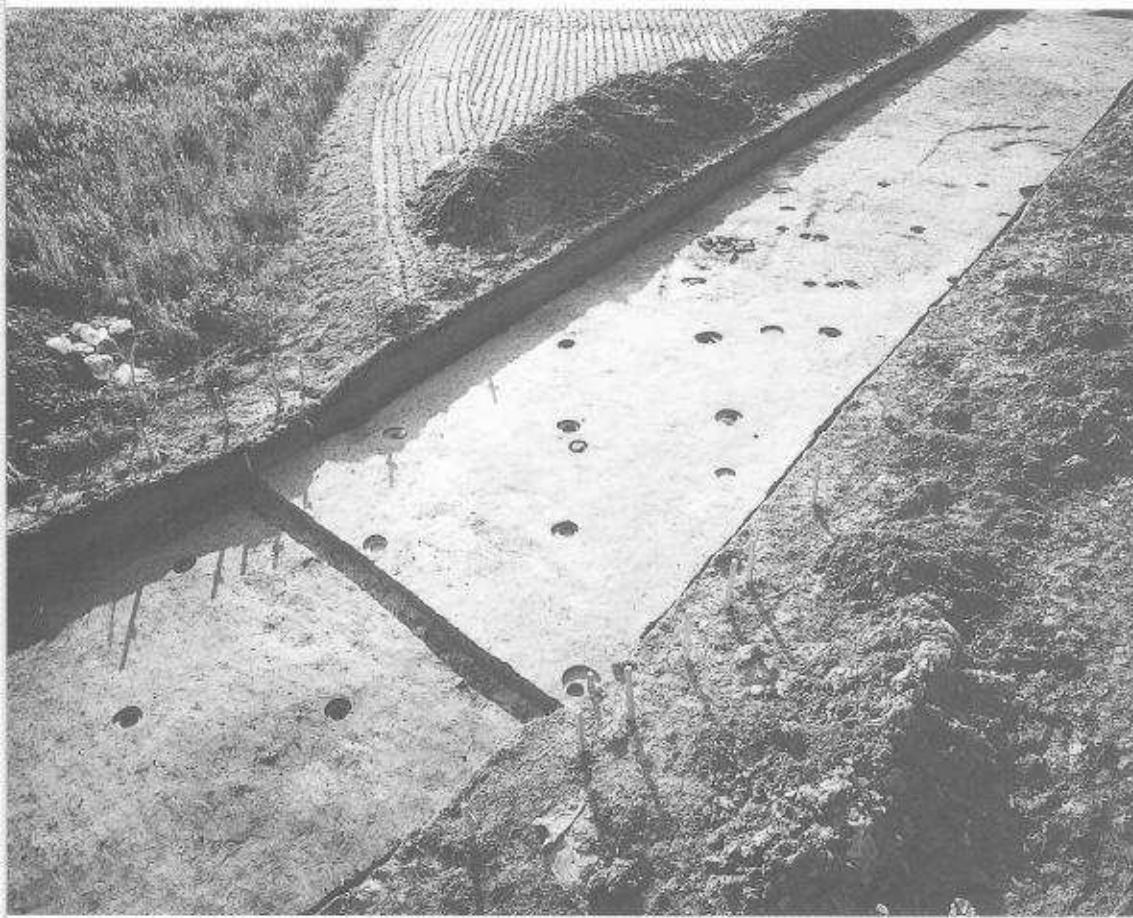
SK-1



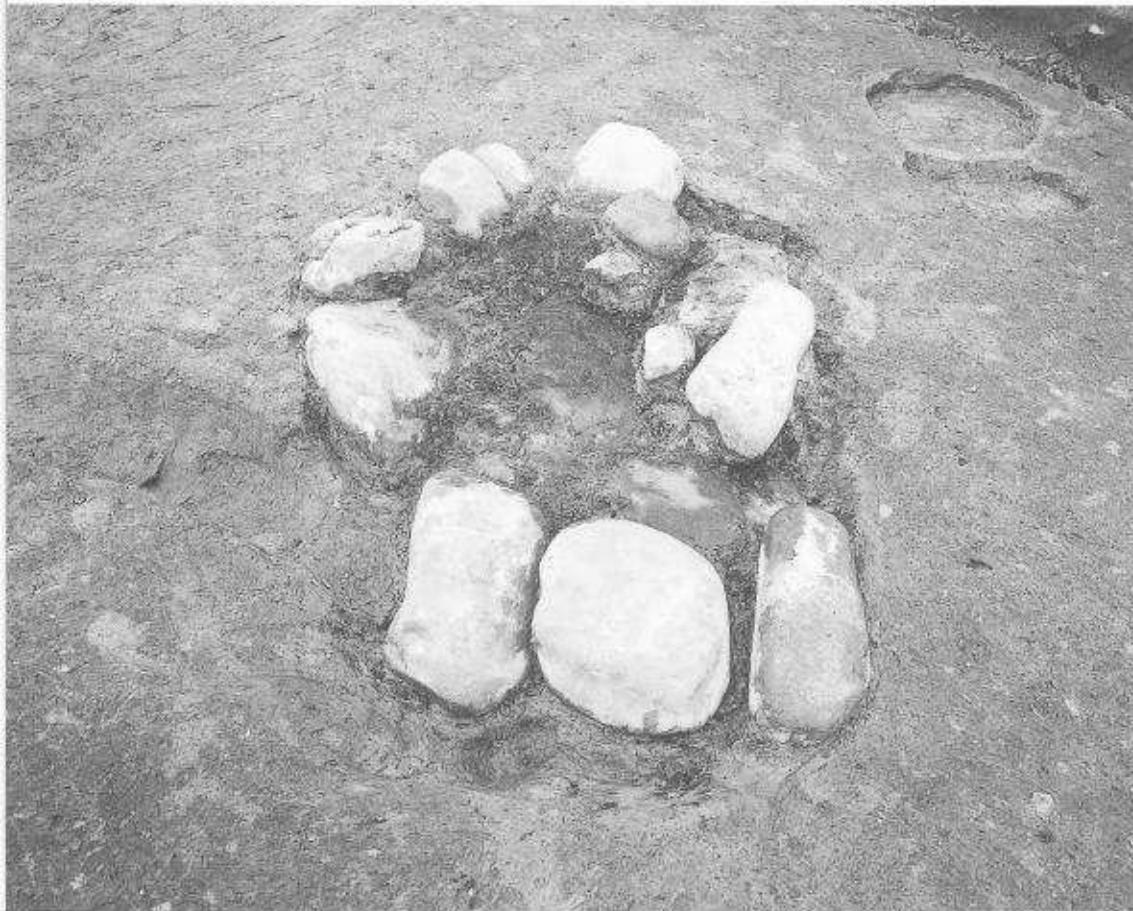
池状遺構

木之元地区 6 区





上層の遺構
(S B - 1 · 2 · 3)



S K - 1

木之元地区



1



3



41



11



18



19



17

出土遺物 1



25



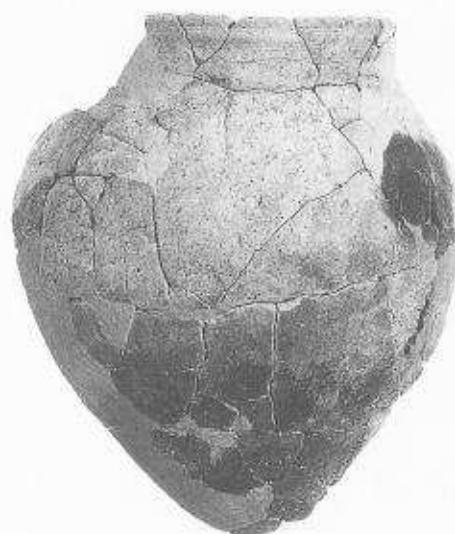
28



22



29



35



38



40



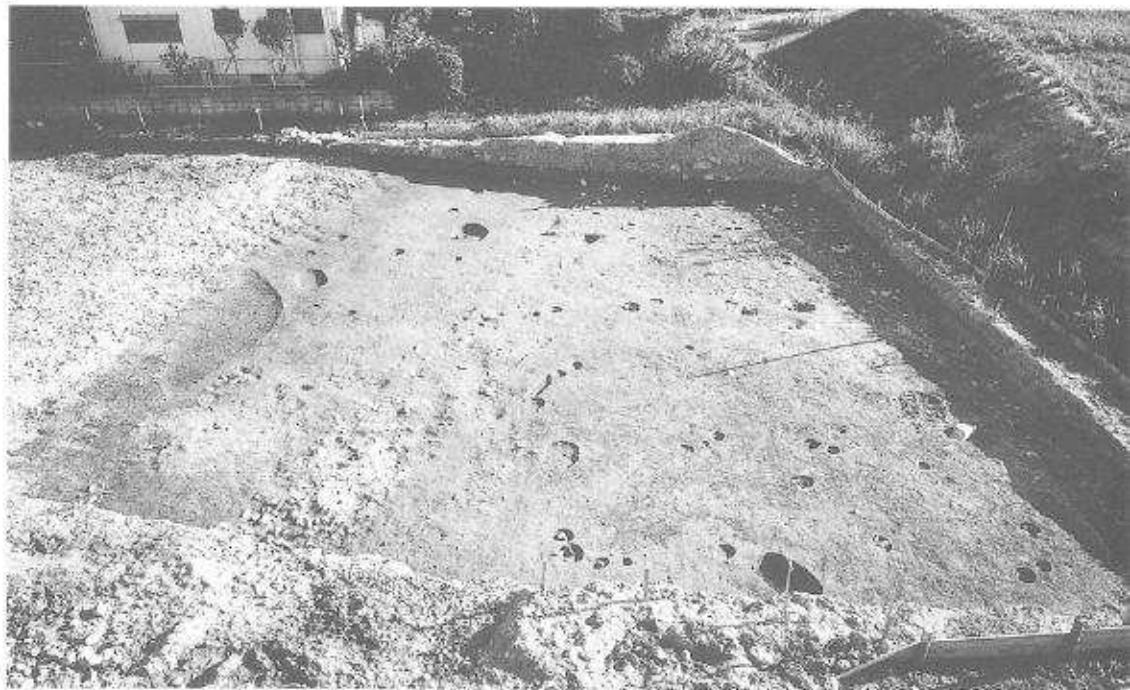
36



33



乗安地区 1区





SD - 1



SD - 1 断面



SD - 1 遺物出土状態

乗安地区 1区





SD-2 遺物出土状態



SD-2 遺物出土状態



SD-2 遺物出土状態

秉安地区 2区



全景



堅穴住居跡群



S H - 3

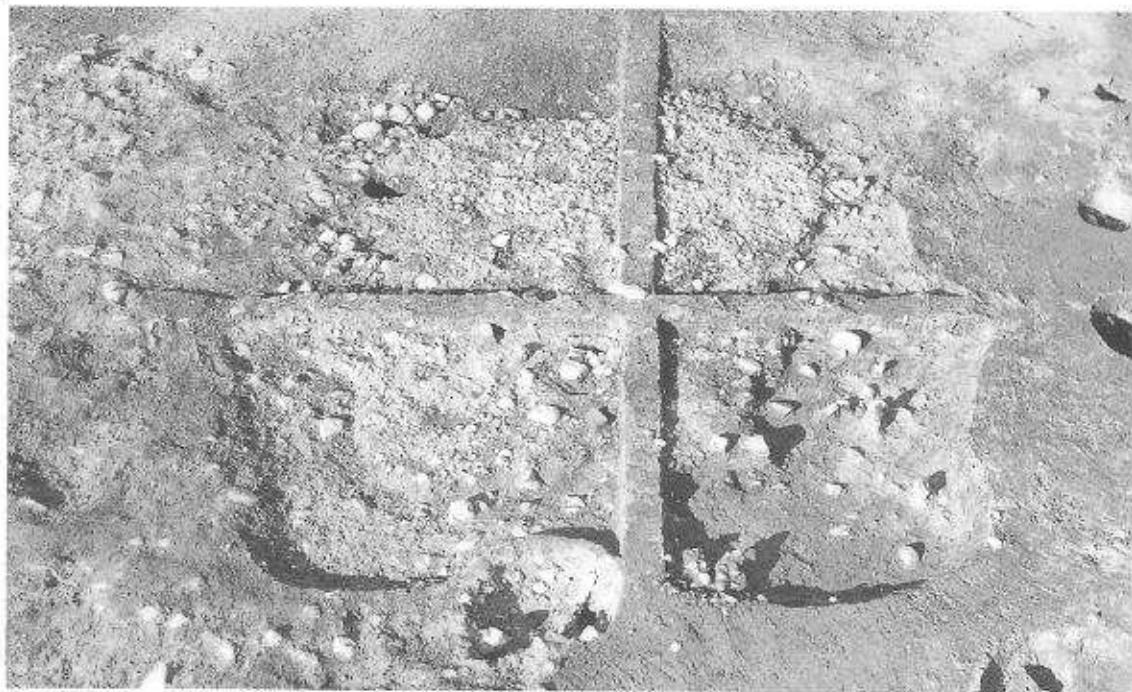


S H - 2



S H - 1

乗安地区 2区



土師器甕出土状態

(No157)

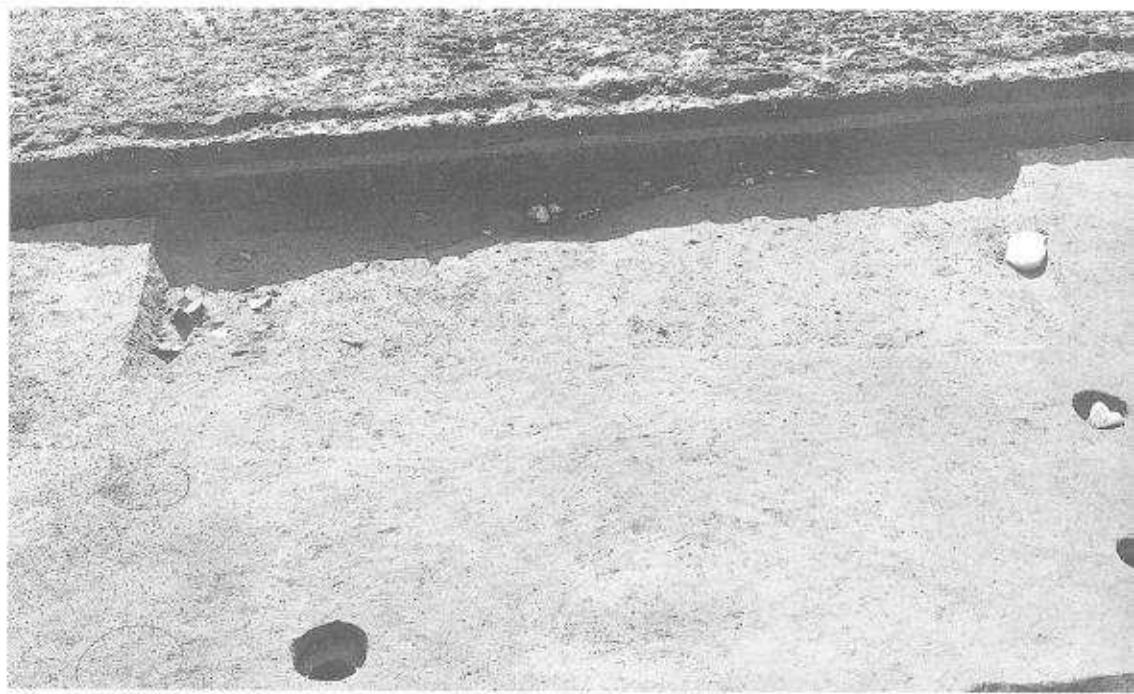


全景



竪穴住居跡群

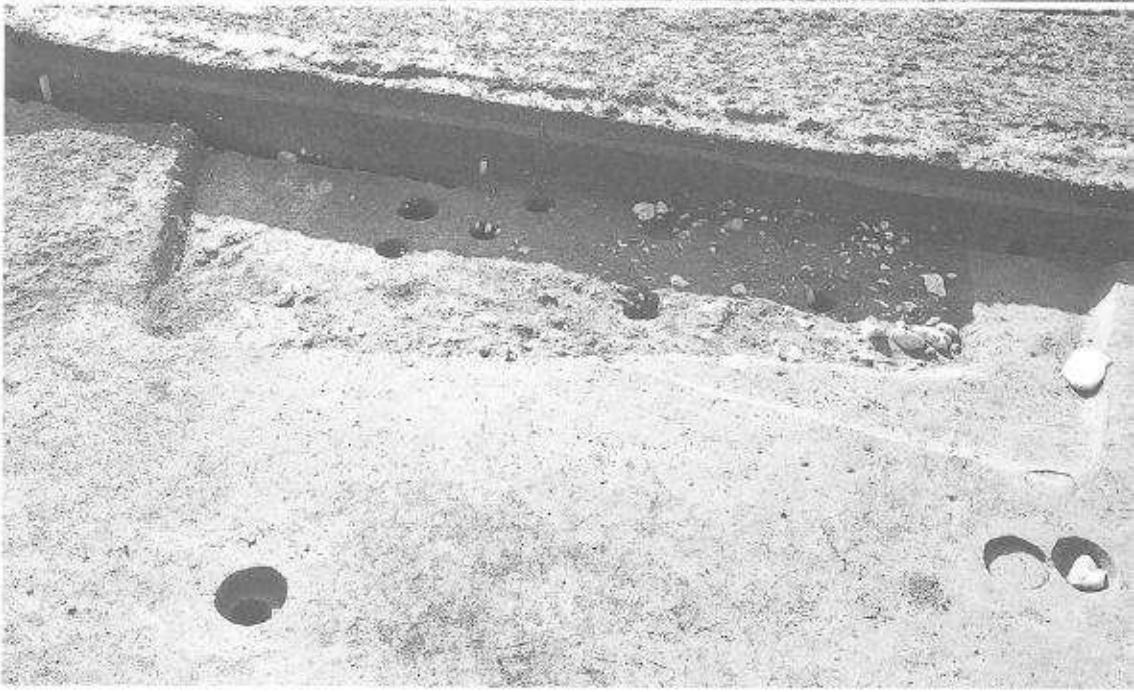
乗安地区 3区



S H - 1



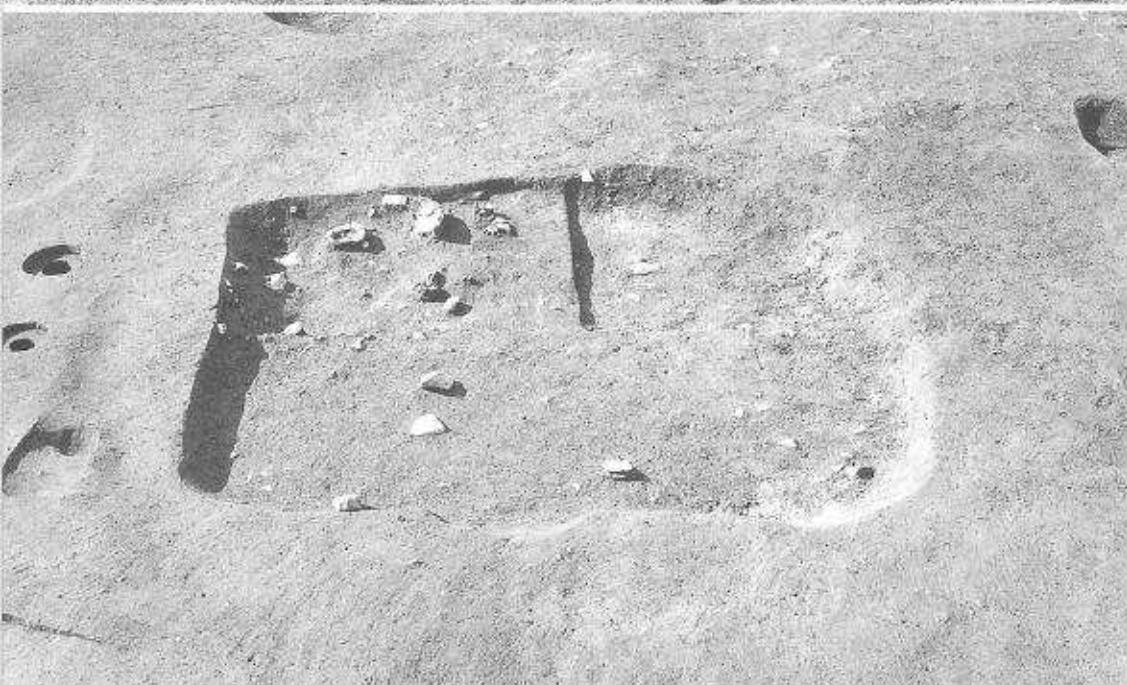
S H - 1 遺物出土状態



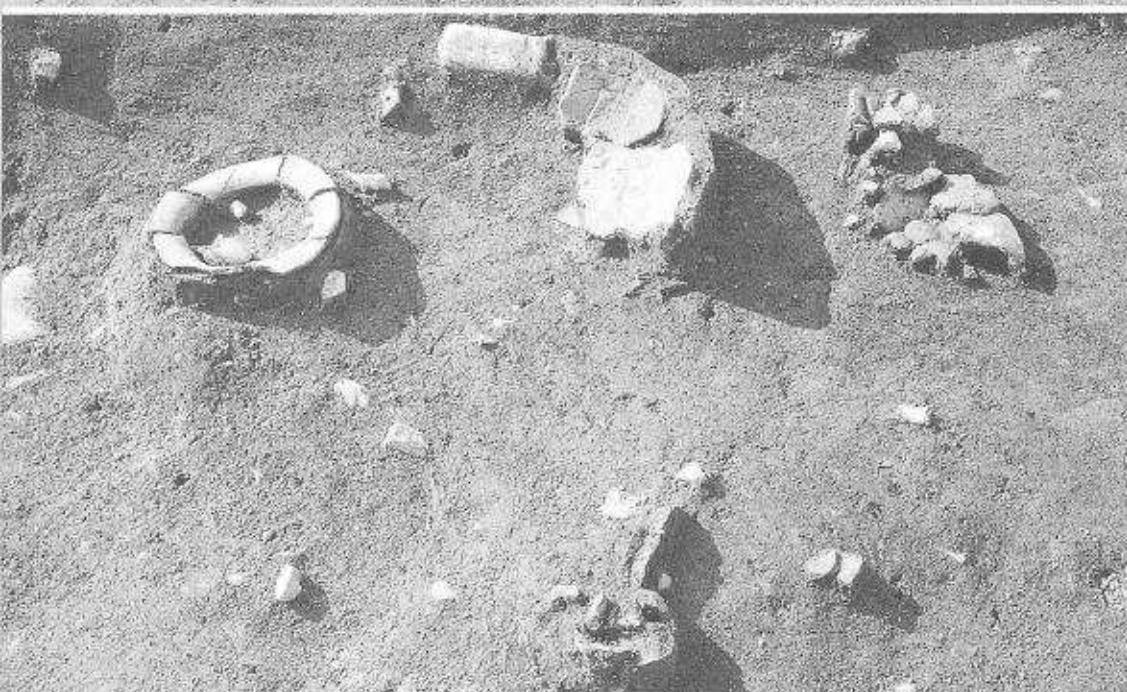
S H - 2



S H - 3・4



S H - 4



S H - 4 遺物出土状態

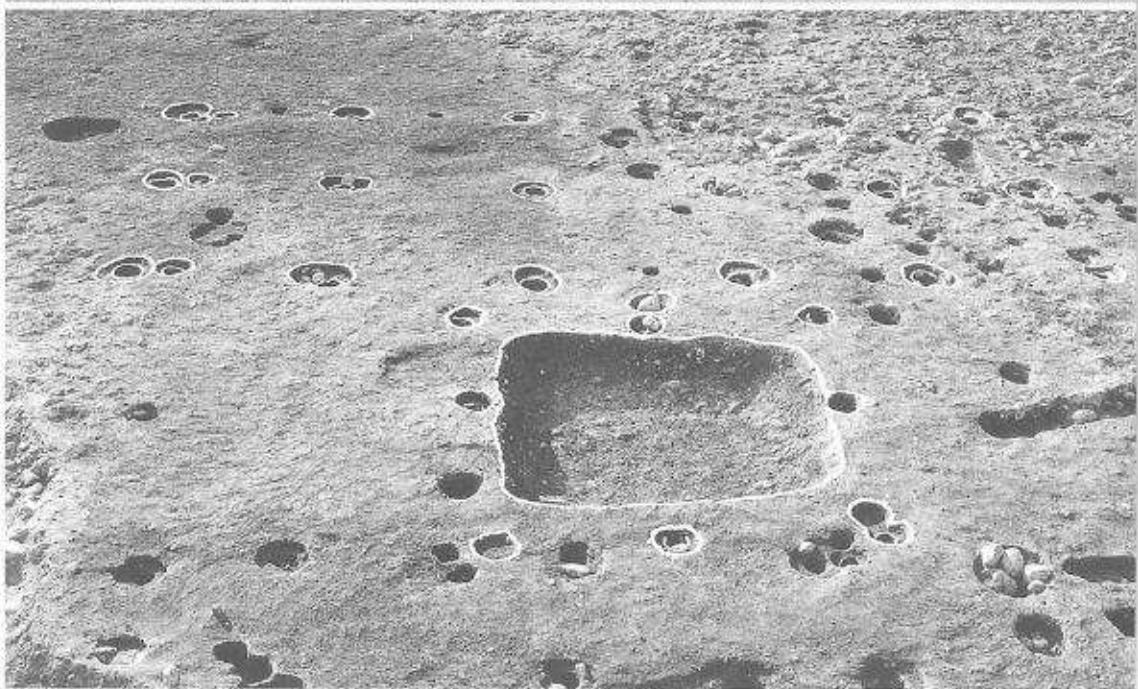
乗安地区 3区



掘立柱建物群

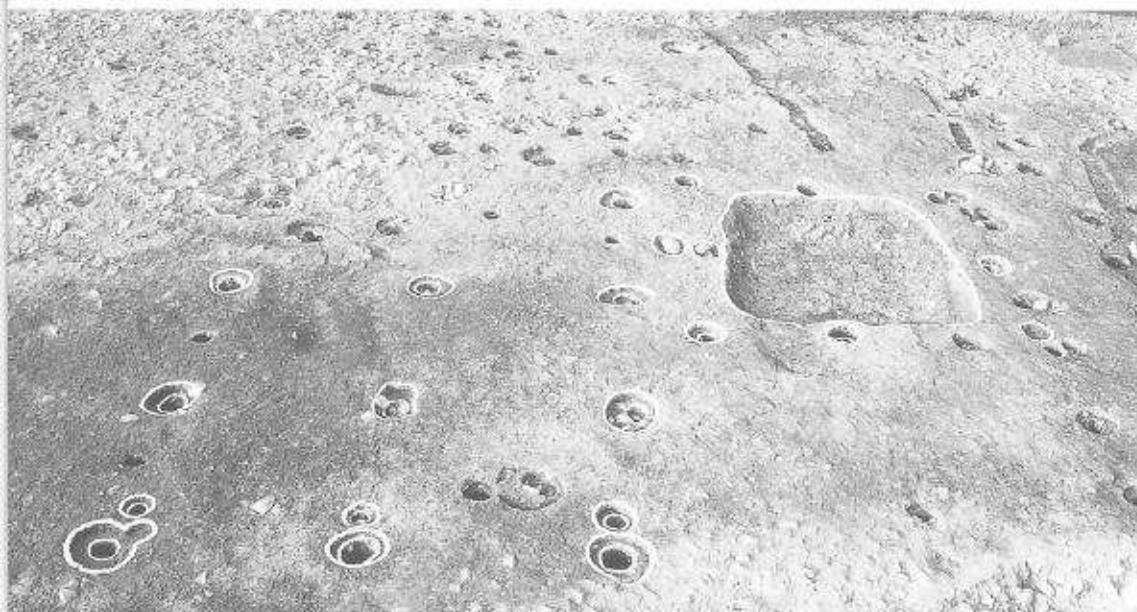


S B - 1



S B - 2 + 3

S B - 2 内土坑



S B - 2 + 3
S B - 2 内土坑



池状遺構



4 区全景

乗安地区 8区



8-2区全景



柱穴群



SD-1



8-4区全景



右)・左) 包含層遺物出土状態



S H - 1 + 2

乗安地区 8区





S H - 5



S K - 1



S K - 2

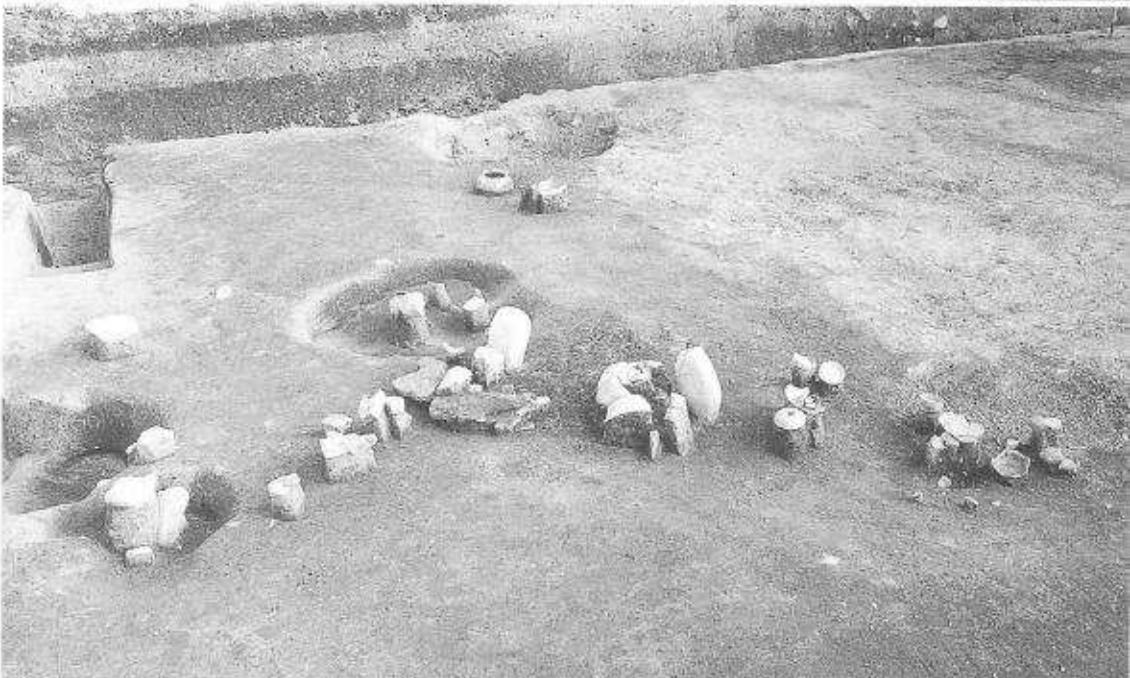
乗安地区 8区



8-1区全景



8-1区中央石群



8-1区石群内立石



52



62



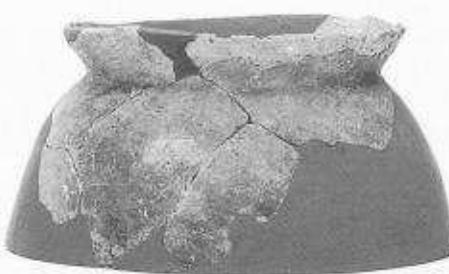
58



70



73



72



74



79



91



80

乘安地区



82



83



84



86



89



87



95



97



94



93



51



102



105



108



109



110



280



289



281

秉安地区



111



112



113



115



117



119



126



133



130



127



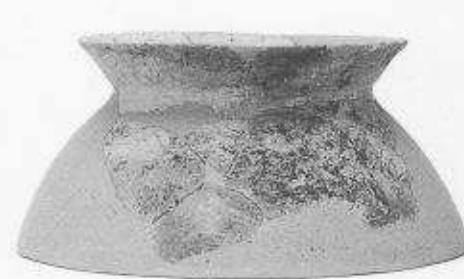
131



128



134



137



143



145



144



147



148



157



149

乗安地区



160



163



167



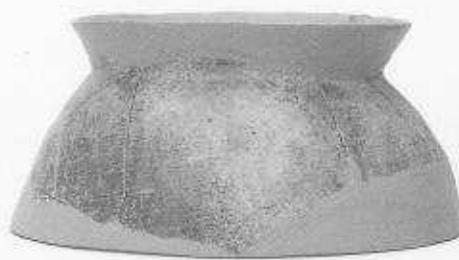
164



215



226



237



253



238



252



244



255



315



316



317



319



322



325



326



327



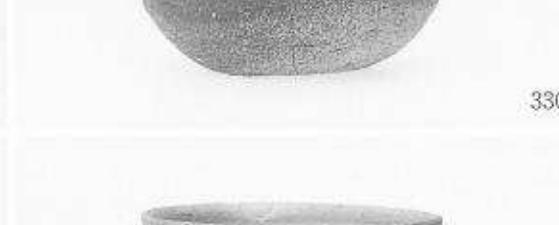
328



330



332



331



333



334

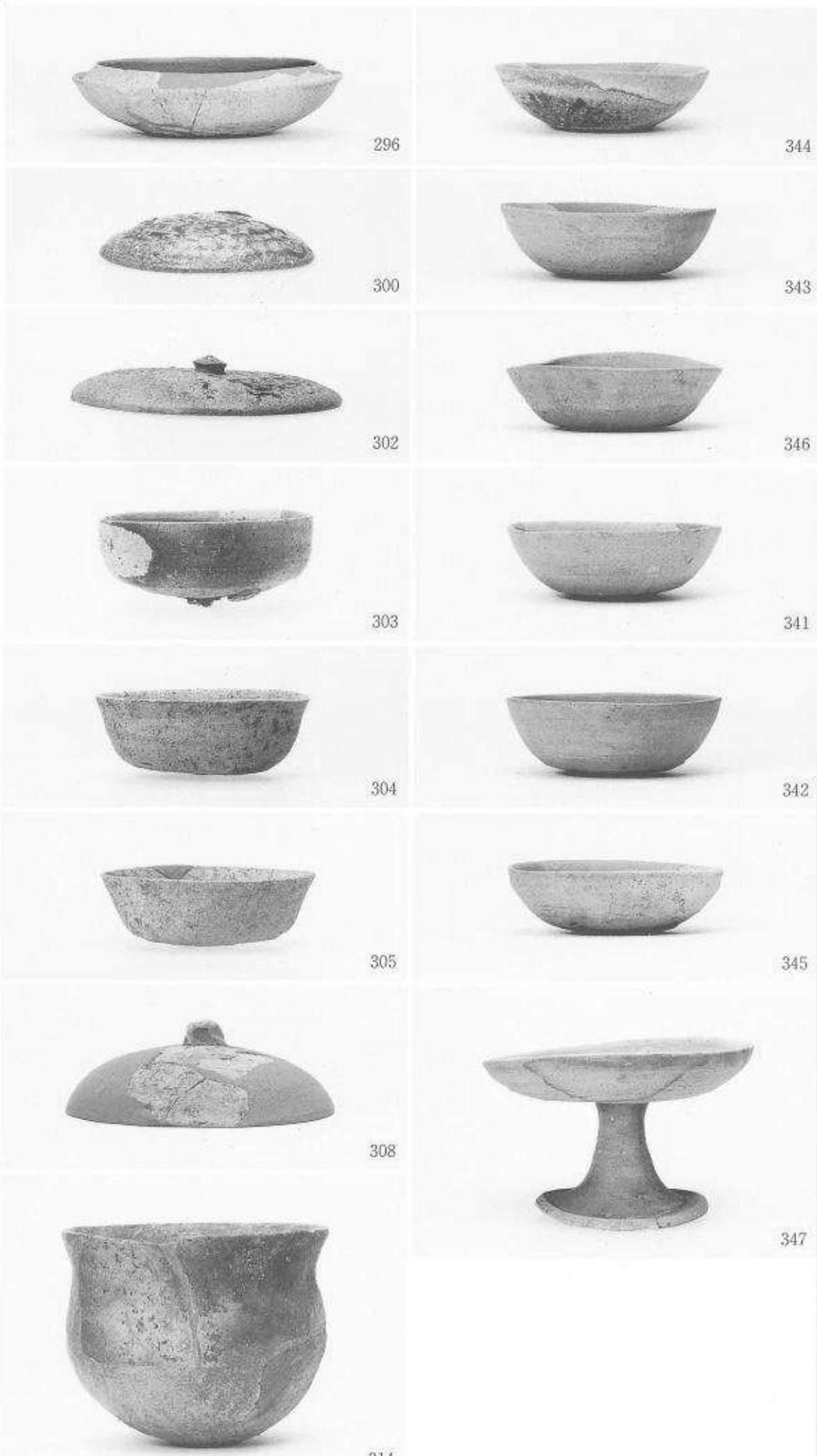


335



336

乗安地区





354



357



364



359



370



371



372



375



378



379



380



384



428



386



387



389



397



392

秉安地区



398



403



406



412



413



419



420



427



429



437



430



431



442



350



352



494



495



498



499



501



505



504



502



507



514

秉安地区



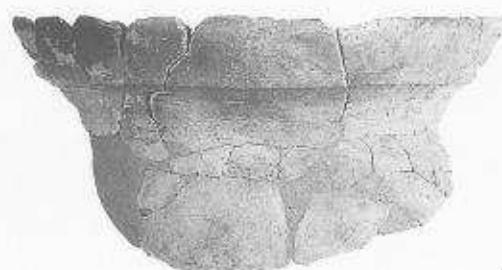
523



524



544



547



550



553



551



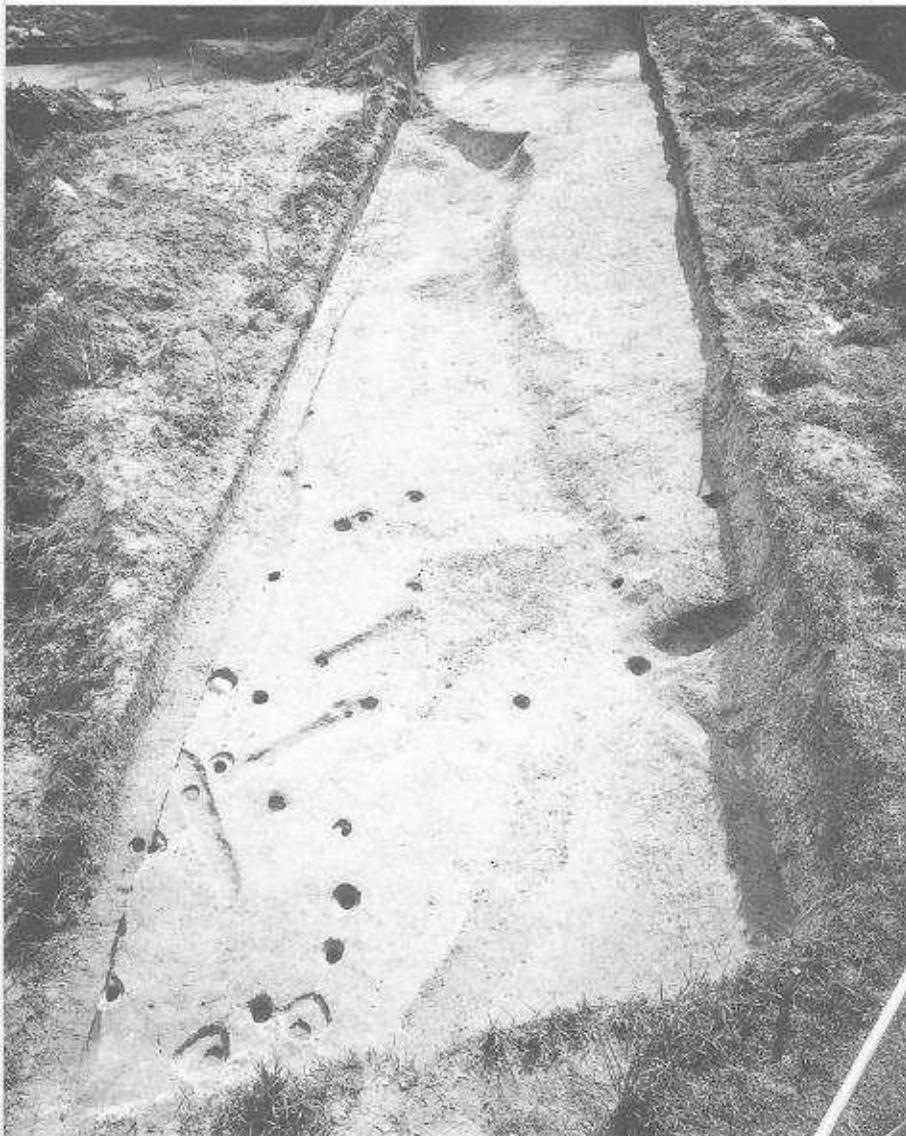
556



541



2区全景



3区全景

宮ノ後地区



3区集石遺構



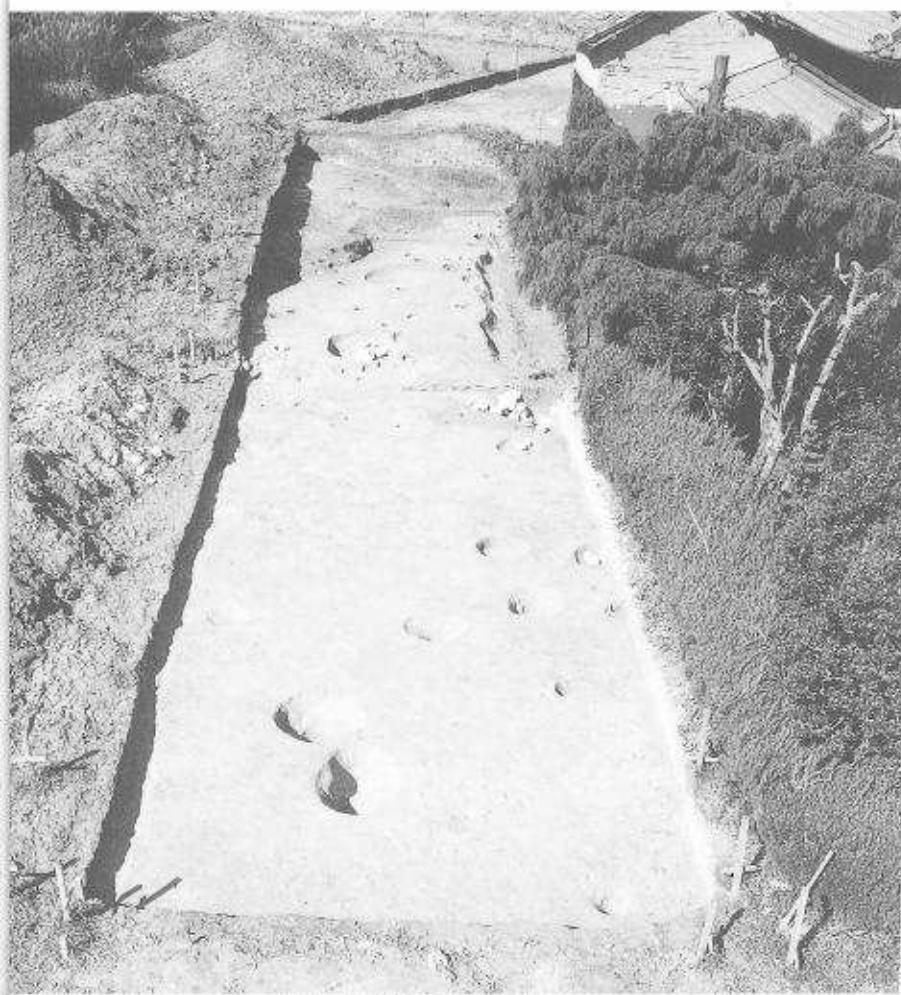
3区集石遺構



3区SK-1

写真図版42

宮ノ後地区

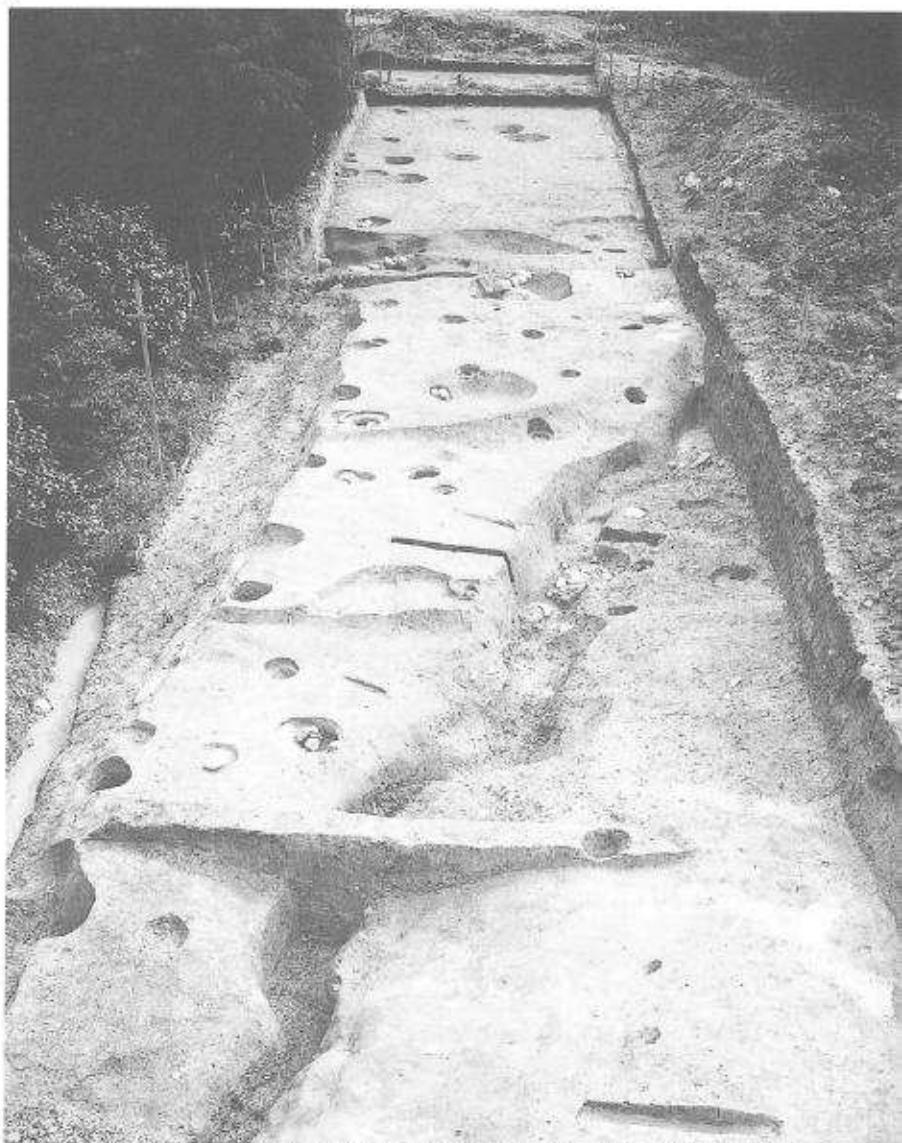


6区上層の遺構



7区全景

宮ノ後地区



写真図版44

宮ノ後地区



570



590



585



587



595



617



620



619



593



621



622



623



627



633

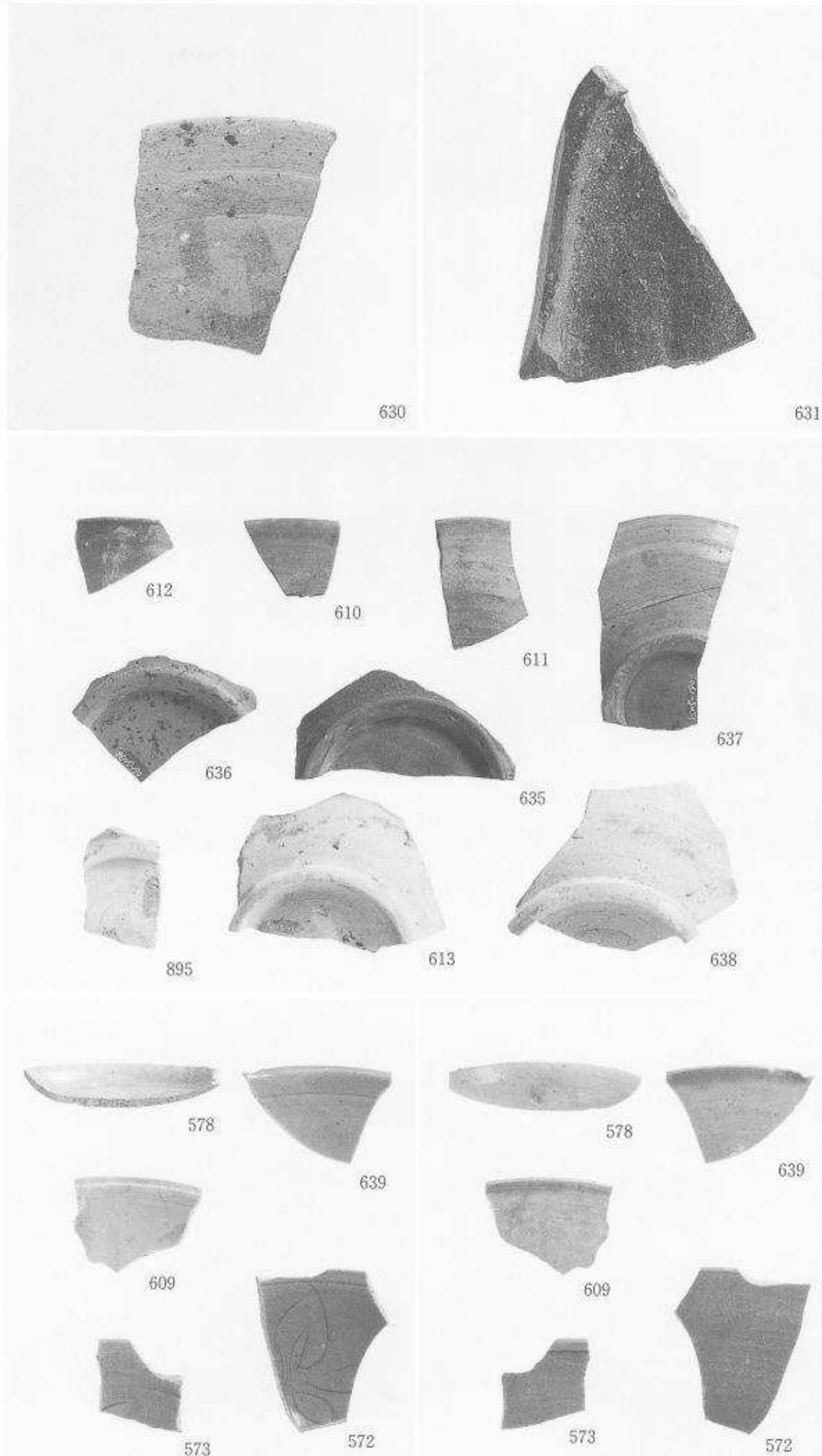


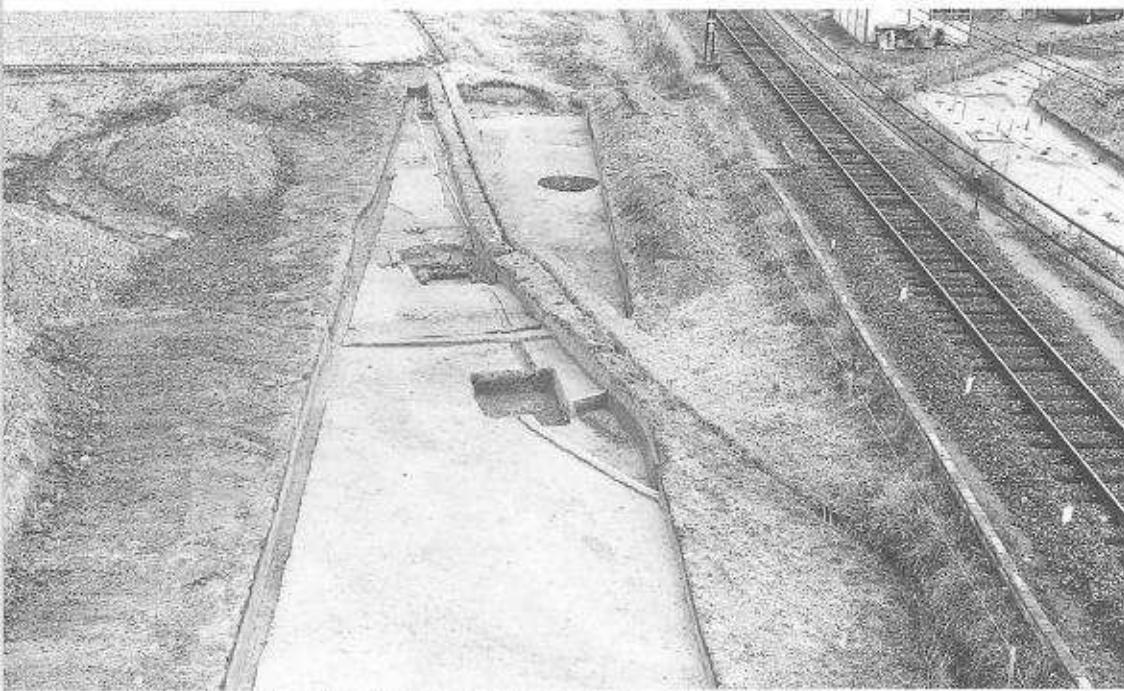
600



628

宮ノ後地区





1区全景

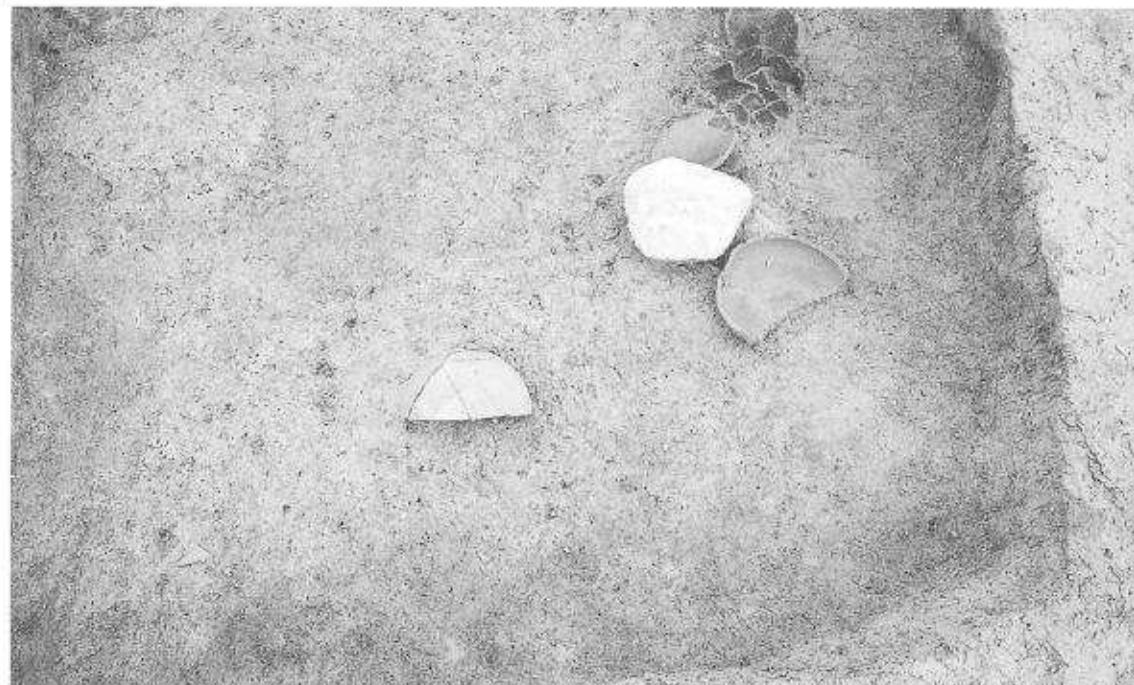


3区全景

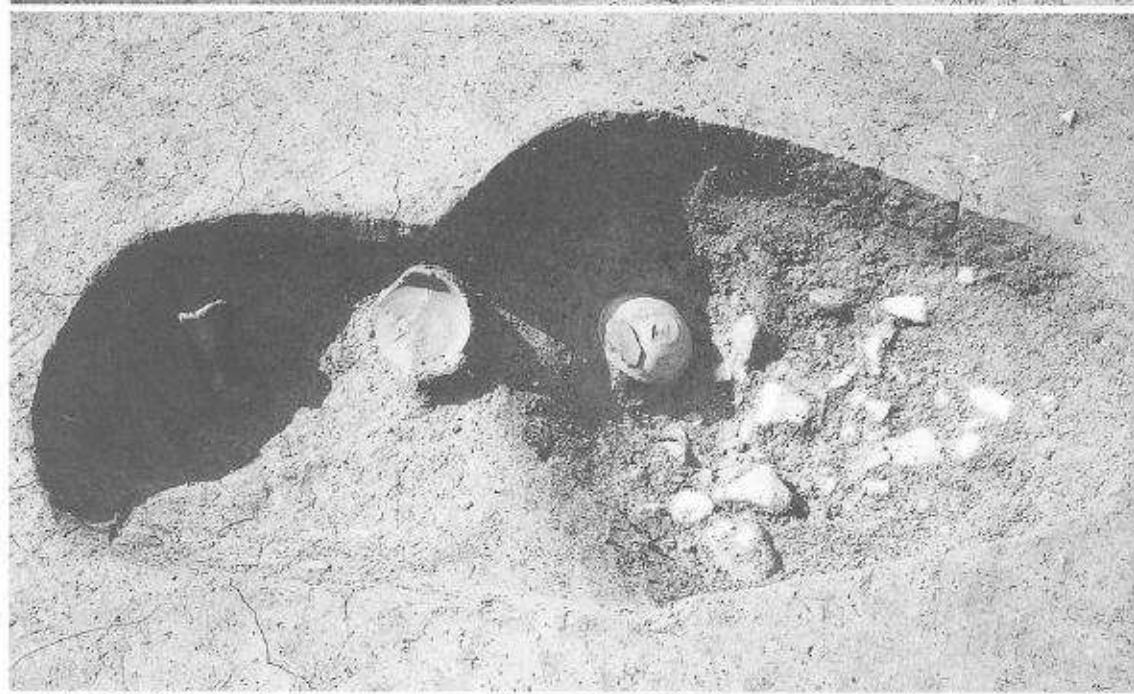


3区北端柱穴群

上才谷地区



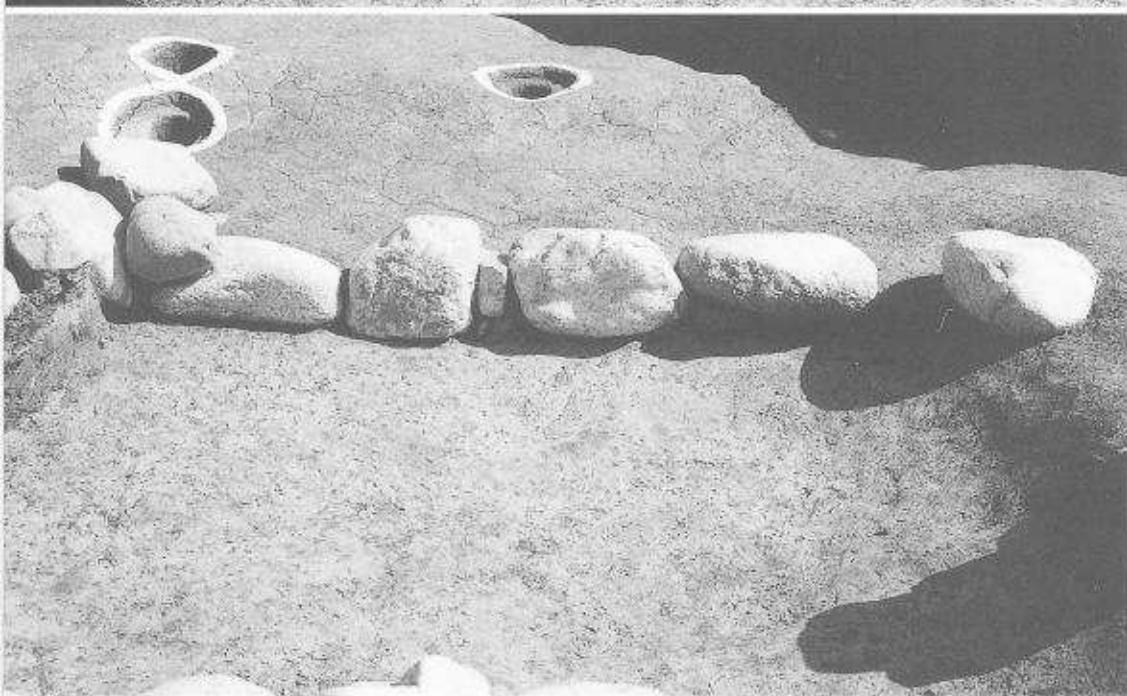
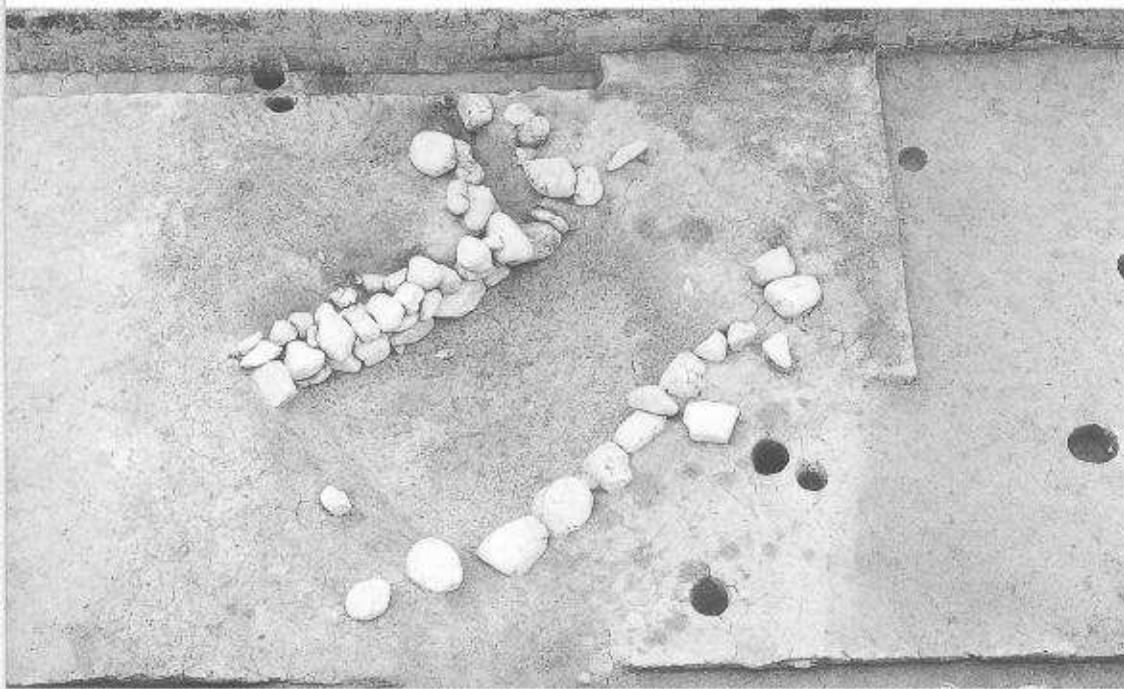
S H - 1 遺物出土状況



S K - 2



石組土坑



上才谷地区



2区全景



4区全景

上才谷地区



5区全景



6区全景

上才谷地区



656



657



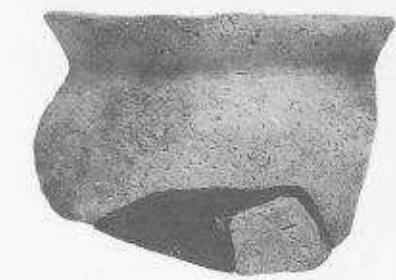
658



659



661



662



664



896



665



897



663



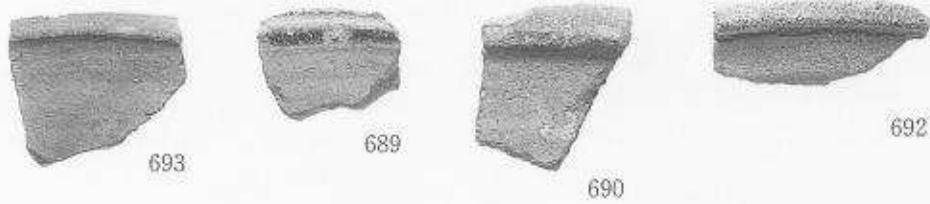
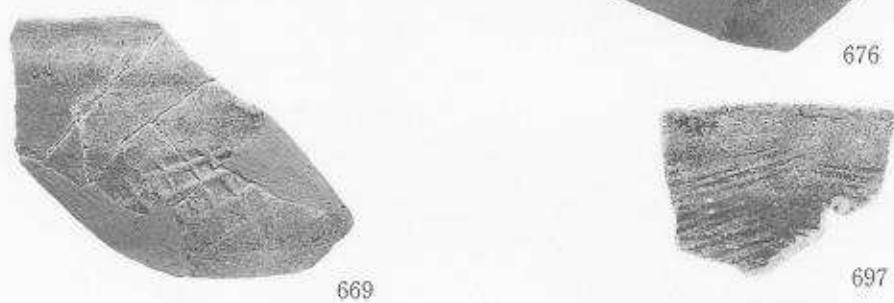
898



687



675



出土遺物 2

上才谷地区



900



686



680



670



696



698



701

出土遺物 3



1区上層の遺構



3区旧河道



1区旧河道

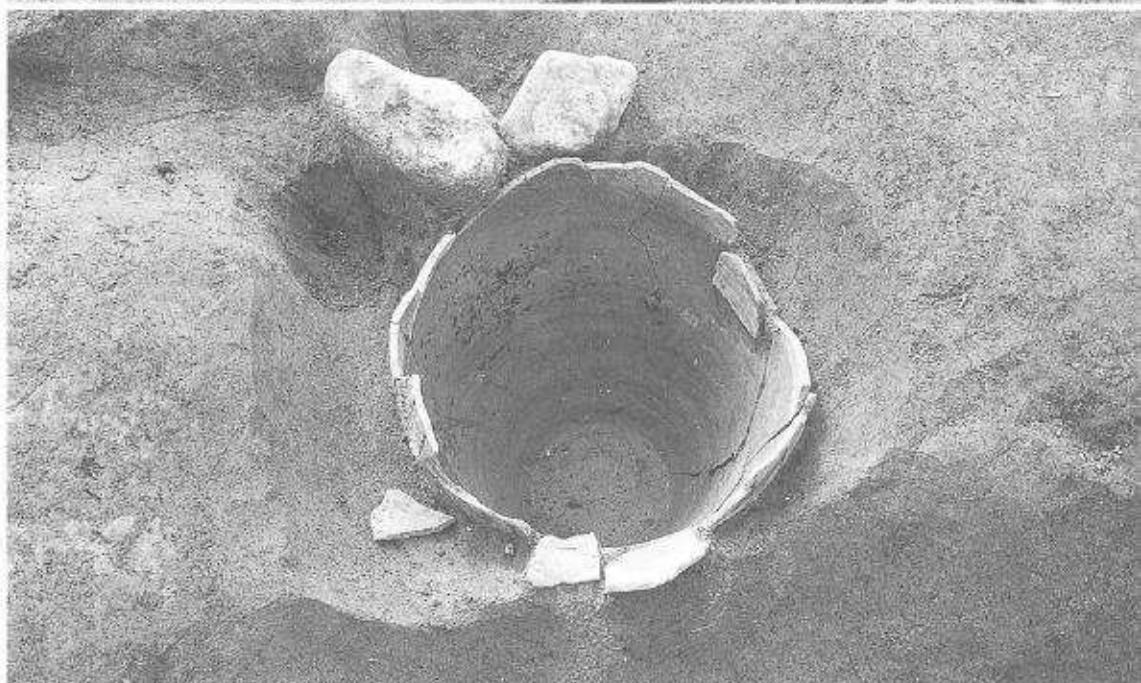
宮ノ向井地区



3区SH-1



3区遺構群



3区SK-1

甕埋設状況



4区遺構群



4区北半



725



722



716



728



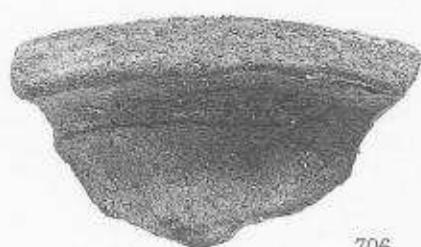
729



724



721



706



702



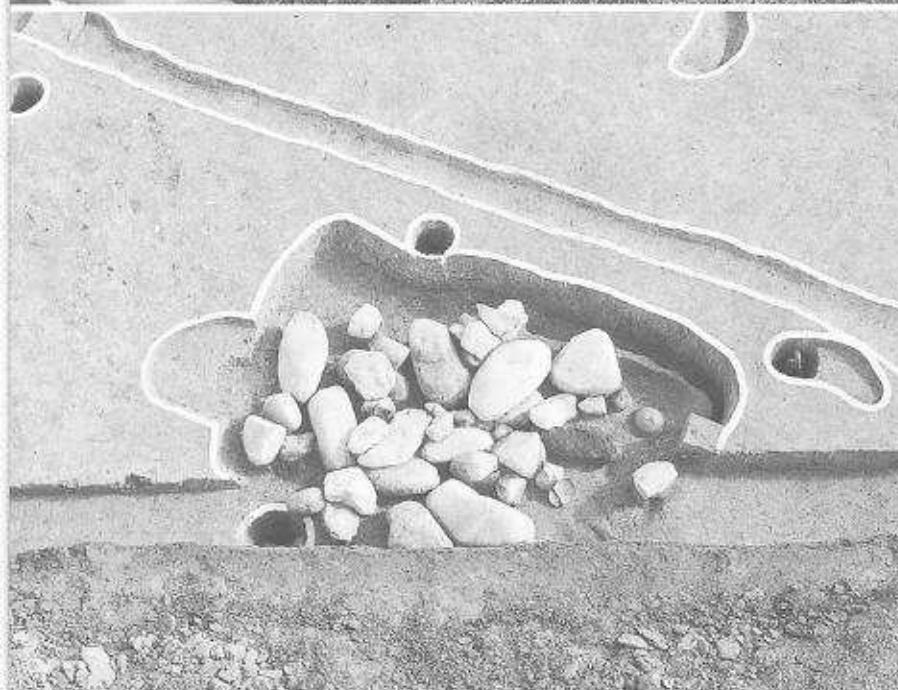
703



704



7区全景



7区SK-1

林ヶ鼻地区



10区土坑群



10区遺構群

写真図版60



827



815



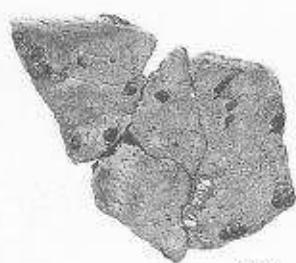
827



816



830



904



905

出土遺物

坂本塙内地区



写真図版62



879



857



869



891



892



894



891



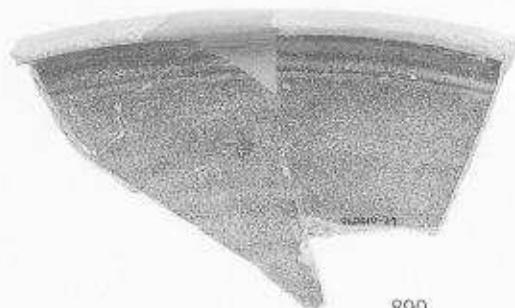
892



894



889



890

鳴滝掛り地区



1・2区全景

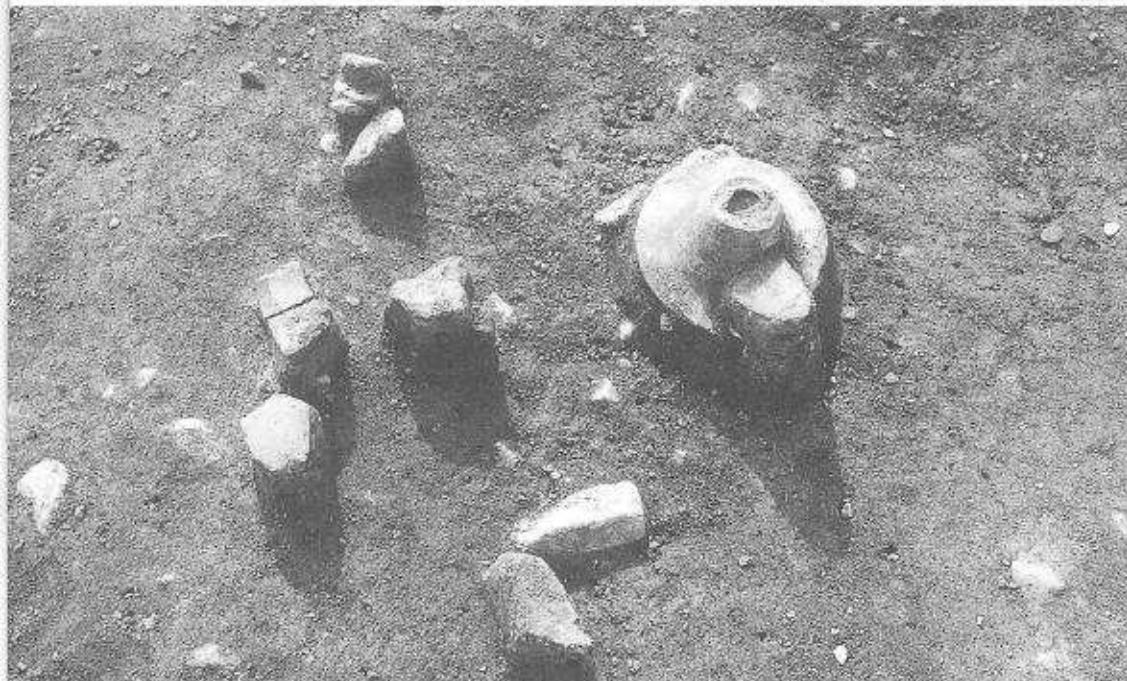


3・4区全景

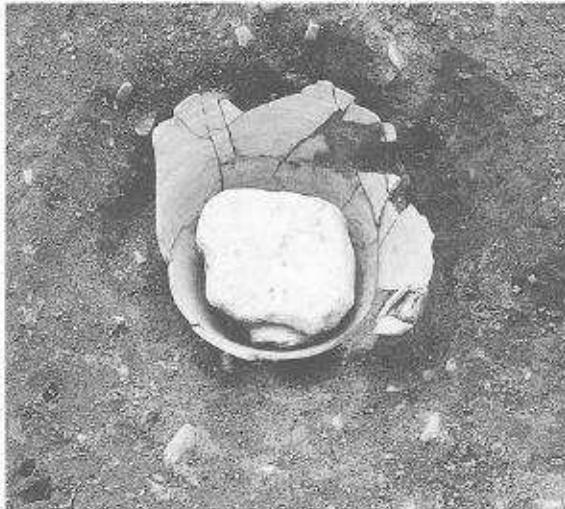
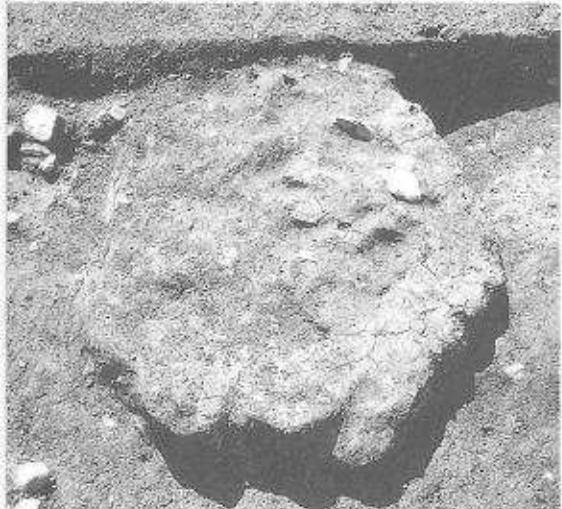
鳴滝掛り地区



1区SH-1



SH-1内遺物出土状況



SK-1上粘土被覆状況
SK-1甕埋納状況

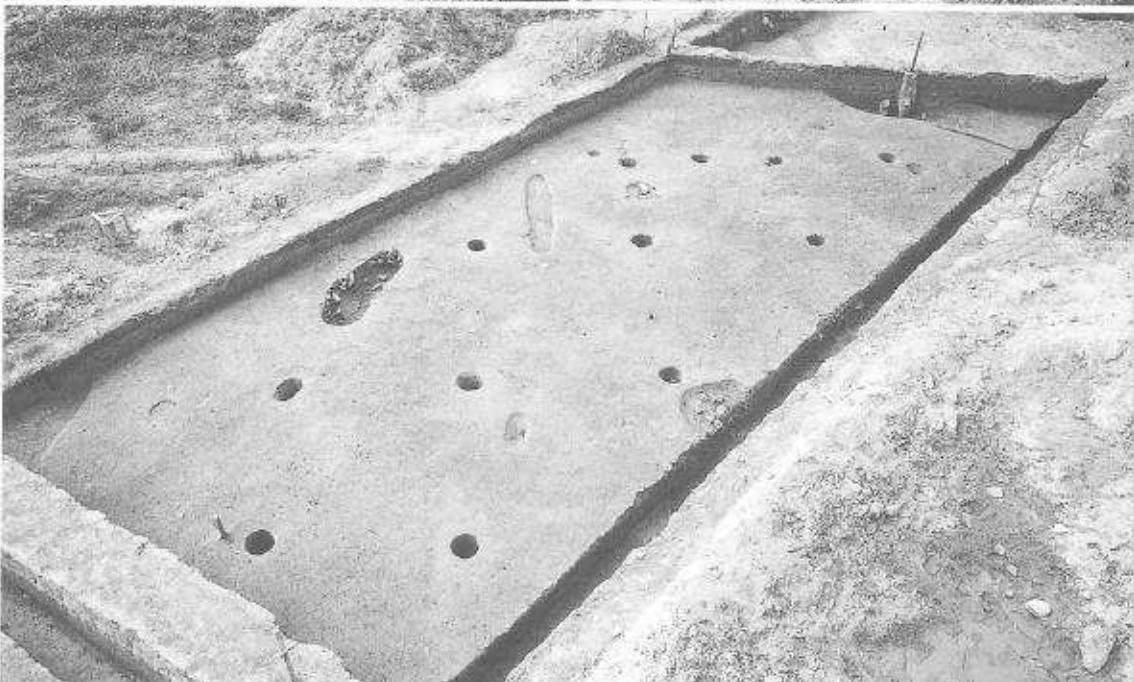
鳴滝掛り地区



6～9区全景



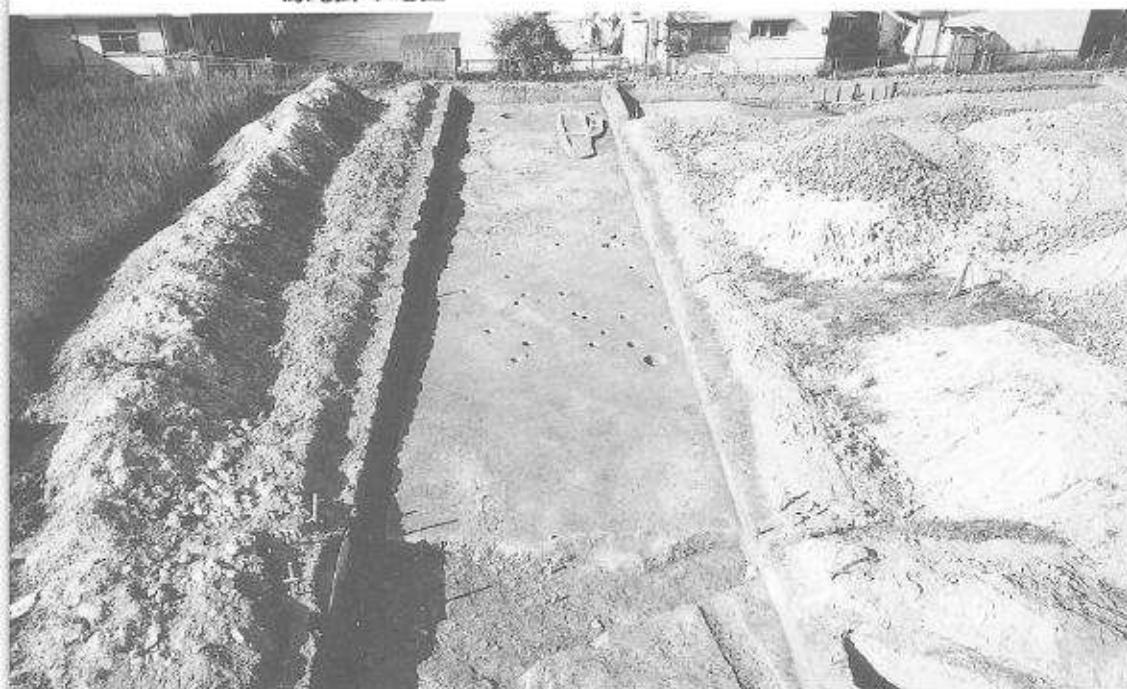
左) SK-1 内砾群
右) SK-1 完掘状況



S B - 2

写真図版66

鳴滝掛り地区



8区全景



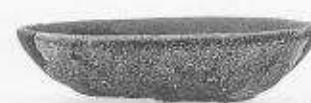
S B - 1



S D - 1



781



782



783



787



789



790



791



792



794



796



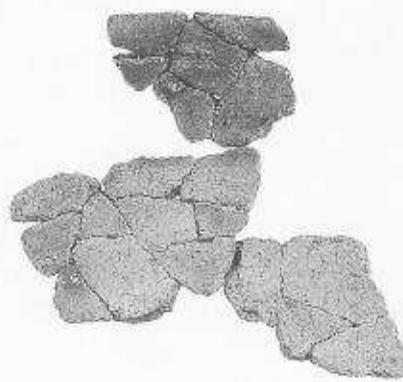
798



801



807



809



808



901



810



812



902



903



F-1



F-10



F-5



F-6



F-11



F-8



F-7



F-12



F-14



F-13



F-3



F-4



F-24



F-25



F-15



F-16



F-17



F-20



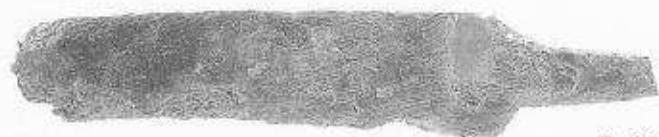
F-21



F-18



F-19



F-22



S-1



S-2



S-3



S-6



S-4



S-5



S-7



S-8



S-9



S-16



S-10



S-11



S-12



S-13



S-14



S-15

兵庫県文化財調査報告 第215冊

神戸国際港都建設事業道場八多地区
特定土地区画整理事業に伴う

日下部遺跡発掘調査報告書

平成13年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目16-12

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
